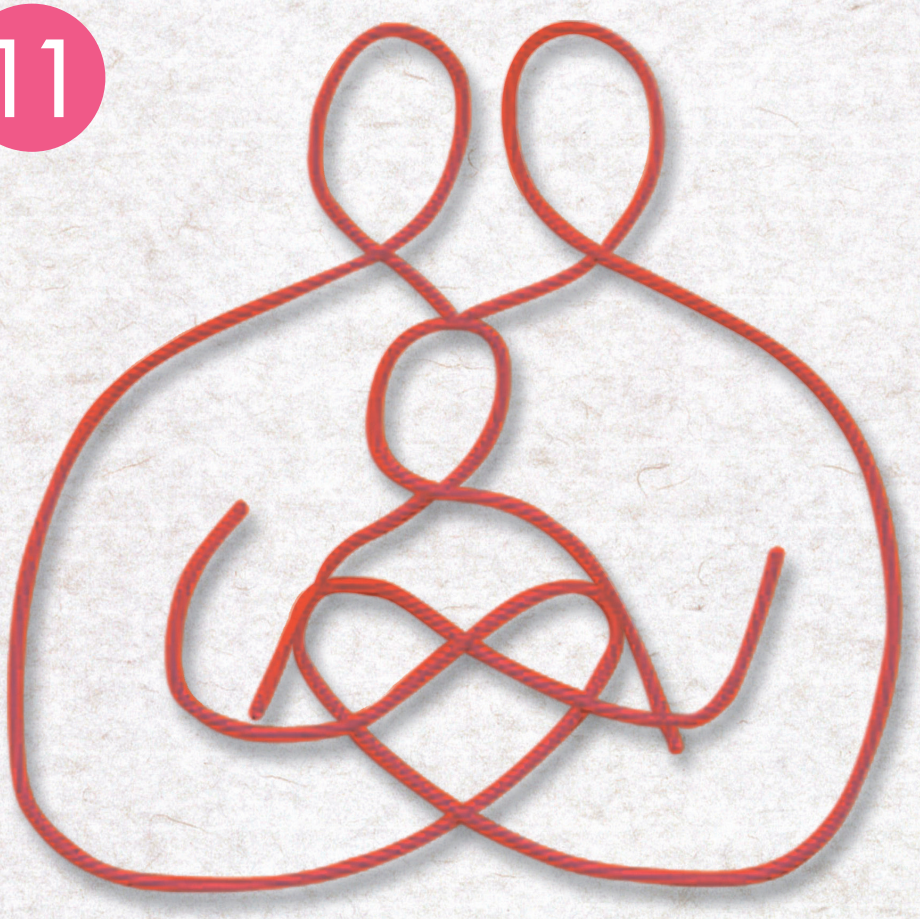
椙山人間学研究センター 年誌

ISSN 1884-8613

椙山人間学研究
2015年度

Journal of Sugiyama
Human Research
2015

vol. 11



学校法人 椙山女学園

椙山人間学研究センター年誌　2015

椙山人間学研究 第11号

Journal of Sugiyama
Human Research
Vol.11

目　次

巻頭言『物事の本質を見つめる大切さ』 …… 002
椙山人間学研究センター長　椙山　正弘

学園創立 110 周年記念　椙山フォーラム報告 …… 006
『女性のライフデザインを考える』…… 006
フォーラムアンケート …… 038

人間講座報告 …… 045
第1回:『1メートルの長さの決め方』森棟　公夫 …… 045
第2回:人間論シリーズ1　人間は、言語によってのみ人間である
『物語はどのように理解されるか』増井　透 …… 063
第3回:人間論シリーズ2　人間は、道具によってのみ人間である
『世界のモノづくりから“くらし”を考える』小林　繁樹 …… 080
第4回:人間論シリーズ3　人は社会的動物である
『災害が露わにする“社会の本質”』黒田　由彦 …… 099

プロジェクト研究報告 …… 121
「総合人間論」プロジェクト研究報告
『オーストラリア先住民の現在と未来:人間文化の多様性理解のために』 …… 121
「女性論」プロジェクト研究報告
『女子大生のキャリアデザインと女子大学のキャリア教育に関する研究ー専門職養成学部を中心にー』…… 134
「日本・アジア文化と人間」プロジェクト研究報告
・『プロジェクト研究報告』 …… 154
・『資料紹介「飯塚恵理人宛辻山幸一氏書簡(2015年11月29日消印)」』 …… 156
「環境と人間」プロジェクト研究報告
『保育者および教員養成課程における環境教育の実践
ー椙山女学園大学教育学部(名古屋市)の事例2007年～2015年』 …… 166
「公募プロジェクト」研究報告
『乳児から就学前幼児までの発達段階を見通した保育の充実
ー乳児専門保育園から幼稚園への円滑な接続を中心にー』 …… 173

寄稿 …… 181

自校教育について …… 181
椙山女学園大学人間関係学部長　杉藤　重信

自然人類学の「環境」概念を再吟味する …… 202
椙山女学園大学名誉教授　京都大学名誉教授　江原　昭善

センター活動概要 …… 215
センター規程 …… 218
センター年誌「椙山人間学研究」編集内規 …… 220
編集後記 …… 222
執筆者紹介 …… 223

巻頭言

『物事の本質を見つめる大切さ』

椙山人間学研究センター長
椙山　正弘

椙山人間学研究センターの年誌『椙山人間学研究第 11 号』をお届けいたします。平成 17 年度に本センターが設立されて 11 年目にあたる平成 27 年度の活動成果の集大成になります。

椙山人間学研究センターでは、設立以来、「人間になろう」という本学園教育理念に基づいて、人間というものを「研究プロジェクト活動」によって人文、自然、社会科学などの各分野から多面的に見つめ、その研究成果を「人間講座」「フォーラム」といった公開講座や、本誌「椙山人間学研究」の発行といった形でアウトプットして参りました。また、これらのセンター事業と並んで保育園、幼稚園、小学校、中学校、高等学校および大学・大学院の各校が枠を越えて一体となり、それぞれに協力し合って教育成果の共有と還元、検証を繰り返しながら、学園教育はもとより学術振興や社会貢献に寄与することに真摯に取り組んで参りました。

「研究プロジェクト活動」では、「総合人間論」「女性論」「人間発達論」「日本・アジア文化と人間」「環境と人間」「人間論教材作成」の 6 プロジェクトが、それぞれのテーマで活動し、人間に関する研究を行っています。また、本センターの開設 10 周年を記念して、今年度から「公募プロジェクト」を設けました。このプロジェクトは、教育理念「人間になろう」を踏まえた研究を対象として、全学園関係者に対して公募を行い、研究事業の支援を行うものです。様々な分野の教員からご応募いただき、選考の結果、今年度は本学園の大学教育学部教授・附属幼稚園長の石橋尚子氏を代表者とする研究「乳児から就学前幼児までの発達段階を見通した保育の充実―乳児専門保育園から幼稚園への円滑な接続を中心に―」を採択しました。

今年度の「人間講座」は、森棟公夫本学園理事長・大学学長の講演から始まり、第 2 回からは「人間論シリーズ」としてシリーズ化し、認知心理学、文化人類学、社会学など、様々な分野から講師の先生方をお招きしました。

まず、第 1 回人間講座『1 メートルの長さの決め方』では、本学園理事長・大学学長の森棟公夫氏が “1 メートルの長さ ” 決定に至る過程で 18 世紀末の科学者達が行った科学的な冒険について講演されました。最初に森棟学長は、フランス革命の時代を生きた、当時のフランスの科学者達が「統一尺度を作る」という目的で「1 メートルの長さを定める」ことを発案したことに触れられました。科学者達は地球 1 周を 4000 万 m と定め、その上で地球の円周（子午線）を測量し、それを 4000 万で割れば 1m の長さが決まると考えました。しかし、問題は「地球はどんな形なのか」ということであり、森棟学長はビーチボールを地球に見立てて説明されました。地球が球体であれば円

周を求めるのは簡単ですが、楕円の場合であると数学的に計算が難しくなります。森棟学長は、ニュートンが自著で「地球は円球ではなく回転楕円形である」と述べていることについて話され、18 世紀に科学者達が行った測量により、実際に地球は赤道方向に長い楕円であることが判明したことを解説されました。さらに、科学者達はあえて難しい子午線に沿った楕円周の測量に挑み、そこから 1m の長さを決定したと説明されました。最後に、伊能忠敬の日本地図の測量の正確さについても触れ、昔の人々の技術の高さや、過去の科学者達がいかに科学の発展に寄与していたかについて考える時間となりました。

第2回人間講座（人間論シリーズ1　人間は、言語によってのみ人間である『物語はどのように理解されるか』）では、大学人間関係学部教授の増井透氏を講師にお招きし開催しました。増井氏は認知心理学、認知神経心理学を専門に、記憶に関する認知神経心理学的研究や、認知症にともなう記憶障害の研究をされています。最初に増井氏は、私達は普段、膨大な情報の中から必要な情報を選択し、そこに意味を見つけることで物事を理解していると話されました。次に、私達は「スキーマ」と呼ばれる、知識の枠組み・単位を持っており、人間の記憶は「どのようなスキーマを用いたか」によって変わり、物語を理解する際にも、スキーマが大きく働くと解説されました。また、スキーマの一種に「スクリプト」というものがあり、これは「習慣的な行動に関する知識」のことを指します。増井氏は、スクリプトによって、私達が一部の情報しか与えられていなくても、何が起こったかが推理できると説明されました。また、スキーマは記憶の変容を起こすことがあるものの、物事を効率よく理解する上で非常に重要なものであると話されました。最後に増井氏は、私達が読んで理解している物語は、個々の文章の集まりではなく、スキーマが意味をつくりだし、記憶をガイドし、理解を促進させているとまとめられました。

第3回人間講座（人間論シリーズ2　人間は、道具によってのみ人間である『世界のモノづくりから“くらし”を考える』）では、国立民族学博物館名誉教授の小林繁樹氏を講師にお招きし開催しました。小林氏は文化人類学、博物館学を専門に、諸文化における、身体の動きと道具との関連について考察する道具人類学的研究などをされています。まず小林氏は、人類の特長について「直立二足歩行」「道具の製作」「火の利用」「言葉の使用」を挙げ、大変長い時間をかけるなかでそれぞれが相互に関連し、人類のくらし方に影響を与えたと説明されました。次に小林氏は、イヌイットがアザラシ狩りの際に使用するスクリーン（隠れみの）、アイヌの人々が使う口琴、タイのモン族が使用するイネの穂づみ具など、世界中の様々な変わった道具を写真で紹介されました。また、ミャンマー内陸に住むインター族の男性が足で櫂を操る様子や、カンボジアの竹筒琴という楽器を演奏している様子などを動画で紹介し、実際に地域の人々がどのように道具を使用しているかを解説されました。小林氏は、道具はくらしや文化に深く関わり、特定の目的に合致して製作・使用されていると話されました。最後に、人間は今後も道具を作り続け、未来に向けて更なるくらしの可能性を広げていかなければならない、と結ばれました。

第4回人間講座（人間論シリーズ3　人は社会的動物である『災害が露わにする“社会

の本質 ”』）では、名古屋大学大学院環境学研究科教授の黒田由彦氏をお招きし開催しました。黒田氏は地域社会学を専門に、近年は東日本大震災を対象とした被災地域の復興過程や支援の問題に取り組んでおられます。黒田氏は、東日本大震災で見えた “ 社会の本質 ” を三つの局面から解説されました。一つ目の局面は「秩序（緊急対応）」です。震災が発生した直後、被災地では暴動も略奪も起きず、コンビニに人々が並ぶ姿は世界を驚かせました。黒田氏は、「秩序」の背後にはゆずりあいの精神と、相互の「信頼」が成立していると説明されました。二つ目の局面は「協力（復興）」です。黒田氏は地域の組織や住民のグループや行政など、利害関係の背後で相互の「信頼」が成立しているかどうかで、復興の進み具合が大きく違ってくると述べ、ここでも互いにゆずるべき所はゆずる精神が大切であると話されました。三つ目の局面は「共感（支援）」です。福島第一原発事故の後、被曝からの自主避難をサポートする市民活動が全国で自然発生的に生まれました。黒田氏は、その背後に人々の「お互い様」意識があると解説されました。最後に黒田氏は、社会を良くするために、どのように信頼関係や相互扶助関係をつくっていくべきかを考えていかなければならないとまとめられました。

今年度の「フォーラム」は、本学園の創立110周年を記念して、学園創立110周年記念椙山フォーラム『女性のライフデザインを考える』と題し開催しました。

今回のフォーラムでは、明治38年に名古屋裁縫女学校として開校した本学園の原点に立ち返り、「衣」の分野で活躍されている株式会社ジュンアシダ・ファッションデザイナーの芦田多恵氏を講師にお迎えし、ご講演いただきました。

第一部の基調講演では、芦田氏が「ファッションと共に生きる～ファッションとライフスタイルデザイン～」というテーマで講演を行われました。芦田氏は、両親ともにファッションデザイナーであったため、幼少期から進路が決定しており、高校からは海外で学び、特に大学教育は、プレゼン力の形成を含め社会生活において役立つ実践的な学びであったことを話されました。1991年に「miss ashida」のブランド設立後、結婚・出産を経験し、仕事と家庭、子育ての両立では、優先順位をつけることを心がけ、「とにかく10年頑張ること」という言葉に支えられたことを語られました。さらに、2013年に立ち上げた東日本大震災復興支援プロジェクト「MINA-TAN CHARM」についても紹介されました。「ライフデザイン」には、「生活を個々人が主体性と創造性をもって設計し、積極的に実現させていくこと」が必要であることを述べられました。

第二部では、芦田氏に加え、大学生活科学部学生2名、高等学校生徒2名、大学生活科学部教授の冨田明美氏が登壇し、アパレル分野を志望する生徒や、ファッション業界への就職を希望する学生に向けたアドバイスなどを交えたトークセッションが行われ、大変盛況のうちにフォーラムは終了しました。

本学園の創立100周年記念事業として椙山人間学研究センターが設立されてから、早くも10年の時が経過しました。本センターはこれまで様々な分野から「人間とは何か」について模索してきましたが、今年度から人間講座

を「人間論シリーズ」という形で始めて、より広い視野から「人間」に関する考察を行っています。そして、広い視野から見つめることで、人間の「本質」についての理解を深めようと努めています。第4回人間講座の黒田氏が講演の中で、「社会の本質」を知ることは、どうすれば良い社会がつくれるのかを知ることであると触れられていました。これはおそらく社会だけでなく、他の物事にも当てはまることでしょう。「人間の本質」を知ることは、この先人間がどうすればより善い道を進むことができるのかを知ることだと思います。そして椙山人間学研究センターは、人間の深層を見つめその本質を探るべく、あらゆる方向から物事を追究し、より一層深化した知識を発信していく使命を担っていることを強く自覚しています。

本センターでは本学園の教育理念「人間になろう」をより広く深く研究し、次の時代を作り上げていく新たな人間についての知の創造へと邁進していく所存でおります。今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう何卒よろしくお願い申し上げます。

椙山女学園創立110周年記念
椙山フォーラム

テーマ　：女性のライフデザインを考える
日　時　：平成27年12月 5日（土）13:30～16:15
場　所　：椙山女学園大学 星が丘キャンパス 文化情報学部 メディア棟001室
プログラム：

開会挨拶　森棟 公夫氏（理事長）
趣旨説明　戸部 栄一氏（椙山女学園大学エクステンションセンター長、生活科学部教授）
【第一部】　基調講演「ファッションと共に生きる～ファッションとライフスタイルデザイン～」
芦田 多恵氏（株式会社ジュン アシダ　ファッションデザイナー）
【第二部】　トークセッション・質疑応答
登壇者:芦田 多恵氏（株式会社ジュン アシダ　ファッションデザイナー）
後藤 真由（椙山女学園大学生活科学部学生）
谷 知夏（椙山女学園大学生活科学部学生）
鶴田 帆香（椙山女学園高等学校生徒）
横井 愛璃（椙山女学園高等学校生徒）
コーディネーター:冨田 明美氏（椙山女学園大学生活科学部教授）

閉会挨拶　杉藤 重信氏（椙山人間学研究センター研究員、人間関係学部教授）
司会進行・講師紹介　豊田 美穂氏（椙山女学園大学生活科学部卒業生、NHK津放送局キャスター）

司会：大変長らくお待たせいたしました。ただいまより、椙山女学園創立 110 周年記念椙山フォーラムを開演いたします。本日のフォーラムは椙山人間学研究センター及び椙山女学園大学エクステンションセンターの主催、愛知県、名古屋市、日進市の後援により開催いたします。

申し遅れましたが、私、本日司会を務めさせていただきます豊田美穂と申します。本学生活科学部の卒業生であり、現在はＮＨＫ津放送局に勤めております。どうぞよろしくお願いいたします。（拍手）

それでは、まず、主催者を代表して椙山女学園理事長の森棟公夫よりご挨拶を申し上げます。

森棟理事長、よろしくお願いします。

【開会挨拶】

森棟公夫理事長：皆さん、こんにちは。椙山女学園理事長の森棟と申します。本日はたくさんの方々にお集まりいただきまして誠にありがとうございます。また、この会場に入り切れない方々がいらっしゃいまして、モニター会場で参加いただいているという状況です。

先ほどもご案内がありましたように、本年は椙山女学園が明治 38 年に創立しまして、110 周年という記念の年となります。最初は名古屋裁縫女学校という小さな学校として始まったわけですが、現在は保育園に始まり、大学・大学院まで、学生数は 8,000 を優に超える数を有しております。基本的には女子校ですが、保育園と幼稚園には男の子も通っています。

毎年椙山フォーラムという講演会を開催していますが、今年は特に 110 周年ということで、著名な方をお招きしました。本日も多くの方にご参加いただきましたことを深く感謝いたしますとともに、毎年講演会や公開講座を数回開催しておりますので、ぜひご参加いただければ大変嬉しく思います。

芦田先生、本日は遠路はるばる名古屋の地まで、お忙しい中、お越しいただきまして深く感謝いたします。どうぞよろしくお願いいたします。（拍手）

司会：森棟理事長、ありがとうございました。

続きまして、椙山女学園大学エクステンションセンター、センター長の戸部栄一より、今回のフォーラムの趣旨についてご説明申し上げます。

戸部センター長、よろしくお願いします。

【趣旨説明・演者紹介】

戸部栄一センター長：エクステンションセンター長の戸部と申します。今、理事長からお話がありましたように、本学園には 3 つのセンター（人間学研究センター、エクステンションセンター、食育推進センター）がありまして、それらのセンターが毎年フォーラムを開いています。今年は特に 110 周年という記念の年ですので、何か皆さんのためになるというと語弊がありますけれども、皆さんに喜んでいただけることをやりたいということで検討してまいりました。

本学はもともと名古屋裁縫女学校が原点であり、衣食住の「衣」の分野からスタートしているため、「衣」をテーマに、「女性のキャリアデザインを考える」という年間テーマを設定することになりました。

そこで、株式会社ジュン アシダの芦田多恵さんにご相談しましたところ、快く引き受け

ていただけるということになりました。大変感激しておるところです。

女性の活躍が期待される現代において、芦田さんはファッションデザイナーとして活躍されていらっしゃり、芦田さんのお話を聞きながら、これからの少子・高齢化時代の中で自立した女性として、そして、一人の人間としていかに生きていくべきかを考えたいと思いました。様々な選択肢が考えられる女性の生き方の中で、どのような選択肢を選んでも社会とつながりながら自立して生きていけるように、また、女性としての一生涯を見通した上で自分のライフデザインを考えることの重要性をメッセージとして伝えていきたいと思います。

今回のフォーラムでは、第一部で芦田多恵さんに基調講演をしていただき、第二部ではトークセッションを行います。現役の大学生、高校生の方お二人ずつに参加してもらい、質疑応答の形式で進めていく予定です。その際には本学生活科学部の冨田明美教授に司会進行役を務めていただきます。また、先ほどご本人から紹介がありましたが、総合司会は生活科学部卒業生の豊田美穂さんにお願いしています。

どうぞ最後までお楽しみいただきたいと思います。よろしくお願いいたします。(拍手)

司会：戸部センター長、ありがとうございました。

第一部に入る前に今回の講演者であります芦田多恵氏のプロフィールをご紹介いたします。

芦田多恵氏は芦田淳氏の次女であり、現在は株式会社ジュン アシダにてファッションデザイナーとしてご活躍されています。高校時代、大学時代を海外で過ごされ、スイスのル・ローゼイ高校をご卒業後、アメリカのロードアイランド造形大学アパレルデザイン科をご卒業、芸術学士号を取得されました。

1991年に「miss ashida」コレクションでデビュー、2012年に「TAE ASHIDA」コレクションを発表、同年秋には一般社団法人日本ファッション・エディターズ・クラブより「ＦＥＣＪ特別賞」を受賞されています。また、2013年には日経優秀製品・サービス賞本審査委員に就任されています。東日本大震災後には東北復興支援を目的とした"MINA-TAN CHARM"のデザインや技術指導をされるなど、社会貢献活動にも積極的に携われていらっしゃいます。

【第一部　基調講演】「ファッションと共に生きる～ファッションとライフスタイルデザイン～」

芦田 多恵氏（株式会社ジュン アシダ　ファッションデザイナー）

司会：それでは、第一部、基調講演「ファッションと共に生きる～ファッションとライフスタイルデザイン～」に移らせていただきます。芦田様、よろしくお願いします。
皆様、拍手でお迎えください。(拍手)

芦田多恵氏：今ご紹介いただきました、ファッションデザイナーをしております芦田多恵でございます。椙山女学園は今年 110 周年を迎えたということで本当におめでとうございます。また、このような記念の年に講演のご指名をいただきまして、大変光栄に思っております。

ファッションデザイナーといいますと、とても派手な職業というイメージがあるかもしれませんが、実は大変地味な物づくりの仕事をしているものですので、多くの方の前で話すということは得意なほうではございません。今日は本当に大勢の方がこのためにいらしてくださっていると伺っております。限られた時間の中ではございますが、皆様と共に『女性のライフスタイルデザイン』というテーマに関していろいろと考える、もしくは何かご提案できる、そのような時間になりましたら幸いです。どうぞよろしくお願いいたします。（拍手）

パワーポイントで少し画像なども盛り込ませていただきますので、ご覧いただければと思います。

■ライフスタイルデザインについて

今回のテーマである『女性のライフスタイルデザイン』についてお話をさせていただきます。でも実は、私はこのようなテーマでお話するにはもしかすると不適格なのかもしれません。私は職業柄、よく雑誌や新聞、テレビなどの媒体にインタビューをされることがあります。インタビューのテーマは、それぞれ違いますが、最初の質問はいつも同じで「いつ何がきっかけでファッションデザイナーになろうと決心されたのですか」という質問です。インタビュアーの方は、何かとてもドラマティックなきっかけがあってこのような仕事をしているのだろうという期待を込めて質問されるのだと思いますが、本当に申し訳ないですが、いつも「覚えていません」という答えしかできないのです。なぜかといいますと、私は物心ついたころから、自分もそうですし、周りの友人、もちろん家族も含めて、「この人は将来ファッションデザイナーになる人」、自分自身も「将来はファッションデザイナーになる」と思って育ってきたものですから、何かきっかけになったこととか、決心した時ということは覚えていないのです。ですから、そういう答えをしますと、インタビュアーの方は非常にがっかりした顔をなさって、多分ドラマティックな答えをしたら、じゃあ、次はこうつなげていこうと想定していらっしゃるのでしょうが、次の質問が出てこなくなるのです。それで私は大体続けて「私には 1 人姉がいるのですが、その姉が全く絵を描いたり物づくりをしたりということが好きな子供ではなかったので、3 年後に生まれた私にたまたま白羽の矢が立ったのです」と言いますと、さらにがっかりされた顔をなさいまして（笑）、本当に胸が痛くなります。ただ、それが事実で、私は家業であったファッションデザイナーという職業を継いだということにほかならないのです。

我が家はある意味とても特殊な感じにお思いになるかもしれませんが、父はもとより、母もファッションデザイナーで、60 年代初頭におそらく今で言ったらＩＴビジネスのような、その時代には非常にニュービジネスであったであろう既製婦人服プレタポルテのデザイン、

製造、そして販売をする会社を２人で立ち上げ、翌年、私がちょうど生まれた年に、“jun ashida”という冠をつけたファッションショーを行い、今年で52年目となります。

さて、『女性のライフスタイルデザイン』というテーマでは、まず母のことが頭に浮かびます。その当時、60年代、70年代というのは、まだ女性がキャリアを持つということが当たり前ではない時代でしたが、母はまさにそのころからキャリアウーマンとして仕事と家庭の両立をしていたのです。現代のような便利な時代でもありませんし、周りの理解もありませんから、おそらく今とは比べものにならないぐらい、大変なことだったと思います。母は私が小さいころ、よく寝かしつける私の耳元で、「早く大きくなってママのお手伝いしてちょうだいね」と囁くのです。それを私はとても覚えています。多分それは母の心の叫びだったのではないかと思いますが、毎晩毎晩寝かしつけるときに囁かれ続けていたので、（意外と子供というのは責任感が強く）「私は早く大きくなってママのお手伝いをしなければいけない」と思うようになりました。今考えてみますと、「母の勝利だな」と本当に思います。私はある意味まんまと乗せられてしまい、私もそのつもりで人生を歩むことになります。

そういうことですから、私は、『ライフスタイルデザイン』というよりも、まんまと乗せられた人生をずっと過ごしているようなものなので、ライフスタイルデザインを語る資格があるかどうか、「不適格なのでは」と最初に申し上げたのです。

■海外の高等学校、大学へ進学

小さいころから父や母は、私を将来ファッションデザイナーにするべく育てておりましたので、英才教育とまではいかないかもしれませんが、「早いうちから海外に」というのは決めていたようです。ただ、「義務教育までは日本でしっかりと勉強する」ということが父の方針でしたので、中学生までは六本木にある東洋英和女学院で過ごし、高校１年生からスイスに留学をいたしました。

どうして海外の学校であったかといいますと、１つは、父が英語を習得するのに非常に苦労したので、「英語は頭が柔らかい子供のうちに学んでおいたほうがいい」ということと、また「海外で早いうちから生活をすることによって国際的な感覚を養わせることがとても大事」という考えのもとでした。また、なぜ

（1）

（2）

スイスだったかといいますと、その当時は、今みたいにインターネットがある時代ではありませんでしたので、それほど情報がなかったのですが、「外国人の子供が１人で生活をするのに安全な国がいい」ということ、スイスという国はいろいろな言語が話されている国ですから「英語とフランス語が同時に学べる」という利点がありました。それで、いろいろな方のご紹介もあり、私が入学した学校の理事をしている方のご推薦もありまして、ローザンヌとジュネーブの間の町にあるル・ローゼイ校に留学することが決まりました（スライド1、2）。この学校は1880年に創立された非常に歴史がある、スイスでも名門の寄宿舎制の学校です。卒業生の中には世界のロイヤルファミリーやハリウッド俳優の子供たちが名前を連ねるような、はっきり言って私にとっては身分不相応な学校に入ってしまったのです。その上、私の語学力はというと留学が決まった時には、東洋英和の先生たちが、「大丈夫ですよ、日常会話ぐらいならどうにかなります。自信を持って行ってらっしゃい。」と肩をぽんと押してくださったのですが、実際には、ほぼ聞きとれない、一切話せないという状態だったのです。いくら小学校のときから英語の授業があったといっても日常会話を理解するというのは難しいことだったわけで、それを全く疑いもなく留学してしまった私も大分とぼけているのですが、とにかく聞きとれない、話せないという状況が１年ほど続きました。

一方、同級生たちはヨーロッパでも名門な寄宿舎の学校だったものですから、大体４カ国語ぐらい話せるという国際派ばかりでした。ですから、誰にも通じない日本語しか話せない私のことは、どうしてあげていいかわからないという存在だったと思います。でも、そんなことを言っても仕方なく、とにかくひたすら英語を学び、同時にフランス語にも一生懸命取り組みました。しかし結局「2カ国語を同時に学ぶということはできないのだ」ということを経験しました。ですから、フランス語は聞くことはできますが、話すことには非常にいまだに恐怖心を持っております。

とにかく英語を学ばなければいけない、英語がしゃべれるようにならなければいけないと、本当に終いには辞書を食べる夢を見るぐらい必死だった最初の１年でした。

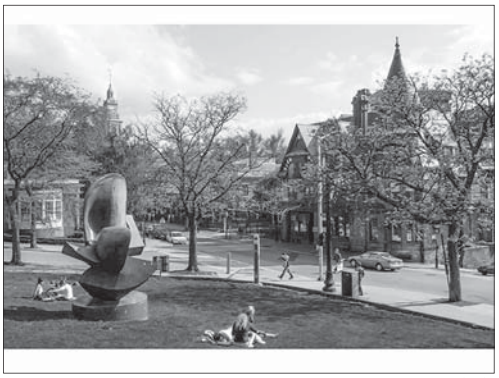
そうして、だんだん会話が耳に入ってくるようになり、良い友達も出来て、話をするようになりますと色々な事情を抱えているということがわかりました。言葉がしゃべれないときには、ただ遠くから見るだけで、ヨーロッパやアメリカの友人たちは、キラキラと美しくて何ヶ国語も話せて私にとっては本当に羨望の的だったのです。同年代なのに私はとても子供っぽく、周りはすでに半分淑女のような雰囲気でした。もちろん金銭的に非常に裕福な家庭から来ている人たちが多かったのですが、そのイメージと違って、「実は何年も自分の国に帰っていないの。母国は内戦状態で、政府の仕事をしていた父は軟禁状態、電話をかけても常に盗聴されるし、手紙も全てあけられて読まれてしまう。」という友人や、「自分には３人も継母がいて、実母は自殺をしてしまったの。だから、居心地が悪くて休暇でも自分の家に帰りたくないのよ。」という会話が耳に入ってくるようになったのです。中には両親とも違う国籍で、世界中に家があって、夏休みはここの家、冬休みはここの家と

行くので、自分の国籍やアイデンティティというものを持っていない友人や、むしろスイスという安全な国に逃がされている子供もいるということを知りました。それで、初めて私は日本人であり、自分の母国があり、家があり、私のことを待っていてくれる家族がいる、ということがいかに幸せなのか、日本人としての誇りを持っているということがどんなに特別で大切なことなのかということを学ぶという機会になりました。

沢山のすばらしい経験と、世界各国から集まっているかけがえのない友人たちとの友情、そして、価値観や常識の違う人たちと一緒に暮らすという一つの“技”を身につけ、私はいよいよファッションデザイナーを目指して専門的な勉強をするためにアメリカの美術大学を目指すことになります。（スライド3、4）これがその学校の写真ですが、もしかすると、このころからやっと私は自分のライフスタイルデザインということを始めたのかもしれません。

元来ファッションデザイナーになるために海外の学校に来たはずなのに、スイスでは語学の勉強がメインになってしまったこともあり、もどかしさを感じながらも、卒業するまでにはどうにか日常会話程度なら不自由なく

（3）



（4）

しゃべれるぐらいになっておりました。そこで大学に入ったら語学の勉強を続けるのではなくて専門的な勉強がしたいという大きな希望を持つようになりました。

■アメリカの大学での学び

ファッションを勉強するのは英語圏の国でないと嫌だと考えており、イギリスかアメリカのいろいろな学校をリサーチしました。また、ファッションデザイナーになるために、ファッションデザインの勉強をするためにどうしても美術大学に行きたい、美術大学の中で美術の一環としてファッションデザインを学びたいという強い希望がありました。もちろんファッションデザインというのは美術大学だけでなく、専門学校など、さまざまな学校で教えていると思うのですが、とにかくそのときはファッションも美術の一環だから美術大学でないと絶対に嫌という気持ちがありまして、それを基準に探しましたところ、美術大学でファッションを教えている大学はアメリカに2校しかないのです。東海岸のニューヨーク州の隣にあるロードアイランド州プロヴィデンスという町に1校、ロードアイランド・スクール・オブ・デザイン、ロードアイ

ランド造形大学という学校が、まさに私が理想としていた学びの場だと思いまして、必死に受験をして入学をすることができました。

大学があるプロヴィデンスという町は学生が非常に多く、ロードアイランド造形大学の隣には、アイビーリーグの一つでもあるブラウン大学が隣接して建っております。ですから、ロードアイランド造形大学は美術大学ですが、隣のブラウン大学と提携をしていてブラウン大学の授業を受けられるという利点もあったのです。

ロードアイランド造形大学は総合的な美術大学ですので、建築･グラフィックデザイン･ファッションデザイン・アニメーションやフィルム制作･彫刻･絵画という全ての芸術、デザインに関する学部があります。学校の特徴としては、そこで教えている大学教授というのは、全員が教授だけの肩書ではなくて、その専門分野における現役のスペシャリストでした。例えば、グラフィックデザインは、グラフィックデザイナーとしても活躍しているプロが授業をするという非常にユニークな学校でした。私が2年次から在籍したアパレルデザイン科のトップの女性も実は50年代に「アメリカン･ヴォーグ」の表紙を飾った有名なモデルで、ファッションデザイナーのようなこともしていた人でした。もうかなり高齢でしたが非常にグラマラスで素敵な女性でした。そういう経歴のある方だったので、現役のファッションデザイナーではありませんが、ニューヨークのセブンスアベニュー（有名なアパレル会社が集まっている通り）にある会社のＣＥＯたちとも非常に太いパイプを持っていました。

ロードアイランド造形大学では、1年目は専攻に関係なく、とにかく同じようにクラス分けをされて、平面と立体、そしてデザインを学びます。一般教養の単位を取得するのも厳しい学校でしたので、課題の作品の制作をするにもかなりの時間をとられ、平均睡眠時間は大体毎日4時間以下でした。徹夜も日常茶飯事でただひたすら勉強。例えばダンテの神曲を読みながら、課題の彫刻をつくり、終わると色彩構成の絵を描きながら美術史のレポートを書くという日々でした。私は英語が出来るようになったとはいえ、もちろんネイティブではありませんので、言葉のハンディもありながら、とにかく必死に勉強して毎日を過ごしていたという記憶がございます。

その中で最も印象に残っているのは、1年生のときのデッサンの授業です。1カ月間ずっと“ブラインド・ドローイング”というのをさせられるのです。（スライド5）“ブラインド・ドローイング”とはモデルは見てもいいのですが、自分の手元を見てはいけないというデッサンの仕方です。ですから、自分が書いているものを一切見ずに絵を完成させなければいけないので、普通は1つの絵にならないのです。ただ、目から見たままのカーブや形を書いていくので、才能がある人なら、1つの造形にはなっていなくてもすばらしい絵

(5)

が出来上がるのです。私もそれを１カ月間やりましたが、そんなすばらしい絵にはならなくて、表現が下手で自分の才能の乏しさに何度も涙を流すこともありました。また、作品を提出する日は、クラス全体で批評し合うのでかなり辛辣な意見も出ます。みんなとアート談義をしたり、とても刺激的で、感動と挫折を繰り返しながら過ごした、そんな熱く有意義な日々を送りました。

そして、２年次からはようやく専攻に分かれて専門分野を学ぶことになります。いよいよ私のファッションデザイナーとしての勉強が専門的に始まるのです。最初の授業は基本的なスカートのパターンを引くという授業でした。今考えると恥ずかしいのですが、その時点で初めて洋服のつくり方を全く知らなかったことに気がつくのです。洋服にパターンがあるぐらいのことは知っていましたが、どうやってパターンをつくるとか、生地に縦横があるということさえ知らなかったのです。ですから、「縦に合わせてパターンを置く」ということもよく意味がわかりませんでした。「ファッションデザイナーになる」と言って突き進んできた割には何も知らず、非常にお粗末でした。一方周りのクラスメイトたちは、アメリカ人にとってもかなり難関な大学でしたので、みんな専門的に勉強をして、もちろん独学で最低限洋服をつくったりはしているわけです。これは本当にファッションデザイナーの子供だということの奢りだったのですが、私は何も知らずに授業を受けることになります。

授業はほぼ専門用語の羅列でした。英会話ができるようになっても、今のようにインターネットも無い時代でしたので、辞書を開いてもその専門用語が調べられず、先生がおっしゃっていることは全くちんぷんかんぷん、その上、自分に基礎知識がありませんから、授業の時間内にスカートのパターンをつくり終えることができなかったのです。それで、１人だけクラスに残って次の日までに仕上げなければいけないスカートのパターンを涙を流しながらつくったこともあります。

余りに悲しかったので、日本にいる母に電話をかけて、「いかに自分がクラスの中でできなかったか、スカートのパターンが引けなかった、用語が余りにも難しくて、先生の言っていることがちんぷんかんぷん」などの弱音を吐きました。すると、母が一言、「あら、そんなことでもう挫折しているのだったら、この先無理じゃない。だったらすぐに帰ってくれば。」と言ったのです。

もちろん私はそんな言葉を聞きたかったわけではなく、すぐやめて帰ろうと思っていたわけでもなく、ただ優しく「それは大変ね。それでも頑張りなさいよ。」と言ってほしかっただけでしたが、母の返答は余りにあっさりしていて予想外でした。それで、私も意地を張って「もういい、帰りません。さよなら。」と言って電話を切り、それから長いこと日本には電話をしませんでした。

娘をデザイナーにしたいのだったら、もう少し技術的なことを教えてくれていたらよかったのに、とパターンを引きながらぶつぶつ文句も言いつつ、とにかく涙を流しながらでも、どうにかついていけるように毎日努力いたしました。

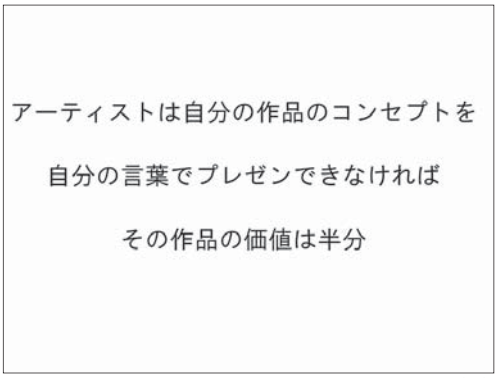
■プレゼンテーションの重要性～自分の作品のコンセプトを伝えること～

私に受難を与えたのはパターンメーキングだけではありませんでした。デザインのクラスでは、毎週、非常に独創的なテーマのもとにデザイン画を20枚書いてきなさいという課題が出ました。例えば「もしスタイリッシュな女性がアラスカに釣りに行く旅行の計画を立てたら、どんなワードローブを持っていきますか」というようなテーマです。ですから余りあり得ないようなテーマなのですが、非常にイマジネーションを誘うデザインをしなければいけません。

私は「この人はこういうことをするのではないか」「こんな気候だからこんなコートが要るのではないか」ということを、いろいろとイマジネーションを働かせてデザインするところまでは割と得意分野でしたが、提出日にはそのデザイン画を全部壁に張り出して、一人一人自分のデザインについてプレゼンテーションをしなければいけないのです。今では当たり前ですが、80年代の日本には「プレゼンテーションをする」という言葉だけでなく概念すらなかったのです。アメリカの学校ではそのときからとにかくプレゼンをしなさい、自分がつくったものをきちんと人の前で説明できるようになりなさいということでやらされるわけなのです。コンセプトをプレゼンするというのは、かなりいろいろなボキャブラリーが必要になり、ネイティブではない私はまずはボキャブラリーが足りませんでした。それから、人前で自分のコンセプトを説明するという訓練を受けていませんでしたので、何かぼそぼそっと自信なさげに話すことしか出来ませんでした。一方アメリカの学生たちは、子供のころからものすごく訓練されていますので、作品のレベルはいかにせよ、それがどんなにすばらしいデザインかというようなことを堂々と説明できるのです。

プレゼン能力で差がついてしまうのでプレゼンの日は気が重く、前の日から眠れなくなるぐらい憂鬱でした。実はこの大学は、「アーティストは自分の作品のコンセプトを自分の言葉でプレゼンできなければ、その作品の価値は半分」ということがポリシーの大学だったのです（スライド6）。私はそのことを全然知らずに入学してしまったので、学生時代は大変苦労しましたが、今思い返すと、その訓練は社会に出てから一番役に立っています。時代はどんどん変わり、日本でも人前でプレゼンをするという機会が大変増えました。広い意味でファッションショーも一つのプレゼンテーションということになります。自分の作品のコンセプトをきちんと人に伝えるためには、自分自身がきちんとコンセプトを理解して組み立てた上で物をつくっていかなければなりません。当時は大変辛い日々でしたが、その訓練はとても貴重な経験だったと思っています。

「アーティストは作品が全てを物語っているのだから、別に言葉は要らない」という風潮も一部あるかもしれませんが、今はもうそんな時代ではなく、「アーティストも自分の作



(6)

品を自分の言葉で伝えなければいけない」、既にそういう時代が来ているのではないかなということを実感しています。

努力の甲斐あって3年生の終わりには最も美しいドレスを制作したという賞と奨学金を少しいただきました。それから、その学校というのは2学期目に自分の専攻と違った勉強をする期間があり、その6週間を利用して、パリのオートクチュールのメゾンに2回と、ニューヨークのセブンスアベニューにある有名ブランドなどで研修を合計3回受けさせていただく経験もしました。

こうして睡眠と遊びとは全く無縁の大学生活だったのですが、無事4年間で修了することができました。

■大学卒業、就職へ

そして、いよいよ就職です。大変恵まれたことに、ニューヨークのブランド2社から就職のオファーをいただきましたが、私は日本に帰国することを決意していました。なぜかというと、高校1年生から大学卒業するまで（ちょうど子供から大人になる年頃の）7年間を日本から離れて過ごしていたものですから、何か日本人としてのアイデンティティというものをなくしてしまったように感じていたのです。アメリカに4年いましたが、もちろん自分はアメリカ人ではないし、ヨーロッパに3年いたときには、スイスという場所で非常にインターナショナルな環境ではありましたけれども、国籍が余り重要ではないという生活をしていたので、日本人としてのアイデンティティは何だろうかと考えるようになり、とにかく日本に帰って、まず日本人としてきちんとアイデンティティを取り戻して仕事がしたいと思っていました。

帰国後、もちろんファッションデザイナーになろうと思って勉強してきましたから、何かファッションの仕事がしたくて、日本のファッション業界で仕事を探しましたが、どこも雇ってくれるところがありませんでした。おそらく「芦田淳の娘」というのは、同業他社の方たちにとってみれば非常に面倒ということがあったのだと思うのです。「気を遣わなきゃいけない」とか、「内部をライバル会社に見られてしまう」という諸事情が考えられますが、皆さん渋い顔をなさって雇ってくれるところがなかったのです。そんな私に「名前を変えて就職してみたらどう？」というアドバイスをくださる方もいましたが、さすがに偽名入社がばれてしまった時には「スパイとして娘を送ったな」ぐらいのことを言われて、父や母にも迷惑をかけてしまってはいけないという心配もありましたし、もちろん自分の名前にはプライドがありますので、そういうことも出来ず、帰国してから半年間何もしないで過ごすという時間がございました。

それでもアメリカの美術大学を卒業したばかりの、20代前半のファッションデザイナー志望でしたので、「私は頑張って4年間専門的な勉強をしてきたのだから、絶対にどこかに就職したら役に立つ」という自負があり、現実は大変厳しいのに、理想ばかりが先立って全てが空回りという状況でした。

ついに見かねた父が「じゃあ仕方がない、うちで働くか。」と一言。実は余り嬉しくなかったのですが（笑）、株式会社ジュン アシダに入社して、私のデザイナー生活が始まります。

入社後、時には親子の確執のようなこともありましたが、いつも父が広い心で受け入れ

てくれたおかげで、デザイナーとして非常に楽しく様々なデザインをさせてもらっておりました。この頃、某雑誌の編集者の方に、どうもあそこの娘がデザインをしているらしいということがわかってしまい、突然のオファーだったのですがデザイナーとして公にデビューしてもいない私が20代向けのファッション誌に連載を持たせていただくことになりました。

(7)

(8)

■「miss ashida」からのデビュー、結婚、出産

その連載が「お洒落のルール」という切り口で意外と人気が出ました。そうすると父が「きちんとデビューもしていない人間が、公のページをいただくということは、その雑誌に対しても失礼じゃないか。」と言い出し、入社から3年目の27歳の時に「miss ashida」というブランドでデザイナーとしてデビューすることが決まりました。

呑気に色々なデザインをしていることが楽しかったので、1つのブランドを持つということに対して心の準備ができていなかったこともあり、本当のことをいうと全然やりたくなかったのです。まるで崖から突き落とされたライオンの子供のような状態で、デビューコレクションを発表することになります（スライド7、8）。

そして、年に2回のコレクション制作のみならず、バイヤー向けの展示会用作品の制作、いろいろな企画や運営、営業的な数字の部分まで全て責任を持たされるという状況になり、毎日仕事に没頭する日々が始まって生活は非常に忙しくなります。

人間というのは忙しければ忙しいほど意外と色々なことをするというのは、自分の人生を振り返っても実感することなのですが、一番忙しかったその時期に私の人生も公私ともに変化をしていきます。

1回目のデビューコレクションを経て、デビュー2シーズン目には婚約、結婚いたします。ここは非常にスピーディーでございます。9月に主人と出会いまして、1月には結婚しておりました。さらに6シーズンが終わったあたりで最初の子供を出産いたしました。

出産前日まで仕事をして、4週間後には仕事に復帰。仕事と子育ての両立ということにいきなり直面するわけです。これは私だけで、当社には産前産後休暇はもちろん、復職後も時短勤務の制度がありますので、どうぞご安心ください。

それは本当に想像を絶するほどのハードワークでした。私は完璧主義者みたいなところがありまして、何から何まで自分できちんとやらないと気が済まない性格なものですから、さすがに仕事をしている日中というのは子供を見るわけにはいかないので、ベビーシッターにお願いしていたのですが、仕事が終わって帰宅しますと、お風呂に入れたり、寝かしつけたり、とにかく全部自分でやりたいのです。また、娘の離乳食も全部手づくりにこだわりまして、絶対自分で手づくりしなければいけないと思っていますから、夜中にお魚を裏ごししたり、次の日にベビーシッターがちゃんとよくわかるように冷蔵庫にきちんとメモを残すなど、本当に息つく暇がない日々が始まってしまうのです。

はじめはどうにかやっていましたが、だんだん娘の夜泣きが始まると睡眠時間がなくなって、いよいよ真っすぐ歩けなくなってしまうぐらいヘトヘトになってしまったのです。その状況を見るに見かねた主人に「いい加減にしなさい。全て自分でやるということは自己満足以外何でもない。もしそれで病気になったら、一番迷惑するのは子供だよ。」と怒られました。自分が完璧にやっていると思っていたことは全て自己満足であったということを思い知らされたのです（スライド9）。

それから、もう自己満足はやめようと決心し自分がやらなければいけないことの優先順位をつけるようになりました。それは仕事も子育ても同じです。全部自分がやるのではなく、私しかできないこと、私がやらなければいけないことをリストアップして優先順位をつけ、それしかやらない。自分がやらなくても他の人ができることは全て任せると決めて

(9)

実行しました。仕事も完璧にやらなければ気が済まない性格ですから、それを変えていくのは一大決心でしたが、そうすることによって大変気持ちが楽になりました。

仕事をしていると、母親として日中子供と一緒に過ごせないのは、どこか後ろめたい気持ちがあり、せめて自分の手が空く夜間に愛する我が子のために何かをすることでどうにか挽回したいという気持ちがあったのですが、それが自己満足ですね。そうではなくて、気持ちに余裕を持つことで子供の成長を見守る、楽しむ、そして短い時間であっても一緒に過ごす時間を有意義なものにすることにもっと神経を使うように変わっていきました。

そして、5年後には2人目を出産しました。臨月でお腹が相当大きくなるまで仕事をしていると、お腹がつかえて机に座ってデザイン画が書けなくなるので、大体7カ月ぐらいからは横向いてデザイン画を書くという方法で、また前回の出産と同じように前日まで働いてしまいました。もはやそのころは子供がいる生活には慣れていましたし、子育てと仕事の両立も当たり前になっていましたので、海外出張もできる環境まで整えておりました。その後パリブティックの20周年記念コレクシ

（10）

（12）

（11）

（13）

ョンを行うため、パリ出張へも行きました（スライド 10、11、12、13）。

どんどん仕事は忙しくなり、相変わらず自分の時間というのは皆無でしたが、仕事で家庭のストレスを発散して、家庭で仕事のストレスを発散するという日々を続けておりました。

■「とにかく 10 年がんばる」

私にはいつも支えになっている言葉があります。それは子供を取り上げてくださった産婦人科の女医先生の言葉です。その先生は母と同い年でお子様を持つキャリアウーマンでした。私が出産したときに私が仕事をしているというのをご存じで、「とにかく 10 年頑張りなさい。10 年経てばいろいろなことが変わってきます。その 10 年間、仕事も大切に続けなさいね。もし仕事を辞めてしまったら、10 年後にあなたはとても後悔しますよ。」と、言葉をかけてくださいました（スライド 14）。

その時私には仕事を辞めるという選択肢はなかったので、辞めるか辞めないかという悩みはありませんでしたが、永遠に頑張らなければいけないと思いがちなところを、「10 年間頑張ってごらんなさい」という言葉によって「10 年だったらどうにか頑張れるかもしれない」という心の支えになっていたのです。人間は短い期間の目標は意外とこなせるものです。「ずっと続けなければいけない」と言われると、出だしから挫折してしまうこともあり

（14）

ますが、先生が仰ったとおり子供は 10 歳になると、本当に嘘のように親の手から離れて、どんどん楽になっていきました。

キャリアにおける 10 年間に置き換えると、新入社員が入社して 10 年経てば役職についているわけです。そのような意味でも 10 年間というのは変化が大きいです。私のようにものづくりをしている者の 10 年は、作品や技術に大きく影響するほどの年月です。ですから、ずっと頑張るのではなく、とにかく 10 年間頑張って乗り越えようという気持ちが大きな支えになり、今日まで私は歩めたのではないかという気がしております。

そして、傍らではいつもキャリアウーマンの大先輩である母が見守っていてくれました。あるときは厳しく、あるときは私が転ぶ前に手を差し伸べてサポートしてくれていたように思います。そもそも私が仕事と家庭と両方持ちたいと若いころから思っておりましたのは母の影響が大きいです。私が子供のころ、母はいつも家にいませんでした。そのころ共働きの家というのはとても珍しかったので、「私だけお家に帰ってもママがいない」と、いつも寂しい思いをして母を恨んだ時期もありました。しかし、20 歳を過ぎて少し私も大人になってから子育てが終わった母を見たときに、子供以外に生きがいを持って輝いている姿がとても素敵だなと思えるようになったのです。

現在母は 82 歳になりましたが、未だに現役のキャリアウーマンで、毎日出社をしてキビキビと仕事をしております。母のポリシーは「一生ハイヒールを履き続ける」ということで、「どんなに年を重ねても、背筋を伸ばして美しくありたい」「美しいものをつくっていきたい」という強い思いは今日も継続中でございます。

そんなことで子供たちも成長しまして、長女は大学 3 年生になりました。今日いらしてくださっている学生の皆さんと同じ年頃です。長男は高校 1 年生になって、母親と一言も話をしてくれなくなりました（笑）。小さいときは 2 人の色々なお稽古事や学校行事のスケジュールと自分のスケジュールを常に頭の中で二層構造に考えるという日々を過ごしていましたが、もはやそんな日々も懐かしいなと思うようになりました。

今は少し自分の時間が持てるようになり、生活にゆとりが出てきた気がします。もちろん子供が大きくなりますと別の悩みというものが出てきて心配事もありますが、それも前向きに捉えられるようになりました。

■東日本大震災の復興支援プロジェクト「MINA-TAN CHARM」

気持ちにも少し余裕が出てきたころ、私は 2011 年に起きました東日本大震災の復興支援プロジェクトに着手することになります。津波によって町全体が壊滅的な被害に遭った宮城県南三陸町の仮設住宅に住んでいらっしゃる被災者の方たちとご縁があり、長期的な

復興支援を目的とした「MINA-TAN CHARM」というブランドを震災の2年後の2013年に立ち上げることができました（スライド15）。このプロジェクトは私が中心になり、当社の技術者などのスタッフと南三陸の仮設住宅に入居している縫製技術者とともに動物のマスコットのついたオリジナリティーと付加価値を持ったチャームを製作するといった内容です。

主にイタリアの高級生地やボタンやビーズなどの当社の洋服の量産が終わった後に少し

（15）

残ってしまった素材を利用して、私がデザインし、技術者たちが立体にして、出来上がったサンプルをもとに南三陸にてワークショップを開催して技術指導を行います。厳しい品質管理のもとに合格した製品に対して工賃をお支払いすることで自立支援にもなっているのです。元来こういう復興支援は、売れた売上金の一部をその方たちに寄附をするのが一般的ですが、このプロジェクトはそうではなくて、「仕事」という位置づけです。ですから、仕事として縫っていただいたものを私どもが全て販売をして、その売り上げの中から販売経費を除いた工賃をお支払いすることでどんどんとプロジェクトとして回していくという流れになっています。

そして、このプロジェクトは被災地の手づくり品ということだけではなく、高品質な商品として有名百貨店などに置いていただけるような商品を目指して厳しい品質管理のもとに行われています。ですから、「被災者がつくったものですので、ぜひ買ってください」ということだけではなく、逆に「かわいいから買ってみたら被災者支援だった」という商品になったらいいなということが目標になっております。

そもそものこのプロジェクトがスタートしたのは、震災から2年がたって、復興支援であるとかボランティア活動などが一段落したように見えた時期でした。それまでも私どもはチャリティーTシャツを販売して売上金を寄附するという活動を行っていたのですが、目に見える支援というのがどんどん減ってきたというニュースがテレビなどで報道されるようになり、何か継続的な支援ができないかと考えておりました（スライド16）。

私は震災前からアメリカで一番大きなボランティアのＮＰＯ法人の東京支部であるハンズオン東京の顧問を務めさせていただいていました。東日本大震災が起きて、何か私たちにできることはないだろうかという話をする

（16）

ようになった矢先に偶然にもハンズオン東京の方から、「南三陸にはミシンを使った手づくり品を復興支援バザーやネット販売している被災者がいますが、支援の思いというのも時がたつにつれて薄らいできて売れなくなってきている」という情報がありました。それでミシンと、それを使う技術があれば、何か発展的かつ長期的にご支援をさせていただけるのではないかと思うようになったのです。

とにかくまずキックオフミーティングの日取りを決めて、ものづくりプロジェクトをやってみたいという方たちと、現地でお会いするということになりました。

現地に行ってから考えようという話でしたが、何のアイデアもないというのはちょっとどうかと思って、自分の中でも考えていたのですが、なかなかいいアイデアが思い浮かばないまま南三陸への訪問前夜になってしまいました。そこで私に不思議なことが起こったのです。そろそろベッドに入って寝ようかと思った瞬間、本当に何かがおりてきたみたいに私の頭の中に突然プロジェクトの形が思い浮かび始めたのです。

会社の中には量産後の端切れが沢山あるなということがまず頭の中をよぎったのです。人間の体というのはカーブでできていますので、パターンをとった後は必ず少し布が残ります。もちろん洋服をつくるときはなるべく大きな残布ができないようにパターンをうまく入れ込んでいくわけですから、大きな残布というのは残らないのですが、どうしても隙間の小さな残布が山ほど出てしまうのです。また洋服を量産するときには、例えば100着つくるということであれば、1割ぐらいは余裕を持って材料を準備しますので、当然残りが出ます。その事が頭によぎりまして、それが使えるのであれば、私たちが洋服を生産している以上、必ずその素材は出てくるものなので、無理なく提供ができるということ、それから残布は小さいものなので、小さいパーツであれば幾らでもつくれると。そして、同じ縫うなら楽しく縫えるものが良いので顔があったほうがいいかな、話しかけたり名前をつけて呼びながら縫えるのではないかなと。それが10分間ぐらいの中で頭の中にわっと走り出したのです。

それなら、かわいい動物のマスコットをつくったらどうだろう。そうしたら、マスコットだけだとなかなか使い道がないので、キーチェーンをつけて、それをアクセサリーのような形でバッグにつけたりすることができたらいいのではないか。このブランドの証明が要るから、ロゴもつくって・・・というようにあっという間にこのプロジェクトの概要ができ上がってしまったのです。もちろん私と同行するスタッフたちは知りませんし、アイディアが浮かんだのが前夜ですからLINEで一言、「いいことを思いつきました。明日新幹線の中でプレゼンします。」とだけ伝えて、次の日、新幹線の中でこんなことをしたらどうかしらというふうに、娘から無理やり借りてきた動物のマスコットとかキャラクターのマスコットを見せながらプレゼンしまして、私たちは初めて被災地である南三陸に訪れることになります。

この写真（スライド17）が私たちが訪れた時の南三陸町の姿です。そこは本当に気が抜けるほど何もないという平野が続いていました。被災する前の町の状況を私たちは知らないものですから、ただ平野が続いているだけ

（17）

（18）

ということで、ぽかんと見ていたのですが、現地の方から「実はここは一番にぎやかな繁華街があったところですよ」と教えられて本当にびっくりしたことを覚えております。（スライド 18）よくニュースで出てくる防災庁舎の骨格だけが残っていて、南三陸は防災庁舎にアンテナが立っているのがご覧いただけるかと思いますが、このアンテナの上のところまで津波が押し寄せたそうです。ですから、建物の中にいらした方たちは全員亡くなられて、何人かこのアンテナにひっかかって命が助かった方がいらっしゃるのだそうです。今見ても本当に悲惨な状況の南三陸町に私たちは初めて訪れたのです。

（スライド 19）これが恐ろしい津波が起こった海ですが、普段は本当に穏やかな海で、アワビが採れたり、カキを養殖していたり海産物の宝庫です。この海がその日だけ牙をむいて全てを飲み込んでいったということだそうです。

（19）

（20）

（スライド 20）そして、キックオフミーティングが始まりまして、プロジェクトに参加を希望するお母さんたちに昨晩私が突発的に思いついたアイデアを提案する時が来ました。私の中ではこれはグッドアイデアだと、自画自賛をして勇み足で行ったのですが、この状況になりましたら急に心配になりました。「東京から来た被災地もろくに知らない人間が何を言っているの、そんなことは全然やりたくないわよ。」と言われても仕方ない。私は恐る

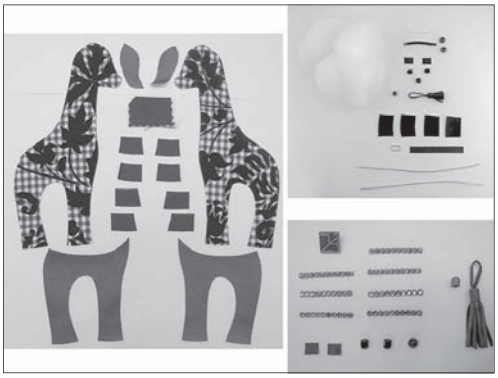
恐るプロジェクトについて話しました。

そうすると、はじめは皆さん緊張で非常にかたい表情をしていたのに、(震災後2年ですから、まだまだとても重い気持ちでいらした方たちだったと思いますが) ぱっと笑顔に変わったのです。そして、その中のひとりが「私たちは津波に全部持っていかれちゃって、本当に津波が憎いけれども、そのおかげでこんな素敵なお仕事ができるなんて嬉しいです。津波に感謝しなきゃいけませんね。」とおっしゃったのです。その言葉に安堵してスタッフ一同、涙です。私も、「次回必ずかわいいサンプルを持って戻ってきますね。」と約束をして、南三陸を後にしました。

そして南三陸から帰った翌日、今度は本社でこのプロジェクトに参加するスタッフたちとミーティングです。当社の技術者の中には、家族が被災をしたという者もおり、技術者たちのチームは全力で復興支援に協力したいと意欲的だったのですが、私が概要をプレゼンしますと、本当に唖然とした顔で固まってしまったのです。なぜなら、かなりベテランの技術者たちも、もちろん動物のマスコットはつくったことがないからです。本当にゼロスタートでした。これってどうやってつくるのだろう、中に何が入っているのかな、これはどういう順番でつくるのだろうというところから研究して、中には人形づくり50年という下町のおじさんのところに修行に行く者までおりまして、試行錯誤を繰り返し、1カ月半後3つのサンプルを持って私たちはまた南三陸に行くことになります。

(スライド21、22) このように技術指導は、最初のうちは全てキットのようなものをつくって、ステップ・バイ・ステップで誰でも縫

(21)



(22)

えるように、苦労して全部テキストブックを作って持っていったわけですが、「はい、次はここを縫ってください。この次はここです。はい、ひっくり返します」という感じで、テキストは見ずに「次はどこを縫うのですか」というような状態でした。(スライド23、24、25) とにかく最初は私たちの想定どおりには全く進まず、日帰りでは一切動物が形にならないという状況でした。その後継続的に練習を重ねていただき、仮生地でつくったものが厳しいＡＢＣ評価を経て合格しますと、やっと本当の生地でつくっていただくというようなプロセスを続けました。2013年の8月にスタートした当初は、「大丈夫ですよ。これはそんな急ぐことありません。自信がつくまでゆっく

(23)

(24)

(25)

りやりましょう。」とお話をしていましたが、(無謀ではありましたが)急遽 2013 年の 12 月に東京の大手百貨店で立て続けにポップアップショップという形でデビューをすることになります。

実は、ポップアップショップはすぐやっていただけると思わなかったので、形にもなっていないのに、自分たちがつくったサンプルを持っていろいろなところに営業していたのです。あるとき大手百貨店の社長にお目にかかる機会があって、実はこういうプロジェクトを始めましたとお話しましたら、その場で資料を見て「わかりました。このクリスマスにやりましょう」と即答してくださったのです。この段になって「まだ商品は一個もできていません」と言うことができなくなり、「ゆっくりやりましょう」どころか、最初はキリンから始まったのですが、9 月の終わりにもう一回スタッフが行って、猫と犬という 2 種類をいきなりやりまして、それで、12 月に一応このようなポップアップショップも開催できるようになりました（スライド 26、27、28)。

それと並行して私ども本社では“水曜ボランティア”というものを立ち上げまして、水曜日の就業後に手のあいたスタッフたちが集まって箱詰めや値札つけなどをしています。ボランティア活動というのは気軽に参加できるものではないという認識の人が多かったのですが、「ちょっと手の空いた人が出来る時に出来ることを」を理念に取り組んでいます(スライド 29)。

(26)

(27)

(28)

このプロジェクトを始めた2013年は、くしくも株式会社ジュン アシダ創立50周年の年に当たり、『心を込めてつくった商品を一つ一つ心を込めて売る』という、私どもの仕事の原点を改めて学ぶ機会になり、大変に運命的だったのではないかと思っております。

(29)

販売を開始して丸2年が経ち、市川海老蔵さんをはじめ沢山の方に応援していただいています。宝塚の「ベルサイユのばら」で大変有名な稔幸さんがペガサスを持っている素敵な写真をアップしてくださったり、藤原紀香さんは三陸鉄道の開通式のときにキリンのチャームを持って、「里帰りをさせてきますね」といって三陸鉄道に乗っている写真を撮ってSNSにアップしてくださいました。またハリーポッターで有名なマルフォイの役の俳優さんや宇宙飛行士の山崎直子さんも快く写真を撮らせてくださいました。そしてファーストレディである安倍昭恵さんは首相の中国外遊に同行された際につけくださいました。おそらくニュース画像の中で気がついたのは私と当社スタッフだけだったと思うのですが、このような公の場でつけてくださるなど、皆さんに大変温かく支援をしていただいております。

製作数も3,500個以上になりました。この2年間でお母さんたちの腕前もプロ級になり、残布でつくっておりますので、非常に限定的な数量ですが、動物の種類も9種類になりました（スライド30～37）。

これは来年の干支になります新作のモンキーです（スライド38）。人間に一番近い形を

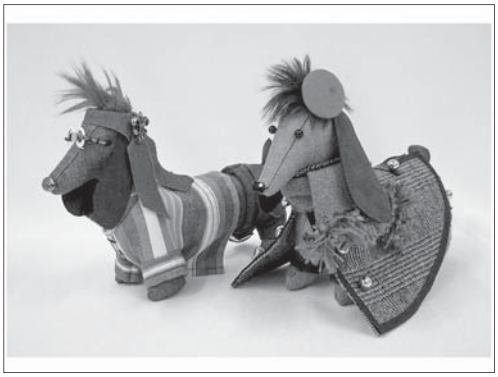
(30)

しておりますので、手の指など本当に細かい作業なのですが、6月に私どもがワークショップに行って、これを技術指導させていただいたときには一言も弱音を吐く人がいませんでした。私が「ちょっと難しかったですか」と心配して聞いても、「いえいえ、今は縫えませんけれども、私たちちゃんと練習すればできるようになります。」と言って、本当に上手に仕上げてくださるようになりました。

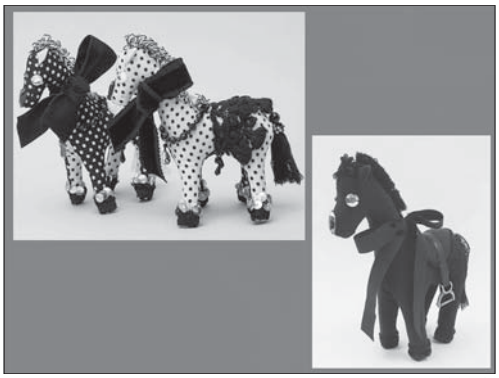
今回のこの講演に合わせて名古屋松坂屋とＪＲ名古屋タカシマヤの「TAE ASHIDA」ショップで1週間を目安に「MINA-TAN

(31)

(34)



(32)



(35)

(33)

(36)

(37)

(38)

CHARM」を展開させていただいております。このモンキーたちもデビューしております。ぜひこの機会に、お母さんたちが心を込めてつくったチャームを手にとってご覧いただけたらと思っております。

■「デザイン」とは～目的に応じて美しく機能させるということを考えること～

本題に戻りますと、今回このように自分の人生を振り、色々なことを考えました。私は「ファッションを通じてライフスタイルをデザインし、提案をさせていただいている」と思っていましたが、「果たして自分のライフスタイルがデザイン出来ていたのだろうか」と改めて考える機会となりました。

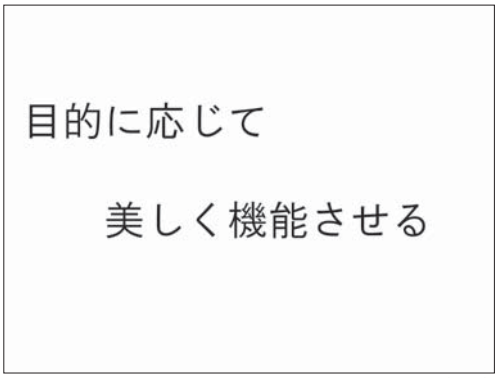
そもそも「デザインする」とはどういうことでしょうか。まず、デザインと聞いて思い浮かべるのは、「美しい造形」だと思います。ファッションデザイン、グラフィックデザイン、ブランドデザインなど、「デザイン」にはさまざまな分野がありますが、そこには必ず「美しい造形」があります。（スライド 39）そして、どの分野にあっても重要なのは「ファンクション＝機能」です。その 2 つが伴って「デザイン」が成り立つと思います。ファッションデザインにおいても、「造形が美しい」のは当たり前で、「人間が着るという機能」が非常に重要なファクターとなります。

(39)

アップル社の創立者であるスティーブ・ジョブズもデザインについてこのように語っています。「デザインというのは、単にどう見えるか、どのように感じるかということではな

(40)

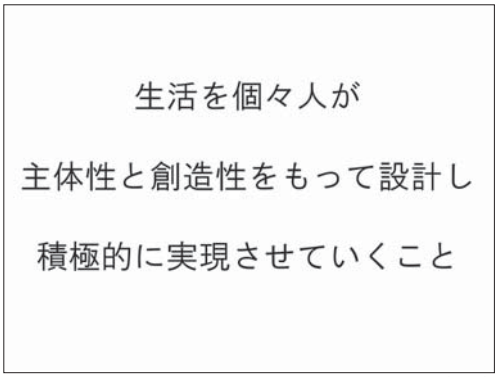
く、どう機能するかだ」（スライド 40）。これからもわかるように、**デザインとは「目的に応じて美しく機能させるということを考えること」だと思います**（スライド 41）。



（41）

■「ライフデザイン」とは

では、「ライフスタイルデザイン」とはどういう意味でしょうか。辞書でこの言葉を引くと、「生活を個々人が主体性と独創性を持って設計し、積極的に実現させていくこと」とあります（スライド 42）。この場合のデザインという意味合いには、「計画する、設計する」ということも含まれていると思います。でも、それだけではなくて、「実現させる」という目的があります。実現させるという意味は、先ほどのデザインという「機能させる」と同じ意味合いがあります。ですから、**夢に描くだけではなくて、計画したことを実現させるために行動を起こすということがライフスタイルデザインということになるのではないでしょうか。**



（42）

でも、人生というのはそんなに簡単には思いどおりになりません。長期で壮大な計画を立てても、それを達成するにはどんな努力をしても、常に目の前に困難なことが立ちはだかりますし、全く不可抗力で想定外のことも起きます。仕事も、結婚や子育ても、女性としてこうありたいということでも本当に思いどおり描いたようにはならないと思います。そのときに「デザイン」という言葉の本来の意味をぜひ思い出していただきたいと思います。**「目的に応じて美しく機能させる」ということを目指し、特に女性は女性ならではのしなやかさ、柔軟性を用いることで、その状況に応じて想定外ということを受け入れて、軌道修正することができると思います。**

■むすびにかえて

私の場合も「将来ファッションデザイナーになる」という明確な目的のもと、（できる限りの努力はしてきたつもりですが）常にその将来を想定してレールの上を歩んできた人生です。想定どおりファッションデザイナーになってキャリアを積み、来年（2016 年）デビューから 25 周年を迎えます。多分皆様から見ると、私の人生はライフスタイルデザインどおりに歩んできた人生というふうに見えるのかもしれませんが、私の中では決してそのような認識はないのです。常に挫折をしたり、迷ったり、自分の才能のなさに落ち込むこともいまだに度々あります。特に子供が生まれてからは、キャリア面で考えると全く思いどおりに進まないという状況に悩んだ時期もあり

ます。そして、子育てもまた想定どおりにはなりませんので、全てが思った通りにはいかない、そんな人生を過ごしてきたように思います。

確かに「ファッションデザイナーになる」という目標は達成できました。しかし、自分が思い描いた人生をそのまま送っていたかというと、そうではありません。でも私が想定したことと違ったことは決してネガティブなことだけではなく、想定以上に素敵なことも沢山あった人生なのではないかと思っています。おそらく皆様も同じだと思います。**いろいろなライフスタイルを想定して、上手くいかないと思っても、思い描いていたことよりもっと素敵なことが起きる、そんなこともあるのではないのかなと思います。**

私が今日ありますのは、ひとえに「ファッションやものづくりが何よりも好きだった」ということです。「好きこそものの上手なれ」という言葉がありますが、私自身がそれに当てはまるかどうかわかりませんが、本当に好きなことをしている時は、どんなに辛いことがあってもそれを「苦労」だとは思わないものです。むしろそれが「歓び」に変わります。そして、特に「ものづくり」には、それに携わる人しか味わうことのできない「幸福感」があります。私には父や母が築いたクリエイティブな環境、この世界に入るための入り口が用意されていました。それは神様が私に与えてくださった大きな恵みであったと思いますし、使命があったのだと理解しています。

そして、ここに至る過程には家族や友人など身近な人たちが大きな愛で必要なアドバイスをそのたびごとにしてくれて支えてくれていたと思います。挫折しそうになったときも、迷っているときも、誰かが私の道標になって正しい道を教えてくれていたように思います。また日々、私のデザインする洋服を愛してくださっているお客様に支えていただき、献身的なスタッフにも支えられて、今日私がここに居るということを改めて振り返る、今回の講演会は大変貴重な機会を与えていただいたと感謝しています。

これからもこうして与えられた機会を大切に、しっかりと前を向き、自分なりのライフスタイルデザインに取り組んでいきたいと思っております。

以上でございます。ありがとうございました。（拍手）

【司会】芦田様、ありがとうございました。

※第一部の講演終了後、「TAE ASHIDA Spring Summer Collection 2016」の上映、解説

（休　　憩）

【第二部　トークセッション・質疑応答】

登壇者：芦田 多恵氏（株式会社ジュン アシダ　ファッションデザイナー）
後藤 真由（椙山女学園大学生活科学部学生）
谷 知夏（椙山女学園大学生活科学部学生）
鶴田 帆香（椙山女学園高等学校生徒）
横井 愛璃（椙山女学園高等学校生徒）
コーディネーター：冨田 明美氏（椙山女学園大学生活科学部教授）

【司会】それでは、準備も整いましたので、早速第二部のトークセッションを始めさせていただきます。

ご登壇いただきますのは、芦田多恵様、そして、椙山女学園大学の学生を代表して生活科学部4年の後藤真由さん、谷知夏さん、椙山女学園

高等学校の高校生を代表して3年の鶴田帆香さん、横井愛璃さん、そして、コーディネーターは本学生活科学部の冨田明美教授です。よろしくお願いします。皆様、拍手でお迎えください。(拍手)

それでは、ここからの進行は冨田先生、よろしくお願いします。

【冨田】今ご紹介いただきました生活科学部の冨田でございます。芦田多恵先生のお話を聞き入ってしまいまして、第二部のトークセッションをどのように持っていこうかを考えている暇がございませんでした。第二部としては、これからファッションを勉強するという高校生のお二人と、4年間、本学の生活環境デザイン学科でファッションについて勉強をしてきた大学生のお二人と、多恵先生から本

日お聞きしたお話や以前からこのようなことを知りたいと思っていたことについて、さらにステップアップできるようにお聞きしたいと思います。また、この会場に来ていらっしゃる方から事前に質問事項をいただいております。それを少しご紹介してトークセッションをさせていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。(拍手)

早速ですが、まず大学生の後藤さんから、最初に、海外での学びと日本の被服教育に関する質問からどうぞ。

【後藤(大学生)】それでは、質問させていただきます。

先ほど高校と大学において課題をこなしながら、また、時には涙しながら熱い日々を送っていたとお聞きしましたが、学生生活を過ごした中で、先生が一番これだけはやっておいてよかったなと思えることを教えていただければと思います。

【芦田】洋服をつくるというのは技術が必要なので、基礎的な技術はもちろん学生時代に学ぶというのは重要なことだと思いますが、やはりさきほど申し上げたように、人の前で自分のつくったものがプレゼンできる力というものを養うということはとても重要だと思います。

それから、ファッションデザイナーを目指す場合は、絵が描けるようになるというのは大変重要で、もちろん今はコンピューターで作図ができて洋服ができてしまう時代かもしれませんが、自分の中でクリエーションするときに、頭の中にあるものを絵に描いてつくっていくことはデザイナーとしては重要な部分ですし、それによって人に伝えるということがあります。例えばそれを全部1から10ま

で自分がつくるのではなくて、技術者の人と一緒にクリエーションしていくわけですから、そのときになるべく自分が思い描いていることがクリアに相手に伝わるようにするには、絵の技術というものも磨いておくということがとても重要じゃないかなと思います。

【後藤(大学生)】ありがとうございます。

【冨田】絵の技術が大切だということ、お分かりになりましたでしょうか。

では、次に、谷さんから海外と日本の被服教育との違いについて質問をお願いします。

【谷(大学生)】先ほどの講演の中でアメリカの芸術大学での授業の内容などをお話しいただきましたが、先生から見て日本の被服教育をどのように感じているのか、お聞きしたいと思います。

【芦田】私は、日本の被服教育についてそれほど詳しく知っているわけではないのですが、よくデザイナー志望として当社にも学校で創作された作品やデザイン画を持って面接を受けに来てくれる学生さんたちがいますが、私はいつもそれを見て、ある意味とても個性的ですが、その個性が同じだと感じています。学校についても、いわゆるファッションの専門学校などで習うことが非常に独創的であるようで、独創的な種類が同じという感じがして残念だなと思うことがあります。

あと、もう一つ、私がアメリカの芸術大学でとにかく耳にタコができるほど先生たちから言われたことは、「アーティストというのは社会に出て一番潰しのきかない人間ですから、そこに順応できる力を持ちなさい」ということです。例えばそこで勤めよう、もしくは研修を受けようと思っているブランドが自分のスタイルとちょっと違ったとしても、自分の能力を使えば、このブランドをこういうふうに表現できます、もしくは、この部分で役に立てますということを表現したデザイン画を書いて最初に持っていくべきです。そこから自分の持ち味を表現できるものを入れていくということなのですが、多分そういう教育は日本でされていなくて、私はこんなにすごいアーティストですということを表現するということが優先されているように感じます。ファッションはビジネスなので、デザインばかりを優先させて商品化することはとても難しいわけです。その時に、むしろ自分の可能性を見せる努力をしていかないと、なかなか難しいと思います。

やはり「アーティストというのは一番潰しのきかない人間なのだから」という言葉は、今になってもすごく自分の中に大切にとどめている言葉です。

【冨田】ありがとうございます。私は長いこと大学で教育をしているのですが、第一部の先生のお話の中ではっと思ったことがあります。多くの学生は、私がどんなに努力してプリントをつくっても見ることなくすぐわからないことをたずねる。これは学校教育として反省するところがたくさんございました。

それからプレゼンテーションをやらせていないということで大いなる反省をいたしました。私は、定年まであとわずかですけれども、若い先生にそのあたりをしっかり教育してもらおうと思いました。

では、ここで、フロアのほうから質問がありましたのでご紹介いたしますと、海外の一流のファッション先進国での研修時代に東洋人という実力や仕事には関係ない部分で差別、偏見などを受けた経験はおありですか。もし

そういう経験があれば、どのようなことでそれを対処してこられましたかというご質問です。いかがでしょうか。

【芦田】私は偏見のようなことをあまり経験したことはありません。特に私がファッションの勉強をし始めたアメリカは非常に多国籍の人たちが集まっている国なので、むしろ日本人であるということを楽しんだ経験はありますが、嫌な思いをしたことはあまりないです。ただ、同じアメリカでも、私がいたプロヴィデンスから少し車で行ったところに１軒、生地屋さんがあって、そこで初めて日本人を見るアメリカ人に出会い、驚いた表情で、口をあけて仁王立ちして、持っている物を落としそうなぐらいまじまじと見られた経験がありますけれども、そのぐらいです。

【冨田】という先生のお答えでございますので、どうぞ外国へ出られる方、安心してお出になってください。

それでは、次に、高校生から、ファッションデザイナーという職業について質問していただきます。

【鶴田（高校生）】先ほどご両親のお話があったのですが、同じデザイナーとしてお父様のことはどのように思われていますか。

【芦田】父であり、大先輩でもありますので、もちろん非常に尊敬の念は持っております。若いころは父がこんなふうにデザインしているけれども、私はもっとこんなことができるみたいなことを思った時期もありましたが、やはり仕事をすればするほど、すごいな、こういうふうにつくっていくのかとか、こういうふうにデザインしていくのかという学ぶことが非常に多くて、そういった意味では本当に尊敬の念しかないです。

【冨田】お父さんは尊敬の対象であるというお答えでございました。

それでは、ここでまたフロアからのご質問をご紹介いたします。先生は年齢やキャリアによってデザインの傾向が変わりましたか、というご質問ですけれども、いかがでしょうか。

【芦田】それはとてもあると思います。やはり生身の人間なので、どうしても自分の年とともに趣向が変わるというのはあると思うのです。ただ、ファッションというものはそういうもので、時代とともに変わっていくものなので、永遠に同じものをつくり続けることがいいことではないと思います。そのような意味では、私がつくるものが少しずつ変化していくということは自然なことだと思っております。

【冨田】言いかえると、生き物のようですね。

【芦田】そういうところがあると思います。

【冨田】それでは、大学生の後藤さんから、次の質問をしていただきます。

【後藤（大学生）】私はすでに就職活動は終わったのですが、これから就職活動をしていく人も多くいると思いますので、ファッション業界に必要だと思われる人材についてお聞かせください。

【芦田】ファッション業界と一口に言いましても、本当に色々な内容の仕事があると思います。一概に言えませんが、例えばファッション業界では、「時代を捉える力」というのが全て基本になっていると思います。「時代を捉える」ということと、「発信する」ということが、どこの業界でも同じだと思いますがとても重要な要素になっていると思います。ファッションというものは時代の最先端ですから、そ

れを捉えることのできる人が重要です。ファッションとは全てです。「何を着る」とか、「どんな襟が素敵」とか、そういうことだけではなく、「今、時代の中でどういう風が吹いているか」、「人がどういうものに興味を持つか」など、それが全て合わさって形になったものがファッションだと思うので、「いろいろなことに興味を持って探究心のある人」がファッション業界の中ではとても重要だと思います。

【冨田】ファッションデザイナーというお仕事に限らず、どのようなお仕事でもそうですね。それは共通していると思います。

それでは、次に、皆さま方、ご存じかどうかわからないのですが、山崎直子さんという方が宇宙に行かれたときの宇宙船内服を先生がデザインなさったということをお聞きしております。今日のお話に出てくるかなと思って楽しみにしていたのですが、ございませんでしたので、そのジャンルについて大学生から質問していただきます。谷さん、お願いします。

【谷（大学生）】世界で初めて宇宙船内服をデザインされたとお聞きしたのですが、世界で初めての誰も挑戦したことのないことに挑戦するときにプレッシャーや不安などは感じませんでしたか。

【芦田】山崎直子さんとは以前から親しくさせていただいていたので、直接彼女から船内服のご依頼をいただいきました。これは本当に予想できない作業でした。デザインというのは何かをプラスすることが多いですが、全てを排除することというのがこの宇宙船内服のデザインの基本なのです。なぜかというと、宇宙船というのは、宇宙飛行士が持っていける荷物の容積や重さが決まっているそうなので す。ですから、「無駄のない軽いもの」にしてくださいという依頼がありました。実用的な要素だけで、デザインのための要素は要らない。

船内服といっても宇宙服ではありませんので、地球上で私たちが着ているものとそう変わらないのですが、船内では火災が一番怖いそうなので、研究された「燃えない素材」を使いました。また、このブルーのジッパーのカーディガンのようなものは「ホールガーメント」というニットの製法でつくっています。ホールガーメントというのは、非常に複雑な技術で縫い目がないのです。軍手を編むように全部筒状に編んでいくという手法で、これは日本の島精機というところが発明して、今では世界的に非常に普及しています。それを使用することで無駄な縫い目がないので、その分軽くでき、体に負担がないのです。人間は宇宙に行くと重力がなくなるので、体の体液などが上がっていきます。ちょっと想像していただくと、火星人って頭が大きくて、下に行くほど細くなる、あれは実はただの想像上じゃなくて、ウエストなどは重力によってむしろ痩せるそうです。地球にいるときよりもウエストが細くなってしまうので、アジャスターみたいなものをつけておかないと、地球上でちょうどいいものは、宇宙に行くと大きくなってしまうことなどを教えていただき考慮して作りました。

それから、パンツにはマジックテープの片方が全部ついています。なぜかというと、ズボンのポケットに物を入れても、無重力の中ではポケットから物が飛び出して出ていってしまうのです。例えば工具のようなものを使ったりすると、それがポケットから出て自分にぶつかるなど凶器になってしまうので、工

具にも全部マジックテープの片割れがついているのです。ですから、宇宙ではポケットは不要で、マジックテープで張りつけるそうなので、それほどスタイリッシュなパンツとかはつくれないという問題もあります。

また、インナーとしてポロシャツを着ているのですが、これもいろいろなことが考慮されたシンプルなものです。いかにマイナスするデザインにするかということだったので、ふだん私が向き合っているものをデザインするということとは正反対の条件の中、デザインをしたという、そんな感じです。

【冨田】ありがとうございました。今先生のお話の中で島精機という会社が出ましたが、和歌山にある、世界に誇る編み機をつくっており、非常に高い技術力を持つ、世界的にも有名な企業です。

【芦田】島精機の島社長というのは発明家でいらして、最初に軍手を編む機械を少年時代につくって、そこから発想してセーターをつくれる機械をつくったそうです。私、一回工場に見学に行ったことがあるのですが、本当に不思議で、編み機でセーターを編むのですが、最終的にセーターになったものが機械からぽとっと落ちてくるのです。ですから、それを見ていると、いや、実は中に小さな小人のおじいさんがいて、こうやって編んでセーターをつくって出しているのではないかしらと思うような、そんな機械で、筒状に編んでいくという技術です。

【冨田】ありがとうございました。その内容を転換させまして、高校生の方からデザインに関する質問についてお願いします。

【横井（高校生）】第一部の復興支援プロジェクトのお話の中で、現地に向かう前夜にプロジェクトの内容がぱっと思い浮かんだというお話があったのですが、デザインはどのようなときに浮かぶことが多いですか。

【芦田】私はどちらかというと机に向かってデザインをするほうです。私の父は夜中に突然起き上がってデザインを描いたりしますが、私はそういうことがございません。デザインというのは常に頭の中にいろんなことがあります。例えばエジプトに行ったからといって単純にエジプトみたいな洋服をつくるということではないのです。エジプトに行ったり、近所の公園に行ったり、今日みたいなことがあったりとかといういろんなことがあって、一つの造形というものが頭の中で生まれてくるのです。ですから、私の場合、突然ひらめいたみたいなことは割と少ないのです。ただ、机に向かって集中して考えたときに、すごくいいデザインがぱっと浮かぶときもあれば、ずっと考えてもうまくいかないときもありますが、意外とそういうものなのかなと思います。

【横井（高校生）】自分のデザインしたものが形になったときの喜びはどのような感じですか。

【芦田】ただ形になった段階では、余り嬉しくないのです。「すぐは嬉しくなくて」というのは、洋服ができ上がった時は、私にとってはまだ過程の段階なのです。それがやはり「人が着て、実際に動くこと」がすごく重要で、例えばコレクション作品であれば、もちろんつくる段階でモデルが着たりしますが、最終的にステージの上に乗ってどれだけ綺麗かというところが私の目指すところです。ですから、初めてモデルが着て動いて美しかったというのを見た時にはすごく嬉しいです。

【冨田】それでは、次に、大学生の谷さんから質問をお願いします。

【谷(大学生)】ベテランの女優さんから、私たちの世代の方から支持されるような若手の女優さんまで様々な世代の方の衣装を手がけているという記事を見たのですが、世代を超えたデザインをするときに気をつけているポイントなどがあれば教えていただきたいと思います。

【芦田】私は、あまり年齢を意識してデザインするということはありません。例えば女優さんなどが着てくださるときは、わざわざその方にデザインするということは非常に稀で、たいていはコレクション作品(プレタポルテ)の中から選んでいただいて、衣装合わせをします。そうしたときに若々しい方にはそういった演出をしていくし、そのときのニーズが全然違うので何とも言えませんが、私はどちらかというとなるべくご自分が着たいというものを選んでいただき、それをどう素敵に着ていただくかということに頭を集中させるということです。

【冨田】それでは、フロアのほうから事前にいただいている質問で、多分お母様だと思うのですが、10 歳の娘が将来ファッションデザイナーになりたいと言っているのですが、この時期からどのようなことをすればよいでしょうかという質問です。

【芦田】特別なことは必要ないと思います。私もそうだったのですが、こういうファッションデザイナーになろうと思っていらっしゃるのでしたら、多分黙っていても絵をたくさん描くと思うのです。自由にたくさん描かせてあげて、出来るだけ褒めてあげてください。それから、いろんなことに興味が持てる、色々な感性が養える、そういう経験をさせてあげるのが一番良いのではないかなと思います。

【冨田】ご質問なさった方、ぜひ絵をたくさん描かせてあげてください。

それでは、まだまだお聞きしたいことがたくさんあるのですが、時間が限られていますので、トークセッションはこれで終わらせていただきたいと思います。どうも皆さま、ありがとうございました。(拍手)

【司会】芦田様、冨田先生、そして、大学生、高校生の皆さん、楽しく有意義なお話を聞かせていただきましてありがとうございました。もう一度皆さま、盛大な拍手で出演者の方々をお送りください。(拍手)

【閉会挨拶】

司会：それでは、最後に、椙山人間学研究センター研究員の杉藤重信から閉会のご挨拶を申し上げます。

杉藤先生、よろしくお願いします。

杉藤重信研究員：本日は学園創立 110 周年を記念した椙山フォーラムにお越しいただきましてありがとうございました。閉会をするにあたって一言ご挨拶を申し上げます。

本来ですと、ここには椙山正弘人間学研究センター長がご挨拶するところですが、代理として、私の方からご挨拶申し上げます。

基調講演をいただきました芦田先生には本当にありがとうございました。貴重な話を承ることができました。また、多忙のところ本学においでいただきまして本当にありがとうございました。

また、多数ご来場いただきました皆様方には本当にありがとうございました。あいにく会場の都合で別の部屋でご覧いただいた方もいらっしゃったのではないかと思われますが、誠に申し訳ございませんでした。また、総合

司会をお引き受けいただきました豊田美穂さんには、ご多忙中どうもありがとうございました。おかげさまで閉会を迎えることができました。また、大学生や高校生の皆さん、冨田先生にも壇上で貴重な質問などをいただきましてありがとうございました。

さて、最後に、人間学研究センターの次の企画についてご紹介申し上げて、ご挨拶を終えたいと思っております。芦田先生のお話の中で、南三陸町で震災への支援活動をなさったとお伺いしましたが、人間学研究センターでは、たまたまでありますが、12月10日、来週の木曜に第4回の人間講座を開催いたします。講師は名古屋大学の黒田由彦先生であります。タイトルが「震災が露わにする社会の本質」と題した講演をいただくことになっております。私ども人間は社会的動物であります。いろんなことに向き合いましても、やはり社会的なバックアップというのが非常に大事であります。地域社会学からの視点でお話をしていただけるかと思います。参加費は無料となっておりますので、ぜひご参加いただければと思います。

本年度の人間講座は第4回で終わらせていただきますが、また来年度も引き続き人間講座やフォーラムを開催してまいりますので、ぜひご参加いただきますようお願いいたします。

本日はどうもありがとうございました。(拍手)

司会：杉藤先生、ありがとうございました。

以上をもちまして、椙山女学園創立110周年記念椙山フォーラムを終了させていただきます。

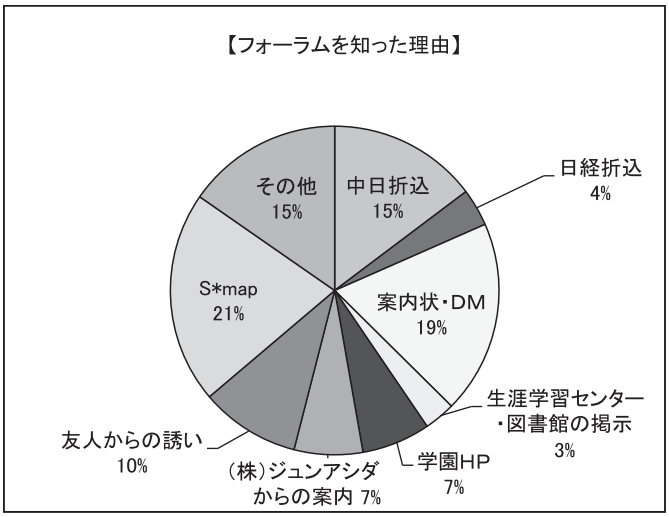
本日はご来場いただきまことにありがとうございました。お気をつけてお帰りください。

椙山女学園創立110周年記念　椙山フォーラム アンケート集計結果

＊受講者数：341名　アンケート回答者数：159名(回答率46.6%)
＊事前申込：512名 /　受講者：341名(参加率66.7%)

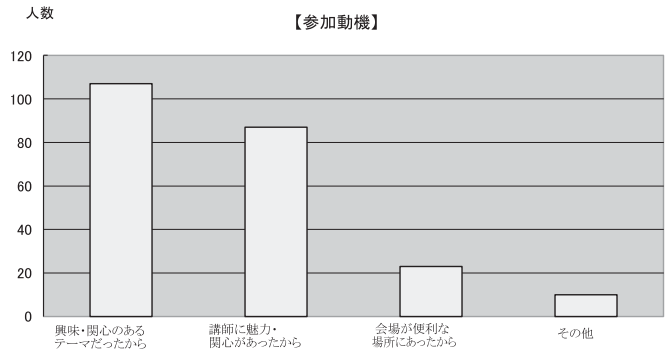
Q1.今回のフォーラムは何でお知りになりましたか?

1.中日新聞の折込チラシ	24名	15%
2.日本経済新聞の折込チラシ	6名	4%
3.椙山女学園からの案内(DM)	31名	19%
4.生涯学習センター・図書館の掲示	5名	3%
5.椙山女学園のホームページ	11名	7%
6.(株)ジュンアシダからの案内	11名	7%
7.友人知人からの誘い	16名	10%
8.S*map(学内のみ)	34名	21%
9.その他	25名	15%
合計	163名	100%



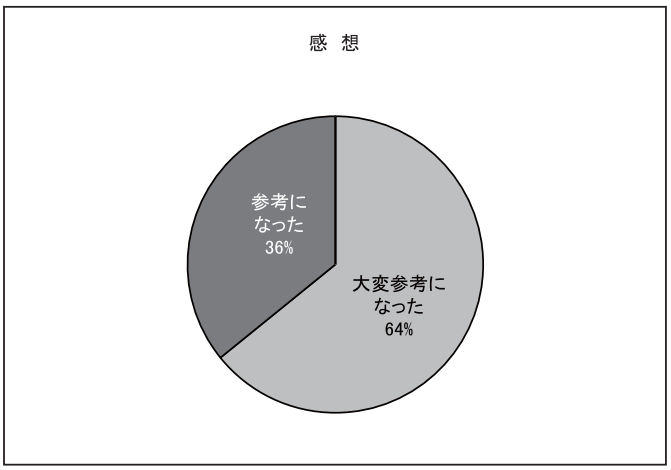
Q2.今回のフォーラムへの参加動機は何ですか?（複数回答可）

1.興味・関心のあるテーマだったから	107名
2.講師に魅力・関心があったから	87名
3.会場が便利な場所にあったから	23名
4.その他	10名

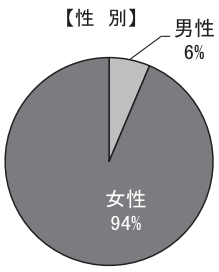


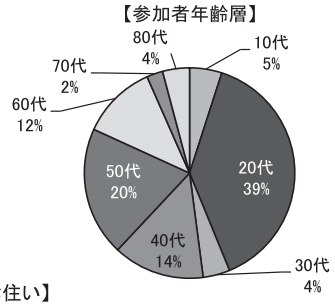
Q3.今回のフォーラムは参考になりましたか?

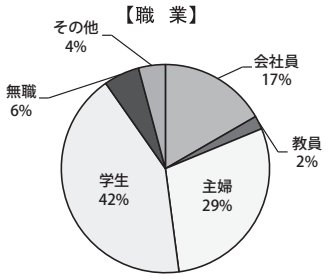
1.大変参考になった	86名	64%
2.参考になった	48名	36%
3.参考にならなかった	0名	0%
4.全く参考にならなかった	0名	0%
合計	134名	100%

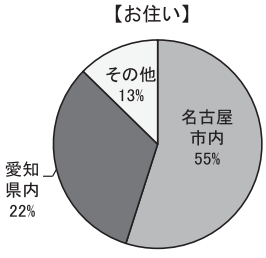


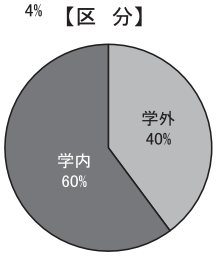
【その他参考データ】











フォーラムに対する主なご意見・ご要望

NO.	職業	年齢	性別	今回のフォーラムに関するご意見・ご要望・今後のフォーラム開催のご要望
1	主婦	70	女性	語り口がやさしい分ハードな人生に対する戦いがすばらしいと思います。目標に沿って一日一日を大切に確実に生きられました事に拍手です。私はお父様の洋服一筋でございますが貴方のお洋服も着てみたい78才です。
2	主婦	60	女性	多恵さんのお話はとてもクリアーで聴きやすく有意義な時間でした。今後も素敵な講師の方をお招き下さい。
3	−	40	女性	徳育の話を聞きたいです。
4	主婦	50	女性	とても有意義な時間でした。 芦田多恵氏のフォーラムとても素敵でした。 最後に2016年のコレクションの映像が見られてとてもうれしかったです。 ・アーティストは自分の作品のコンセプトを自分の言葉でプレゼンできなければその作品の価値は半分。 ・とにかく10年頑張る。 ・「自己満足」→優先順位を決める。 ・「デザイン」生活を個々人が主体性と創造性をもって設計し積極的に実現させていくこと。→目的に応じて美しく機能させる。
5	会社員	−	女性	ファッションに寄った話が多くありましたが、女性のライフデザイン、キャリアデザインについてもう少し話を聞きたかったです。
6	会社員	50	男性	人それぞれに人生があり、楽しくお話を聞く事が出来ました。これからも、この様な機会がありましたら、ぜひ参加したいです。
7	主婦	50	女性	ダイバーシティについて（周知・可能性について） スティグマについて（人間関係と寛容について）
8	主婦	60	女性	講師の芦田さんの人柄が素敵です。
9	会社員	−	男性	普段聞けないような講師なので、良かった
10	会社員	40	女性	ありのままの芦田さんの話、とてもよかったです。
11	−	−	女性	「とにかく10年頑張る」「自己満足になっていないか」とても心にひびきました。今後の人生、仕事に活かしていきます。多恵先生の素晴らしいお話を伺うことができ嬉しかったです☆
12	会社員	50	男性	芦田多恵先生のお話は、中園ミホさん（脚本家）と同じくらい楽しませていただきました。心からお礼申し上げます。
13	学生	20	女性	とても貴重なお話を聞くことができました。
14	その他	55	女性	本日は、大変有意義なお話を伺うことができました。ありがとうございます。ライフデザインを広くとらえたお話に感動いたしました。これからも人の人生をふりかえるお話を伺えることができたら、うれしいです。
15	主婦	−	女性	ファッションショーのVideo等楽しい時間でした。
16	会社員	40	女性	本日は素敵なお話を聞かせていただき、ありがとうございました。また、フォーラムに参加できればと思います。
17	主婦	40	女性	デザインについての専門家のお話

NO.	職業	年齢	性別	今回のフォーラムに関するご意見・ご要望・今後のフォーラム開催のご要望
18	無職	60	男性	ファッションについて興味深く講師の説明もわかりやすかった。
19	会社員	50	女性	芦田多恵さんは同世代という事もありとても興味がありました。私も仕事と家庭との両立をこれからも頑張ろうと再確認をすることが出来ました。有難うございました。
20	主婦	40	女性	MINA-TAN CHARMのプロジェクトはよいアイディアで南三陸を支援していくよい活動だと思いました。 テーマ…「格差社会の是正」「高齢社会を支えるためにしていくこと」など
21	その他	77	男性	1.新しい感覚の話であって楽しかった。 2.めぐまれた世界で仕事をしていた方で実務をやっている人の話は楽しい。
22	−	60	女性	“女性の品格”を書かれた坂東眞理子、幸田真音
23	無職	40	女性	ファッションデザイナーのご家庭に育った多恵先生のがんばり屋さんで感受性が豊かで優しくていらっしゃることに感動しました。スイスやアメリカで負けずに勉強した経験は、ぬいぐるみの可愛い優しいデザインに生かされていらっしゃると感じました。ありがとうございました。デザインを通してたくさんの女性を喜ばせていると感じました。
24	会社員	−	女性	茶道や華道に携わる方
25	その他	50	女性	様々な分野でご活躍している方々を講師としてまねいていただければ興味深いと思います。
26	主婦	50	女性	とても具体的なお話で、理解しやすかった。
27	主婦	40	女性	大変、良かったです。
28	会社員	−	女性	有意義な時間を過ごすことができました。ありがとうございました。
29	学生	−	女性	このようなフォーラムをたくさん開いていただきたいです。
30	会社員	30	男性	大変貴重な機会をありがとうございました。感謝申し上げます。
31	学生	20	女性	本日は、ありがとうございました。
32	学生	−	女性	興味のある話までが長かった。
33	教員	50	女性	私は英文科卒の為、イギリスの方のお話が聞きたいです。以前、映画通訳者の戸田奈津子さんにお会いでき、とてもうれしかったです。
34	その他	80	女性	仕事に関わる動機や外国生活なども含めて、大変楽しく有意義に伺いました。デザインの在り方も現実的で示唆に富んだものです。
35	会社員	40	女性	仕事と家庭の両立の話が、とても良かったです。今後も多恵先生の服を愛用したいと改めて思いました。今後のフォーラムも「働く女性」や「女性の生き方」をテーマとしたものを希望いたします。
36	−	−	女性	人生のとらえ方や考え方など、とても有意義な話を聞くことができてよかった。今後もこのような講演を望みます。

NO.	職業	年齢	性別	今回のフォーラムに関するご意見・ご要望・今後のフォーラム開催のご要望
37	主婦	50	女性	110周年記念の年でもありますので、通常なかなか聴講できない、東京や世界（ビックでしょうか?）で活躍していらっしゃる方のお話が伺いたいです。
38	主婦	50	女性	身近で、知らないことや苦労話など、いろんなお話が聞けてよかった。
39	学生	20	女性	とてもいい講演会でした。参加してよかったです。
40	その他	50	女性	予定の時間どおりに休憩をとってほしい。
41	主婦	30	女性	テーマからは若干ずれたようであったが、おもしろく、興味深く聞くことができました。むしろ「衣」という視点から、ファッションにしぼった話の方が、プロの話を聞くことができてよかったのではないかとも思います。
42	主婦	50	女性	ミナタンチャームを作って販売するというプロジェクトがとてもすばらしいボランティア活動だと思います。募金活動ではなく、南三陸の女性達にやりがいと笑顔を取り戻すというところに共感をもてました。
43	主婦	40	女性	芦田多恵さんの講演が大変素晴らしかったです。学生の皆様によい刺激になったのではないでしょうか。
44	学生	10	女性	“女性のライフデザインを考える”と題して、多恵先生の人生や経験を通じて、自分がどのように生きていくか、生きていきたいのかを考えたいと思いました。ありがとうございました。
45	学生	20	女性	アパレルを学んでいる人間として大変ためになるお話でした。
46	学生	20	女性	とても勉強になりました。新しいことにたくさんチャレンジされていて、とても素敵な方だと思いました。春夏のファッションショーも芦田先生のお話付きで見られてよかったです。
47	学生	20	女性	将来、多恵先生の洋服を売る側になる者として、つくり手の意志や想いをしっかりと肌で感じることができ、充実した時間を過ごすことができました。
48	学生	−	女性	女性のライフスタイルに関する内容はとても興味が持てるし、今後も女子大であるからこそ、そういった内容に取り組んでほしい。
49	学生	20	女性	第一部も第二部もとても貴重で素敵なお話でした。
50	学生	20	女性	貴重なお話で、とても参考になりました。
51	学生	20	女性	興味深い話が聞けて楽しかった。
52	学生	20	女性	世界で活躍、学んで努力された方だからこそ色々な話を聞いて興味を持つことが多くあった。とても良い話を聞けて良かった。
53	学生	−	女性	すごく勉強になる講演会でした。また機会があれば、このような会に参加したいです。
54	学生	20	女性	とても興味のある内容でした。私もファッションに興味があるので、もっと勉強していきたいと思いました。
55	学生	20	女性	女性としてキャリアと家庭を両立する勇気を頂きました。

NO.	職業	年齢	性別	今回のフォーラムに関するご意見・ご要望・今後のフォーラム開催のご要望
56	主婦	60	女性	椙山女学園110周年にふさわしい芦田多恵さんの講演で、一女性として生きてきた足取りも、これからの生き方も大変興味深い方のお話でした。これからはキャリアも子育ても積極的に取り組む若い学生達へのよい刺激になって下さることを希望いたします。女性が一番興味のあるファッション界のリーダーで、素晴らしい方でした。ありがとうございました。
57	−	50	女性	服飾の世界はとても華やかに見えるのだけれども、ものづくりは、地味で毎日の研究が必要なのだという芦田先生の講演は、とても説得力のある講演でした。国際社会の中で過ごした時間が、日本人のアイデンティティの確立することの必要性を感じたことが印象的でした。
58	−	80	女性	ファッションデザイナーという仕事を通した女性の生き方について、とても感動しました。若いこれからの学生さんにとって大変有意義であったと考えます。
59	主婦	40	女性	本日は貴重なお話を聞かせていただき、ありがとうございました。夢を叶えるために大変努力され、実現されて、すばらしいと思います。今後の人生に役立てたいと思います。
60	会社員	30	女性	毎年6月の食育の方のフォーラムに参加しています。今回案内をいただいて初めて食以外のフォーラムがあることを知り、来てみました。自分の仕事と直結する内容ではないですが、とても新鮮で楽しかったです。また久しぶりに大学に来られたのもうれしいです。（卒業生です。）
61	主婦	−	女性	大変良かった。
62	会社員	40	女性	女性の一つの生き方としてアドバイスをいただき、本当にためになり、今後の励みにもなりました。
63	−	40	女性	子育てと仕事の両立が自己満足とならず、優先順位をつけていけることが、ライフデザインをするということなのだと実話をもとに感じました。
64	会社員	20	女性	タイトルから想像する内容とは少し違いましたが、面白かったです。トークセッションも意外に面白かったです。ありがとうございました。
65	学生	20	女性	マイクの音量が小さかったせいか、声が聞き取りにくかった。
66	主婦	60	女性	花はとても残念なアレンジでした。高価な花が背景に合わずもったいないと思いました。もう少し工夫や色がほしかった。
67	会社員	50	女性	芦田多恵氏の声が小さいので聞こえないという高齢の方の意見が聞こえた。マイク音量の調整が必要かも…?
68	主婦	60	女性	「アーティストは自分の作品のコンセプトを自分の言葉でプレゼンできなければ、その作品を価値は半分」→good “人間って忙しい時にこそ色々ありよい”→人生のテーマ 第二部のトークの中の、山崎直子さんの宇宙の船内服の話は大変興味深かったです。最高にすばらしいお話をいきいきとした表情で話されていたことに感動しました。JR高島屋ショップに行ってみたいです。
69	主婦	−	女性	大変楽しく過ごさせていただきました。ありがとうございました。
70	会社員	−	女性	ジュンアシダを始め、芦田多恵さんの名前、ブランドは知っていたのですが、コレクションの洋服などは実際に見たこともなく、着たこともありませんでしたが、なかなかデザイナーのトークショーの機会がないと思い、参加しました。想像では、年配の方向けのデザインが多いと思っていたのですが、コレクションのDVDを見て、自分も着てみたい!と思うデザインがたくさんありました。お話の内容も楽しく、あっという間に時間が過ぎてしまいました。

本学園の社会活動に対してのご要望

NO.	職業	年齢	性別	ご意見・ご要望
1	主婦	70	女性	娘が卒業生なので一般誌に生徒さん達の活動の様子がかかれているとうれしくなって熱心に読んでしまいます。
2	会社員	−	女性	一般の方にもopenにしていただけると活動に参加させていただけます。広告も費用が発生しますが、椙山ファンを作る上でも「開かれた学園」をお願いできたらと思います。
3	−	50	女性	平成9年に当時の生活科学部生活社会科学科を卒業しまして、本日は母と参加させて頂きました。名古屋で著名な方のお話を拝聴するチャンスが少ないので、今後もこのようなフォーラムを開催して頂けると嬉しいです。ステキなフォーラムをありがとうございました。
4	会社員	50	男性	椙山女学園大学・創立110周年Congratulations!　先週or先々週、伏見名古屋商科大学大学院Campusの西のHotelで、記念式典receptionが催されていて、頬がゆるみました。Danke schön
5	主婦	60	女性	初めてこのようなフォーラムがある事を知りました。もっと多くの人に知らせてあげたい、そんな事を思いました。
6	会社員	50	女性	娘が来年4年生となり卒業いたします。在学中の子供がいなくても、参加できればとても有難いです。よろしくお願い致します。
7	その他	77	男性	1.実際仕事をしている方（実業をしている人）の話が良い。 2.学者、先生、研究者の話でない方が参考になる。
8	無職	40	女性	子どものすこやかな成長をねがって椙山女学園さまのご成功をお祈りします。椙山女学園で学ぶことで女子学生が歩いて行けると思いました。すべての子どもと女性と男性などが同じように食べて生きがいをもつ世の中が来てほしいです。日本女性全員同じ位すてきな洋服さんを着られると善いと思います。
9	学生	−	女性	アナウンサーや俳優さんの話も聞いてみたい。 どういう話し方がいいのかとか…。
10	教員	50	女性	皆さんにはお世話になっており、私の方でできることがあれば何でもおっしゃってください。
11	その他	80	女性	いつも椙山人間学研究セミナーを開催頂き感謝しております。これからもよろしくお願いいたします。
12	主婦	−	女性	とても有り難い活動だと思います。これからも期待しています。フォーラムを開いてくださり、ありがとうございました。
13	会社員	20	女性	今後もファッションに関する講演会を期待しています。
14	主婦	60	女性	以前、茂木健一郎氏の講演も拝聴いたしました。折に触れてこのようないいチャンスを与えて下さったことにとても期待を抱いています。大学という身近において受講させて下さるのはとても感謝いたします。今後も折をみて参加させていただければ幸いです。
15	−	50	女性	社会的なテーマの講演を増やしてください。
16	−	80	女性	積極的に社会で活躍する女性の生き方についてのフォーラムは、大変刺激的で参考になると思われます。
17	主婦	−	女性	飲みものは高齢者もいるので飲めるようにしてほしい。どこの講演も飲みものは自由です。
18	会社員	40	女性	椙山女学園は衣食住に大変通じていて、とてもよいフォーラムを提供してくださり、ありがたく思っております。

1メートルの長さの決め方
――18世紀末の科学者達の気概――

The Length of Meter Determined by the Scientists
—Pride of the Scientists in the Late Eighteenth Century—

学校法人椙山女学園理事長・椙山女学園大学学長
森棟　公夫
Kimio Morimune

杉藤重信研究員：定刻となりました。椙山人間学研究センター主催の本年度第１回人間講座を開催いたします。本日の講座に先立ちまして、本学園の学園長であり、この４月より椙山人間学研究センター長となりました、椙山正弘センター長からご挨拶申し上げます。

椙山正弘センター長：皆さん、こんにちは。本日は人間講座に大変多くの方にお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。従来ですと開会の挨拶は理事長が行うことになっていますが、本日は理事長が講師となりますので、私が代わってご挨拶申し上げます。去年、日進市内の大学の学長が集まって、それぞれお話をされる講演会がございまして、森棟学長は『1 メートルの長さの決め方』というテーマで講演をされました。それが大変好評でしたので、人間講座でも是非講演していただきたいということになりました。どうぞご清聴をお願いいたします。

杉藤重信研究員：続きまして本日の講師、森棟公夫先生をご紹介申し上げます。森棟先生は本学園の理事長であり、大学長を兼務しておられます。先生は 1946 年のお生まれで、京都大学経済学部卒業の後、同大学大学院およびスタンフォード大学大学院を修了されました。1976 年より京都大学の方に勤務され、経済学部長や大学院の研究科長等を歴任しておられます。

本学園へは、2010 年 4 月に現代マネジメント学部教授および椙山女学園副理事長として着任され、現在の理事長と大学長は 2012 年の 4 月より兼務しておられます。

本日は『1 メートルの長さの決め方』というテーマで、地球の外周の長さや 1m の長さがどのように決められたかについて、18 世紀の科学的概論を説明されます。普段は「長さ」のことを深く考えることのない私達ですが、本日は森棟先生の先導で科学的冒険へ旅立ってみましょう。それでは森棟先生、お願いいたします。

森棟公夫学長：森棟でございます。本日はよろしくお願いいたします。先ほどご紹介がありましたように、今回のテーマ『1 メートルの長さの決め方』は、日進市で一度講演をいたしました。その際は 6 名の学長が順番に講演を行うという会でしたが、このたび本学でも講演をさせていただく機会を得ました。

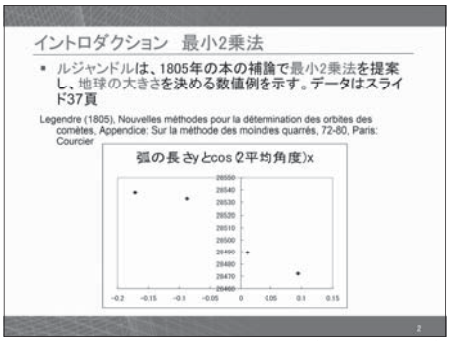
最初にお話しさせていただきますと、今回の人間講座の会場として使用している講義室

は、新設されたばかりの教室になります。今までの教室よりも少し広くなっており、従来の教室は 50 名の座席数でしたが、こちらの教室は 80 名まで収容可能となっています。私立大学等改革総合支援事業という国からの補助金がございますが、そこに申請をしまして、この教室は全て文部科学省によって資金援助を受けております。ですから、本学にしては贅沢な新型モニターを 3 台も設置するなど、いろいろと細工がされているという状況です。隣はキャリア支援課になっていて、就職支援を行っている事務課が設置されています。教職協働と申しまして、「事務の仕事も教員が参加する、教員の仕事も事務が参加する、教員も事務職員も協働していかなければならない」という目標がございますので、それに基づいて申請を行った次第です。もともと、ここは国際交流センターという留学生が利用していた場所になっていました。

さて、本日の話は『1 メートルの長さの決め方』ということですが、『18 世紀末の科学者達の気概』という副題をつけています。18 世紀末の科学者達がいかなる生き甲斐を感じながら、どのような研究をし、実際の科学の発展に寄与していったか、ということを解説したいと思います。

イントロダクション 最小2乗法

もともと私は、メートル法の起源を研究しようと思っていたわけではありません。私は統計分析が専門領域になりまして、その中に「最小 2 乗法」という非常によく使われる統計手法があります。例えば、スライド 1 に四つの点がありますが、この四つの点に一番よく合う直線を引くというのが最小 2 乗法でして、この手法は様々な分野の人が使用します。私は始め、この手法を最初に開発した人は誰なのか、ということに関心を持ちました。現在はエクセルというソフトで線形回帰という設定を行えば、自動的に線を引いてくれますが、その線の引き方を誰が考えたのだろうということを調べたのです。



（スライド1）

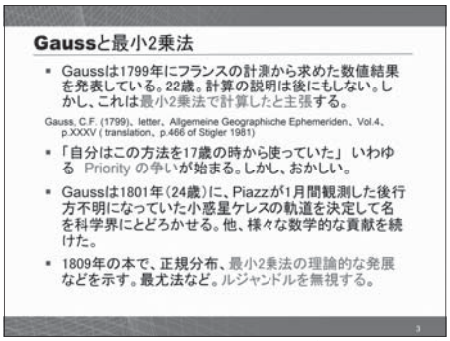
そして、スライド 1 の四つの点が、地球の大きさを決めるための、あるいは 1m の長さを決めるための調査結果になっています。図に四つの点があります。これらの四つの点の数値は、皆さんにお配りしたスライド 27（60 頁）に表が出てきます。表の中に出ている四つの観測結果が図中の四点になっています。

ルジャンドル

最小 2 乗法については、ルジャンドル（Legendre）というフランスの数学者の 1805 年の著書の補論に、計算方法の説明がありました。ですから、ルジャンドルが考案したのだと考えていました。しかし、面倒なことが色々とありまして、ガウス（Gauss）というドイツ人の数学者がいます。大天才の数学者ですが、その彼が小さな論文の中で「その手法を使った」と主張しているのです。その小論文では、スライド 27（60 頁）のデータで、地球の大きさ、1m の決め方の話をしているのですが、数

値結果だけが書いてあります。計算法は分かりません。後に1805年にルジャンドルが本を出したときに、ガウスは、「こんなことは、私が前に使った」と言います。学術に関係する方々はご存じでしょうが、学者達は「Priority争い」といって「誰が先にやったか」ということを争うことが多く、当時の科学者も「Priority争い」をしていたことが分かりました。

ガウス



（スライド2）

1799年のガウスの論文は計算方法の説明をしていないことが問題です。ガウスがその頃に行った大発見を紹介しましょう。イタリアの天文学者のピアッチ（Piazzi）が、小惑星ケレスの観測を行っていました。火星と木星の間には、数多くの小惑星が存在することが知られています。最近話題に上ったイトカワも小惑星の一つですが、その中で最も大きなものがケレスです。ひょっとしたら火星と木星の間の惑星ではないか、と言われていたのですが、今日では惑星ではなく、準惑星に分類されています。

ピアッチは一月ほど毎晩観測を行ったのですが、その後、病気になって寝込んでしまいます。病気から回復して観測を再開すると、ケレスがどこへいったのか分からなくなってしまいました。ところが、ピアッチの一月間の観測結果を見て、ガウスはどこにケレスが現れるかを理論的に解き明かしました。軌道計算をしたのですが、ここに現れると主張したら、その通りにケレスが現れました。この軌道計算の結果、ガウスは天才であると世に知られることになりました。数学だけでなく、天文学や物理学においても、ガウスは大天才だったというわけです。

彼は偉大なる数学者であり、1809年の著書で非常に重要な数学的な結果をたくさん出しています。しかし、最小２乗法については、「私は最小２乗法を使った」と主張するのですが、どのように計算したのかは説明しません。また、その数値結果も再現できないのです。

スライド３がガウスです。昔の10マルク紙

（スライド3）

幣の中にガウスの肖像がありまして、またお札の中に統計学でよく使われる正規分布も描かれています。ガウスは正規分布を考えた人でもあります。

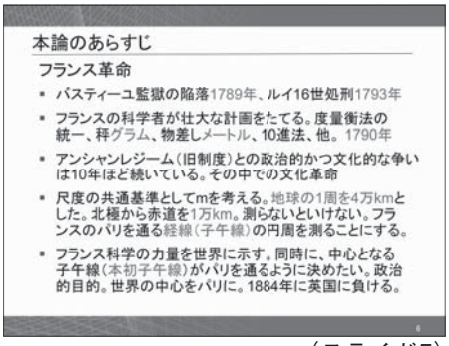
『The history of statistics』にスライド４のルジャンドルの肖像が載っています。最近になって画像処理や画像探索が色々とできるようになったおかげで、この写真が全く別人だったということが判明しました。この写真は同じ名前の政治家だそうです。本当のルジャンドルは立派な風貌の人ではなくて、やせこ

（スライド4）

けた数学者だということです。

あらすじ

フランス革命と度量衡法

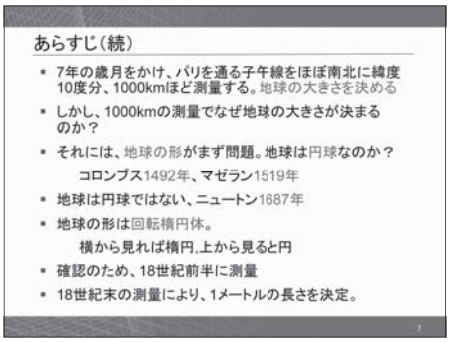


（スライド5）

本日の話のあらすじを申しますと、フランス革命が話の中心となります。バスティーユ監獄の陥落が1789年、ルイ16世の処刑が1793年です。ところが、フランスの科学者達はフランス革命のときに「度量衡法の統一」ということを考えます。ですから、私はスライド5に「文化革命」と書きました。度量衡法の統一の一つの目標は、「物差しを共通化する」ということです。重さ、量、長さ、全ての物差しを統一します。そして「十進法」を極端に推し進めます。ご存知の通り、時計は十進法ではありません。角度も、実際、直角が90度というのはおかしな話です。そこで、直角を100度にして角度の計算を行います。私は初めて当時の文献を読んだときに内容が分かりませんでしたが、直角が100度として計算が行われていることに気が付きました。全ての角度に100分の90を掛ければ理解できました。けれども実際、直角が90度で、1時間が60分というのは不自然です。当時の科学者は、1時間60分は変だから1時間を100分にしよう、と考えたのでした。そういうこともあり、「度量衡法の統一」を、アンシャンレジーム（旧制度）からの文化革命と私は表現しています。

角度や時間だけでなく、統一尺度を作ることも考えます。フランスはフランスで独自の尺度を持っています。しかし、その尺度も地域によって違うため、統一したものを新しく作ろうという話になったのです。そうして、1mの長さを定めることになりました。

地球の周の測量



（スライド6）

共通尺度の1mを決める為に、科学者達はまず、地球の一周を4万kmと定めます。北極から赤道までを1万kmとして、一周はその4倍なので、4万kmになるという考え方です。そして、フランスのパリを通る経線（子午線）を測量します。地球の大きさを決めて、北極から赤道までを1万kmにしましょうと

決めるわけです。そのあたりのことを説明します。

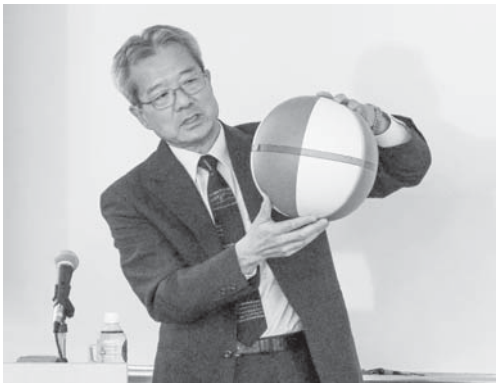
この測量には、「フランスの科学の力量を世界に示す」という目標もありました。当時のフランスは科学的に非常に優れています。さらに、子午線の中心である本初子午線の中心をパリが通るように決めたいと考えていました。イギリスではなく、本初子午線がパリを通るように決めることが一つの目標でした。当時はフランス革命が進んでいましたが、その中で、7年の歳月をかけて、子午線の長さを調べるためにフランスの北の端から南の端まで約1000kmを測量します。そのデータを元に、地球の大きさを決めるわけです。1000kmくらい測量すれば、地球の大きさを決めることができます。

地球の形

次に問題となるのは、「もともと地球の形はどうなっているのか」ということです。地球の形がきれいな円球なら苦労はないのですが、実は円球でないということが分かっています。それに関しては、コロンブスやマゼラン、そしてニュートンまで時代が遡ります。ニュートンは「地球は円球ではない」ということを見つけ、『プリンキピア』という本の中でそれを説明しています。地球の形は回転楕円体という、球を上からつぶした形になっています。表紙写真のビーチボールを地球に見立てて説明すると、まず、ボールの上を北として、上から見れば円になっています。ボールを横切る線は赤道を表していますが、赤道は円です。しかし、横から見た場合、ニュートンによると周囲は楕円形になります。ニュートンの主張が正しいかどうかを調べるために、18世紀前半、1730年くらいに測量が行われます。これが大変な測量となりました。スライド20（57頁）が18世紀前半の測量結果ですが、先ほどお話ししたフランス革命中（18世紀末）の測量結果と併せて、1mの長さを決定しました。

経線（子午線）と緯度線

ビーチボールを持ってきたのは、説明の際

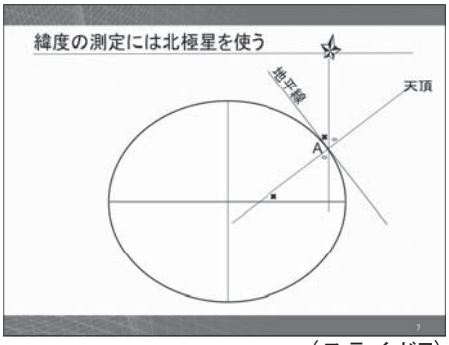


に都合が良いからです。ボールを横切る線は赤道で、赤道は上、あるいは下から見れば円になります。経線（子午線）は、北極（上端）と南極（下端）をつなぐ線です。これが、ビーチボールの緑と白の境目にあたります。経線、あるいは子午線と呼ばれます。赤道は緯度が0度の線でして、日本は北緯35度、赤道の上方に位置する平行線の上にあります。また、経度は東経135度となり、それが明石市です。本初子午線はグリニッチを通り、経線（子午線）としては0度になります。現在はその経線の0度がグリニッチを通るように決められていますが、1800年頃はパリを通る線を本初子午線にしたいとフランスの科学者達は考えていました。パリを世界の中心として定めたかったのですが、最終的にそのようにはいきませんでした。ですから、縦が経線（子午線）、横が赤道、これに平行なのが緯度線と

いうことになります。一番上の北極が北緯 90 度で、赤道が 0 度、一番下の南極は南緯 90 度です。

緯度と経度のはかり方

緯度の測り方は、その場所における北極星の角度で決まります。船の上にいても北極星の角度を調べることで、航海中に自分がどこの緯度にいるのかを知ることができます。一方、経度の方は、グリニッチを 0 度と決めたのも、フランスがパリを通る線を 0 度と定めたいと考えたのも、いずれも人為的なルールです。ですから、自分のいる場所の経度を調べるのは難しくなります。自分がどの経度にいるかということは、時計がないと分かりませんでした。時計で、太陽が一番南で高くなるときに何時になるのかを調べ、それがグリニッチとどの程度差があるのかを調べるのです。緯度の方は北極星の角度ですから、正確に観測できます。しかし、経度は間違いが起きます。一日で地球は一回転しますから、360 度を 24 時間で割ると、1 時間あたり 15 度の経度の差ができます。正確な時計と、1 時間で 15 度回ることを使えば、経度が分かります。明石市がなぜ日本の基準時間に選ばれたかというと、135 度はきれいに 15 で割り切れるからです。135 を 15 で割ると 9 になり、グリニッチと比べると 9 時間早いというのが明石市が日本標準時に選ばれた理由です。



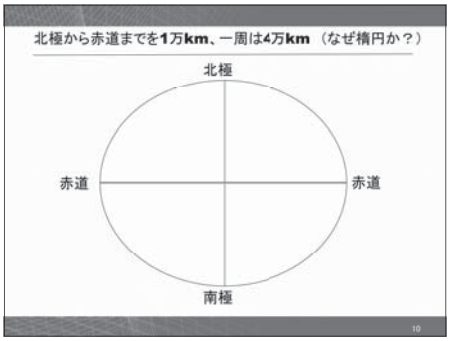
（スライド7）

スライド 7 で説明したいのは、先ほどの緯度の決め方です。地平線と北極星の角度で、この×と描いてあるのが、自分のいる場所の緯度になります。絵で見ると北極星が近くにあるように見えますが、実際は無限の遠くにあります。北極星は恒星で太陽の仲間ですから、実は地球よりずっと大きい星ですが、我々からは小さく見えます。地平線と北極星の角度が緯度になります。船が移動中であっても北極星の角度を測量することによって緯度を観測できます。しかし、船は動くので計測はなかなか難しく、何回も繰り返して計測をしたようです。

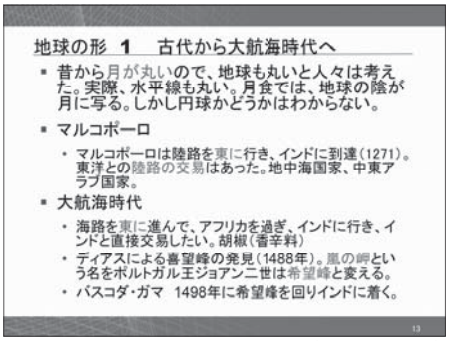
科学者達の気概

フランス革命の最中にメートルの長さを決めることになり、子午線の長さを測量しなければならないことになりました。ところが、メートルの物差しを作るときに、別に地球の大きさなどを測らずに勝手に決めてしまってもいいわけです。面倒くさいから、ここからここまでを 1m としましょう、と決めてしまっても問題ありません。しかし、当時の科学者というのはこだわりを持っています。1m の長さを決めるのにも、科学的な意味を求めて定めようとします。ですから、そのためには地球の周を測量しないといけないことになりました。あるいは、北極から南極までを測量すればその 2 倍で良いのですが、北極から南極を測量しなければなりません。それも、フランスの旧尺度を元にして地球の大きさを測り、そして 1m の長さを定めるということを行います。大変なことを考えたわけです。

スライド 8 を見てください。北極から赤道までの弧を 1 万 km とします。そうすると、ち



（スライド8）



（スライド9）

ょうど4倍で4万kmが、地球の大きさです。難しいのは、北極と南極を通る地球の周が楕円だということです。円であれば、1度分でも長さを測れば、360倍すると円周が分かります。中学校でも習う計算方法です。ところが楕円の円周は、簡単な計算方法では調べることができません。

そして、地球の大きさを4万kmとするわけですが、mに直すと4000万mとなります。もし地球がきれいな円球であれば、測量は非常に簡単になります。ところが子午線は円ではありません。ニュートンが1687年に自著『プリンキピア』で「地球は円球ではなく回転楕円形である」と主張した時代から100年経っていますから、赤道の周りは円だということは分かっています。ですからフランス革命のときに、赤道周りの円周の4000万分の1を1mにすると決めたなら、測量は簡単でした。しかし、当時の科学者達はわざと測量が難しい方を選び、北極と南極の距離を2万kmとして、北極と南極を通る地球一周を4万kmとしたのです。当時の科学者達の気概が良く表れていると思います。

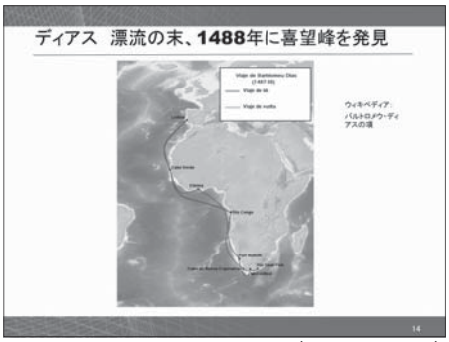
地球の形

本題に入り、地球の形について解説したいと思います。話は更に昔に遡ります。人々は古代から、円球なのかどうかまでは分かりませんでしたが、地球が丸いことは知っていました。古代ギリシャにも天文学がありましたが、月食などで地球の影が月に映りますし、月も丸いということで、地球が丸いことは分かっていました。ただ、地球が丸いという生活実感を持つことはできませんでした。

マルコ・ポーロは1271年に東方見聞録を書くわけですが、陸路でヨーロッパから東の方へ旅をする話です。東洋と陸路の交易はありましたが、途中で中東アラブの国などがあり、なかなか通過するのが困難でした。当時もヨーロッパはイスラム教徒と仲が良くありません。

喜望峰の発見

やがて大航海時代に入ります。航海者達は海路を東に進んでいって、アフリカを過ぎて、



（スライド10）

インドへ行きます。ディアスという人物が喜望峰（南アフリカの一番南の端）を発見して、そこを通ってインドへ行く方法を見つけました。そして1498年には、バスコ・ダ・ガマが喜望峰を回りインドに到着します。

スライド10が当時のポルトガルの冒険の絵です。ポルトガルのリスボンから出発して、アフリカの海岸沿いに少しずつ南へ行きます。当時の航海は非常に危険ですから、陸から近い場所を航海します。アフリカの南端まで来てディアスは嵐に遭い、漂流した結果、アフリカの東岸に行きつきます。ディアスは東岸に着いた段階で、このまま航海していけばインドに着くと確信しました。しかし、船員の水夫達がここから先は怖いから行かないと言うので、ポルトガルに戻ることになってしまいます。重要なのは、ディアスはポルトガル王ジョアンニ2世の資金援助のもとで、航海をしているという点です。目的は何かというと、胡椒やアジアの食料製品です。アジアと直接貿易をし、品物をヨーロッパに持ち帰って利益を得ることが航海の目的です。海路でなくとも、陸路ではインドへいけます。しかし陸路では、途中でアラブの国を通ります。陸路でインドやアジアに行って商品を仕入れ、ヨーロッパで売ることはできましたが、直接船で交易した方がもうけは大きいのです。このような商業上の目的のためにジョアンニ2世は資金援助をしたのです。そしてアフリカ海路の確立により、ポルトガルの将来の貿易収入は確保できたと考えました。

コロンブスと新世界

ところが、コロンブスは発想が全く異なり、南ではなく海路を西へ行こうとします。コロンブスはイタリア人ですが、もともとポルトガルのジョアンニ2世の資金援助のもとで航海しようと願っていました。しかし、ジョアンニ2世はバスコ・ダ・ガマの海路で利益を得ることができると確信していますから、航海ビジネスは終了ということで、新海路への資金援助をしませんでした。今の言葉で言えば、新しいビジネスモデルには資金を投資しなかったということです。

コロンブスはスペインの資金援助で、パロスから船で出発しました。そして緯度線（赤道に平行）に沿って、大西洋を西へ航海します。そうすれば東海路より速くインドに着けると信じていました。そして到着した陸地に、インドに着いたと思い違いして西インド諸島と名付けるのですが、実はそこはメキシコ湾でした。ここでも、先に述べた緯度の測定は簡単だけれども経度の測定は難しい、という問題が出てきます。自分がどこにいるのか分からなくなってしまうのです。インドに着いたと思ったのですが、西インド諸島はメキシコ湾の中に過ぎません。

スライド11が当時の世界の分割図です。

（スライド11）

1481年に、『エテルニ・レギス』という回勅（カトリック教会の公文書の一つで、ローマ教皇が全世界または特定国の司教、使徒へ宛てた形で書かれる文書）が布告されました。『エ

テルニ・レギス』の内容は、カナリア諸島より南は全てポルトガルの領域になるというものですが、これは法王が勝手に決めたものでした。しかし、その後コロンブスが西へ行きますと、ポルトガルと同じく、スペインも自分達の権限を拡張したいと考えます。コロンブスが西インド諸島に到達した年が1492年ですが、その1年後に、今度はスペインが境界（分割図の中の、中央部の点弧線）を作ります。これは、ヨーロッパから点線までがポルトガルの領域で、点線から西側がスペインの領域であるという主張です。「新世界」という言葉がありますが、点線より西側はスペインの新世界である、と決めます。これがトルデシリャス条約ですが、翌年に改定され、分割図の中の実弧線（中央部の弧線）になります。弧線が通るのはブラジルですが、最初の点線ではあまり陸地が入っていません。そこで、陸地をもっと入れないと損だということで、ポルトガルが西へ境界線を動かします。そして弧線で分割が決まるのですが、そうなると、弧線の東に出た部分はポルトガル領になり、ポルトガル語で開発が進むわけです。ブラジルは、実際はもっと大きい領地を持ちます。結果として、南アメリカではほぼ全域でスペイン語が使われますが、ブラジルだけはポルトガル語が言語になりました。これが、トルデシリャスという1494年に結ばれた条約です。

マゼランと世界分割

次に、マゼランが登場します。マゼランは1519年にスペインを出発します。南アメリカの南の端を通って、フィリピンに到達して、胡椒などを直接得ることになります。

マゼランが登場しますと、中央の弧線で新世界を分割してもどんどん西に進めば、地球を一周して元へ戻ってくることが分かりました。弧線で境界を決めたときには元に戻れるという事実は分かっていませんでした。西は放っておけばいいと思っていたら、マゼランが地球を一周してしまいます。マゼラン海峡は南アメリカの南端ですが、マゼランはそこを通り、フィリピンに到達して戦争をし、ラプ・ラプと戦って戦死します。しかし、フィリピン付近に着いたとき、マゼランは、自分達はこの地域の言葉を知っていると分かりました。バスコ・ダ・ガマの航路を通って東海路でアジアに来たことがあったのか、住民が話す言葉を聞き知っていて、自分達が地球を一周したことを理解したのです。

こうなると、丸い地球を分割するためには、中央の弧線の他にもう一本境界線を引く必要が生じます。そこで、1529年にサラゴサ条約が結ばれ、新たな境界線が引かれました。スライド11では日本を通る弧線です。つまり新世界は、分割図上の中央の弧線からどんどん西に行って、右の弧線までの範囲だということです。どんどん西へ行って、中央線から右線までがスペイン、右線から中央線まではポルトガルだというように、かなりいい加減に地球は分割されました。もちろん、当時はいろいろとプラクティカルに領地を決めていました。分割図上の右の線は、日本の岡山県を通っています。ですから、この分割通りにいきますと、岡山県から西はポルトガル語で、東はスペイン語になり、我々は現在スペイン語で話をしなければならない、ということになってしまいます。ヨーロッパ側は日本にも調べに来ています。1543年に鉄砲が種子島に来ます。フランシスコ・ザビエルが来日したの

が1549年です。サラゴサ条約の20年後ですから、感覚的にはどこがポルトガル領地になるかということは調べていたと思います。いずれにしろ、このような歴史的な経緯があって、地球は船で一周できるのだということが分かったのです。

地球は円球ではない

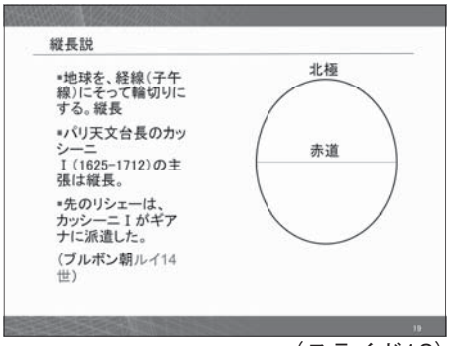
時計が遅れる

100年くらい後になりますが、フランス人の天文学者リシェーが1672年にフランス領のギアナに行きます。彼は正確な時計を持っていますが、フランスできちんと合わせた時計が、赤道に近いギアナではなぜか振り子が遅れてしまいます。毎日2分28秒遅れてしまい、これはおかしいとリシェーは気付きました。時計は天文学で使う正確なものです。また、山の上や下などといった、海抜が違う場所にいるのであれば遅れも理解できますが、海抜が同じ場所で時計が遅れるのです。パリには海がありませんから、海抜0mというのは少し苦しいのですが、仮にパリの海抜50mとギアナの海抜50mで比べると、時計がずれてしまいます。地球がもし円球なら、海岸であれば、あるいは海抜が同じであれば、どこでも地球の中心から同じ距離になり、時計が遅れるはずは無いのです。

（スライド12）

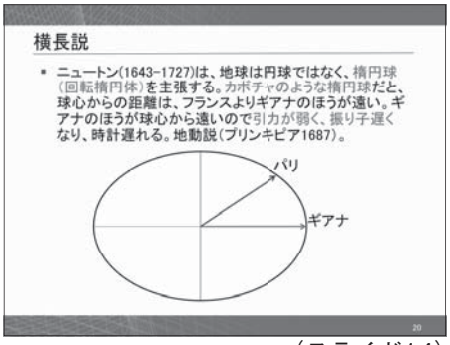
フランス領ギアナは、南アメリカの赤道（スライド12の中の横線）の右端少し上に位置します。後で出てくる、エクアドルはスライド12の中の横線の左端に位置します。ギアナはフランス領でして、ここに牢獄がありました。『パピヨン』という映画は、スティーブ・マックウィーン演じるパピヨンという男が監獄につながれて、何度も脱出してすぐに捕まり元の監獄に戻される話です。ひどい環境の中で牢獄暮らしをしていますが、その監獄がこのフランス領にありました。赤道から5度だけ北側です。

ニュートンと地動説



（スライド13）

先ほどの時計が遅れるという現象について、二つの説明が提案されました。一つは「地球縦長説」で、地球は北極と南極の方向に長くなっており、赤道周がつぶされているという考え方です。パリ天文台長のカッシーニ1世

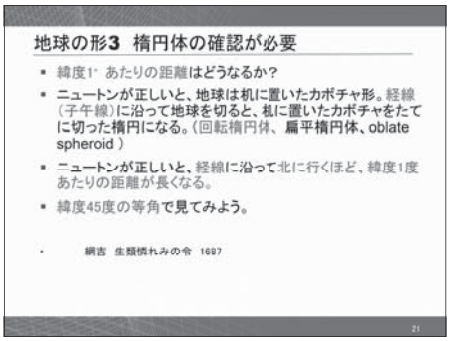


（スライド14）

が主張しました。そのときの王様はルイ14世です。先ほどのリシェーという天文学者は、カッシーニ1世の資金援助によって、ギアナへ行っています。

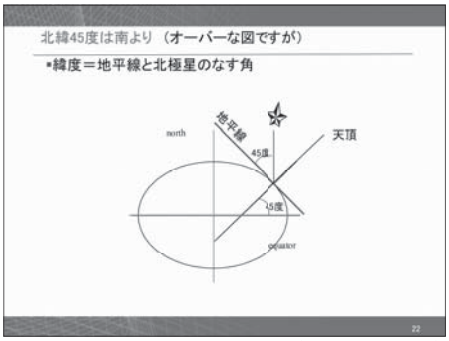
もう一つの説は「地球横長説」で、北南をつぶして赤道の方向に楕円形になっているという説です。この説を主張したのはニュートンでした。数学的には回転楕円体とも言いますが、上から見ると円で横から見ると楕円というものです。この場合、地球の中心からの距離は、パリよりもギアナの方が遠くなります。ギアナの方が遠くなりますから、引力が弱く、振り子が遅くなり、時計が遅れるというわけです。逆に、パリはギアナに比べると地球の中心から近いですから、振り子が早く動いて、ギアナより時計が早くなるのだとニュートンは説明しました。1687年の『プリンキピア』に書かれていますが、これは地動説に関係しています。

測量による検証



（スライド15）

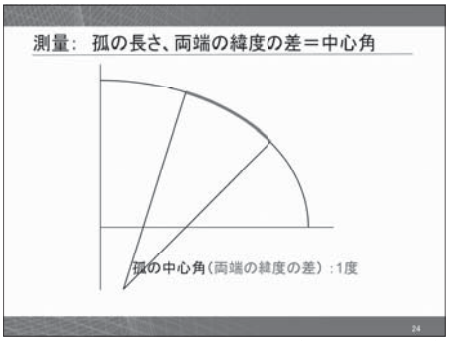
面白いのは、当時の科学者達が、縦長説と横長説どちらが正しいのかを証明しようとしたことです。証明するには、緯度1度あたりの区間距離が緯度によってどう変化するかということが問題になってきます。緯度は先ほど説明しましたように、北極星で測ります。ニュートンが正しいとした場合、一本の経線を緯度ごとに切っていきますと、緯度1度辺りの距離が北へ行くほど長くなります。スライド16は極端ですが、1度ではなく45度で見ていきます。図中の点で地平線から北極星の高さを調べると45度になっているとします。そうすると、この点が北緯45度です。そうしますと、赤道から北緯45度までの弧が決まります。この弧と北緯45度から北極までの弧を比較すると、北極側の弧の方がずっと長くなっています。いずれの弧も45度分です。実際、1度ずつ細かく切っていっても同じことで、赤道から北に行くほど、1度の幅が長くなります。それが地動説につながっています。1720年頃に、フランスの科学者達は、地動説が正しいならば1度ごとの長さが北に行くほど長くなるではないか、それは測量で確認できると考え、測量を行いました。科学的な大冒険でした。



（スライド16）

これまでの話をまとめてみます。ニュートンが正しければ、北に行くほど1度の幅は長くなります。カッシーニが正しいとその逆です。円球の場合は1度あたりの弧の長さは、緯度に係わらず一緒です。ですから、経線に沿って弧の長さを測量しようとしたのです。

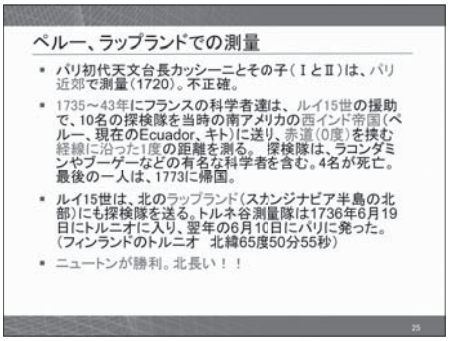
楕円の弧の長さですが、円のように一部だ



（スライド17）

けの測量では完了しません。正確を期すために、かなりの距離の測量をしなければなりません。また、測量しないといけないのは、区間の両端の緯度と、弧の長さです。最初に測量をしたのは天文台長のカッシーニとその子（1 世と 2 世）でしたが、これは後から見ると不正確な測量だということが分かりました。

ペルー（エクアドル）での測量

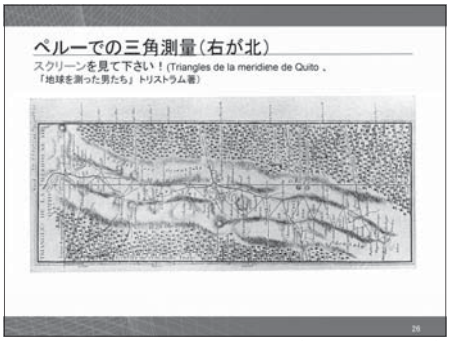


（スライド18）

1735 年から 1743 年に、フランスの科学者達が西インド帝国（現在のエクアドル）に探検隊を派遣して測量を行います。ルイ 15 世が資金援助をしました。日本では江戸時代が始まって 100 年ほど経ったばかりの時期なのですが、フランスではこのような科学的な冒険を行っていました。当時はメキシコ湾を西インド湾と呼んでいます。「西インド帝国」と間違えて名前を付けた国は後にペルーになり、今はエクアドルとなっています。そしてエクアドルの赤道を挟む区間を測量しました。数学者のラコンダミン、天文学者のブーゲーなど、様々な科学者が参加しているのですが、10 人の内の 4 人が亡くなってしまいます。そして最後の一人は、40 年経ってから帰国を果たしています。日本でも幕末にスペインなどのヨーロッパへ派遣されると、もう一生家族と会うことはないだろうと考えたのでしょうが、この探検も 1730 年頃の話なので、本国に帰国することが無いと考えるのも自然だったかもしれません。

面白いことに、ルイ 15 世に資金援助を頼むのですが、色々な嘘を言って資金援助をしてもらいます。そして、最後は、南アメリカの様々な資源、植物を持って帰ります。当時見つけたのはゴム、それからキニーネなど、多種多様な南アメリカの資源を持って帰国しています。また、ラコンダミンは数学者ですが、ほら吹きでも有名でした。彼は無事フランスへ帰った後、あちこちのサロンへ呼ばれて南アメリカの話をしますが、ほらばかりついていたようです。一番有名なのは、アマゾン川のほとりには、アマゾン女族という女だけの蛮族がいて、男がいると食ってしまうという話です。この話を作って広めたのがラコンダミンです。数学で有名であると同時に、ほら吹きでも有名な人だったようです。南アメリカのことを知る人は少ないので、人々は、彼の話を喜んで聞いたようです。また、ブーゲーは地球物理で高名な学者でした。

別の一隊は北へ行きます。先ほどの測量は赤道を挟む 0 度が中心でしたが、もう一方はラップランド（スカンジナビア半島の北部）に行きまして、これは割と簡単に北緯 65 度の



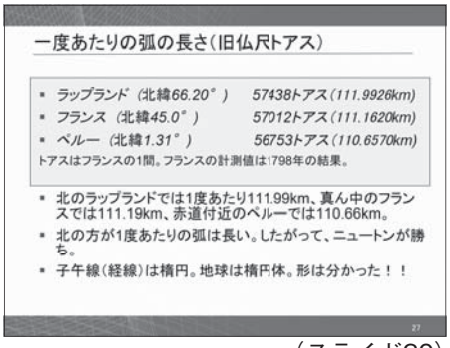
（スライド19）

位置で計測をしました。そしてニュートンが正しいということが分かったわけです。測量の結果、北に行けば行くほど、1度の幅は長くなることが分かったのです。

スライド19はペルーでの測量ですが、三角形が重ねて描いてあるのが確認できます。（右が北、左が南です。）これは三角法という測量方法でして、三角形を組み立てていきます。三角形は、底辺と両端の角度が分かると三角形の辺の長さなどが全て決まります。測量の距離が長いと、地球は球体ですから、球体の修正をかけないといけません。平面でしたら、底辺と両端の角度で辺の長さなどが決まります。このように測量を進めていきますが、当時の測量は非常に正確でした。

地動説の勝利

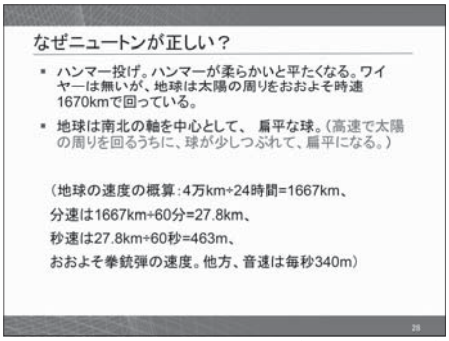
スライド20が計測結果です。ラップランド



（スライド20）

（北緯66.20度）は111.9926km、ほぼ112kmです。北の方のラップランドは、ノルウェー、デンマークの境界です。パリは北緯45.0度とあるのですが、ここは111.1620km。そしてペルーは北緯1.31度の結果ですが、この地点が110.6570kmとなり、少しずつ北に行くほど長くなることが分かりました。このような大変な冒険を行った結果、地動説が正しいということが証明されたのでした。

なぜ地球は楕円体なのかというと、まずハ



（スライド21）

ンマー投げのことを考えていただきたいと思います。ハンマー投げで、ハンマーの部分が少し柔らかければ、くるくる回せば、ハンマーは少し扁平になると予想できます。同じように、地球が南北の軸を中心として、太陽の周りを高速で回転しながら回っていくと少しつぶれてしまうため、楕円になるということです。地球の一周が4万km、赤道周囲もほぼ4万kmとしますと、それを24時間で一回りしますから、地球は時速で言うと（4万km÷24時間＝）1667kmで回ります。ですから、リニアが時速610kmなどというのは遅いものです。時速1600kmで現時点でも地球は回っています。しかし、ニュートンの時代では、それを人々に納得させることができませんでした。時速1667kmで回っているのに、なぜ

我々は立っていられるのだ、という反論が出てきます。分速で言いますと 1 分間に 27.8km、秒速では 463m、拳銃とほぼ同じ速度です。そういった速度で地球は回っているのですが、我々はそれを感じていません。我々が立っていられるのは、引力が働いているからだということになります。

楕円の式

赤道周と楕円周

楕円は、先ほど横長の楕円になってくるということが分かったのですが、楕円の方程式は次のようになります。

$$\frac{x^2}{a^2}+\frac{y^2}{b^2}=1$$

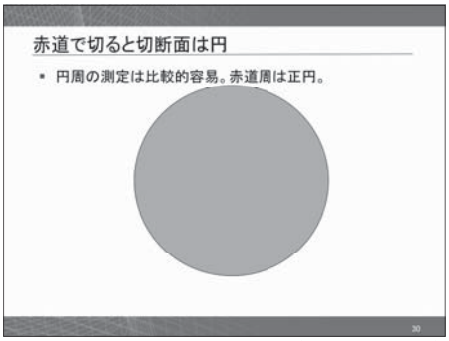
この式の中の a と b というのが不明なのですが、これの決定が問題になってきます。

もう一回繰り返します。地球は赤道で切ると正円です。正円ならば、一度分の弧の長さを測量して、それを 360 倍すれば円周が分かります。ところが、子午線、あるいは北極と南極を通る周は楕円ですから、計算が難しくなります。

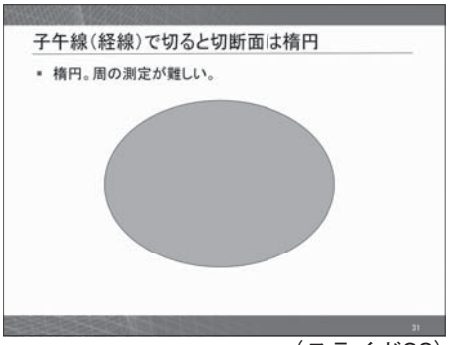
地球の大きさ

子午線が楕円で、赤道が円ということが分かると、実際に地球の大きさをどのようにして決めるかということが問題になります。

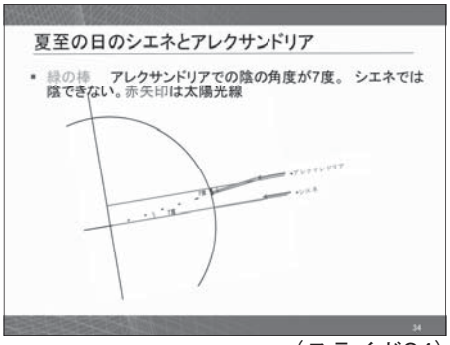
話を一度、古代ギリシャ時代に戻します。ギリシャにエラトステネスという人がいました。毎年 6 月 21 日、夏至の日の正午に、エジプトのシエネという町の井戸の中に影ができないことが知られていました。しかし、そこから 800km 離れたアレクサンドリアでは、同じ夏至の正午に 7 度の影ができました。これはなぜなのか、ということをエラトステネスは考え、彼は地球が円球であるとし、地球の大き



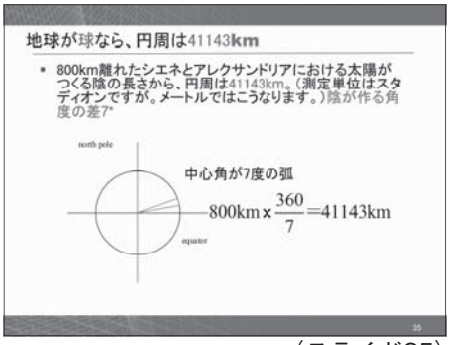
（スライド22）



（スライド23）



（スライド24）



（スライド25）

さを計算しました。影についてはスライド24を見てください。アレクサンドリアだと影ができますが、シエネだと真上から日が照っていますから、井戸の中に影はできません。シエネは北回帰線の上に位置しています。ですから、夏至の日に影はできません。また、同じ夏至の日にアレクサンドリアでは7度の影ができます。これをもとに地球の大きさを計算しますと、現在の単位で表すとシエネとアレクサンドリアの間は800kmあるので、360/7をかければ、円周は41143kmになります。（中心角が7度、弧長が800kmである扇形の円周を求める計算です。）これが、古代ギリシャ時代に行われた計測です。当時は、測量単位としてスタディオンが使われたそうですが、kmに直すとこのような計算になります。

フランス革命

そしてフランス革命の時代に、北極から赤道を測量しようということになり、パリを通る経線に沿って1000kmほど測量します。赤道周なら簡単に計算できるものを、子午線周を求めようとするので測量が大変困難になります。

少し復習したいと思います。まず、バスティーユ監獄の陥落が1789年です。共通の度量衡法が国会に提出されたのが1790年。そして1791年に、経線に沿った地球の測量が始まります。ルイ16世の処刑が1793年1月で、マリー・アントワネットも同じ年の10月に処刑されます。ドゥランブルとメシェンという天文学者の測量が1798年に終わりまして、1799年にはメシェンがパリの天文台長になります。先ほど登場したカッシーニ家は、1世、2世、3世、4世とパリ天文台長を継いだのですが、5世はアンシャンレジームに反対しましたので、パリ天文台長を辞しました。その後でメシェンが天文台長となりました。ドゥランブルとメシェンは天文学者であると同時に数学者でもありますが、当時の科学者の能力は素晴らしかったようです。

科学者達は7年かけて壮大な測量を行ったのですが、一方でフランス革命も唐突に始まって終わるのではなく、地方では何年も続いていました。革命が継続しているという緊迫した状態の中で、望遠鏡を持って歩いて測量を行っていますので、捕まったりもしたようです。はじめはルイ16世の許可証を示しながら測量を行っていましたが、後になってくると、ルイ16世の許可証を持っていること自体がスパイだとみなされてしまいます。非常に困難な測量を行ったといえましょう。

スライド26（左が北）はフランスの地図で

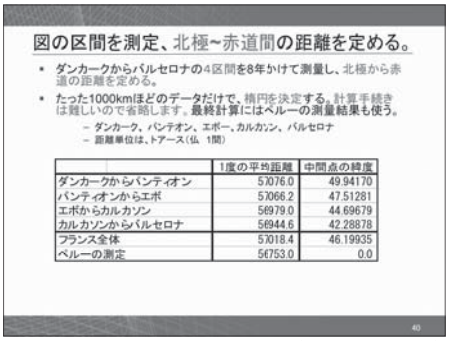
スライド(26)

すが、また三角形でくぎっています。一番北側の町がダンケルクでして、第二次世界大戦の映画などによく登場する街です。ドイツのような名前で、ドイツとの国境に位置します。そこから南へまっすぐ、三角形を積み重ねて測量していきます。南の端はバルセロナになります。バルセロナはスペインの町で、隣の国に入るわけですから、余計に安全が問題に

なります。国境を通れば役人がいます。役人に、「メートルを決めるという偉大な目的のために測量しているのだ」などと言っても通じないのは当然でしょう。

測量結果

フランスの測量の測量結果がスライド27



（スライド27）

になります。測定単位（距離単位）はトアースと言いまして、日本の1間くらいの長さです。ダンカークからパンティオンが第1区画、パンティオンからエボまでが第2区画、エボからカルカソンが第3区画、カルカソンからバルセロナが第4区画。それから一番下に、ペルー（エクアドル）の測定結果も書いてあります。そういった測量結果を使って、楕円の大きさを決めました。

最終的な長さは、楕円の長径の長さが3271216トアース（6375.7km）、短径は3261444トアース（6356.7km）となり、長径の方が大体20kmくらい長いことが分かりました。5130740トアースが、子午線の4分の1で1万kmとなりますから、1mは、昔のフランスの尺度で表すと、0.513074トアースになります。これで決まりです。トアースの長さは既に決まっているわけですから、1mの長さは、トアースに比べて0.513074倍であると決まったのです。このような測量結果から、楕円全体の周を求める計算法は数学的に複雑になりますので、今日の話では省きます。

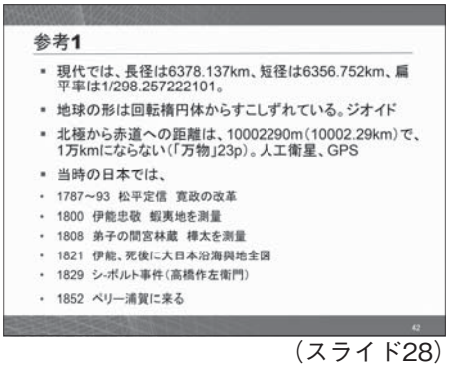
メートル原器

この結果が1799年に国際会議で承認されて、メートル原器が完成します。このとき作られたのが最初のメートル原器で、アルシーブ原器と呼ばれます。1879年には新たなメートル原器が作られます。メートルの長さを決めるとは、メートル原器を作るだけの話なのですが、これほどの苦労をしてメートル原器の長さが決まりました。安易に考えれば、「これだけの長さを1m」と勝手に決めることもできるのですが、当時の科学者は、そういった安易な決め方を許しませんでした。赤道周ではなく子午線周を基準としたところにも、科学者達の気概が感じられます。

参考

参考までにお話ししますと、現代の計算では、長径は6378.137km、短径は6356.752kmで、少し当時の測定からずれています。また、ニュートンの時代は地球がきれいな回転楕円形だと考えられていたのですが、人工衛星などでいろいろと調べますと、地球はきれいな形でなく、ジャガイモみたいに凹凸があることが分かっています。

現代の測量方法できちんと測りますと、北



（スライド28）

極から赤道の距離は1万kmではなく、10002290m（10002.29km）になります。つまり2290mずれているということになりますが、メートル原器は昔のままです。現代の計測は、人工衛星でもできます。GPSを使用し、光学的に距離を測ることも可能です。

当時の日本

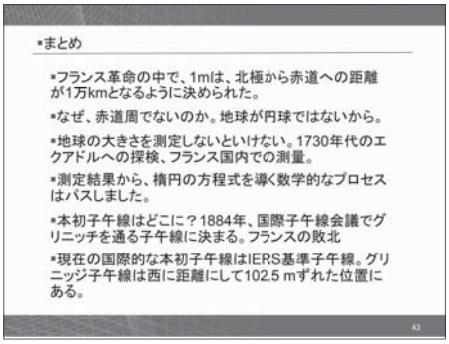
フランスでメートル原器が作成されていた頃、日本はどのような様子だったのかということをお話ししたいと思います。当時の日本は結構頑張っていまして、1800年に伊能忠敬が蝦夷地の測量を行っています。1808年には、弟子の間宮林蔵が樺太を測量。そして1821年、伊能の死後に、伊能の地図である大日本沿海輿地全図が発表されました。

また、1829年にはシーボルト事件が起きます。シーボルトが国へ帰るときに船いっぱいに日本に関する資料を持って帰るのですが、その中に大日本沿海輿地全図も入っていました。しかし問題だったのは、江戸城の内部が詳細に書かれた地図も一緒に入っていたということでした。シーボルトの船は難破してしまい、その難破船の荷物を救出しているときに江戸城の地図が見つかります。それがシーボルト事件です。そこで、天文方の高橋作左衛門は江戸城の地図をシーボルトに渡したということで、すぐに打ち首になり、処分が決まるまで亡骸は樽に塩漬けにされました。また、家も断絶されました。1852年にペリーが浦賀へやってきます。このときペリーは、大日本沿海輿地全図の小型版をきちんと持っていますので、日本の情報は西欧に伝わっていたようです。

伊能忠敬の地図を見ると、南北は正確なのですが、東西はきちんと合いません。南北は北極星で調べることができますから、正しく出すことができます。一方、東西は時計がないと正確に調べることができません。伊能忠敬はおそらく、時計は使わないで距離を測っていると思われますので、少し東西がずれています。しかし、正確な地図だと言えるようです。

まとめ

最後に、今回の講義をまとめます。まずフランス革命の中の科学者達の会議で、1mは北極から赤道への距離が1万kmとなるように定めることが決議されました。そして、赤道周ではなく、経線に沿った楕円周を測量す



（スライド29）

ることになりました。ここが非常に重要です。また、地球の大きさを測定することになりますが、その測定には歴史があり、1730年代にエクアドル（ペルー）での大変な探検が行われています。英語で赤道のことはequatorと言いますが、スペイン語ではEcuadorとなります。つまり、エクアドル（Ecuador）は日本語に訳せば「赤道国」ということです。本初子午線については、フランスはパリを通るように子午線を定めたいと考えたのですが、残念ながら1884年に、グリニッチを通る本初子午線（経度0度の線）が決まります。（現在

の本初子午線はグリニッチから 100m 位ずれた場所を通るように修正されています。）

　以上が、今回の講義のまとめになります。それでは、そろそろ時間になりますので、終了させていただきます。ご清聴いただきまして、誠にありがとうございました。

人間論シリーズ1　人間は、言語によってのみ人間である

物語はどのように理解されるか

Cognitive processes of story comprehension

椙山女学園大学人間関係学部教授
増井　透
Toru Masui

杉藤重信研究員：本日は暑い中お集まりいただきまして、ありがとうございます。今年度第２回人間講座を開催いたします。まずは森棟理事長より挨拶がございます。どうぞよろしくお願いいたします。

森棟公夫理事長：本学学長・理事長の森棟でございます。本日は暑い中をお越しいただきまして、ありがとうございます。この椙山人間学研究センターは、学園創立 100 周年記念の際に設立されました。その後、毎年数回の人間講座を開いている次第でございます。昨年度から、自然科学分野だけでなく、人文、社会科学分野においても講演を行っております。今回は本学人間関係学部教授の増井先生に『人間は、言語によってのみ人間である　物語はどのように理解されるか』というタイトルでご講演をいただくことになります。たくさんの方にご参加いただきまして、ありがとうございます。また、この教室に入られるのが初めての方もいらっしゃると思いますが、昨年度、文部科学省が行っている私立大学等改革総合支援事業で助成金をいただきまして、もともと国際交流センターがあったこの場所をキャリア教育推進ルームという教室に造り替えました。IT 機器が多くそろった教室で、机等も新しくなっていますので、快適な環境で受講していただけたらと思っております。よろしくお願いいたします。

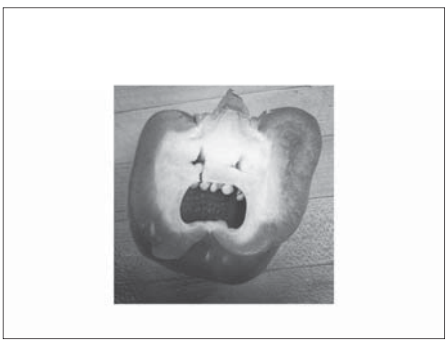
杉藤研究員：今年度２回目の人間講座になりますが、今回から少し趣旨を変えまして、シリーズタイトルをつけております。本学園の教育理念は「人間になろう」ですが、「人間」という言葉が各所でキーワードとして出てきます。この講座も「人間講座」という名前ですが、更に「人間」というものに焦点を当ててシリーズにしたいと考えています。「人間論シリーズ」と名づけ、１回目の今回が『人間は、言語によってのみ人間である』となります。最近では、必ずしも人間だけが言語を話すのではないと考えられています。それでも、我々が使っているような言語を使用するのは、人間だけです。そういった訳で、今回は「言語」にハイライトを当てた講座として、増井教授にお話しいただきます。

増井教授は言語学の専門ではなく、認知心理学の方からアプローチいただいて、人間の言語の原点というところから、話していただきます。増井教授の研究内容等については、この後の講演の中でお話しされると思います。それでは増井先生、よろしくお願いいたします。

増井透教授：ご紹介いただきました増井でございます。よろしくお願いいたします。本日は大変暑い中、お越しくださいましてありがとうございます。今、簡単に紹介していただきましたが、私は専門が認知心理学・認知神経心理学という領域になります。認知心理学というのは、「外界の情報を人間がどのように処理して、世界を認識するか」という、例えば知覚や記憶などという領域が含まれますが、その中に当然「言語」というものが入ってきます。また、認知神経心理学というのは、例えば脳が損傷した場合に認知障害が起こりますが、失語症のように言語機能が損傷される場合があります。そういった場合に、言語と一言で言ってもさまざまな側面があり、言語的な機能がどのように損傷しているのか、それを健常者の認知モデルを用いて一種のシミュレーションを行います。そういった中で、言語材料というものを刺激として使ってまいりましたので、その中で特に「物語」という材料を使った研究を私自身も行いました。題名からして、物語というと文学的なイメージを持つ方がいらっしゃるかもしれませんが、あくまでも言語材料としての物語（文章の連なり、ある固まりをもった文章）というものがどのように処理されるのか、という話をしたいと思います。

まず、本日のテーマですが、一番簡単にエッセンスだけを言うと「トップダウン処理」という言葉があります。例えば、組織でトップダウンにすると効率が良いとかいう言い方をしますが、随分と昔から認知心理学・認知科学という領域でトップダウンという言葉が使われるようになりました。このトップダウン処理が言ってみれば人間の処理の一つ、情報処理の特徴でもあります。それに関する言葉に「スキーマ」というものが出てきます。今日はこのスキーマという言葉をキーワードにして、話をしたいと思います。そして最後になりますが、スキーマによって談話（今回は特に物語）の理解は変わるということ、あるいは物語が理解されるということについて話をし、人間の情報処理にとってスキーマがいかに重要かということを実験的な例を使ってお話しします。

心理学といっても、カウンセリングや犯罪などといったイメージを持っている方が多いと思いますが、もともとは実験心理学は物理学から派生した領域でもあるので、心理学で実験というものがどのように行われていて、人間の情報処理のモデルを考えているのかというのを説明したいと思います。



スライド1

まず話の始めとして、スライドをご覧いただきたいと思います。この写真は何に見えますか？（スライド1）見てのとおり、これはピーマンですが、おそらく人によってはピーマンではないものに見えているのではないかと思います。大抵の人は、これが顔に見えてしまいます。ピーマンを切っただけなのですが、なぜ顔に見えるのか。実は、先ほど言ったスキーマがこれに関連してきます。

スライド2

では、この画像はどうでしょうか（スライド2）。これも普通は、向き合った二人の人物の顔に見えます。ところがよく見ると、全然違うものが見えてきます。心理学ではこのような図をよく使うのですが、要するに「あるもの・あるパターンが、なぜ、ある形に見えるのか」つまり「意味をそこにもたせる」という一つの例になります。ここでは「顔」というスキーマが強く働いていると考えられます。

我々は、特に物語を読んだりして内容がわかったような気になっていますが、その「わかる」あるいは「わかりたい」と思うのはどうしてなのでしょうか。「わかるということは、どういうことなのか」というのは、心理学でも昔から一つのテーマになってきましたが、残念ながら、いまだにはっきりとは解けていません。ただ、一つの考え方として、次のように考えられてきました。まず、「エネルギーの均等の法則」というものがありますが、これを「エントロピーの法則」と言います。自然界では、情報量というものがどんどん増加していき、均等になろうとする働きがあります。例えば、水の中にインクを一滴たらします。すると、インクはどんどん拡散していきます。これは、情報量が最大になるということです。つまり、放っておくと、混沌としていくわけです。また、部屋も気をつけて片づけなければ、だんだん散らかっていきます。要するに、無秩序になっていきます。これが、自然界の一般的な法則ということになります。

ところが、生物というのは、それとはまったく逆向きの性質を持っています。生物はエネルギーを補給し続ける存在であり、更には、情報を減らして秩序を維持しようとする傾向が非常に強くあります。世界というのは、何もしなければ混沌とするままです。ところが我々は、そういった世界に耐えられません。何かそこに意味を見出したいと考えます。だから、何かパターンをそこに見つけて、物を見るわけです。これは、膨大な情報の中から、何かの情報を選択し、それに意味を与えて、何らかの秩序を見つけ出そうとする働きです。これを我々は「認知」と考えております。そして、何らかの秩序、つまり意味が見出されると、「わかった」というふうに思います。もちろん、こんな簡単なものではないかもしれませんが、人間というのはなるべく情報量を減らして、そこにある意味を持たせる働きがあるのだと考えてください。

今話したように、情報量を減らす働きというものがあります。これを認知と考えると、認

知というのは環境への積極的な働きかけ、つまり、自動的に何か刺激が入ってくるのを待つのではなくて、こちらから積極的に世界に「意味」を与える働きをしているのだと考えられます。ところが、一つの大きな問題点は、「意味」というのが一つとは限らないということです。先ほどのピーマンの写真、あるいは向かい合った顔の写真のように、いろいろなふうに見えるわけです。つまり、そこで自分が「わかった」と思った状態、あるいは一つの意味をそこに見出したとしても、それが唯一の物であるかどうかはわからない、という問題が常に起こっています。

では、今から簡単な実験をしてみたいと思います。まず、皆さんに次のような五つの質問をします。

1. ハトにえさをあげたことがありますか？
2. 道ばたにお地蔵さんがあったらお祈りしますか？
3. 最近、本を買いましたか？
4. ペンギンを飼ってみたいと思いますか？
5. 仏像を見て癒されることはありますか？

では次に、少しの時間ですが、この図を見てください（スライド3）。何かよくわからない図がありましたが、この図についてはまた後ほど尋ねますので、覚えておいてください。

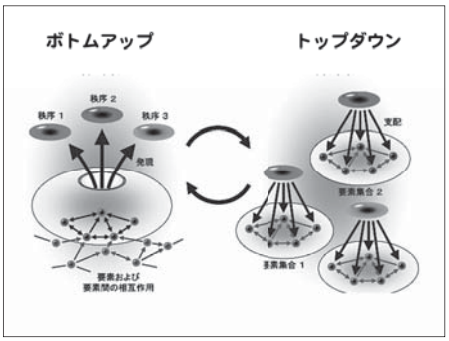
先ほど、トップダウンという言葉を紹介し

スライド3

ました。心理学では、我々の情報処理の様式として、二つの様式を想定しています。一つは、神経細胞のレベルから始まって、どんどんそれを統合していき、より高次の情報処理に至る処理様式で、これを「ボトムアップ処理」と呼んでいます。例えば、文章理解の場合に、文章をいきなり理解するわけではありません。まず「文字」を一文字ずつ読み取ります。次に、その文字が集まって「単語」を理解します。今度は単語が連なって「文章」になり、その文章が一つの固まりとなって、意味をそこで理解するというように、より低いレベルの刺激から、それがだんだん統合されていき、高次の理解へ進んでいく。このような、下から上へ進んでいく処理の方式が、ボトムアップです。初めて外国語を学んだときのことを思い出してみてください。最初は、文字一つ一つを一生懸命読んでいきます。次に、単語を覚えます。単語がわかって、次に文章というようにして、だんだん範囲が拡大していくことが実感としてわかると思います。

ところがもう一つ、「トップダウン処理」という処理様式があります。これは、低次の処理から順番に上へ上がっていくのではなく、初めにすでに期待や予測があり、それにもとづいて処理をします。つまり、初めに期待があるので、それを裏づけるような低次の情報があるはずだと考え、探していきます。例えば、「顔だ」と最初に思ってしまうと、当然、顔には目や鼻や口があります。仮に鼻がなくても、目や口があれば「顔だ」と認識できるわけです。要するに、個々の要素をすべて処理して「これは顔だ」と認識しているのではなく、初めに「顔だ」という予測を立てて、それによって処理をしているということです。

例えば、夕暮れの墓場を歩いていて「幽霊が出そうだな」と思っていると、ススキが揺れているのを見て「幽霊だ」と思ってしまう。また、一時期、人面魚がはやったことがありますが、先ほどの顔の例のように、これも「見たい」と思っていると、魚の一部が顔に見えてくる。このようなことが起きますが、まさにこれはトップダウンで行っているということになります。このトップダウンとボトムアップの二つが上手にからんで、我々は情報処理を行うことができます。図にすると、このようになります（スライド4）。下からだんだ



スライド4

ん積み上げていくのがボトムアップ、それに対して、上から要素を探していく方式をトップダウンと呼んでいます。

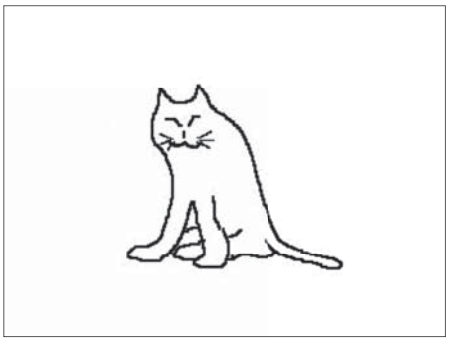
次に、この図を見てください（スライド5）。真ん中の文字ですが、これは何と読みますか？　実は形としては同じなのですが、縦方

スライド5

向に見ている方は「13」に見えます。ところが横方向に見ている方は「B」に見えます。同じパターンだけれども、文脈によって違ってきます。では、その文脈は何によって作られるか。我々は「スキーマ」が一つの要因だと考えています。

では、スキーマとは何かということですが、これは我々が持っている知識の枠組み・単位のことです。図式とも言いますが、情報処理を行うときに環境との相互作用の際に使われているもの、知識の単位だと考えてください。そのスキーマがトップダウン処理を駆動しています。つまり、スキーマによって解釈が決まるのだと考えられています。

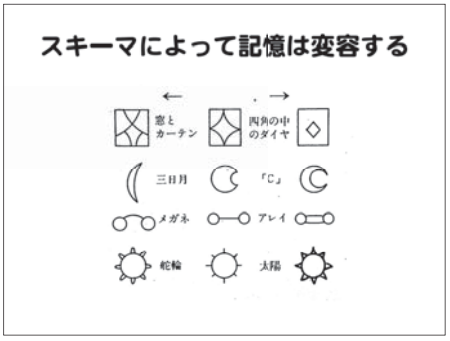
では、先ほど見ていただいた図（スライド3）を、思い出して簡単に描いてみてください。実は、これはいろいろなパターンが生じるのですが、時間が経てば経つほど、様々な形が現れます。まず「何だと思ったか」で描くものが随分変わってきます。つまり「どのようなスキーマを用いたか」によって記憶は変わってしまいます。更に、時間が経つほど内容が変容していくという現象が観察されます。例えばこのような例がありました。この絵（スライド6）を描いた方は、猫だと思ったわけです。そうすると、猫を描いてしまいます。図



スライド6

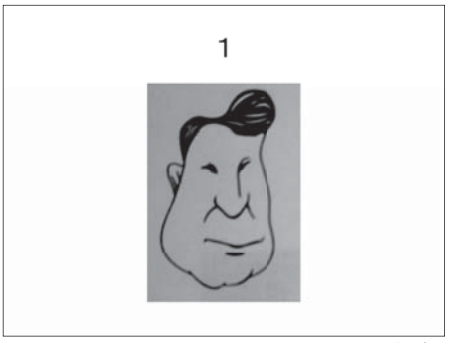
を見せる前に、五つの質問をしましたが、あれには誘導があります。鳥に関する質問がありましたが、鳥というふうに認識した方は、おそらく鳥っぽい絵になります。それから、お地蔵様や仏様のように認識した方は、そういったように変わっているかもしれません。人はおそらく、何だかわからないぐちゃぐちゃな形を描くのは我慢できない、何らかの意味がある物を描きたいと考えます。そのときに、自分が暗黙裡に思いついたものがスキーマとして利用されているのではないかと思われます。この猫の絵はまさしく、猫のスキーマを使った例だと考えられます。

次の図は、実験で行ったケースです（スライド7）。真ん中が元の図です。そこにラベル



スライド7

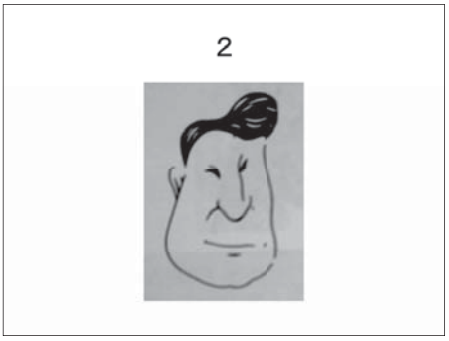
をつけます。例えば、「窓とカーテン」とか「三日月」とラベルをつけると、向かって左側のようなパターンになります。また、「ダイヤ」「C」というラベルをつけると、右側のようなパターンになってきます。これは明らかに、どのように思ったかによって記憶が変わっていくという、実にはっきりした例になります。心理学科でも入学前教育のスクーリングを行っていますが、そこでこのような実験を高校生にやってもらっています。本当におもしろいように変わった図が見られます。



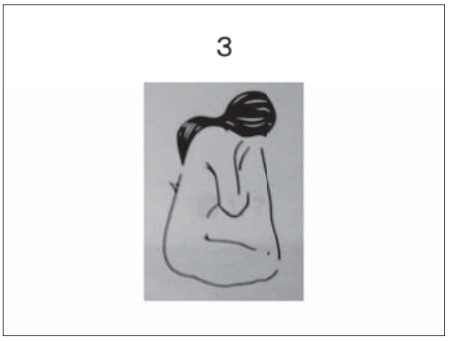
スライド8

実はスキーマの働きというのは、私達はあまり意識していません。スキーマは無意識のうちに働いていることがわかります。

皆さん、この図（スライド8）は何に見えますか？　おそらく、ほとんどの方はおじさんの顔みたいに見えるはずです。この図を今から次々に変えていきますので、見ていてください（スライド9～13）。ここまで来ると、だいぶ変わってきて、おじさんの顔ではなく



スライド9

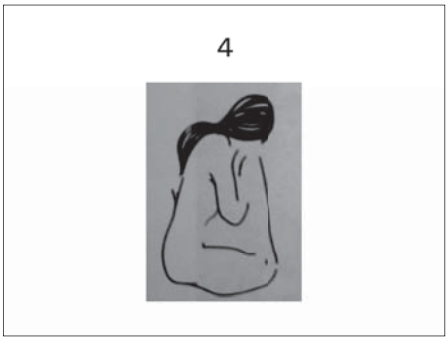


スライド10

女性の姿に見えてきます。今度は逆に見ていくと、初めに見たものの印象がかなり残ります。つまり、何を見たいか、何を見ようとしているかによって、かなり図がゆがんでいても、見たいものが見えてきます。スキーマの働きというのは、非常に強いことがわかります。

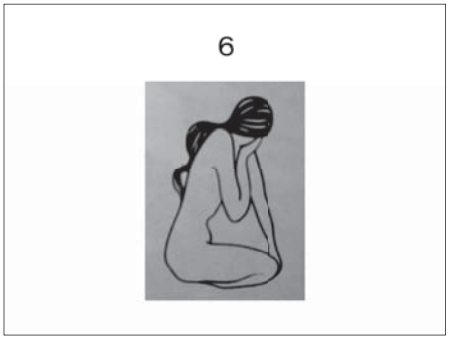
では、そういったスキーマの働きが、実際に我々が物語を認識する場合にどのように関与してくるかということを、四つの点から説明したいと思います。まず一つ目が「視点の効果」、二つ目が「スキーマ」、三つ目が「スクリプト」、そして四つ目が「物語文法」。この順番で、説明をしていきます。

まず、こちらの文章「国境の長いトンネルを抜けると　雪国であった」は、川端康成の『雪国』の有名な一節です。これをサイデンステッカーという人が英語に訳した文章がありますが、このようになっています。“The train came out of the long tunnel into the snow country.” これをそのまま日本語に訳すと「列車は長いトンネルを抜けて雪国に入った」となります。さて、原文の文章と英訳を日本語訳した文章、それぞれ、どのような光景を想像しますか？　この実験を実際に行ったケースがあります。まず原文の方は、この写真のようなイメージ（スライド14)。つまり、ト

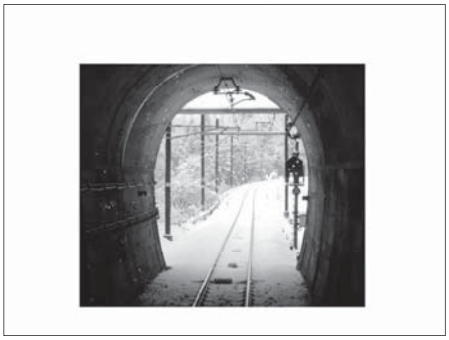


スライド11

スライド12



スライド13

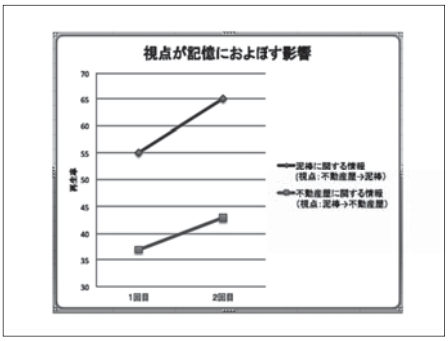


スライド14

スライド15

ンネルを抜けると前方が雪国であったというイメージをする人が多いです。逆に英訳した方の文章では、列車がトンネルから出てくるイメージになります（スライド 15）。これはまさに、どこから見ているかという「視点」に関係してきます。よく「神の視点」「虫の視点」と言いますが、上から見通している、あるいは自分の側から見ている、それだけの違いで、随分印象が変わってくるという一つの例として出しました。この視点というのが、物語を理解するときに大きな違いになってきます。

この視点について実験を行った例があるので、紹介したいと思います。まず「少年が学校をさぼって、家族がいない家の中で一日を過ごす」という内容の物語を読んでもらいます。内容は、どのような家か、家にどのような物があるかなど、家についての描写が書かれています。要は、家に関する様々な記述が書いてある一つの物語を読んでもらうということになります。この際、次のような操作をします。被験者を半分に分け、片方のグループには「不動産屋になったつもりで読んでください」と伝え、もう片方のグループには「泥棒になったつもりで読んでください」と伝えます。つまり、視点を変えて読んでもらうということです。そして一定の時間をおいてから、一回目の再生、つまり物語の内容を思い出してもらいます。それからまた時間を置いて、二回目の再生を行ってもらいます。このときに、視点を変えます。一回目に不動産屋の視点で読んでもらった人には、今度は泥棒の視点で思い出してもらいます。逆に、最初に泥棒の視点で読んだ人には、不動産屋の視点で思い出してもらいます。このことによって、次のグラフのように随分結果に違いが出ます（スライド 16）。



スライド16

このグラフでは、一回目と二回目にどの程度違いがあったかということを見てもらいたいと思います。グラフの内容を要約すると、次のようなことになります。まず、視点を変えた参加者は、一回目より二回目の方が 7％多く再生、つまり思い出す量が増えました。新しい視点で、新しい視点に関する内容の再生が 10％増加しました。つまり、泥棒の視点で読んでもらうと、泥棒に関係しそうな内容が増えてくるということです。逆に、一回目に不動産屋の視点で読んだとしたら、二回目の再生では不動産屋の視点であまり重要でなかった内容が減ってしまうという結果になりました。つまり、視点を変えると、その視点にマッチした内容が思い出されるという結果です。また、視点を変えなかったグループは、再生量にほとんど変化はありませんでした。つまり、視点によって記憶は変わり、思い出すときに内容も変わってくるという一つの例になります。

このように、「視点」によって記憶は形成され、理解されます。そして当然、思い出すときも、その視点に合致した内容が出てきますが、思い出すときに視点を変えると今度は新

しい視点に合った内容も思い出されるということになります。本人は覚えていると思っていないかもしれませんが、新しい内容が出てきたということになります。これを一般化すると、「いま、ここにいる自分」に合致した内容をよく思い出すということになります。人間の記憶というのは、テープレコーダーやビデオテープとは全然違います。覚えたものはそのまま残って、そのまま思い出されるわけではありません。「いまの自分」が影響して、内容が変わってくるのだと、理解してもらいたいと思います。

これを日常的な問題に置き換えると、ニュースというのは本来ニュートラルな立場にあるべきだと言われています。例えば5W1H「いつ、どこで、誰が、なぜ、何を、どうした」という内容をきわめてニュートラルな内容で報道するはずですが、よく注意して見てみると、視点というものが非常にはっきり現れている場合があります。視聴者側の視点で記憶が変わってきます。例えば、原発に賛成か反対かによって、同じニュースを見てもその印象が大きく変わってきますし、後でどういった内容だったか訊くと、かなり違ってきます。これは言い方を変えると、制作者側の視点も影響していると言えます。

例えばこの画像は、湾岸戦争のときに盛んにマスコミに流れた、オイルにまみれた水鳥の映像です（スライド17）。この映像は何度も流されて、観ている人は「フセインのイラクが石油を放出して、それによって水鳥が苦しんでいる。イラクは悪だ。」という印象を非常に強く持ってしまったとされています。しかし、その後の調査で、この映像はイラクと全く関係ないということが判明しました。ですから、ある種の情報操作とも言えますが、どちらの視点で映像を作り流すか、それの一つの典型例としてよく言われています。

スライド17

先ほど、スキーマについて話をしました。スキーマとは「知識の枠組み」で、このスキーマによってトップダウンを行っていると考えられています。最初にスキーマというものを提案した心理学者バートレット（1932）は、「幽霊の戦い」という物語を使った実験を行いました。この物語を被験者に聞かせてから時間を置き、先ほど聞いた物語はどういった内容だったかということを再生して、答えてもらいます。すると、いろいろなことがわかってきました。

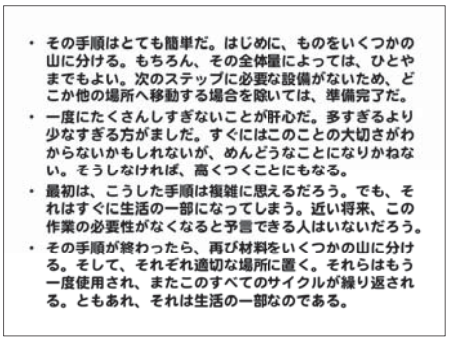
ポイントは、この物語は先住民族アメリカンインディアンの民話で、それを当時のイギリス人の学生に聞かせたという点です。この物語は、学生から見るとよくわからない、つじつまの合わない話だということです。そういった話を聞いたときにどうなるのか、という実験です。この実験で、バートレットは、時間を置いて6回再生させました。そうすると、一定の法則に従った記憶の変容があったということです。つまり、何となくぼんやりと記憶が薄れていくのではなくて、ある種の法則性を持って記憶が変わっていったということを示しました。

まず、法則性の一つ目が「単純化」です。初めは A4 一枚くらいの長い話でしたが、どんどん簡略化されてシンプルになっていきます。二つ目が「統合化」と言いますけれど、当時のイギリス人の学生が持っているような知識にうまく合致するような内容に変わるということです。つまり、あいまいでピンと来ない内容の部分には、その学生が持っているスキーマに合うように変わっていったということがわかります。三つ目は「一般化」です。スキーマというのが一つの枠組みと考えると、図式なので、当然入っている値（コンピューター用語でいうとデフォルト値）が決まっています。そういったものが出てくるということです。例えば、物語の中で語られていなくても、そのスキーマの中には当然あるべき値・内容であると、勝手にそれを作ってしまう、補ってしまうということが起こりました。つまり、もともとはこの物語特有の話であったのが、どんどん一般的な話になってしまうという特徴が見つかりました。これはこの話に限らず、たくさんの研究が行われましたが、ほとんど同じような結果が出ています。それは、記憶というものは時間とともに薄れていくのではなく、特定の法則に従って変容していくものであり、その特定の法則を示しているものが何かというと、スキーマだと考えることができます。

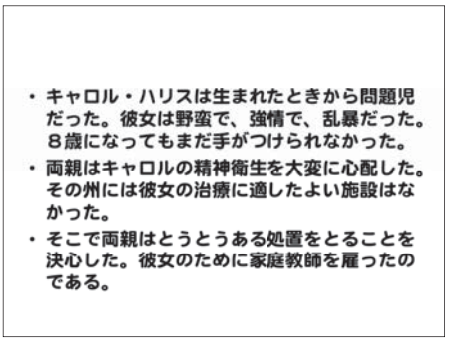
次の実験は、皆さんにも協力していただきたいと思います。次の文章を読んでみてください（スライド 18）。おそらく、ほとんどの方はピンと来ない、意味不明な文章だと思います。この物語を読んで後で再生してもらうと、ほとんど思い出せません。要するに、この文章を読んだ人は、何の話であるかわからないのです。この実験では、文章をそのまま読んでもらう統制群と、「これはこういった話だ」とスキーマを提供してヒントを与える実験群の二つのグループに分けて、実験をしています。すると、スキーマを使えたグループは非常に高い再生率、つまり、よく思い出すことができたという事例です。

さて、先ほどのあいまいな文章ですが、実はこれは、洗濯の手順をもっともらしく書いているだけです。この「洗濯」というヒントを事前にあたえますと、ヒントを聞いたグループは文章の内容を多く思い出します。同じ文章を読んでいるのに、なぜでしょうか。つまり、スキーマが働くと「洗濯ではこういったことがあるはずだ」ということがわかり、それが非常に強いヒントになることが想像できます。

次に、この 6 行ぐらいの文章を読んでください（スライド 19）。今度の実験は、再生で



スライド18



スライド19

はなくて、一週間後に再認テストで“「彼女は耳が聞こえず、口もきけず、目も見えない」という文がありましたか？”と質問します。皆さんは今、文章を読んだばかりなので、そのような一文はなかったとすぐにわかります。しかし、この文章に登場する人は“キャロル・ハリス”という名前でしたが、実際の実験では、この人物の名前を“ヘレン・ケラー”と変えたグループがありました。そのグループに対して、一週間後に再認したところ、50%もの人が「彼女は耳が聞こえず、口もきけず、目も見えない」という文があったと答えています。一ヶ月経つとかなり記憶があやふやになりますので、もともとのキャロル・ハリスのグループの再認率でも 5% という結果になりました。これは「遅延」です。再認までの時間が長くなるほど、この率は高くなっていきます。つまり、先ほどの文章があったかということを見たときに、記憶が再構成されます。そして、ヘレン・ケラーの話だとすれば、彼女は三重苦で有名な人物なので、その知識が働いて「当然あったはずだ」と思ってしまい、「あった」と答えてしまったと考えられます。

先ほどの繰り返しになりますが、我々の記憶というものはテープレコーダーやビデオのように、そのまま記憶されて、そのまま再生されるわけではありません。スキーマに合うように変容されて記憶され、理解されます。当然思い出すときにも、そのスキーマに合致したものがよく思い出されます。そのスキーマですが、先ほどの例を見ると誤りばかりを起こしているので、「スキーマなんてろくなものじゃない」と思うかもしれません。しかし、トップダウンというのは、認識をする上で非常に効率の良い方法になります。ボトムアップの場合、必要なものが全部そろって初めて認識が成立しますが、トップダウンの場合、少しの手がかりさえあれば、認識が成立します。顔の認識にも同じことが言えます。目、鼻、口、耳、全てのパーツがそろっていないと顔だとわからないのでは、なかなか顔の認識は成立しません。ところが、何か顔らしきもののみがあったとして、目や鼻がなかろうが、顔と認識できます。文章の場合でも同じです。いちいち細かい部分まで全部読まなくても、スキーマが働けば理解は成立するし、記憶も非常に良くなります。その反面、実際になかったものを「あった」と思ってしまうなどのエラーは生じます。このようにスキーマは、効率が良いと同時に、不正確な部分があるというのが特徴になります。

スキーマを使った次のような実験があります。何人かの心理学者が、精神病患者の症状を装って精神病院に入院します。入院してから「実は嘘だ。自分はこういった実験のために入院したので出してくれ」と言ったのですが、なかなか出してもらえなかったという実験です。つまり、精神科医の方は“精神科医のスキーマにあてはまった症状”で患者とみなしてしまうので、「これは病気だ」と決めつけてしまうわけです。“精神病のスキーマ”というものがあり、それを覆すのは非常に大変だったということがわかった実験でした。いくら「自分は正常だ」と訴えても、「それは妄想だ」と決めつけられてしまう。これはとても厄介なことです。今の例は実験でしたが、そうでないケースもありますから、非常に難しい問題になってしまう可能性もあります。

3番目として、スクリプトという言葉があ

ります。例えば、「昨日、レストランに行ったよ」「魚がよかった」「思ったより安かった」という会話があります。この単純な会話を聞いて、皆さんは何を理解しているでしょうか。つまり、文字通りこの３行の内容だけしか理解していないのかといったら、それは違います。おそらく、もっといろいろな事や、さまざまな背景があるということが理解できます。

このスクリプトも、スキーマの一種として提案されました。これは「習慣的な行動に関する知識」あるいは「局所的な時系列的スキーマ」。つまり、順番が決まっていて習慣的に行われているような内容です。そういったものを、スクリプトと呼んでいます。これを上手に使えると、どのような行動がどのような順番で起きるのかということが、暗黙裏に分かるということです。例えば、「レストラン・スクリプト」というのが最初に提案されて有名になりました。“レストランに行く”というのは、一体どういうことなのか。“レストランに行く”という言葉だけを聞くと、まさにそれだけの意味ですが、我々は“レストランに行く”ということに関するスキーマを持っています。しかも、順番にどういった事が起きるかも理解しています。例えば、とあるレストランに入ったとします。おそらく、きちんとしたレストランなら、ウエイターが席まで案内してくれるでしょう。席まで行ったら、イスに座ります。次にメニューを見て注文し、少し時間がかかってから、料理が運ばれてきます。食事をしたら、今度はレジに行って会計をします。そして最後にレストランを出る、という一連の行動が、大体今のような順番で起こるはずです。つまり、先ほどの３行の会話を聞いただけで、我々の無意識の中にはこのような知識が活性化しているわけです。ですから、あの３行だけではなくて、さまざまなことを我々は理解しているということになります。スクリプトというのは、まさに“台本”ということになります。当然、場所はレストランであり、登場人物として話し手やあるいは話し手の連れ、他の客もいるかもしれません。それからウエイターやシェフがいて、レジ係の人がいるかもしれません。当然、このような登場人物が想定されるし、舞台設定としては、テーブルや食器や料理があるということになります。ですから、いきなりこのような文章を見せられても、我々は驚かないわけです。何の脈絡もなく料理のことが出てきたとしても、それは当然出てくるはずの物なので、文章としては十分に説明がなくても、我々は内容を理解できます。それは、今説明したようなスクリプトが働いているからです。実は、新聞記事などを理解するコンピュータープログラムというものが作られて、随分発展していますが、データベースとしてはこういったスクリプトというものを想定しています。

スクリプトによってごく一部の内容から、どのようなことが起こったか、あるいは起こったはずだということが推理できます。我々の記憶はテープレコーダーのようなものではないと言いましたが、まさに推論を行っているわけです。聞いた内容から、どういったことが背景では起こっているはずだ、起こっているに違いないと推論しているわけです。だから、理解というのはそのような推論も含めた、非常に広い範囲、つまり、文字の解釈、文法的な文章の解釈だけではなくて、その背景にあるスキーマまたはスクリプトに関与する

ような知識を理解していると考えることができます。

我々はこのような実験を行いました。スクリプト収集と言って、「レストランに行くとはどういうことか」を聞き、何が起こるかを書いてもらいます。そうすると、先ほどリストアップしたような行動が、同じような順番で再生されます。ただし、重要度に違いがあります。例えば、高級レストランにあまり行ったことのない人、学生は普段ファミレスやファーストフードの店に行くことが多いので、それにフィットした内容が多く出てきます。しかし、レストランに行くとどのようなことがどのような順番で起こるかは、みんな分かっています。更にどういった行動が、一番重要度が高いのか、という区別もきちんとついています。これはレストランに限らず、スーパーで買い物をするスクリプト、旅行に行くスクリプトなどがあります。実際に学生に聞いてみたのは、朝起きてから学校に行くまでに化粧を行う際、どういった行動を取るのか、ということでしたが、これにはさまざまなケースがありました。化粧に時間をかけている人でいろいろな行動をリストアップする学生もいれば、ほとんどスッピンで学校に来る学生もいましたが、化粧の一連の行動に関する知識というものはあります。その知識を当然、会話の中や文章を読むときに使用していることもわかります。

先ほどのスキーマと同じで、スクリプトを使うと一部の情報だけでも推論が可能になります。「レストランに行ったよ」という文章だけでも、レストランで何が行なわれているかがわかります。また、当然の値（デフォルト）、つまり、当然起こるべき話（レストランなら、当然料理が出てくるはず）が文章に書かれていなくても、当然何かを食べたということは理解できます。これはスキーマと同じように、聞いた文章の中にはない情報を作り出してしまう可能性があるし、そのスクリプトに当てはめて理解してしまう。これは良い面も悪い面もあります。良い面は、非常に効率的にわずかな情報で理解ができることです。悪い面は、なかったことを勝手に思いこんでしまうという側面もありますが、いずれにせよトップダウン処理の一つの手がかりとして、スクリプトというものが使われていることが明らかになりました。

おもしろいのは、スクリプトというのは大体順番が決まっています。ですから、その順番に即して物語を作って後で再生してもらうと、非常にスムーズに答えることができます。けれども、あえて順番を変えてしまうとどうなるでしょうか。そのスクリプトの順番を無視したストーリーを作って、それを聞かせて、後で再生してもらうと、不思議なことに聞いた通りではなくなります。スクリプトの順に直って再生されてきます。勝手に直してしまうということです。これを説明する理由としては、スクリプトを使って我々は記憶し理解しているのだとしか考えられません。このように、スクリプトは非常に強い働きを持っているのだということが分かります。

最後に、物語について話をしたいと思います。これは、プロップというロシアの研究者の話ですが、昔話や民話というものを調べてみて、どういった構造の話になっているかを調べてみたところ、大体一定のプロット構造があることがわかりました。つまり、どういったストーリーかというのが大体決まってい

たということです。これをあえて分類してみると、「恩返し物」や「復讐物」、ハッピーエンドになる「シンデレラ物」、または「化け物退治」など、いくつかのパターンに分かれます。しかし、大体お話の構造、どういった話の組み立てになっているかというのは、パターンがあるということがわかります。このパターンは何だろうということです。

一つは、お話というのは文字が発展していなかった昔は、口伝で伝えられていました。つまり、おじいさん、おばあさんが囲炉裏端で子どもにお話を伝え、子どもはそれを聞いて、また自分の子どもに伝えるというように、物語を伝えていました。すると当然、物語はわかりやすい構造になっていきます。そのときにスキーマが働いたのではないかということが言われていました。これを心理学的に考えた研究があり、それを「物語文法」と言います。文章というのは単にランダムな単語の並びではなくて、規則性があります。その規則によって意味が変わってきますが、その規則が「文法」ということになります。例えば、主語・述語があるというように、単語の並びが決まっているわけです。それが文法ですが、実は物語の中にも文法があるのではないかと考えられています。これが物語文法という仮説です。これも一種のスキーマです。この物語文法に即した物語は、非常にわかりやすく、覚えやすいということが言えます。

少し具体的に見ていきたいと思います。先ほど「構造がある」という話をしましたが、物語は四つの構造からなっています。「設定」「テーマ」「プロット」「解決」です。これらがもっと込み入っている場合もありますが、大きく言うと、大抵の物語はこのような構造になっています。「設定」というのは「時間＋場所＋登場人物」、つまり「昔むかし、あるところに、おじいさんとおばあさんが住んでいました･･･上流から桃が流れてきて、桃から桃太郎が生まれてきました」というのが、設定です。次に、「テーマ」というのはまさに「目標」のことです。「桃太郎は悪い鬼を倒しに、鬼が島へ行きました」がテーマになります。「プロット」というのは、具体的なお話、エピソードが続いていくわけです。一つ一つのエピソードは、「小さい目標＋試み＋結果」、どうなったかという内容が連なっています。そして最後に「解決」、最終的にどうなったか、あるいは「教訓」というものがついてきます。このように、物語を分解することができます。

これが一種のスロットと言いますか、穴が空いている構造でその中に文章が入っていくという格好になっていて、このようにして物語を分析してみると、いろいろなことがわか

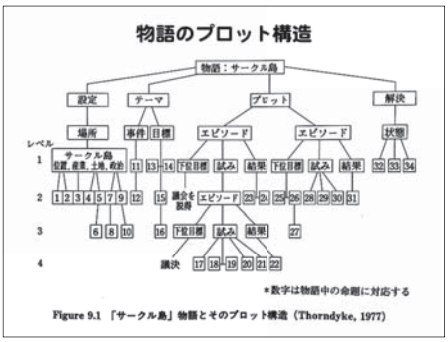


Figure 9.1 「サークル島」物語とそのプロット構造（Thorndyke, 1977）

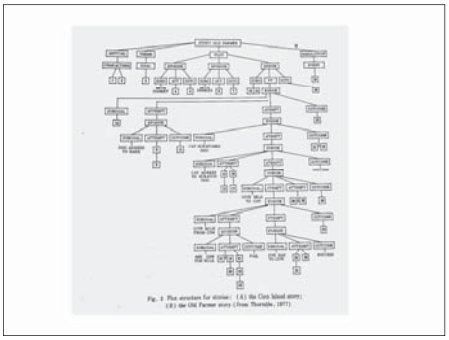
スライド20

ってくるという実験です。例えば、この図を見ると、一番上が「物語」で、二段目に「設定」「テーマ」「プロット」「解決」があります（スライド20）。更に「設定」の中に「場所」「時間」、あるいは「テーマ」の中に「目標」があるというように、どんどん枝分かれしていって、一番下のところに具体的に文章が入

ってくるというふうに、物語を分解することができます。

これで何がわかるかというと、図を見ると一段目から四段目までレベルがありますが、同じ文章に見えても、物語の中での重要性が違います。この重要度の高い文章ほどよく思い出せる、あるいは「要約を書いてください」と言うと、レベルの高い文章を使って要約を書くということがわかっています。つまり、いくつかの文章がずらりと並んでいますが、このような構造に分かれて、更に大事な文章が使われるのだということがわかりました。

次の実験として、これは我々も使った文章ですが、「昔ブレーメン地方に小さな農場があった」という文章を読んでもらって、後で思い出してもらいます。そうすると、文章によって思い出され方が違って、再生が予測できる。つまり、構造化してレベルの高い文章ほどよく思い出すということがはっきりとわかりました。この図を見ると、「ブレーメン地方の農場の話」は、下に行くと込み入った話になっていきます（スライド21）。かなりレベルが深くまで行っていますが、下の方のレベルはほとんど思い出されません。上の方ほどたくさん思い出されます。我々が理解しているのは、こういった物語構造というものにむしろ当てはめて理解を進めているのではないかと考えられます。



スライド21

物語を読んでもらって思い出してもらうと、物語文法に合っているものほどよく思い出せるし、階層構造の上位の文章ほどよく覚えているということになります。更に、先ほどの構造を見てもらうと、「設定」「テーマ」「プロット」「解決」があり、これらがいわゆる物語の必須要素ですが、例えばこれを一部わざと取ってしまうと、場合によっては、後から思い出すときに勝手に作ってそこを埋めてしまいます。筋が通るように作り直してしまうということがあり、この物語文法を使って我々は理解をしているということがわかってきます。

これは少し古いのですが、私たちも今のような物語を使って実験を行いました。そうすると、構造が明確な文章ほど覚えており、再生の際にどの文章を思い出すかは構造レベルに依存し、一部の文章を取ってしまったとしても、穴埋めされて再生されるということが分かりました。

例えばこれは桃太郎の話。「昔々、あるところで、桃太郎が産まれた」が「設定」、「桃太郎は鬼退治に出かけた」が「テーマ」になります。「イヌ、サル、キジを家来にした」「鬼が島で鬼を懲らしめた」がエピソード、「宝物をもって家に帰った」「めでたしめでたし」が「解決」になります。こういったスロットそれぞれのところに文章を当てはめていって、これがすんなり当てはまると非常にわかりやすいという印象になります。実験ですから、わざと物語の文章を入れ替えてしまう、あるいは一部をわざと抜いてしまう、ということを行って話を読んでもらい、後で「どのような

物語だったか？」と尋ねる実験を行いました。すると、物語文法にあったような内容に修正されて再生されるわけです。もし、覚えたものそのものを記憶して、そのまま思い出すのだったら、順番は滅茶苦茶なまま、あるいはその内容が欠落したまま思い出すはずですが、そうではなく、きちんと話のつじつまが合うように、話を作りなおして再生しています。ということは、やはり文法が効いていたのではないかと考えられます。

なお、あえていろいろな部分を欠落させて、この話はわかりやすかったかとか、おもしろかったかとか、いろいろなことを訊きます。それを整理してみると、どうも「わかりやすさ」と「おもしろさ」は違うということがわかりました。「テーマ」がないのが最もわかりにくい。何の話かわからないのだから、当たり前です。また、「解決」がないと「おもしろさ」が低下します。要するに、物語文法に合っているものほどわかりやすいですが、それが「おもしろさ」につながるとは限らないということです。また、「わかりやすさ」と「おもしろさ」は別の次元だということがわかってきました。

大まかに言うと、話の展開が物語文法を外れた場合、意外なので「おもしろい」という場合があります。更に、物語の素材となる事象自体が興味を引くものだと「おもしろい」と感じます。これは内容の話ですが、先ほどの物語文法を外れた場合の話は構造です。ある種の構造の変化があると「おもしろい」と感じる場合があることがわかりました。

物語文法をスキーマといっても良いかもしれませんが、この物語文法を使っているケースを最後に紹介したいと思います。ハーレクイン・ロマンスという小説ですが、これらは恋愛ものです。このハーレクイン・ロマンスは、毎月5冊刊行していて世界的な大ベストセラーだそうです。主婦やOLが憧れそうな舞台背景、男性像、ファッションなどのディテールをコンピュータで作成してライターに書かせるという生産方式のため、いくらでも書けるということです。つまり構造は決まっていて、内容を入れ替えている。しかも、その内容というのは、女性が憧れそうな背景、男性像、ファッションといったものを決めておいて、どんどんコンピュータが組み合わせを変えてシナリオを作り、それを大勢のライターにわたして小説を作っています。そのため、毎月5冊というように、いくらでも書くことができます。

このハーレクイン・ロマンスを調べたら、舞台設定や人物設定には典型的なパターンがあり、大体ヒーローはラテン系かアラブ系の大富豪かエリートもしくは王族、ヒロインは白人女性だそうです。つまり、どこかのパーティなどで男性と出会い、惹かれたら実はその人はアラブの王子または大金持ちでした。そしていろいろと苦労があるのですが、最終的にはハッピーエンドを迎えるというパターンです。これがベストセラーということは、こういった話を好む人がいるということなのですが、これは構造的にはまさに物語文法ぴったりの話なので、いくらでも書けるようです。しかも、長さが大体200ページでそれほど長くありません。これも構造と関係してきますが、まずヒーローとヒロインが出会い、愛し合い、必ず一度は別れるのだそうです。一回問題が起こり、再会して最後はハッピーエンドになります。これもおもしろいのですが、冒

頭から 20 ページ以内に必ず最初のラブシーンがあります。そこで読者を惹きつけるのでしょう。このようにほぼ 1 パターンなのですが、これをどんどん大量生産していきます。しかも売れているということは、おそらく読む側にしてみれば、安心して読めるということです。しかも内容がどんどん変わっていきますから、飽きずにおもしろく読めるというところでしょう。

まとめると、物語というのはどうやら、一定の構造を持っているということがわかります。その一定の構造というのは、物語文法という文法で説明でき、その文法に合っているものは、非常にわかりやすく読みやすいということになります。我々は物語（これは文章の羅列みたいに見えますが）に文法を当てはめて、この部分は「設定」、この部分は「テーマ」というようにして、スキーマを使って理解しています。そのため、スキーマに合ったものはスムーズに理解することができるということになります。

もう少し突っ込んでいきますと、我々が読んで理解している物語は文章の集まりの総体ではなく、一種のスキーマであるということです。そこにうまくスキーマが見つかれば、すみやかに理解につながっていきます。よって、スキーマが意味をつくり、記憶をガイドし、理解を促進させるということになります。最初にトップダウンの話をしましたが、このトップダウンが効いて、我々は物語を理解していくのだということがわかったのではないかと思います。

先ほど構造の話をいたしました。おもしろさというのは、意外性があったり、あるいは、あえて自分が変わったりしていると、少し驚きます。つまり、こちらが期待しているものと違いますから、そこで納得すると「おもしろい」と感じるのだと思うのですが、それとは別に最終的には何らかの感情（情動関与）があります。つまり納得して、それによって何らかの感情が生じると、いかにも「おもしろい」という感情が出てくるのではないかと考えられます。「じーんときた」「ぐっときた」「泣けてきた」あるいは「非常に納得した」など、そういった感情が湧き出てくると、おもしろさが強化されます。筋がわかって、どういった内容の展開かがわかったというだけで、情報量は軽減されるし、文法に即して秩序立てて理解はできるけれども、更にそれに感情が結びつくと、もっとおもしろさが湧き上がってくるのではないかと想像されます。しかし、残念ながら、その辺りはまだ研究が進んでいません。

スキーマについて今までに明らかになったことに関してお話ししましたが、全体像がわかる、あるいは筋立てがわかる、もしくは仕組み（どのような構造になっているか）がわかるという、いろいろな側面があるということがあります。そのため、単純に物語がわかるということについて一元的に説明するのは難しいのですが、一つの考え方として、我々は物語文法で、特に理解について、ある程度説明できるのではないかと考えています。

スキーマというものが、我々の物語理解をガイドしていると考えてもらえれば、ありがたいと思います。これで、私のお話を終わらせていただきます。ありがとうございました。

人間論シリーズ2　人間は、道具によってのみ人間である

世界のモノづくりから“くらし”を考える

Let’s Think about our Lifestyles through Tool-Making in the World.

国立民族学博物館名誉教授
小林　繁樹
Shigeki Kobayashi

杉藤重信研究員：本日はお足元の悪い中、ご来場いただきまして、ありがとうございます。本日は、今年度3回目の人間講座になります。人間講座は前回から『人間論シリーズ』と題しまして、2回目は「心理」「物語」をキーワードに講座を開催しましたが、今回は「モノ」についてのお話になります。まずは本学園理事長の森棟よりご挨拶申し上げます。

森棟公夫理事長：理事長兼学長の森棟でございます。本日はお足元の悪い中、ご来場いただきまして、誠にありがとうございます。杉藤先生からもご紹介がありましたが、前回は『人間は言語によってのみ、人間である』というテーマで、増井透先生がご講演されました。本日は「道具」がテーマとなります。本年度の人間講座では、人間のさまざまな面を3回に渡って紹介するということでございます。人間学研究センターが設立されて10年が過ぎ、11年目となります。会場も変わりましたが、これからも講演会を行ってまいりますので、今後もぜひご参加いただきますよう、お願いいたします。私の挨拶は以上とさせていただきます。

杉藤重信研究員：それでは、本日の講師の小林繁樹先生をご紹介いたします。私はいつも親しく「小林さん」と呼んでおります。私が本大学に赴任する前から存じ上げておりまして、その頃、私は大学院生でまだ先の決まらない身の上だったのですが、いつも励ましていただいておりました。小林先生は、その当時はリトルワールドの学芸研究員でいらっしゃいました。その後、東京造形大学から国立民族学博物館教授を経て、現在は国立民族学博物館の名誉教授でいらっしゃいます。

今年度から、本学の生活科学部でも人類学の科目の非常勤講師をお願いしておりまして、今回も人間講座の講師を快く引き受けてくださいました。国立民族学博物館での経験を踏まえて、本日はご講演いただけるかと思います。それでは小林先生、よろしくお願いいたします。

小林繁樹教授：皆さん、こんにちは。ただいま杉藤先生からご紹介いただきました小林繁樹です。

本日は、『人間論シリーズ2　人間は、道具

によってのみ人間である』というテーマに沿って、道具づくりをめぐる人類の歴史をたどり、それから、世界各地の、いわゆる「道具」を取り上げていきたいと思います。

そして後半では、その理由を検討しながら、今や道具なしでは生活していけない私たちが、これからどのようにくらしていけばよいのかという、解決への糸口の一つとなりそうな考え方をご提案していきたいと思います。

＜1. 人間は、多種多彩な「道具」を創り出し、使う＞

この人間論シリーズは1回目で「言語」を、2回目の本日は「道具」を、3回目は「社会」をトピックスに取り上げて、人間について探求していく趣旨とのことですから、まずは道具に関わる人間の特徴について、少しおさらいをしておこうと思います。

人間を生物学的な意味合いを込めて使う場合は「人類」とか、あるいはカタカナで「ヒト」と表現しますが、その人類の特徴としてよく挙げられる項目に、直立二足歩行、道具の製作、火の利用、言葉の使用といった事柄があります。多くの方が昔、中学や高校の教科書で習ったことを記憶されているでしょう。

まず、直立二足歩行は、背筋をまっすぐにして二本の足だけで歩くことです。恐竜も鳥類も、サルも時々、二足歩行はしますが、前かがみになったり膝を曲げたりせずに、持続的に直立して二足歩行をするのは、哺乳綱サル目（これはよく霊長類とも称せられます）の、ヒト科ヒト亜科ヒト族のうち、チンパンジー亜族と分岐したヒト亜族に属する人類だけがもつ特徴です。

樹上生活だった祖先がどうして平地に降りたのか、なぜ二足歩行できるようになったのかなどは、よく分かっていません。草原で敵を早く見つけられるためとか、立った方が日射を受ける面積が少なくなるためなどの説がありますが、手となる前足が歩行とは別に、例えば物を運んだりできるようになるので、これが有利に働いたとも考えられます。

人類の歴史は、昔は100万年前とか200万年前、最近までは500万年前などと言われていましたが、現在では、およそ700万年前に、猿人とも呼ばれる最初の人類であるサヘラントロプス・チャデンシスがアフリカで出現したとされています。アフリカの中央部チャドで2002年に発見された、この頭の骨は、首の骨が頭骨に入る穴である大後頭孔が比較的前方についていて、直立二足歩行を想定させました。それと同時に、犬歯がゴリラやチンパンジーといった類人猿と比べて、現代の人並みに小さかったのです。これが大変重要なことです。

ちなみに、現生人類では首の骨は頭骨のほぼ中央に垂直に入っていて、大きく重い脳を効率よく支えています。また、犬歯が縮小しているということは、牙を使う戦いがそれほど用をなさなくなったと考えられます。例えば、犬歯に代わる武器が持てるようになったとか、メスを巡っての戦いが不要になった、つまり安定した家族生活が営めるような状況になったなどが考えられます。

乾燥化が進み、森林から、森林と草原が混在するような自然環境に変わった中では、食料が豊富な森林でのくらしとは異なって食料探しの必要が出てきました。すると、育児に忙しいメスは、次第に食べ物を持ち帰ってく

れるオスを好みはじめます。中でも二足歩行が上手にできるオスは、両手でいっぱいの食べ物を運ぶことができるので、いっそう好かれるようになります。また、家族形態が一夫一妻制となれば、メスを巡ってのオス同士の争いもなくなり、家族が安心して子育てに励み、子孫が繁栄していく、というストーリーです。

二足歩行の確かな証拠は、タンザニアのラエトリで見つかった足跡の化石でしょう。およそ350万年前の猿人アウストラロピテクス・アファレンシスが歩いたもので、足の長さ26cmと18cmの一組が肩を並べて歩き、更に大きい方の足跡に長さ21cmの足跡が重なっていました。一家3人が歩いたのではないかと推測されます。人類進化の最も早い時期に、直立二足歩行と一夫一婦制のもとで家庭を営んでいたということでしょうか。

そして、それは同時に、脳が大きくなって知的活動が活発にできるようになり、それまでの前足が手となり、その手を思いのままに動かせるようになって道具を作り始め、火の利用を学び、言葉も生まれた、と考えがちです。しかし、これまでの人類学の研究結果によれば、これらの動きはなかなか簡単にはいかなかったようです。

現在までに発見されている最古の石器は、人類誕生から400万年もの時を経た、260万年前のものとされています。第一の技術革命とも呼ばれる石器づくり、これが道具の製作の、はっきりしている始まりです。加工せずにそのまま用いた石とか木などの道具は、もっと早くから使用していたでしょう。しかし考古学的証拠として発見されていないので、明言できません。とはいえ、非常に硬い素材である石を加工してできる石器は、十分、特記に値する、大変便利で効率的な道具に違いありません。

240万年前頃から、その石器づくりと呼応するように、神経活動の中枢である脳も大きくなり始めます。アフリカの乾燥化が進んで草原が広がり、文字通り、走り回って食べ物を手に入れるようになったからのようです。それまでの猿人と異なり、原人として加えることのできそうな、私たちと同じホモ属に属するホモ・ハビリスの脳の大きさは、600ccから800ccほどになります。

ちなみに、私たちの脳容量は1350ccほどですが、ホモ・ハビリスの脳はその3分の1以下だったサヘラントロプス属の360ccあたりから倍増し、私たちの脳容量の半分ほどです。180万年前あたりになると、原人の代表格ともなるホモ･エレクトス（180～7万年前）が出現して、その脳容量は私たちの75%ほどの1000ccぐらいとなります。

そして、およそ250万年前のエチオピアの地層から、石器を使って肉を剥ぎ取ったような跡のあるウシ科動物の骨が見つかっています。石器を使って効率よく肉食を始めたことが、体重の2%であるのに消費エネルギーは全体の20%以上となる脳の、更なる大型化につながっていったのでしょう。脳の活発化した働きと、自由になった手の動きから生まれる道具の製作は、こうして相互に関連しつつ、それまでとは飛躍的に異なったくらし方へつながっていったと考えることができます。

火の利用は、150万年ほど前に遡れるかもしれませんが、はっきりしているのは、炉の

跡が見つかったフランスのテラ・アマタ遺跡で、およそ40万年前です。50万年ほど前から始まる、いわゆる旧人の時代です。火の利用は、動物などからの防御、食べ物を柔らかくし殺菌ができる調理、暖房や照明、あるいは生命力の象徴など、くらしの上でとても大切な役割を果たしています。

火は、物質の燃焼、つまり急激な酸化に伴って熱と光が発生する現象です。物質とは異なる現れ方をする現象の利用は人類の新たな工夫で、第二の技術革命と称せられています。天界から火を盗んで人類に与えたとされるプロメテウスのギリシア神話をはじめ、世界各地に火の起源神話があり信仰の対象となっていることからも、火の利用の重要性はうかがえるでしょう。

50万年位前に、旧人にあたるホモ・ハイデルベルゲンシス､その進化した姿として20万年ほど前にホモ・ネアンデルターレンシスが現れ、彼らと並行して、20万～15万年前に、私たちと同じ知性と言葉を持つ新人がアフリカに出現します。ホモ属サピエンス種の亜種となるホモ･サピエンス･サピエンスです。複雑になりますが、ホモ・サピエンス・イダルトゥとは亜種で異なります。ネアンデルタール人は、4万年ほど前から絶滅する3万年ほど前の約1万年間、ヨーロッパで現生人類のクロマニョン人と共にくらしていたとされています。

そして、いよいよ最後の難関である言葉の使用が始まるのは、およそ7万5千年前あたり、物事を抽象化する能力が発揮されるようになってからだと考えられています。人類の言語は音声言語を特徴としているため直接的な物的証拠は残りませんが、南アフリカでは幾何学模様を刻んだ黄土の塊りが発見されています。ことに4万年前あたりになると、各地から装身具、彫刻や壁画、楽器などが発見されていきます。この頃から知的活動は飛躍的に活発になります。また精緻化された道具の製法などを子孫などに伝えるのに言語は必要だったと考えられています[1]。

幼い孫を見ていると、好奇心が実に旺盛で、こちらが言った言葉をたどたどしくオウム返しに喋って、反応がよければ自分も喜び、笑います。物への関心も高く、携帯電話とかテレビのリモコン、コンピューターのキーボードなど、大人たちが大切にしているものに限って手から離さず、ディスプレイを見比べながら、真剣に何やら押し続けます。随分知的で、ヒトはこうして人間になっていくのだなと思います。

マルク･ハウザー氏は人間の特性を「知性」をもつことだと考えています。彼によれば､知性は再帰と組み合せによって物事を創り出す「生成計算能力」、異なる領域の知識を混ぜ合わす「思考の自由自在な組み合わせ」､知覚経験を記号化して情報伝達系の基礎を形づくる「理知的シンボル」、個別的経験的事例を超えて物事を考えることができる「抽象的思考」の4要素からなっているとのことです[2]。説得力のある考えと思います。

人類は、100万年、10万年といった、途方もない時間の中で、幾段階かの飛躍を重ねながら、直立二足歩行と社会、道具の製作と火の利用、言葉の使用などの特質を獲得してきた訳です。

こうした人間の特徴をまとめて表現している言葉の中には、私たちがよく耳にするもの

があります。

まずは「ホモ・サピエンス」です。これはスウェーデンの植物学者カール・フォン・リンネが、1735 年に『自然の体系』の中でヒトにつけた分類名で学名です。「知恵のあるヒト」の意味で、日本語では「叡知人」です。また、「ホモ・エレクトス」は「直立人」、「ホモ・ハビリス」は「器用人」です。直立に立ち、石器を作った人類の特徴をよく表現しています。ちなみに進化論で有名なイギリスの自然科学者チャールズ・ダーウィンは、1859 年に『種の起源』を、1871 年に『人の由来と性に関連した選択』を著し、ヒトは動物であり同時に一つの種であること、二足歩行と道具の製作が繁栄への足がかりを築いたと説いています。

オランダの歴史家ヨハン・ホイジンガは 1935 年に『ホモ・ルーデンス』を出版します。その日本語訳は「遊戯人」で、遊びは生活維持のための直接的な必要を超えて生活行為に意味を添え、文化より古い遊びが基になって人間独自の文化を形づくってきたと、考えています。

そして何よりも今日の本題と関連している言葉は、アメリカ合衆国の大統領で物理学者でもあったベンジャミン・フランクリンによる、「人間は道具を作る動物である（1778 年）」です。この定義はカール・マルクスの『資本論』（1867 年）にも引用されて、多くの人びとの記憶に留まることになっています。

「ホモ・ファーベル」という定義も大切です。フランスの哲学者アンリ＝ルイ・ベルクソン、日本語のベルグソンですね、彼は 1907 年に『創造的進化』の中で、知性の本質は創造性にあるとして「工作人」と定義しています。知性の根源をたどって人為的なものをつくる能力、特に道具をつくるための道具をつくる能力に注目しています。

さて、人間はいわゆる「道具」に限ってみても、実に多種多彩な「道具」を創り出し、使っています。しかし、動物もいろいろな「道具」を使います。

道具として単に使う、つまり既存のものから、目的に合っているものを単に使用する、という例では、ジガバチが小石をくわえて巣穴を叩き固めたり、ダーウィンフィンチが小枝やサボテンのとげを使って虫を採ったり、トキのオスが求愛行動としてメスに小枝を渡したり、あるいは、カラスが電線にぶら下がったり、滑り台で滑って遊ぶことなどが知られています。

道具を作って使う、つまり素材を目的に合わせて新たに加工し、使うという、知的意思が強く現れる例には、チンパンジーのアリ釣りやシロアリ釣り、アブラヤシの実を平たい台石に置いてハンマー石で叩き割る行動などもよく知られています。枝を尖らせて、夜行性の原猿類であるガラゴを突き刺す狩猟行為の報告もあります。カレドニアガラスも有名です。クチバシで枝を適当な二股に折りそろえ、倒木の穴に差し込んでカミキリムシの幼虫を釣り上げたり、カギ状の小枝を作ったりパンダナスの葉柄を噛んで楊枝状にして、虫を捕まえたりします。

更に、道具を作るための道具の使用の例としては、アブラヤシの実の叩き割り文化を発見した杉山幸丸氏が、1991 年には台石の座りをよくするために、小石をその下に置いて安定させる行為を発見しています。

しかし分類が細かくなりますが、道具を作るための、その道具の製作と使用、例えばドリルや鋸といった加工道具のような道具作りには至っていないようです。台石を安定させるために、小石を適当な大きさに割って使うとなれば、もう基本的に人間と変わらなくなるのですが、今しばらく調査を待たなければならないでしょう。

チンパンジーより知性が高いと考えられているボノボも、野生での道具使用は観察されていません。人間とその他の動物との違いを分けていく、いわば人間中心主義的な見方は、このくらいにしておきましょう。

道具の使い方からみると、昨年の2014年、京都大学の山極寿一氏が、中央アフリカのガボンで、野生のチンパンジーが3種類の道具を作り、それらをセットとして蜂蜜採集とマングース狩猟の2つの目的に使うという事例を、柔軟な思考能力の証を示す新しい道具使用の例として報告しています[3]。

こうした動物の行動には、見よう見まねにせよ、行動内容の学習とか伝達といった重要な文化的要素が含まれています。種全体ではなく、特定の群れで、特定の行動が世代を超えて伝達、継承される行動を、生物学における「文化」とか「文化的行動」といいます。アフリカのチンパンジー社会での叩き割り文化、掘り棒文化、シロアリ釣り文化などがよく知られています。先のカレドニアガラスの場合でも、子ガラスは親ガラスが虫を釣り上げる様子をしっかり観察して見習っていきます。

動物の知的能力については、実験でも明らかです。特定の芸をする水族館のイルカやシャチなどの他、アメリカのジョージア州立大学言語研究センターで飼育されているボノボのカンジ（34歳、人間では80歳近く）は、ライターで紙に火をつけ、石に石を打ちつけて剥片石器を作り、絵文字を覚え、人の言葉も理解でき、スーザン・ランボー博士と会話しながら調理も手伝います。日本では犬山の京都大学霊長類研究所の、ことにチンパンジーの親子アイ（39歳、人間では80歳以上）とアユム（15歳、人間では30歳ほど）も、色や漢字の習得や数字の認識などの能力が優れています。数字を覚える速さは並大抵ではなく、とても追いつくことはできません。

ラッコは貝を割るために胸に置く台石を使い、自分の気に入った、いわばマイ・ストーンを大事にして、よく脇の下に持っています。しかし、水族館では水槽のガラスに貝を叩きつけることもあり、豊橋総合動植物公園では2009年に、強化ガラスにヒビが入ったということです。

キリがないので、最後は日本のカラスの話しで終わりにしましょう。日本のカラスは、よくクルミの実を道路に置いて車にひかせて殻を割ります。BBCによる動画では、信号のある横断歩道の上にクルミの実を落とし、車がクルミの実を砕くのを見てから、交通信号が青になるのを見定めて歩道を歩いて渡り、その割れた実をついばみ、信号が青のうちに、また歩道を歩いて戻るという、とんでもなく知恵のある姿が記録されています。

ともかく、動物の知的能力は、人間が思っているよりも高いようです。とはいえ、重要なことは、知られている動物の道具とか文化は、種全体の話ではなく群れの中の、大方1種類とか数種類というもので、人間のように種として文化を持ち、その種類や数が数えら

れないというようなことではなさそうだということです。人間はどこでも誰でもが文化、つまり生活様式を持ち、それを支えにして生活しています。部分ではなく全体で、です。そして、その多様性は驚くほどです。それこそが、人間の人間たる所以となるのでしょう。

人間の文化の特徴は、言語と、ある意味を表す記号であるシンボルを使用し、後天的に学習された、ある程度、類型化され統合され、集団の成員で共有され、ある面で適合的で、しかも変化するものとされています。この文化をもって人びとは陸地の多くに住んでいます。そして、その応用でエクメーネといいましょうか、居住地域の拡大が可能となっています。

＜2. 世界の「道具」あれこれ＞

では次は、現代の、世界各地の人間が創り出し、使っている、あるいは少し昔に使っていた、いわゆる「道具」をクイズ形式で取り上げて、映像を使いながら紹介、解説していきたいと思います。

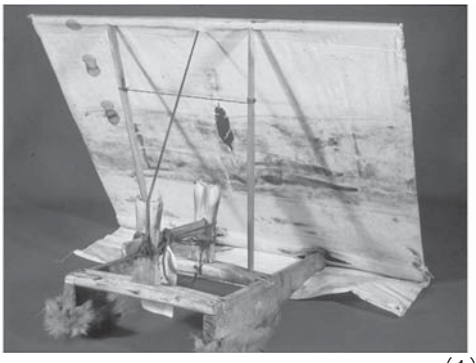
取り上げる道具は、世界各地からの、生業や衣・食・住に関わる道具です。

（1）まず、この幅 70cm、高さ 60cm ほどの白い布の「衝立」のような道具は何に使うのでしょうか？ヒントは、極寒の地で使う近代的な道具です。後ろには台が付いていて、布の中央には少し裂け目が入っています。台はソリのような形をしていて、台にはものを乗せるように窪みがある木が立てられています。

これは、北アメリカ大陸の極北（北極圏周辺部）に住むグリーンランド・イヌイット、カラーリトの人びとが、アザラシなどを狩猟する際、獲物に近づくための狩猟用のスクリーン（隠れみの）です。カムタワッハと呼びます。白いカンバス布は大人が隠れるほどの大きさで、スクリーンの中央の裂け目に鉄砲の銃身を出し、台の窪みに鉄砲を置きます。

イヌイット、昔はエスキモーと呼んでいましたが、彼らは狩猟採集民で、一年の大半を雪と氷で閉ざされるツンドラでくらしています。少なくとも数千年前から狩猟生活で生計を立ててきました。主な食料は、陸上ではカリブーと呼ぶトナカイ、海ではアザラシ、セイウチ、クジラなどの哺乳動物で、他に魚や鳥などを捕り、また若干の果物なども採集します。

極北とはいえ、春になると氷が薄くなり、アザラシの呼吸穴も大きく開いていて、アザラシが出入りし、氷上で日光浴をするようになります。ところが氷原のため、狩人には身を隠すところがありません。そこで猟師はこの狩猟用のスクリーンを前に置いて身を隠しながらアザラシに十分近づき、鉄砲でしとめる、



（1）

（2）

というわけです。

アザラシは視力が弱いとのことで、鉄砲のなかった頃には、アザラシのまねをして横むきに寝て、時々、足で雪を蹴ったりしながら4～5mのところまで近づき、モリでしとめていました。

北アメリカ、グリーンランドの狩猟採集社会における狩猟具でした。

（2）次は、色彩が豊かで文様の配置も巧みなカゴです。編みもしっかりしています。大きさは直径が30cm、高さ24cmほどです。ヒントは、ヒノキ科の木の裂いた根で編んだ、まさに水も漏らさぬ優れたカゴ編み技術です。今はもう使われていません。

答えは、北アメリカ大陸の北西沿岸地域に住む狩猟採集民トリンギットの人びとが、食べ物を煮炊きする鍋です。私は鍋カゴと呼んでいます。彼らは、彫刻柱トーテム・ポールを作ることで知られています。

普通、この鍋カゴは、英語でシダーと呼ばれるヒノキ科の針葉樹（おそらくアラスカヒノキ）の裂いた根を材料にして編んだカゴで、緻密に編まれるため水はもれません。その上、黄褐色の地に黄や赤、黒色の幾何学文様が精巧に施されていて、美しい仕上がりとなっています。

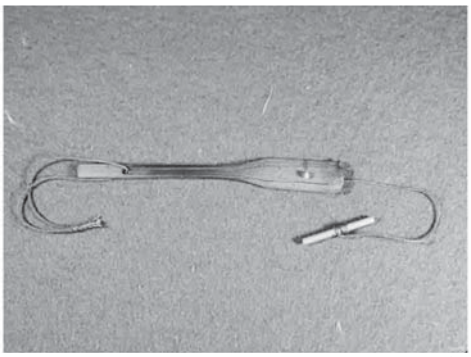
トリンギットを始め北西沿岸地域に住む先住民族は、特にサケを中心にした漁労や採集・狩猟を生業としていて、土器を作りませんでした。その代わり、食べ物の煮炊きにはシダーの板を使った曲げ木の箱や、編んだカゴを使いました。

煮炊きはストーン・ボイリングという方法で行います。まず、たき火で握り拳大の小石を焼きます。その焼石を火ばしでつまみあげて、水が入った容器につけて灰を洗い落し、次に水を入れた鍋カゴに入れます。水が煮立つと、料理する食べ物を鍋カゴに入れ、マットでふたをします。長時間の料理には、熱い焼石を何度も取り替えます。その効率のよさには驚くほどです。

大盆地地域で採集や狩猟で移動生活をしていた、例えばパイユートやショショーニの人びとも、鍋カゴで煮炊きしたし、大平原地域の野牛（バイソン）狩りを生業としていた先住民族は、4本の杭に野牛の胃を吊して鍋にしたり、地面に穴を掘り、そこに野牛の皮を張って鍋としていました。

この料理方法は日本にもあります。秋田県男鹿半島の石焼き料理や新潟県粟島のわっぱ煮（わっぱ汁）です。杉の柾目板を使った曲げわっぱに焼石を入れて魚介類を煮炊くこの料理、鍋カゴ料理と同じで、文化の関連性を深く暗示させています。

北アメリカの狩猟採集社会における食文化・調理文化でした。



（3）

（3）次の道具は、へら形の薄い竹の中央に細長く切れ目が入っています。大きさは長さ14cm、幅は太いところで1.7cmほど、左右には紐がついていて、かわいらしい道具です。ヒントは、音と関係する道具です。

これは、日本のアイヌの人びとが使う口琴です。アイヌ語でムックリと呼びます。竹の振動板を紐で引くタイプのムックリで、根曲がり竹を薄く削り、中を大きく切り取り、中央が振動板になっています。

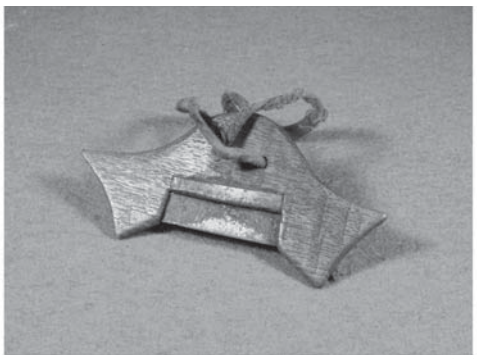
持ち方は竹の皮の方を口側にし、紐の輪を左手の小指と薬指にかけ、親指と人さし指で先をつまみます。そして振動板についている紐を右手に持ち、その先についている竹片を人さし指と中指の間にはさみます。鳴らす時は、左手の親指の爪を唇の左端にあてて固定し、口を開け、口琴をくわえるようにしながら右手の紐を引くと、振動板がふるえ音が響きだします。そして、口の形を変えて口腔を共鳴させたりして、いろいろな音を出します。

ムックリは、女性が一人で鳴らして楽しむ楽器です。動物の鳴き声や生態をまねるもののようで、セイウチの泳ぐ様、子グマが親を慕う甘え声などを弾くといいます。ビョーン、ビィーンと響く音色は、なにかしら哀愁を誘い、また心が休まる思いがします。

口琴は中国起源のようですが、その分布は広く、台湾、東南アジア、インド、ヨーロッパ、南アメリカ、オセアニアなど、地球のほぼ全域におよんでいます。

同じ口琴といっても、振動板を紐などで引いて振動させるタイプと、振動板や枠を直接、指で弾くタイプがあり、また材料を竹で作るか、金属で作るかの分け方もあります。指で弾く金属製の口琴は欧米に多いようです。英語ではジューズ・ハープ、またはジューズ・トランプ。インドではモルチャングといいます。ちなみに現在の中国では、口琴というと普通はハーモニカを指すので注意が必要です。

日本の狩猟採集社会における楽器でした。



(4)

(4) 薄い木の板の先に、小さな細長い鉄の刃がついています。板の大きさは長さ 12 ～ 13cm、幅 5cm ほどです。何に使うナイフでしょうか。ヒントは、切る対象はたいへん身近な必需品であり、また手で握るのにちょうどいい大きさであることです。

答えは、タイ北部のモン（中国ではミャオ）の人びとが、イネの熟した穂の部分だけを一本一本つみとる穂づみ具です。形、持ち方、つみ方はいろいろあります。一例をあげると、中指と薬指との間に刃を外側に向けて台をはさんで固定します。そして、親指と人差し指でイネの穂の元あたりをつまみ、中指を手前に引くようにして茎を刃にあて、つみとっていきます。

米作地域の東南アジア大陸部の多くの場所では、水田で栽培をしたイネを鎌で刈りとっていますが、穂づみ具がよく使用されている地域はインドネシア、マレーシア、フィリピンなどの島の地域で、大陸部のベトナム、ラオス、タイの一部でも使われています。多くは焼畑耕作で陸稲を栽培する地域です。マレーシアではルンガムとかケタプ、インドネシアではアニアニとかケラムビット、バリではアンガパン、モンやヤオの人びとはブーと呼んでいます。

この穂づみ具、私たちが普段使う鎌とは形も刈り方もまるで違いますが、イネの実が熟す時にばらつきがあったり、茎が6m も伸びてしまうウキイネ（浮き稲）が栽培されている地域では、イネの熟した穂だけを選んでつみとることができるので、便利で都合のよい道具となっています。

写真の穂づみ具は、鳥をかたどっています。稲穂に宿っているイネの精霊を驚かせないように、鳥がついばむようにイネを収穫するとのことです。

歴史的には、穂づみ具と考えられている石包丁と呼ばれる石器が、中国、台湾から朝鮮半島、日本にまで分布しています。ちなみに、アフリカのニジェール川内陸デルタでのウキイネ収穫も、穂だけを小刀で刈りとっています。

東南アジアの農耕社会における農具でした。

（5）

（5）これは長さ 30cm、先の幅 6cm ほどの、かなり重い木の道具です。四角い部分には縦に幾本も溝が切ってあります。円い部分を握って叩く木槌です。では、何に使う槌でしょうか。ヒントは、水に濡れると弱いものを作る道具です。

答えは、樹皮布用の槌です。樹皮の内皮を叩き伸ばして、織機で織らない、紙のような不織布である樹皮布を作る道具です。写真は南太平洋のサモアの人びとが使う槌で、イッエと呼んでいます。樹皮布はサモア語でシアポ、ポリネシアでは、おおむねタパです。

サモアの樹皮布の材料は、主にウッアと呼ぶクワ科のカジノキです。この幅 10cm ほどの樹皮を剥がして外皮などを除き、内皮を取り出し、水につけて柔らかくした後、木の台に乗せイッエで叩きます。５、６枚重ねにして打ち広げます。カンカンカンと少し乾いた音がします。長さ１m、幅 40cm ほどに仕上がった樹皮布は、２枚を重ね打ちした後、乾燥させ、継ぎはぎをし、張り合わせます。糊はマニオクやタロイモなどです。

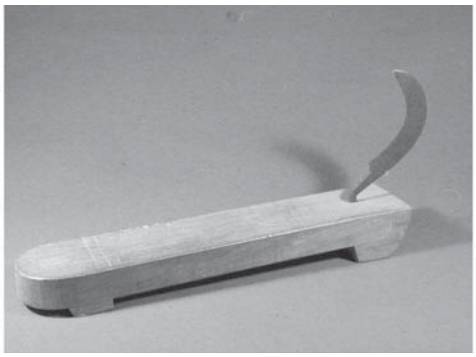
染めは、サモアでは捺染をします。文様に染料を塗って写し取ったり、染め型の上に樹皮布を乗せ、拓本を取るようにして着色します。手書きもあり、色は赤褐色が多いようです。大きさは、１m × 1.5m とか、2.5m × 3.5m などいろいろです。トンガの樹皮布は大きく、幅 4m、長さ 22 ～ 23m ほどで、カジノキを 300 ～ 400 本も使います。見た目や手触りは和紙によく似ています。樹皮布作りは普通、女性の仕事です。

オセアニアの樹皮布はもともと衣服、褌や腰巻、寝具、間仕切りなどに使う他、結婚式や葬儀などに欠かせない品で、トンガでは財産であり、冬の毛布代わりにもなっています。しかし安価で丈夫な綿布に取って代わられ、現在ではサモア、トンガ、フィジー、ウォリスなどで作られているにすぎません。オセアニアに機織り技術が普及しなかったのは、日常のくらしには樹皮布で十分、間に合うと考えていたからでしょう。水には弱いけれど、作りやすいからです。

樹皮布はオセアニアの他、アフリカ、東南アジア、中・南アメリカ各地域の、おおよそ赤道周辺部で製作されています。

ところで、『万葉集』にある持統天皇の「春過ぎて夏来るらし白たへの衣干したり天の香具山」という歌の、たへが樹皮布タパに通じるという説は関心深いところです。

オセアニアの農耕社会における衣文化の道具でした。



(6)

(6) 次の道具は、丈夫な木の台の端に、内側に刃のある鎌のようなものが取り付けてあります。台の長さは45cm、刃の長さは14cmほどです。この道具は何でしょう。ヒントは、日々の生活に欠かすことができない、家庭にはどこにでもある道具です。

この道具は、インドで使われる調理用の包丁です。鉄製の刃は内側が切れるようになっていて、この台に腰をおろしたり、片足を乗せ、切る材料を両手に持って、包丁の刃に押しあてて切ります。

この包丁でマトンの肉を切ったり、エビの皮をむいたり、魚のウロコや頭・骨を取り、身を切ったりもします。もちろんマニオクイモの皮をむき、ジャガイモやタロイモを切り、ニンジンやキュウリ、トマトなどを切り刻みます。さいの目切りもします。私たちが持つ包丁さばきのイメージと大したずれはありません。ただ、切った食材がこぼれ散らないように気を使ったり、手で受けたりする必要があります。

トウガラシやニンニク、コショウなどの香辛料はすりつぶし、みじん切りなどは、ペティ・ナイフでチャパティ台や皿の裏、小さなまな板などを使って切ります。

包丁は、刃の部分は村の鍛冶屋などで作ってもらい、木の台は自分で作るか、あるいは村の大工に頼んで作らせます。刃が大きいものや多目的に工夫された包丁もあります。ヒンディー語ではパスル、ベンガル語でバンティと言うようです。地球上広しとはいっても、日常生活の基本的で必須的な料理の道具や動作が、これほど異なる例は劇的ですらあります。

インドの農耕社会における食文化・調理文化の道具でした。

(7)

(7) ヒョウタンの細長い部分の先には、長さ5cm、直径9mmほどのアシの管がさしこんであり、球の部分には穴があいています。何に使う道具しょうか？

一見、笛などの楽器か飲食器に見えますが、これは東アフリカのタンザニアに住むトングウェの人びとが使う浣腸器です。ヒョウタン

製で長さ35cm、球部の直径は11cmほどです。球部の中に薬液を入れ、アシの管を肛門にさして薬を腸内に注入して便通を促します。トングウェ語でカンコテコと呼びます。

タンザニア西部に住むトングウェの人びとは、トウモロコシやマニオクを栽培する焼畑農耕民です。彼らは怪我や病気、不作や不漁、よい伴侶にめぐりあえないなど、あらゆる不幸は何らかの超自然的存在による意志か、悪意を持った邪術者ムロシが何かをした結果だと考えています。

中でも怖いのは病気で、具合が悪くなると呪医であるムフモにすがります。ムフモは占いによって病気の原因をつきとめると、多様な治療を行います。浣腸はよくする治療法で、特に腹痛用は多く、定められた薬草を土鍋に入れて煮て、その液を浣腸器に入れ、肛門から注入するのです。アフリカでは浣腸による治療法は多く知られています。

アフリカ中央部のカメルーンでは、現在ポンポとかポンピと呼ぶ、中国やポーランド製の工業製品がよく出回っているようです。

東アフリカの農耕社会における住文化・衛生具でした。

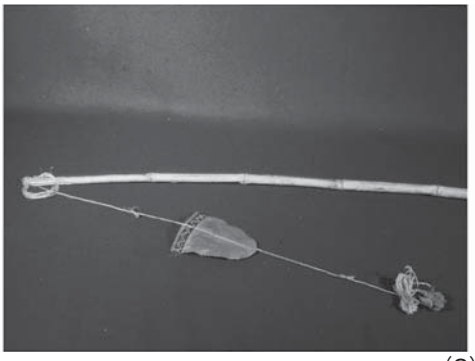
（8）長さ14cm、幅13cmほどの、木の葉を丁寧に細工したものが細い糸についています。その上の糸は竹竿に固定されていて、下の糸にはクモの巣を輪にしたものが3つほどついています。これは一体、何でしょう。

答えは、オセアニア地域、パプア・ニューギニアのシアシ諸島で使われている、凧を飛ばしてダツという魚を釣る漁具です。凧はイプと呼ぶ木の葉を二つ折りにして作ります。クモの巣は直径5cmほどの輪です。この仕掛けをシアシ語でショムボム・ト・マニップ（ダツ釣り竿）と呼びます。漁労・交易民であるシアシ諸島民にとって漁労は生業で、当然、漁法の数は多いのですが、この凧漁は魚のうちでもダツだけを釣る、一風変わった方法です。

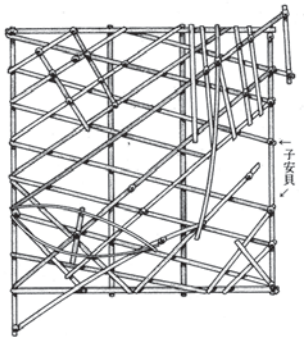
漁は普通、サンゴ礁の中や、サンゴがとぎれた隙間である水道のあたりにカヌーを出して、二人で行います。カヌーの漕ぎ手は自分が常に風上にいるようにしながら、いい漁場に船を操ります。

漁場では凧を飛ばし、餌となるクモの巣が海面スレスレになるようにします。するとダツが波間に跳ねる小魚かエビと思ってこれに食いつくのです。ダツは体長50cmほどの細長い魚で、その口ばしは鋸の歯のようにギザギザになっています。だから食いつくとクモの巣の塊りに口ばしが引っかかり、とれなくなってしまうのです。魚の習性や形態をよく知っている漁といえます。

この凧漁法はインドネシア、メラネシア、ミ



（8）



（9）

クロネシアといった地域にしか見られない、特殊で興味深い漁法として知られています。

オセアニアの漁労・交易社会における漁労具でした。

(9) ココヤシの葉のヒゴで作った、この粗い網のようなものは何でしょう？大きさは50cm 四方ぐらいで、所々につけられているのは子安貝です。ヒントは、ミクロネシアのマーシャル諸島で使われていたものです。

答えは、海図です。マーシャル諸島はグアム島とハワイ諸島の中間ほどにあります。イラストの海図は、マーシャル諸島の全体を表すほぼ四角いもので、子安貝は島を表しています。レビリブといいます。

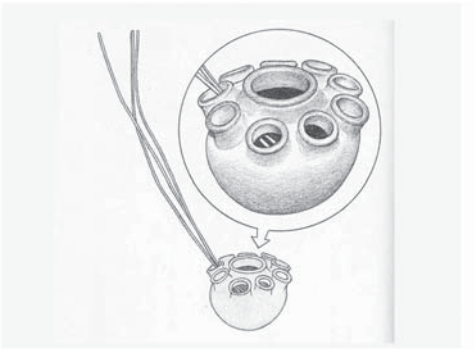
太平洋の島々に人が住み始めたのは紀元前からで、彼らは天体と海洋の現象に習熟し、それらを巧みに利用した独自の航海術を編み出していました。よく利用するのが星の位置関係と「海のうねり」です。そして、マーシャル諸島の人びとは、海のうねりを基に独特の海図を作り出していました。海図は、東西南北から一年を通じて見られるうねりと、うねりが島にあたって生じる弓形のうねりの変化を基にしています。小枝で組まれていることから、英語ではスティック・チャートと呼ばれています。

海図は、もともとは若者への航海技術教育の教材として使われたもので、マタン、メドー、レビリブの３種類があります。そのうち、このレビリブはマーシャル諸島のすべての島々の、空間的な位置関係を示しています。位置関係は実際の地理的位置と驚くほど同じで正確ですが、距離は異なります。航海に要する時間を基にしているので、波が荒くて時間がかかる所は実際より長く表していたりするからです。

熟練した航海者はすべての知識を記憶していて、航海の際に海図を持参する必要はありませんでした。船べりに打ち寄せる波の音だけで、うねりの変化を察知したようです。

19 ～ 20 世紀にかけて統治したドイツや日本が遠洋航海を禁止したため、この海図は使われなくなりました。今では観光用の土産となっていますが、近年、こうした伝統的航海術を再評価する気運が高まっています。1975年にはチェチェメニ号が沖縄まで航海し、また 2009 年にはハワイからホクレア号が沖縄、そして横浜まで航海しています。

オセアニアの農耕社会における、海洋文化の交通道具でした。



(10)

(10) この土器製の壺は直径が 35cm、高さが 30cm ほどです。上部にある口は直径 12cm ほどで、その周囲に小さい穴が開いています。直径 5mm くらいの細い管で、長さは 1.2m ほどのストローもついています。

これは、ウガンダの酒壺とストローです。東アフリカ、ことにウガンダやルワンダあたりに住むバンツー系の人びとは、ストローを使って壺に入っているお酒を飲むことが多いです。大抵は上部に口が一つだけの壺が使われます。ヒエやトウモロコシ、モロコシなどか

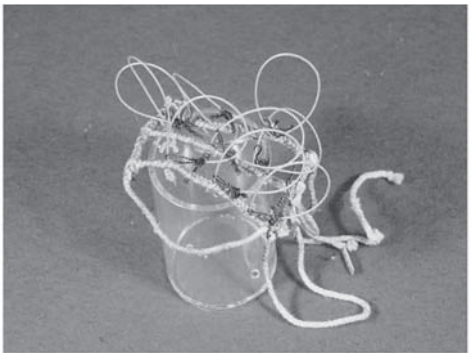
ら作る醸造酒は、ウシと共に人生最大の関心事であり、楽しみであり、誇りとなっています。人が集まる所にはお酒があり、特に 12 月から 3 月までの乾季はお酒による社交の時間となります。

ヒエと発芽したヒエ（酵母）を粉にひいて水につけ、発酵しかけたところで陰干しにし、やや焦げる程度に炒ります。そして、この黒い粉をもう一度、発芽したヒエと共に水の入った壺に入れて密閉すると、3 日ほどで飲み頃の原酒となるのです。このどろどろした原酒を、飲酒用の壺に移し替え、湯をついでストローで飲むのです。5 回ほど湯を注ぐと味がなくなり、終わりとなります。ヒエ酒はあまり強くありません。

ウガンダのテソの人びとが使うストローは、エピイと呼ぶ草の茎を乾燥させ、その髄を抜いたもので、先は竹で編んだ小さい漉し器が付いています。現在では漉し器がアルミ製になっていたり、ストローに点滴用のチューブを使う人もいるようです。普通は複数人で飲みますが、吸い口に毒を塗られることを警戒して信頼できる仲間を選びます。大抵の老人は、自分用のストローを竹の鞘に入れて持ち歩いています。

女性も一緒に飲むことが一般的です。また酒づくりは女性の仕事であり、主婦たちの副収入源でもあります。

この飲み方はビールの発祥の地、メソポタミアに起源するようです。西方だけでなく東にも広がり、東南アジア大陸部では普通の飲み方となっています。アジアではストローを竹で作ります。ラオスの、コメから作ったどぶろくラオハイ（ラオは酒、ハイは壺の意味）はよく知られています。



（11）

東アフリカの半農半牧社会における、食文化の嗜好品でした。

（11）分かりづらいですが、中央部の四角い紐の部分に、いくつかのナイロン糸でできたくくり結びがあります。その両端には、しょいこの背負い紐のようなものがついています。全体の長さは 15cm ほど。ヒントは、何やら、からまりそうな道具です。これは何でしょうか？

答えは、ハトをおとりにして捕まえるタカ狩り用の罠です。タカなどを使って鳥や小動物を捕らえる狩猟をタカ狩りといいます。問いの罠は、そのタカ狩りに使うタカを捕まえるための罠で、西アジアのシリアに住む、ベドウィンの中のハッディディーンという人びとが使う罠です。今のまさに IS（イスラミック・ステート）になっている地域です。

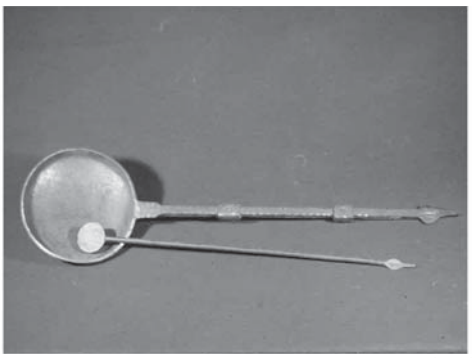
この罠を自分で飼育しているハトの背中に背負わせます。一つの輪はハトの尾に通し、更に罠が抜け落ちてもハトからとれないように、2 本の紐をハトの足に固定します。タカがこの罠つきのハトを上空から獲物だと思って襲うと、背中のくくり結びに爪が絡み、とれなくなります。タカが疲れて地上に降りてくるまで、人はただ後をつけていればいいのです。アラビア語でシャバックと呼びます。

ハッディディーンの人びとは、毎年、冬が近づいて雨が降り始める 10 月頃､草を求めて国中を移動していた遊牧をきりあげて、シリア北部の冬を過ごす冬営地に戻ってきます。そこはヒツジが移動しなくてもすむような草が生える土地で、この時に母ヒツジは出産をします。タカ狩りはこの時期に行います。

ここは山が近くにあって、しかもタカやワシが多いトルコからさほど離れていません。男たちは暇をみては、双眼鏡を片手にハトを 3、4 羽、車に積むと、タカ狩りに出かけます。しかし、なかなか大変な狩りで、昔、10 月から 2 カ月間ほど彼らと共に過ごした時には、結局 1 羽のタカも捕まえられませんでした。

生け捕りにしたタカは馴致（じゅんち）といって、革製の目隠しをかぶせたり、まぶたを糸で縫って見えなくさせ、人の手から餌を食べるようにさせて、腕にとまるように馴れさせます。それから狩りをするように調教をして、お金持ちのアラブ人に売ります。タカ狩りの歴史は古く、今でもベドウィンにとっては豪勢な趣味となっています。

タカ狩りはユーラシア、北アフリカに広く見られ、日本でも有名です。日本では、初夏の巣立ち前後のひなを捕まえたり、秋に成鳥をおびきよせて、網とかトリモチなどで捕まえて、飼い馴らしていきます。



（12）

西アジアの牧畜社会における趣味の道具でした。

（12）鉄製で重く､随分頑丈な道具です。長さは 90cm ほど。皿の直径は 20cm ほどです。一種のフライパンとその返しです。ヒントは、私たちになじみのものを調理する道具です。

答えは、西アジアのシリア砂漠で、ベドウィンが使うコーヒー豆の炒り具です。この皿の中にコーヒー豆を入れ、直火にあてて炒るのです。アラビア語でマハマス・ハシュガといいます。

コーヒーは、まず豆を炒り、臼と杵でよくつきます。それを独特の形をしたポットに入れ、火にかけたり、灰の中に入れて熱します。ポットは大から小へ 5 段階くらいに分けて煮つめていきます。最後のポットのとき、ショウズクの実ヒルを加えます。これで味が随分、薬味臭くなります。

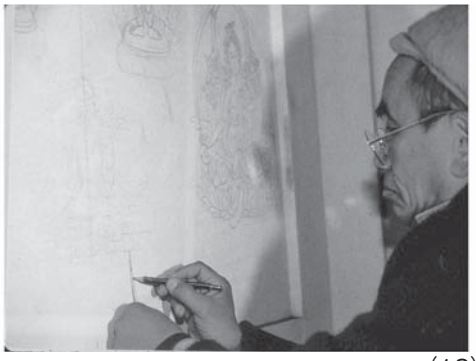
乾燥地域で、主にヒツジやラクダの放牧をする遊牧民ベドウィンにとって、カフワとかガホワと呼ぶアラビア・コーヒーは、社会的に重要な飲み物です。ただの水分補充ならば、水か、あるいは砂糖入りの紅茶チャイを飲みます。しかし来客などの場合は、接客の作法としてコーヒーでもてなします。

客が挨拶した後、主人か家人が磁器製のカップを右手に持ち､左手でポットを持って､注ぎながらポットを高く持ち上げ、コーヒーを細く注ぎます。そしてさっと下ろして、カチィとカップにあて、差し出します。二すすりほどで空になりますが、黙っていれば、お代わりが続きます。2 杯ほどで、カップを左右に軽くふり、もう結構です、という合図をするのが礼儀です。アラビアの茶道です。

コーヒーはエチオピアからアラビア、そし

てトルコを経てヨーロッパに伝わりました。呼び名もトルコ語でカアベ、ギリシャ語でカフェズ、イタリア語でカフェとなっていきます。磁器製の碗の裏には、漢字で景徳鎮と書かれていました。コーヒーは、本当に長い歴史と世界的な広がりを見せる飲料です。

西アジアの牧畜社会における、食文化の嗜好用の道具でした。



(13)

(13)左手に持っている棒状の道具が問題です。細い竹皮の上の部分に、5 本の目盛りが刻んであります。一見したところ、その間隔は同じではありません。何に使う道具なのでしょうか？ヒントは、目盛り方が大切で、必要に応じて目盛りの間隔は変えます。また使っている材料には関係がありません。

答えは、チベットやネパールで、チベット仏教の仏画を描くときに使う、その下絵用の比例ものさしです。チベット語でツェ・シンといいます。

チベット仏教では、例えば仏陀の身長は顔の大きさの 10 倍とされ、体の各部の比率は「顔の大きさ」ともいわれる 12 ソルを基本単位として、1：2：4：6：8：12 と決まっています。だから比例ものさしは、描く絵の大きさに合わせて、そのたびに作ります。

まず顔の大きさ、つまり 12 ソルの長さを決めます。もし縦、横 30 cm 四方くらいの紙に仏の座像を描くならば、顔の大きさは 3 cm ほどとなるので、まず 3cm をものさしの上端からとり、そこに印をつけます。次にそこを 3 等分し、その真ん中を 2 等分し、その一方を更に 2 等分します。こうして 1：2：4：6：8：12 の比率を得ることができます。

つまりこのくらいの絵ならば、ものさしは実質的には 3cm、手に持つ部分を見ても、長さ 15cm、幅 2 ～ 3mm ほどの竹の皮で十分となるのです。こうしてチベット仏教の仏画絵師はどんな大きさでも、同じ構図の絵を描くことができるのです。私はこの画法を、比例関係を用いる幾何学的描画法として注目しています。

南アジアの農耕・牧畜社会における、芸術 / 宗教や絵画の道具でした。

以上、世界各地からの道具の紹介と解説でした[4]。

＜3. なぜ分からないのか？そして、これからの展望＞

人間が多様なくらしに応じて多彩な道具を生み出し、活用し、状況に照らして更に便利な道具を生み出し続けていく様子がお分かりいただけたと思います。

これらの道具は、ごく普通の人間のくらしに必要な道具であり、そこでくらす人には当たり前の日常生活での道具です。しかし、すべての道具の使い方が分かったという方は、きわめて少ないのではないでしょうか？それは、なぜなのでしょう？

人間は長い歴史の中で、自然環境や社会環境などにあるくらしの問題点をさまざまに工夫し、目的に合致した道具を創り出して解決

してきました。適合への工夫の連続とも言えるでしょう。私たち人間として共通する事柄の他に、特有の地域的あるいは社会的な必要に合わせた工夫も必要でした。これらの共通性と多様性の結果が、以上の道具紹介にも表れていて、目的とする理由が分からないものは、その道具の使い方、使い道も分からなくなるのです。

いわゆる「道具」は目的の結果です。目的とは、くらし、つまり文化が必要とする事柄です。道具がくらしや文化に深く関わり、特定の目的に合致して製作、使用されていること、まさしく人間は道具を作る動物であることを再認識されたことと存じます。

道具を作っての人間ですから、私たちは今後も引き続き、道具を作り続けていかなければなりません。また、くらしに更なる可能性を広げていく、未来のくらしへの試みも重要です。断固とした決意をもって新たな文化を創出していく。極地や海中、あるいは宇宙でくらすことを夢に留めておいてはなりません。

そうするために、新たな有効な道具の創出や、道具作りのプロセスそのものの効率を上げるための工夫もあるのかもしれません。

＜4. 新たな道具の定義から見えてくること＞

ところで、今までは「道具」というものを、どうも無条件に物、つまり実体のある物質だと考えていると思います。物体は実存的であるために、視認できて理解しやすいです。しかし、これまでの道具の紹介で、道具の物質性にあまりとらわれると、技術的で具体的な使い方ばかりか、その背景にある事柄、目的、つまり文化への理解が進みにくいことが分かりました。

また、物事には、物質的理解だけでは不十分なことも多々あります。いわゆる「道具」だけでは、世の中の事がすべて分かる訳ではありません。現象はどのように理解すればいいのでしょうか。社会の仕組み、火の利用や言葉の使用といったくらしに大切な事柄への理解がどこかへ行ってしまいがちとなります。

少し、具体的に例を挙げてみましょう。一昨年の2013年にミャンマーに出かけた際、ヤンゴン郊外の野外民家園である「ミャンマー民俗村」で、偶然、足で櫂をこいで舟を操る光景に出くわしました(14)。ミャンマー内陸のシャン高原のインレー湖でくらすインターの人びと独特の操り方ですが、かねてより実際に見たかったので、本当に幸運でした。この写真は、その様子を撮影した動画の一コマです。

(14)

また、次の動画は、カンボジアの竹筒琴という楽器の演奏です。チュンリエンとよびます。半割りにしたヒョウタンを共鳴具として胸に当て、演奏中に胸との隙間を開けたり閉じたりして共鳴効果を高めています。つまり身体も演奏具の一部として取りこんでいるのです。物質的な道具そのものを見ているだけでは、その内容が十分には伝わらないことが、

はっきり分かります。

そこで私は、道具の身体技法と言いましょうか、道具の使い方といった技術体系だけでなく、道具が使われるくらし、文化状況へも理解の目が届くように、また現象とか情報、それらの複合的全体にも注意が払われるように、漢字の「道具」や「道具作り」からカタカナの「モノ」や「モノづくり」と表現を変えてみたいと思っています。本日の講演のタイトルや講演内容の文章には、カタカナの「モノ」、カタカナの「モノ」に「道具」と漢字で括弧書きしたもの、漢字だけの「道具」などが混在しています。それは、こうした話の内容と関連して、それぞれ異なった意味やニュアンスをつけたいと思っていたからです。

私は、カタカナの「モノ」の内容を「情報集合」と呼んでいます。物体もそれに関連する情報も包括している物事、状態や状況まるごとですね。すると配慮すべき範囲が分かりやすくなります。

また、モノの理解を促進し、新たなモノを創出しやすくなると考える、道具の新たな定義も提案しています。定義の概念を変えて、異なった見方が可能になる試みです。

従来の定義は、「人間が目的を達成させ、あるいは能力を拡大するための手段で、身体の外延長にあり、使用者によって持ち運びができるていどの人工物」あたりだろうと思います。それを、私は「道具とは目的を達成させる手段であり、その具体化する事物も道具とよぶ」、と勝手に作っています。

これは簡略形で、完全形は、「地球上の生物ホモ・サピエンス・サピエンスにより定義された道具とは、単数にしろ複数にしろ複合にせよ特定の目的を達成させるのを助ける手段という関係を示す概念であり、その目的―手段関係を具体化する事柄と物体を含む事物も、行為をする生物により加工がほどこされた事物＝加工物としての道具とよぶ」、というものです。

道具を目的と手段の関係としてとらえ直しています。要点を簡単にいえば、人工物、つまり人が加工する物体から、その人の部分と物体の部分を解放させて、もちろん動植物を含む、生物一般が加工する事と物のすべてとしてとらえていこうとする姿勢です。

こうすることで、変化を内包した関係全体を前提とすることが必要となり、行為者（だれが－だれに、又は　なにが－なにに）、状況（いつ、どこで）、目的（なぜ－何を）、手段（どのようにどうする）の、行為を実施する、いわば構造を一貫して考慮し続けることが基盤となります。簡単にいえば、モノをつくる時には、まず人間が使うことと物質である物を使うことをやめて考え始めたら、ということです。道具の包括的把握を通して理解を促進させることです。

こうした関係を検討し続けることが道具の基本で、結果として生成される道具は、いわば関係の付随品となります。言い換えれば、この定義は、物質である道具が主人公ではなく、道具を取り巻く関係そのものが道具の主役であって、加工される事物は、結果としてその関係の部分を具現しているモノということになるでしょう。

すると、モノづくりの最初から人間中心主義に縛られることなく自由に発想し、誰がどのように使えば目的に適っているのか、事情をよく理解して創り出していくことになっていくと思います。簡単に紹介した動物たちの

少しの例を見るまでもなく、なんら彼らの能力を考慮に入れずに創作に進む、ある意味、非常にもったいないことをしないためにも、視野は広くもつことが大切だと思います。

この定義は、最初 1988 年に提案しましたから、かれこれ 30 年ほども経つのですが、しかし、あまり評判を耳にしません。私は「物の力」と呼んでいますが、物質のもつ実存の力のすごさを感じます。

それでもなお、日々くらしのあらゆる事柄を判断し、実行されている、つまり、カタカナのモノづくりをされていらっしゃる皆さまにとって、明日からのくらしに、こうした考え方が少しでもお役に立つならば幸いです。

長くなりましたが、以上で私の話しは終わりにしたいと思います。ご静聴どうもありがとうございました。

1　以上、おもにウッド , バーナード 2014『人類の進化』馬場悠男訳、サイエンス・パレット 013、丸善出版。篠田謙一編 2013『化石とゲノムで探る 人類の起源と拡散』別冊日経サイエンス 194、日本経済新聞出版社。フィンレイソン , クライブ 2013『そして最後にヒトが残った』上原直子訳、白揚社。三井誠 2005『人類進化の 700 万年』講談社現代新書 1805、講談社を参考。

2　ハウザー , マルク「知性の起源」篠田謙一編の前掲書 pp.138-145。

3　山極寿一「野生のチンパンジーの新しい道具使用行動を発見」2014 年 6 月 19 日。最終アクセス 2015 年 9 月 30 日。http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/research/research_results/2014/documents/140623_1/02.pdf.

4　例示した道具については、小林繁樹 1997『世界一周道具パズル』光文社文庫こ―22-1―480、光文社も参照のこと。写真 1,3 ～ 8,11,12 は野外民族博物館リトルワールドの収蔵資料で、資料写真も提供して頂いた。写真 2 は天理大学附属天理参考館編 1986『天理大学附属天理参考館図録』天理大学出版部、p.97。イラスト 9,10 は小林の前掲書 p.129,95。写真 13,14 は筆者撮影。

人間論シリーズ3　人は社会的動物である

災害が露わにする“社会の本質”

Disaster reveals the essence of society

名古屋大学大学院環境学研究科教授
黒田　由彦
Yoshihiko Kuroda

杉藤重信研究員：今年度第4回人間講座を開催させていただきます。まずは理事長兼学長の森棟よりご挨拶申し上げます。どうぞよろしくお願いいたします。

森棟公夫理事長：こんにちは。本日は第4回人間講座にお越しいただきまして、誠にありがとうございます。本年度は学園創立110周年として人間講座を毎回「人間になろう」という教育理念の下に開催しております。また、学園では椙山フォーラムを開催しております。先日、椙山女学園創立110周年記念の椙山フォーラムではファッションデザイナーの芦田多恵氏をお招きし開催いたしました。本学園の原点は裁縫女学校であり、ご縁のある服飾の芦田先生にご講演いただきました。本日は、名古屋大学の黒田由彦先生に人間論シリーズ「人は社会的動物である」というテーマでお話しいただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

杉藤研究員：本年度は、第1回人間講座を森棟理事長にご講演いただき、その後、人間論シリーズというシリーズを開始いたしました。シリーズ1回目は「言語」、2回目は「道具」、そして今回は「社会」となっております。前回の「道具」の小林先生のお話で気がついたのですが、まさにこれは人類の歴史を遡っている形になります。「言語」が誕生するより前に「道具」が誕生し、「社会」は人間だけでなく動物も持っているものです。人間らしさの本質というのは、ひょっとしたら「社会」という面にあるのかもしれない。それは、東日本大震災のような危機的な状況の中でどのように現れるのかといったことについて、本日は黒田先生をお招きしてお話を伺いたいと思います。ぜひ楽しんでいただければと思います。黒田先生は以前、本学日進キャンパスの人間関係学部にいらっしゃいまして、私の研究室の隣に研究室を持っておいででした。本日は久しぶりにお話を伺うことになります。どうぞよろしくお願いいたします。

人間にとって社会とは何か

黒田由彦教授：皆さん、こんばんは。先ほどご紹介いただきました黒田と申します。『人は社会的動物である　災害が露わにする“社会の本質”』というタイトルでお話をさせていただきます。

まず、私の学問分野は社会学になります。英語ではSociologyと書くのですが、Society（社会）とLogos（論理）という言葉が合わさって、Sociology（社会学）となります。「社会」を正面から研究する学問だと言ってもいいかと思います。本日はその社会学という学問分野から見て、「人は社会的動物である」というのはどのような意味なのか、という話をします。最初は原理論的な話をしますが、なるべく具体的な題材から、社会とはこういったものだという話をしていきたいと考えています。

社会とは何かということですが、まずは「人々の集まり」だということです。人が集まって社会をつくるわけですが、集まって暮らす生き物はいくらでもいます。例えば、ミツバチや蟻がいます。鰯も大群を為して泳ぐのがよく知られているので、これも集まって暮らしているということになります。マウンテンゴリラもハーレムをつくって、オス一匹とその周辺に多数の雌という群れで暮らしています。バッファローはサバンナで集まって暮らしています。このように、集まって暮らす生き物はいくらでもいるわけで、人間に限ったことではありません。

では、人間（ヒト）のつくる社会はどこが異なるのでしょうか。人も動物ですので、ヒトという動物がどのような特徴を持っているかについて、次の二つが言われています。

一つは、「本能が減退している」。本能とは、ある種の全ての個体に見られる複雑な行動パターンで、生まれつき持っており、変更がきかないようなものを言います。人間の場合は、ほとんど本能行動はないと言われており、あったとしても非常にわずかであると見なされています。他の動物は、ほとんどプログラムされたようにしか動きません。例えば、人間はいろいろなことを話しますが、犬は「ワン」としか鳴きません。あるいは、草食動物は草食しか行わない、肉食動物は肉食しか行わない、そのようにつくられています。人間の場合はそこが非常に可塑的で、学習によって草も食べるし肉も食べるという点が他の動物と違っています。そういったことから、本能が減退しているというように言われています。

もう一つの特徴として、本能が減退していることと関わっていますが、「生理的早産」ということがあります。早く産まれるということです。馬の場合、産まれて数時間経つと立って歩きます。人間だとそんなことは考えられません。歩けるようになるのに10ヶ月かかります。ということは、人間は早く産まれているということです。そのまま放っておけば死んでしまうくらい弱い存在として、早く産まれてきます。逆に言えば、早く産まれることによって周りが世話をしなければならないので、その過程でいろいろなことを学習していきます。そのため行動の可塑性が非常に広いわけです。つまり、本能があまりないので、学習しないと社会に適応できず生きていけません。そこが、人間が他の生き物とは違う重要なポイントだと言われています。つまり、行動の自由度が極めて大きい動物なのです。

このように、本能がほとんどなく、その後の学習によってヒトは人間になっていきます。

椙山女学園の教育理念「人間になろう」は、まさにそれを言い表していると言えます。

人間は行動の自由度が極めて大きいわけですが、そういう特性をもつ人間がつくる社会も非常にブレがあります。つまり、多様な、いろいろな社会があります。「融和・協力」するような社会もあれば、逆に「敵対・闘争」する社会もある。これが、蟻がつくる社会であればほとんど変わりません。どこの蟻も同じ種類であれば同じです。ミツバチも、良い社会もあれば悪い社会もあるなんてことはありえません。基本的には同じです。ところが、人間の場合は可塑性があるので、良い社会（融和・協力する社会）もあれば、いがみあって互いに殺し合うような社会もあるわけです。ここが非常に違うところです。

少し考えていただければ分かると思いますが、ヒトという動物は、同じ種の中で仲間を大量に殺し合える、ほとんど唯一の動物です。例えば、先ほど話に出てきたマウンテンゴリラには、子殺しという行動があります。前のボスとメスとの間に産まれた子どもを新しいボスが殺してしまう行動です。しかし、何百万人もの同じ種を組織的に殺すというようなことはありません。猫の大虐殺などというのは聞いたことがありません。犬も大虐殺を自分では行いません。他の生き物を殺したりはしますが、同じ種同士では基本的には殺し合ったりしません。大虐殺まで行ってしまうのは人間だけです。そういった人間、ひどい行いをしている人間を見て、「これは人間じゃない、畜生だ」という言い方がよくありますけれど、これは大変間違っています。

今言いましたように、社会のあり方は非常に多様です。社会はどこでも同じではありません。私は社会学の中でも地域社会学という分野で研究をしていまして、これは地域を調べて回るという、地域を社会学的に見る分野です。皆さんは日本のあらゆる場所に行かれて、どこも同じ感じだと思われるかもしれません。しかし、私のような地域社会学という観点から見ると、地域社会ごとにまったく質が異なります。同じような村を見ても、きちんと治まって秩序のある村とそうでない村と、はっきりとした差があります。それは協力の体制が違うからです。あまりうまく治まっている村ではないなというのは、数十年も地域社会を研究しているとすぐに分かります。道路がどうなっているかとか、家のたたずまいとか、そういったところを見ればぴんと来るのですが、じつは地域社会ひとつひとつは非常に多様だということです。

人間の社会が多様になるのは、社会のベースに規範があることと関わっています。規範とはルールであり、「みんなで守りましょうね」、という約束事です。その約束事をみんなが守っているから、人間社会には秩序が保たれるわけで、一歩間違うと虐殺が起こってしまうのが人間社会です。約束事としても「規範（＝ルール）」があることが、動物とは異なるヒトという動物がつくる基本的な社会の特性です。言い換えれば、「規範」が人間社会の本質であるというふうに言えるわけです。

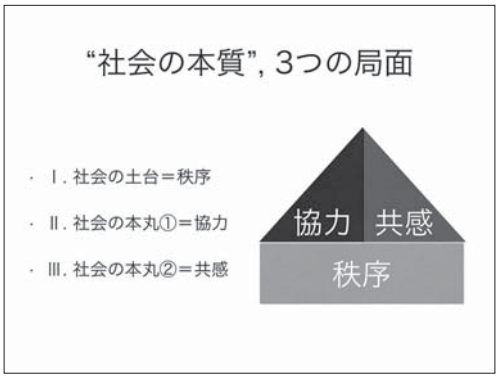
ここまでの話をまとめておきましょう。

人間がつくる社会は多様で、良い社会もあれば、そうでない社会もあります。そして、ここからが本題になってきますが、どうすれば良い社会がつくれるのか、ということが知りたくなってきます。社会を研究することは、ど

うすればそれができるのか考えることです。一歩間違えば、敵対や殺し合いをしてしまう可能性のある人間の集まりである社会を、どうすれば人間社会として一番良い状態に持っていけるか。これが分かるということが、“社会の本質”を知ることです。社会学的な視点から見ると、そのように言えます。

ところが、なかなか“社会の本質”は見えてきません。ぱっと見て分かるように可視化されていません。普段の生活ではあまり社会の本質は見えず、何か裂け目がないと、誰の目にも明らかに見えるということは、あまりないわけです。しかし、社会の本質が見える特別なときがあります。それが実は大規模災害なのです。大規模な災害の状況が、社会の本質を誰の目にも明らかになる場として見せてくれます。小規模な災害はしょっちゅう起こっていますが、社会の本質はそこまで見えません。ところが、圧倒的な自然の力で人間の社会が壊され、多くの人が命を落としたり、大きな地形的な変化があったりするときに、根源的な意味における「社会の本質」が現れて、見えるわけです。東日本大震災はまさにそういうときでした。

本日は、東日本大震災で見えた社会の本質を三つの局面でお話ししたいと思います。一つ目は「秩序」、社会の土台の部分です。これはかなり無意識的なところです。二つ目は「協力」し合うこと、「社会の本丸①」としました。三つ目は「共感」、「社会の本丸②」です。秩序、協力、共感、それぞれが見えた事例を話しながら、説明していきたいと思います。



スライド1

図で表すとこのような感じです（スライド1）。秩序が土台にあり、その上に協力と共感が乗って成立するということになります。普段はなかなか見えにくいのですが、次に東日本大震災の中でこういったことが見えたという話をしたいと思います。

東日本大震災について

私は地域社会学なので災害そのものを研究しているわけではありません。私の所属している名古屋大学の環境学研究科というのは、2001年に誕生しましたが、110人の研究者からなっています。理学部系、工学部系のスタッフがいて、そして経済学、社会学、心理学、地理学、政治学といった社会科学系のスタッフがいます。この三つの部分からなっています。

さて、東海地方に大地震が起こることがほぼ確実なのですが、最近の言い方では南海トラフ大震災と言っています。この地域は観測のための地震計がびっしり埋められています。一回地震が起こるとものすごい量のデータが取れるので、日本の名だたる地震学の学者が名古屋大学にいます。現在、極端な事を言うと次の瞬間起こってもおかしくないような状況なのです。私は環境学研究科におりますが、もともと災害をメインに研究していたわけではありません。それが、2011年3月11日に東日本大震災が起きた後は、研究がほとんど

災害関連の研究にシフトし、現在ももっぱらこの問題を取り扱っております。

実はここ10年くらいを見ると、三つの大きな地震が東アジアで起こっています。一つは2004年のスマトラ島沖地震で、20万人以上の方が亡くなっています。2008年には四川大地震が起き、8万人以上の方が亡くなりました。そして2011年の東日本大震災では、2万人の方が亡くなりました。これら大きなマグニチュード9クラスの地震を比較するという研究も含めて、研究に取り組んでおります。

東日本大震災は起こってからもうすぐ5年になります。名古屋市民にとってみれば、もうすでに終わったことと思えるかもしれません。でも現場である東北は全く終わってなどいません。災害というのは、発生してから完全に復興して、初めてそこで終わるのです。ということは、最後の仮設住宅がなくなり、家を建てて普通の生活に戻り、町が復活するまでが災害だということです。仮設住宅がなくなるまでに、阪神大震災の場合は5年かかりました。町の復興には10年かかったと言われています。広域災害だった東日本の場合、20年くらいかかると考えられています。ですから、我々の研究はまだ終わっていないというより、今からがまさに本番ということになります。

後でお話しする女川町のように復興が早い場合もあります。しかし現状は、復興と言えるのかどうか分かりませんが、ようやく土のかさ上げをしている状態です。かさ上げした土は数年置いておかないと地盤沈下しますので、10mくらい積み上げてそのままにしておかなければなりません。置いておいて地面が固まって初めて家が建てられます。多くの地域でまだその段階です。東日本では災害は全く終わっておらず、東北の人、特に身内が亡くなった人にとっては、おそらく心の中では永遠に終わりません。東日本大震災はまだ終わっていないということを知っていただくためにも、東北の話を本日の題材にしました。東日本大震災について、もう一度改めて思い返していただきたい。

東日本大震災について改めて振り返ります。まず、2011年3月11日14時46分に発生しました。地震規模はマグニチュード9.0とありますが、これは日本では最大クラスです。ちなみにマグニチュードは1違うと30倍違います。2違うと、30 × 30 = 900倍です。ですからマグニチュード7と9では、900倍違います。となると、マグニチュード5と9ではどれほど違うか分かりますよね。普通よく起こっている地震と比べると、とんでもない地震のエネルギーだったということが分かっていただけると思います。

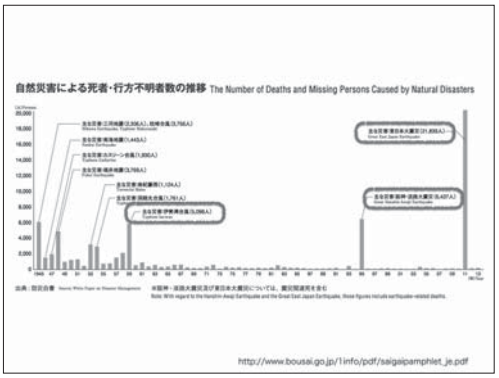
これが当時の震源図です（スライド2）。この×が震源です。この×の周辺が震源域になります。ピンクと赤の箇所が震度6弱～6強ですけれども、名古屋でも結構揺れましたよね。名古屋は大体震度3～4くらいだったと思います。

スライド2

今回の東日本大震災が、とても悲惨な災害となった大きな要因は津波で、波高 10m 以上、最大遡上高は 40.5m でした。津波は「波」と書きますが、普通の波ではありません。普通の波は 10m あるときもありますが、ザーッと押し寄せた後引いていきます。しかし、津波はすぐには引いていきません。海底があって水面がありますよね。この海底がボコッともち上がるという感じです。これが例えば、数百 km にわたってもち上がります。そうすると、例えば 100km くらいの大きなここに 10m の巨大な水の固まりがもり上がります。これが津波です。ですから、そこにいる人にとって、突然海面が 10m もち上がり、それが上から覆い被さってきます。

スライド3

後で写真を見ていきますが、こちらが人的被害と建築物被害です（スライド 3）。人的被害は 21,935 人になります。この 2 万人という数字がどのくらいの数字かというのを、この図で見ていただきたいと思います（スライド 4）。戦後まもなくにこれらの地域で地震があったのですが、戦後に一番被害が大きかったのは伊勢湾台風でした。これは 5,098 人の死者を出しています。伊勢湾台風はまさに名古屋で起こりました。南区で一番被害が大きかったのですが、伊勢湾台風の被害があまりにひどかったので、1961 年に災害対策基本法という災害対策の基本法ができ、台風で二度と伊勢湾台風のような被害は起こさないということで、政府は本腰を入れて災害対策を行ってきました。堤防などに膨大なお金をかけています。それで被害を押さえ込んでいました。実際、台風による死者は激減しています。この時期は地震学で言うと静穏期でして、大きな地震はあまりありません。

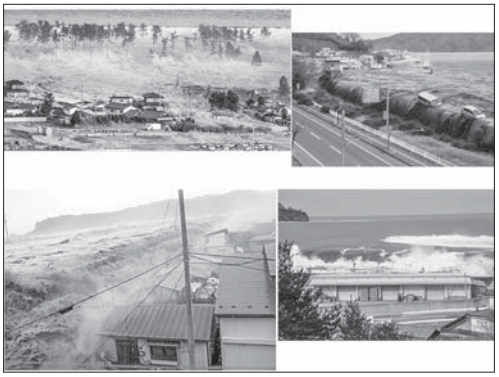


スライド4

次に災害被害が大きかったのは、阪神淡路大震災で、6,437 人の方が亡くなっています。これは直下型地震でした。プレート型の場合は横揺れですが、直下型の場合は下からドンと叩くような感じです。そのエネルギーは、グランドピアノが飛んでいくほどです。ピアノなんかが人の上に落ちてきたら圧死します。戦前で一番大きな地震は関東大震災で、約 10 万人が亡くなっています。関東大震災はほとんどが火事による焼死でした。阪神大震災の場合は、飛んできた物や建物による圧死です。東日本大震災は溺死でした。溺死ですが、瞬間的に即死している場合も多いです。時速 40km で壁にぶつかったらどうなるか考えてみてください。それよりもはるかにすごい衝

撃が来るわけなので、ほとんど即死状態の人が多いと言われています。この東日本大震災の２万人という数字が、どれほどすごいか分かっていただけると思います。

そのため、日本の社会科学を含めた様々な学問が、このような被害を二度と起こしてはいけないと考えています。ちなみに、南海トラフ大地震がもしも最悪のパターンで起きた場合、換言すれば、東海地震、東南海地震、南海地震が同時に起きた場合、最大の死者数は日本全国合わせて 32 万人という数字を中央防災会議が出しています。それをいかに小さな被害に食い止めるかというのは、まさに日

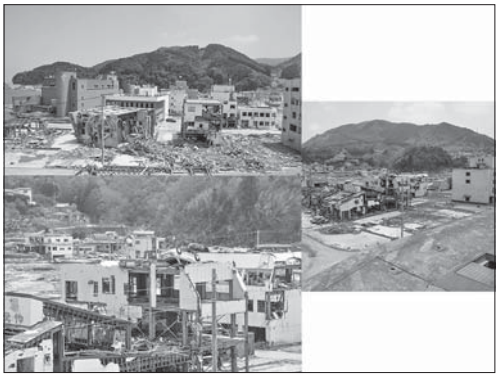


スライド5

本の学者が総力を結集して考えていかなければならない問題です。

スライド５の左上の写真は、産経新聞の一面に翌日掲載された新聞の一面です。大体このあたりが10ｍくらいです。ここは仙台の郊外です。これは松林なのですが、ここまで海面があるのが分かりますか？右上左下の写真はここまで海面が上昇しているのが分かりますよね。右下の写真も同じような感じです。一見静かに見えますが、海面が上昇したものが向こうから走ってくるわけです。その結果どうなるかというと、スライド６のこれらの写

スライド6



スライド7

真のような状態になってしまいます。アトランティックという雑誌から引用したものです。

スライド７の写真は、私が２カ月後に女川町へ行って撮影した写真です。この建物を見ますと、ビルが倒れています（左上）。水が海のある方から走ってきましたので、建っていたビルが横倒しになったということです。ですから、上を向いているところがビルの側面で、手前が屋上で、横に非常階段がついています。このビルはがれきが整理された後も、1年位前までは残っていました。震災遺跡として残そうという話もあったのですが、崩れると危ないということで、結局取り壊してしまいました。右の写真も２ヵ月後の写真です。２ヶ月経っていたのでこのあたりは片付けられ

ていますが、ここを見ると、自動車が引っかかっているのが分かります。拡大すると左下の写真です。ビルの３階なのですが、ここまで水が来て自動車が浮いて、屋上に引っかかったということです。わたしはこれを見たとき、津波のすさまじさに衝撃を受けました。

スライド8

こちらも先ほどと同じ仙台平野の写真です（スライド８下）。この家は、２階は助かったのですが１階は壊れてしまいましたので、２階だけが浮いて移動して、最終的にここに残ったということです。ここも同じ仙台平野でもう少し南に下がった名取という場所になりますが、こちらは浴室の跡で、ここは家が密集していた場所なのですが、土台の他は何も残っていません。やかんとかお酒のビンとかバッグとかが散らばっています（スライド８上２枚）。非常に生々しい光景です。名取市の閖上地区では約 900 人の方が亡くなっています。

災害と直面した社会と「信頼」

さて、東日本大震災の記憶を新たにしていただいたところで、社会の土台についての話をしたいと思います。震災が発生した当初は、上下水道、ガス、電気は当然なく、店にも商品はありません。役所も機能しません。ある所では、役所に勤めていた方の多くが亡くなってしまいました。また、警察もありません。人は亡くなったり傷ついて瀕死の状態であったり、そういった極限の状態でした。そういった中で、生き残ったまわりの人しかいない状況に投げ出されると、どういったことが起こるかということです。そのときに社会の本質が見えます。

実は、震災直後の日本の様子を様々な世界のメディアが報道しました。そこで、日本は世界のメディアから賞賛されました。暴動も略奪も便乗値上げも起きなかったという点です。東日本大震災においては、暴動は起こっていません。略奪も全くないわけではありませんが、目立ったものはありませんでした。便乗値上げも起こっていません。

アメリカでは 2005 年にハリケーン「カトリーナ」がニューオリンズを襲って大きな被害を出したとき、便乗値上げは大変なものでした。絶対に手に入れなければならないものは、２倍３倍の値段がついても売れます。便乗値上げは禁止されているわけではないので、自分の利益を上げたければ、こういったことが起こります。その便乗値上げが東日本では起こらなかったことに、世界のメディアは驚い

スライド9

たわけです。

特に有名になったのは、ニューヨークタイムズに載った写真（スライド9左上）で、コンビニに整然と並んでいる姿です。これを見て、なんて日本人はすごいのかという賞賛の声が上がりました。もう一枚の写真（スライド9右下）はカトリーナのときの略奪を行っている様子です。今でも「アメリカ」「カトリーナ」「略奪」で検索すればYouTubeなどで出てきます。もちろん凶悪犯罪は起きていませんが、商品が供給されるわけではないため、ぎりぎり生きるために必要なものを略奪するより他、仕方がない状況でした。

スライド10

皆さんも見たことがあるかもしれませんが、マイケル・サンデルというハーバード大学の教授が『大震災特別講義　私たちはどう生きるのか』という特別講義を開き、それがNHKで放送されました（スライド10）。日本人の学生、アメリカ人の学生、中国人の学生が参加して、いろいろと議論しました。そのときにアメリカの学生が何と言ったかというと、「私は日本の人達が誇らしい」と言いました。つまり、「日本人は人間のもっとも美しい可能性を見せてくれた。人間社会はここまで良くなれるのだ」ということに感動したというのです。

つまり、日本人だからすごいと言っているのではなく、同じ人間として日本の人達が誇らしいと言いました。サンデルさんは「地球の反対側にいたとしても日本の人々の冷静で勇敢な対応には強い共感を覚えることができたということ。日本の人々の痛み、苦しみを私たちは分かり合うことができる。それだけではなく日本人が見せてくれた、素晴らしい人間性や功績をまるで自分のことのように誇りに思うということができるということだ」と話しています。

このように東日本大震災の直後、警察も何もないぎりぎりの状態の中、「秩序」は存在していました。その背後にある論理は、次のようなことだと思います。

まず、相手が同じように考えていることを実感できるということ。相手も自分と同じように困っていることが実感できるということです。それから、生死がかかっている状況で、略奪をしなければ死んでしまうかもしれません。それでも、みんな大変だから我慢しよう（ゆずろう）という考えがあります。しかし、もし自分が究極の状態で我慢したら死んでしまうような状況だったら、わかってゆずってくれるだろうということは、みんなが同じように考えているはずです。だから我慢やゆずりあいができます。

コンビニの列に並んでいるのは、まず健康な人達です。病気の人や小さな子どもや高齢者は列には並びません。並んだら大変なことになります。こういった人達に最優先に配分します。だから列に並ぶというのは、形式的に全員がそうするのではなくて、自主的に並べる人は並ぶ、そうでない人には優先的に配

るといったことができるのが「秩序」です。では、なぜそうなるのかというと、根拠を問わない相互の「信頼」というものが社会の基底にあるからです。

もしも南海トラフ大地震が起きて、震源地がここから近かったとします。すると、もちろん電気やガスや水は使えませんし、地下鉄も動かなくなります。そういった状況が数日間続きます。そういったときに「略奪しませんよね？」とお互いに確かめ合うことはないでしょう。それは、根拠はないのだけれど信頼感が成立しているからです。これが、震災発生直後の混乱していた時期に見えたものです。

実は、この「信頼」というのが現代社会学の非常に重要なキーワードの一つになっています。しかし、この「信頼」は当然裏切られることもあります。カトリーナの場合には、みんな裏切られました。そのため、根拠を問わない相互の信頼は、一種の「賭け」でもあります。だから、社会は良い社会にもなるし、裏切りが続くとその社会は相互不信になります。本当に微妙な、だけれどあるかないかで社会のあり方が決定的に分かれるところなのです。

災害と直面する社会と「協力」

さて、二番目の問題にいきます。社会の本丸①「協力」です。根底に「秩序」があり、その上に乗っているものの一つが「協力」です。震災直後の緊急対応期を脱すると、避難生活が始まります。体育館の中で寝泊りすることもあります。避難所で寝泊りする人達は、災害救助法という法律に従って避難所が設置されると、そこでの生活費などはすべてタダになります。着るものなど与えられるものも、すべてタダです。次に仮設住宅になります。仮設住宅に入るということは、2年間家賃がタダになるのですが、そのかわり生活費は自分で払います。その仮設住宅に住んで次にどうするかというと、自宅を再建して移り住みます。ここまで来て初めて、ようやく住宅再建という意味では復興が完成します。この復興のプロセスが、地域によって本当に違います。そこから地域社会の本質が見えてきます。

今回、地域によっていろいろな差が出た原因に、高台移転があります。津波に家を流された人のなかには、今後も同じような被害に見舞われる可能性があるため、津波で流された所に帰りたくないという人がいます。あるいは、もといた場所に家を再建させないという自治体もあります。そこに住んでいた人は強制的にどこかに移転させられるということです。行政は、住宅再建をどうするかということを、津波で家を流された人にまず相談するわけです。そういったときに、話し合いがすんなりいくところと、そうでないところと、差がはっきり出てきます。それは復興計画をつくるということなのですが、みんなの合意が必要なときに、合意がいち早くできて協力する体制になったところと、不和対立が続いたところがあります。話がまとまらないところは最終的にどうなるかというと、「ここはこうします」と行政が押し通してしまいます。そうなると、しこり（不満）が残ります。これは被害の大小とはあまり関係がなく、その地域社会が持っている社会の質によって差が出てきます。協力できるところと、そうでないところの分岐点は何なのでしょうか？

この協力がうまくいった地域の例が、先ほどの写真でビルが横倒しになっていた女川町

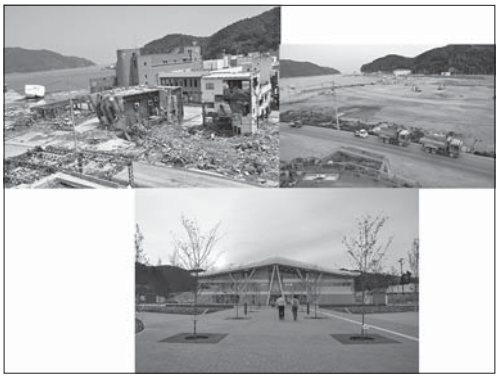
です。女川町は、仙台から自動車で北に行った石巻市の隣にある町です。東北電力の女川原発があるので、ご存知の方がおられるかもしれません。福島第一原発事故が起きた際に、あと津波が1m高ければ、女川原発も同じことになっていました。非常電源が一つだけ生き残っていて、それでぎりぎり助かりました。その電源が駄目だったら、福島第一原発事故と同じようになり、今頃その辺り一体に人が住めなくなっていたところです。しかし、原発は助かったものの、津波による被害は大変なものでした。

震災前の人口は1万人で、水産加工業の町でしたが、人的被害は死者574名、行方不明者253名で全体の8.3%、住宅の被害は89.2%で、家はほとんど流されたということになります。震災が発生して1週間、女川町の情報はほとんど外に流れませんでした。私は震災発生直後からずっとテレビを録画していたのですが、女川町の情報は全くありません。その後のインタビューで分かったのですが、町の人達は1週間全くの孤立無援の中、大変な状況だったと言っていました。

避難所は最大25箇所で5,720名、未だにほとんどの人達が仮設住宅に住んでいる状態です。水産加工業も大きな被害を受けました。これだけ大きな被害を受けているので、復興には相当の時間がかかると誰でも思います。仙台のように大都市ではなく、人口1万人の小さな町です。

ところが女川町の復興計画の策定は非常に早かったのです。それを主導したのが、女川町復興連絡協議会（FRK）という組織でした。FRKは行政の組織ではなく、民間がつくった組織でした。人格的にも地元で尊敬されていた水産加工業の社長が会長となって、水産加工者（買受人組合）、商工業者（商工会）等、中心部の産業団体が連携して、そこに議員さんや住民の方々が入り、いろいろな議論を行いました。その中からグランドデザインが行政に提案され、採用されました。町役場の職員の方も津波の犠牲になっており、町役場の機能が大分低下していましたが、それを補う形で住民が頑張りました。同じような災害が起こるのは大体1000年に1度の割合なのですが、町の中心部には住まないことになりました。そして周辺にある山を削って、そこに住宅を建てることになりました。私はそれを聞いて、山を削って住宅を建てることが可能なのだろうか、高齢者の方が住めるのだろうかと、いろいろと思いましたが、女川町ではこの計画に基づいて復興事業が進められています。

スライド11の左上の写真が先ほどお見せした、震災発生直後の姿です。右の写真がこの間現地へ行ったときの様子です。整地され、きれいになっているのが分かりますよね。この辺りは海に近いので、住宅は建てません。住宅を建てる場所は、ここにある山のもっと向こうになります。実はもう、あとは住宅を建てるだけの状態です。たった5年でここまで



スライド11

こぎつけたわけです。先ほどお話ししたように、5年ではまだほとんど復興が進んでいない地域が多いのですが、女川町は非常に早いです。下の写真を見ると、もう駅ができています。当然JRは震災で駄目になってしまっていたのですが、今年の3月17日に行ったら駅ができあがっていました。もうJRがここを走っています。

ちなみにこの駅の2階は何だと思いますか？実際に行ってみると、なんと2階は温泉になっています。もともと駅の近くに小さな女川温泉という温泉があったのですが、津波で流されてしまいました。女川の人達は、温泉をどうしても復活させたいと思ったそうです。そして、駅につくろうということになりました。小さいですが本当の温泉で、私も150円の手拭を買って、さっそく利用してきました。これは復興の一つの象徴なので、やはり地元の人達はうれしく思っています。

他方で、復興が遅れた地域もあります。ここではA市B地区とします。もともと漁村なのですが、有名な観光地なので、行ったことのある方もいらっしゃるのではないかと思います。ここは非常に大きな被害を受けて、地区人口の20％の人が亡くなっています。2,000人くらいの人口で、観光漁業を行っていました。震災の際、津波が来るまでに1時間あったにも関わらず、地元の人は逃げませんでした。NHKが「震災が起こってから1時間あったのになぜ逃げなかったのか」ということを一つひとつの家にインタビューをして、まとめた本があります。テレビ番組が作った本です。家の中にいたままで亡くなっている人が多く、「まさか津波は来ないだろう」という考えがあったことがうかがわれます。

ところがこの地域の復興計画は、地域の組織、様々な住民のグループ、行政の思惑などが非常に複雑に絡み合い、いろいろな話し合いの場が設けられたのにもかかわらず、復興計画がまとまりませんでした。

最終的にどうなったかというと、市長・行政が押し切る形で決着しました。多くの方は、もうここに住みたくないから高台へ移転したいと言っていました。しかし、行政側は現地再建を優先したいと考えていました。そこで折り合いがつかず、結局のところ時間切れで玉虫色の決着というような感じで、しこりが残ったということです。

ここは仙台の郊外で、すぐそばに仙台空港のある非常にいい所です。それなのになぜ、話がまとまらなかったのか。私の学生が今後このことについて博士論文を書くことになっているのですが、なぜこういったことが起こるのか。これはまさに、社会の質としか言いようがないということです。理由はいくつかあるのですが、あまりにいろいろな人の思惑があり、お互いに譲らないということが起きてしまい、何回か裏切り行為が続いてしまうと、相互の信頼が失われてしまいます。

「協力」の背後にある論理

「協力」の背後にある論理なのですが、2番目の問題のまとめになります。まず、生存は既に保障されており、生存の段階では「ゆずりあい」が起きました。これは東日本大震災の際、どこでもそうでした。秩序正しい行動の方が圧倒的に多かったわけです。

ところが、生活の再建になってくると、対立が顕在化してきてしまいます。「ここまでは自分を通す」「ここからは譲る」というのは、

前提として「限度を超えて得をしようと考える人はいない」という考えがあります。みんながそう考えて、動き、実際にその通りで、だから「これが正しかった」ということで、繰り返されるわけです。それが成立しなかったところは、話がまとまりません。

当然、生活の再建ですから、例えば自分の土地をどうするかとか、住宅をどうするかとか。お金持ちの人ばかりではなく、貯金のない人まで、いろいろな思惑があります。ですから、利害計算はきちんと行います。でも利害計算の背後で、「限度を超えて自分だけが得してやろうという人はいないだろう。だから自分はここまで譲ってもいい。本当はこうしたいのだけど、ここまで譲ろう」という気持ちになるかどうかです。

その相互の「信頼」が成立しているかどうか。その「信頼」をうむ落としどころを探り当てるリーダーがいれば、なんとかなります。しかし、A 市の場合は市長が少し癖が強くて、それができませんでした。むしろ自分の手柄を優先したと、地元の人が思ってしまうような行動を取ってしまいました。そうなると、「信頼」が成立しなくなってしまいます。

実は女川町の場合も、ぎりぎり危ないときがありました。FRK が計画案をまとめて町長に持っていったときのことですが、そのときの町長は、みんながさんざん譲りあって作ったものを採用する気はありませんでした。それが分かったときに、女川町の人達はどのようにしたと思いますか？ちょうどそのとき町長選挙がありました。その町長は選挙に出たかったのですが、FRK の人はどうしたかというと「あなたには町長になってほしくない」と言って他の人をつれてきました。非常に若い、当時は県議会議員をやっていた人をつれてきて、引導を渡したわけです。そこまで言われてしまえば、現町長は降りるしかありません。

そして、つれてこられた若い人がみんなの推した新しい町長になりました。「信頼」をうむ落としどころを探り当てる正統性をもったリーダーになったということです。それであの復興の早さが実現しています。前町長が優秀でなかったというわけではありません。結局、多くの住民の方々の相互信頼が成立しているかどうか、それができるかどうかという問題です。

福島第一原発事故の事例からわかること

さて、最後に社会の本丸②「共感」の話をしたいと思います。今度の話は、地震や津波というより原発です。言うまでもありませんが、東日本大震災は福島第一原発事故を起こしました。そこの周辺自治体の住民は避難しました。避難には「強制避難」と「自主避難」の 2 種類があります。強制避難の方は、政府が原子力災害対策特別措置法に依拠して、原発から半径 20km 県域を「警戒区域」に指定しました。その後、区域変更が行われ、現在は「帰宅困難区域」「居住制限区域」「避難指示解除準備区域」からなりますが、住むことはできません。もっと言うと泊まれません。「帰宅困難区域」は入ることすらできません。「居住制限区域」は 1 日入ることはできますが、日帰りです。これは政府が強制的に行っており、警察が見張っています。従って、地域の住民は自分達の責任ではないのに原発事故によって家を追われたわけですから、賠償

金が払われます。毎月、生活費、慰謝料ということで、震災から５年くらい経ちますから、「帰宅困難区域」に住んでいた人で、すでに億を超えている人もいます。

ところが、その避難指示区域から1mでも外へ出ると、補償はありません。でも1m外に出ても、放射能の怖さが全くなくなってしまうわけではありません。避難指示区域の外に住んでいて低線量被曝を恐れる人々は、仕方なく自主的に避難しました。これを「自主避難」と呼びます。避難指示区域外の地域は、避難指示区域に隣接する一部の地域を除いて、政府による賠償はありません。かろうじて事故の際に福島県内に住んでいた人は、例えば子どもの被爆を心配して東京へ避難したいと考える人がいた場合、家賃は払ってもらえます。ただし、家賃が保障されるだけです。他方、群馬県とか、茨城県も結構放射性物質が流れていますが、それらの県の人が避難しても、お金は１円も支払われません。

自主避難というものがあるということは、おそらくあまり知られていないと思います。メディアでも報道はされるのですが、あまり知られていません。そうすると、賠償がある人はいいのですが、ない人もいます。自主避難はいろいろな悲劇を生む要因にもなります。自主避難するかどうかで家族（特に夫と妻の間）で意見が割れ、離婚に至るというケースもあります。

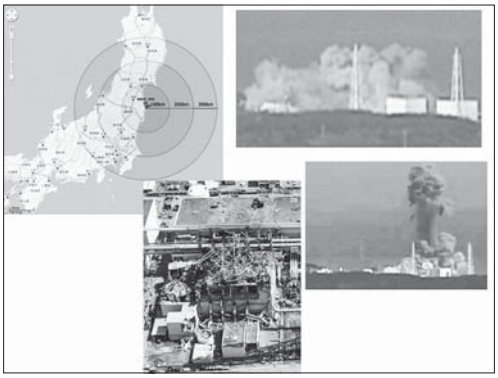
放射能は目に見えないし、匂いもないし、知覚できるものではありません。そのため怖いと感じる人がいる反面、全く気にならないという人もいます。政府は「直ちに被害はありません」というようなことを言い続けました。科学的な議論としては、１年の被爆量が100ミリシーベルト以下の場合、必ず癌になるという疫学的な根拠は今のところありません。

ちなみに100ミリシーベルト以上は危険だという根拠がどこにあるかというと、原爆です。広島と長崎の被爆者による原爆のデータがあるのみなので、それ以外はデータがありません。危険がない、ということではなくて、データがないのです。データがない以上、科学的には何も言えない、ということなのです。

名古屋大学の理学部のある研究室では、放射性物質を使うため学生は被爆します。そのため学生は被爆バッチをつけなければなりません。被爆すると、それがバッチに記録されていきます。そして定期的に回収して測って、年間１ミリシーベルト以上になると、その学生は実験ができなくなります。これは文部科学省が定めた規則でした。１ミリシーベルト以上は駄目ですとずっと言っていましたが、原発事故後いつの間にか20ミリシーベルト以上になってしまいました。そのことをメディアが取り上げて、「1ミリシーベルト以上だったはずでしょう」と訊いても、政府から「直ちに問題にはなりません」という返事しかありませんでした。しかも、5ミリならいい、10ミリならいいと、政府の言っていることが二転三転してしまいました。そうなると、当然誰も信用できないという話になります。学者も、危ないという人もいれば大丈夫だという人もいます。医学的に証明されていないわけです。

そうなると、逃げたい人と大丈夫だと考える人と意見が分かれて、大抵は夫と妻の間で分かれてしまいます。「子どもを連れて避難したい」「政府は大丈夫だと言っているし、避難しなくてもいいんじゃないか」と意見が分か

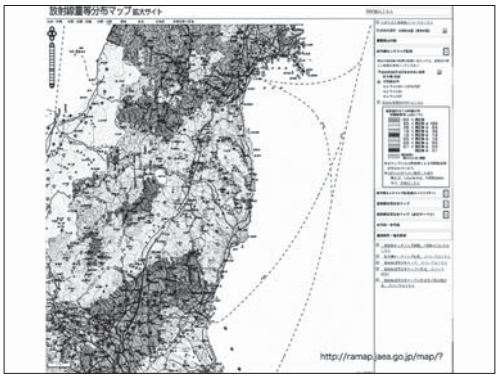
れて、家庭の中で不和が生じ、気持ちのすれ違いが起きて離婚に至るといったことが起きてしまいます。今も自主避難で避難している人の多くは、別居です。それが東日本大震災の福島第一原発事故で実際に起きて、いまだにそれが続いているのです。



スライド12

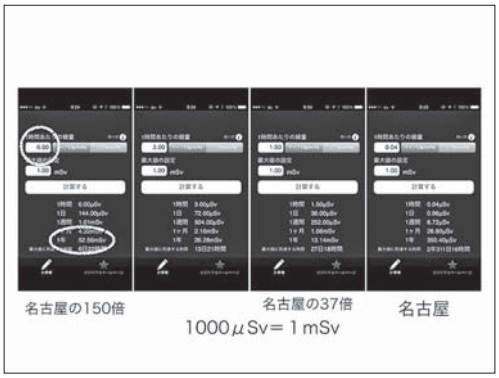
原発事故についてですが、原発はとにかく冷やさないと駄目なので、冷やせなくなった途端にメルトダウンが起きてしまいます。スライド12の左上の地図を見てください。ここが福島第一原発ですね。東京湾までは大体200km、名古屋までは450kmです。右上・右下が第一号機、第三号機が爆発したときの写真で、このときに大量の放射性物質が空気中に出ました。花粉と同じだと思っていただければ結構です。その放射性物質がふわふわと飛んでいきます。飛んできた放射性物質は地面に落ちていき、それは積もります。除染していないところは、ずっと汚染が続くということです。

放射性物質が放射能を出し続ける期間というのは、セシウム137で30年です。半減期といいます。ある物質は原子の構造が変わって別の物質になるのですが、その別の物質になるときに、ものすごい量のエネルギーを出します。一つ一つの原子の中にエネルギーが閉じ込められていて、それが壊れるとエネルギーが出ていきます。壊れて別の原子になるときにエネルギーが出るのですが、放射線も出てしまいます。どのくらいの期間、放射線を出すかというのは、物質によって決まっていまして、セシウム137なら放射線を出す能力が半分になるのに30年かかります。これを半減期が30年と表現します。半分から4分の1になるのに60年、8分の1になるのに90年かかります。



スライド13

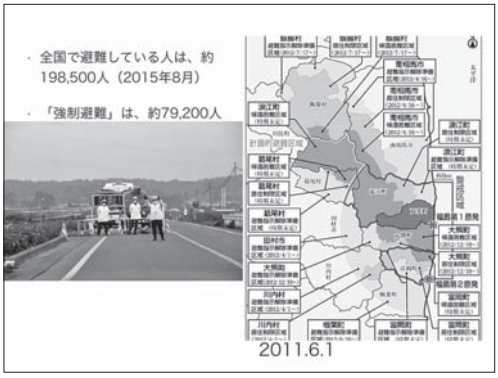
スライド13は放射線量等分布マップですが、9月はこのくらい広がっていたのですが、橙色の部分は大体9.5～19.0で、黄色が大体3.8～9.5です。これがどのくらいの放射線かというと、μSv（マイクロシーベルト）という単位なのですが、1時間あたりにどのくらいの放射線が出ているかという単位です。先ほどの放射線量等分布マップの黄色い部分を見てください。3.8～9.5の間をとって6ぐらいとしましょう。これが名古屋で測ると、1時間あたりの線量が0.04 μSvです（スライド14）。ちなみに、放射線というのは常に出ているので、放射線が0の所は地球上にはどこにもありません。我々は常に放射線を浴び



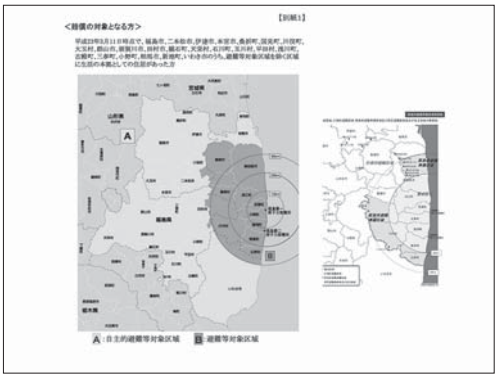
スライド14

ています。先ほどの6 μ Sv は、名古屋の150倍になります。名古屋の150倍がどれくらいかというと、毎日レントゲン写真を撮るようなものだと考えてください。毎日レントゲンを撮る被爆です。大丈夫だと思う人もいますが、ちょっと嫌だなと感じる人もいますよね。放射線量等分マップの黄色のところはこれにあたります。

スライド15の右の図を見て、色がついているところが強制避難だと思ってください。つまり補償が出ています。そしてこの中に入ろうとすると、左の写真のような警察の人達が見張っていて止められます。これは実際に私が南相馬市でどこまで行けるか試したときの写真です。やはり警察の人に止められてしまいました。2011年6月1日のことです。スラ



スライド15



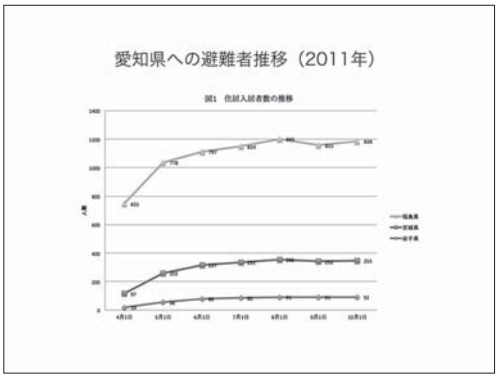
スライド16

イド16の図の色の濃いところがそうで、その周辺の色の薄いところは一時金が出たところです。子どもと妊婦は40万円出て、それ以外の人は8万円出ました。その後、子どもと妊婦に40万円、その他に2万円追加されました。灰色の部分は1円も出ません。ただ先ほど触れましたが、福島県に関していうと、避難した先の住宅費は災害救助法で支払われます。ここは栃木県ですが、福島県以外の人達は1円も補償がありません。しかし、福島県と、栃木県の福島県との境界地域とは放射線量はそれほど変わりないように見えます。

原発事故避難者の例から：愛知と岡山の事例

さて、わたしが注目したいのは、政府から見放された「自主避難」した人々をサポートする市民活動が全国で自然発生的に生まれた、という事実です。もちろん、政府はそういったことをするのはナンセンスだという立場なので、政府のサポートはありません。

愛知県にもかなりの方が避難のために来ていました。福島から来られた方は低線量被爆を避けるために避難して来た人々です。スライド17のグラフを見ると、2011年の4月か



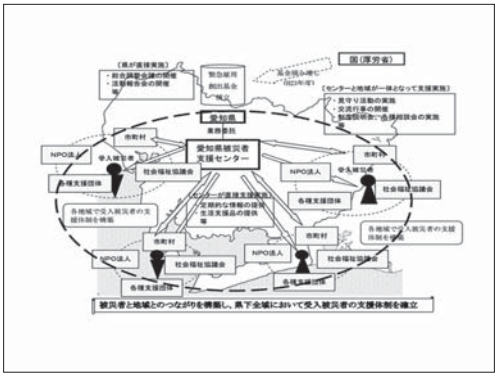
スライド17

スライド19

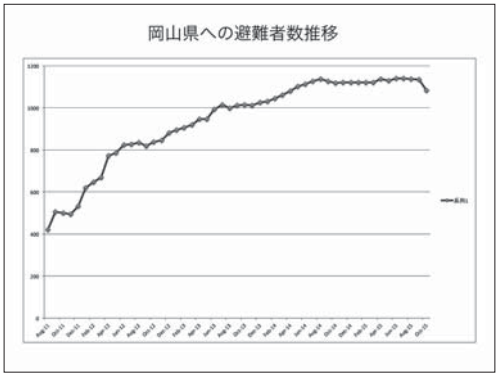
ら5月までどっと避難者数が増えて、あとは定常状態になっているのが分かります。避難者は1200人くらいで、徐々に減りつつあります。それに対して愛知県は、避難してきた人達をとりあえず受け入れました。県庁に限らず、行政組織は税金を使うのが大変です。100円使うのにも決裁が必要なので、県は機動的に支援活動を行うために、NPOに支援業務を委託することにしました（スライド18）。具体的には、愛知県被災者支援センターという組織を作り、その運営を4つのNPOに委託しました。これが愛知県被災者支援センターのホームページです（スライド19）。ここでいろいろな支援活動を繰り広げています。

日本全国でこのような活動が行われていますが、私が愛知県の他にもう一つ注目しているのは、岡山県です。愛知県の場合は、県がバックにあって被災者支援センターをつくり、実際の事業はNPOにアウトソーシングをしました。それを受けて、NPOが市民活動として頑張って行っているという形です。ところが、岡山県は東北から地理的に遠いということもあり、そういったことに関して県としては全くお金を出していません。

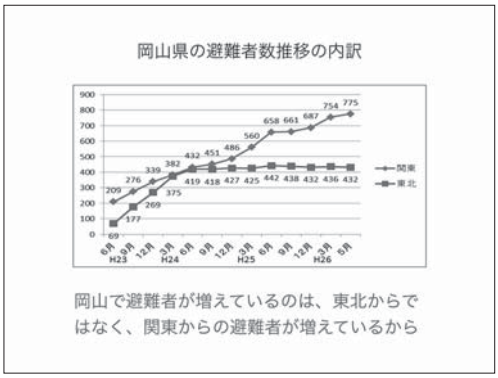
避難者の数は2011年の7、8月くらいまでどっと増えて、だんだん減っていくというのが全国的な傾向です。ところが岡山県では、全国の研究者が驚くようなことが起きました。スライド20のグラフを見ると、岡山県への避難者数は増えていっているのです。単調増加ですね。他の県は減っていっているのにも関わらず、岡山県だけがなぜか増えていました。



スライド18



スライド20



スライド21

スライド22

なぜこのようなことが起きているのだろうと思い、岡山まで話を聞きにいってみると、ほとんどの避難者が自主避難でした。スライド21のグラフを見ると、東北の人は増えておらず、特に関東からの自主避難の方がどんどん増えています。低線量被爆が怖いからと避難しても、お金が1円ももらえない、政府からの補償が全くないような人々が増えているということが分かりました。では、なぜ岡山県なのでしょうか。私はこれを「岡山」現象と名付けて、詳しく調べてみました。

すると、次のようなことが分かりました。とにかく、避難者を受け入れる市民がいたということです。ひとつ例をあげます。原発事故の発災直後、『おいでんせぇ岡山』というものを市民が立ち上がります。立ち上げた張本人の弁によると、「あまり根拠はなかったのですが、避難者が来るはずだから、シェア・ハウスをつくって、その人達が一時的に避難できる場所を設置しないといけないね」という話になったそうです。「それで避難者が来たのですか？」と尋ねたら「いや、来ちゃったんだよ。本当に来ちゃったので、困ったのよ」という答えでした。

この『移住者ウェルカムネットワーク　おいでんせぇ岡山』（スライド22）は組織かというと、そうではありません。組織は全くなく、メンバーがメールで連絡をとりあっているだけです。ホームページを作るのが得意な人がいたので、ホームページも開設しましたが、無料サーバを使ったのでタダです。メンバーはLINEなどのSNSで連絡を取り合っているだけで、本名を知らない人とかもいたりします。とてもゆるやかなネットワークのなかで、活動が続いているのです。

これもそのような中で作られたもので、備前市というところにありますが、ホームページの文章を見ると、「福島県で起きた原発災害を受けて、東日本から一時的に岡山で過ごしたい親子さんを受け入れるために始まりました。放射能の不安から離れて、のびのびと子ども達を外で遊ばせたい。安心して岡山の食材を食べたい。移住するための下見をしたい。体の不調を治したい」。こういった人々を受け入れる施設だと最初から言っています（スライド23）。つまり、避難してくる人がいるだろうと思って、これを作ったということです。

実際にシェアハウスの一つに行ってみました（スライド24）。ここは岡山市の北部なのですが、そこにあるキリスト教会があり、そ

スライド23

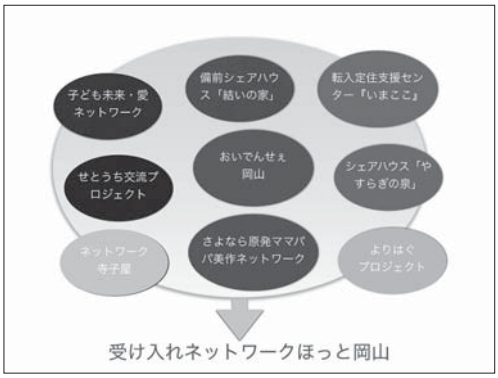
スライド24

の教会の牧師さんがシェアハウスを運営しています。この地域は空き家が多いのですが、その空き家を借りて、そこに避難してきた人達を一時的に泊めてあげるということを行っています。一泊 1,500 円です。お金はきちんととります。食費は自分もちです。中はこのような感じです（スライド 25）。右は共同の台所です。

私の学生が『おいでんせぇ』を立ち上げた代表者の A さんにインタビューをしました。A さんによると、「助けないといけない」という一心から、震災 5 日後に座談会のメンバーで支援に乗り出したということです。「なぜ、助けないといけないと思ったのですか？」と訊いてみると「いや、そう思っただけ」という答えで、何か根拠があったわけではないそうです。そして、避難できる空き家を複数借り上げました。岡山県まで遠いとか、本当に避難者が来るのかとか、そういう考えは全くなかったそうで、とりあえず受け皿を作ることになったということです。そして蓋を開けてみたら、ものすごく多かったというわけです。それからいろいろな移住相談とかも行うようになりました。そういったことがあちこちであり、連絡を取り合って、ネットワークができました。ですから、行政の組織がイニシアティブをとったといったことは全くなく、自然発生的に市民がそういった風に動いたということです。最初はみんな同じで、「避難する人がいるはず」「そういった人達が来たらきちんと受け入れてあげなければ」という一心でした。シェアハウスはこんなにあって、スライド 26 の図のようにネットワークを作っています。

スライド25

「岡山」現象のメカニズムは、次のようになります。まず、市民団体が善意でシェルター（一時避難所）を開きます。次に第一波の避難者が岡山に集まってきました。この時は、行政の支援はなく苦しい運営状況です。そして、避難者同士の相互扶助関係が発生します。避難してきた人が、今度は次に避難してきた人



スライド26

を助けるということです。その中から特に熱意のある人々がリーダーとなって、いくつかの支援団体を形成します。そうすると避難者がどんどん増えていきます。

そうなると統計的に岡山に移住者が増えることになりました。岡山県は過疎県なので、以前から移住政策を行っていました。ところが、東京、大阪、京都に行って「岡山はいい所なの移住しませんか」「岡山は一番災害が少ない所です」とアピールしても、あまり来ませんでした。ところが最近になって突然移住者が増えてきたので、「なぜだろう」と行政の移住担当者が思ったそうです。そうしたら、なんと避難者でした。

県庁に話を聞きにいくと、「私達は移住政策の担当ですから、被災者支援は行っていません」という話でした。それでも、説明会を東京で開催すると、何と 900 人くらいの人たちが来て、「本当は怖いから移住したいのですが、周りには変人と思われるので、言えませんでした」と涙を流して訴えるのだそうです。そして、そういう人々の中から、実際に岡山に移住する人が次々と現れたのだそうです。まずシェア・ハウスに泊まって、「岡山ってどういったところ？」という土地勘をつかんでから本格的に移住してくる。このようなことが、今も起こっているのです。

「共感」の背後にある論理

さて、この「共感」の背後にある論理を考えてみましょう。広域避難者を支援した人々はどのような人々かというと、別に放射能の専門家ではありません。学者でもなければ、専門的な知識もありません。反原発運動家かといえばそうでもありません。反原発の人もいればそうでもない人もいるし、もっと言えば「放射能ってそんなに怖いの？」という人もいます。ただ、ごく普通の市民です。そして、どのような考え方かというと、「いろいろ不安に思って避難してくる人達が必ずいるだろう」という根拠のない予想です。一番大きい共感は子どもに関わっています。小さな子どもを抱えている若いお母さん達は不安だろうと予想できます。

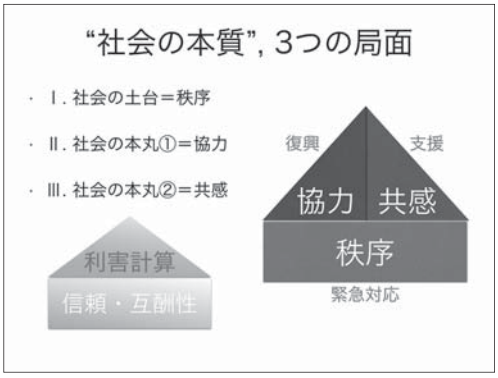
被爆について、子どもの方が大人より大きな被害を受けることだけは、はっきりしています。ちなみに放射能がなぜいけないかというと、それは DNA を傷つけるからです。我々の体には 40 兆個くらいの細胞があるのですが、その細胞は数ヶ月でそのほとんどが入れ替わります。入れ替わるときに DNA を参照して細胞を作るので、その DNA がもしも傷ついていたら、癌ができてしまいます。人間の体は常に作りかえられていて、だから DNA は大事で、DNA が傷つくのは怖いということです。となると、細胞が入れ替わるサイクルは子どもの方が大人よりもはるかに早いので、小さな子が被爆するというのは危険なのです。私くらいの年になると被爆したってどうってことありません。あと 30 年して害が出

てきても、年齢からしてもうすでに死んでいる可能性が高いので問題ないのです。しかし子どもは話が違ってきます。

となると、やはり避難したいと思う人がいるだろうと。そして、そのような人達を支えなければ、という使命感がありました。だからといってベタベタするわけではなく、来る者は拒まず、去る者は追わずという距離感で、きちんと1500円は取るという感じです。来た人の気持ちが落ち着くまでここにいてください、ルールはきちんと守ってください、ルールが守れないなら泊めることはできません、ということをはっきり言います。

「なぜ、このようなことを行うのですか？」と質問したところ、これは「ひょっとしたら自分も同じ境遇になるかもしれないからね」と皆さん口をそろえて言います。これは、先取りされた苦悩の共有、つまり「お互い様」意識があるということです。

スライド27の図は、“社会の本質”3つの局面の、先ほど出した図ですが、社会の土台にある「秩序」、それから、社会の本丸①「協力」、社会の本丸②「共感」です。緊急対応期には、「秩序」という側面が見えてきます。次に復興にあたって「協力」できるかどうかというところが見えてきます。3番目に見えたのが「共感」です。これは本当に正しいかどうかは分かりませんが、それでも「不安に思ってくる人達をまずは受け入れてあげよう」ということです。これは、「利害計算」だけでなく、その底にある「信頼」やお互い様（難しい言葉でいうと社会学では「互酬性」という）というのが見えにくいけれども、あります。「利害計算」は見えやすいです。この「利害計算」の前提に「信頼・互酬性」というのがあり、これが災害などの際に見えてきます。社会をよくするためには、「利害計算」だけ考えていては駄目で、「信頼･互酬性」の部分をどのように作るか、それを作りやすいような制度はどのようなものなのか、ということを考えていかなければなりません。



スライド27

以上、述べてきましたように、東日本大震災という大規模災害は、「秩序」「協力」「共感」というような、日常的には見えにくい社会の「本質」を私たちに露わにしてくれました。ここからわたしたちはよい社会をつくるためには何が必要かという教訓をたくさん読み取ることができるように思います。

少し長くなりましたが、以上で私の話を終わりたいと思います。ご清聴どうもありがとうございました。

オーストラリア先住民の現在と未来:人間文化の多様性理解のために

Present and Future of Australian Indigenous: for understanding of the diversity of cultures

椙山女学園大学人間関係学部教授
椙山人間学研究センター研究員
杉藤　重信
Shigenobu Sugito

はじめに

毎年 1 月 26 日は「Australia Day」といって、フィリップ提督に率いられイギリスのポーツマス港を 1787 年 5 月 13 日に出港した植民船団 First Fleet が、1788 年 1 月 26 日に Sydney Cove[1] に到着したことにちなんで定められたオーストラリアの国民の祝日である。その日は毎年様々な催しが行われるのだが、特に 1988 年の「200 年祭」の際には、大きくハイライトされ、その後、この日の前後は「Australia Day」のあり方をはじめ、オーストラリア国家と先住民との関係を巡る様々な論争のタイミングとなっている。

植民以前からオーストラリアには先住民のアボリジニやトレス海峡諸島民が居住していたことは周知の事実で、先住民の側から見れば 1788 年 1 月 26 日以降、かれらの苦難は始まったといえよう。先住民の側からすると、この日は忘れてはならない「Invasion Day（侵略の日）」にほかならない。国民の祝日として「祝い」たいのは、新天地の大陸に到着した移民であろうが、しかし、先住民を蔑ろにしているという先住民の主張を省みてもよいだろう。

今年（2016 年）の Australia Day の前日、ジャーナリストの Stan Grant が「IQ2 Debate: Racism is destroying the Australian Dream」[2] というディベート・シリーズで行ったプレゼンテーションがデジタル版の Gardian 紙にリンクとともに掲載され、Facebook をはじめとする SNS で大きな反響を呼んだ。Stan Grant は「The Australian Dream」のフレーズを繰り返し、そのプレゼンテーションのインパクトを強める。オーストラリア植民以降、オーストラリア人の夢（願い）は一体何だったのか、という問いかけである。

Stan Grant はその演説 [3] の中で、アボリジニ人口がオーストラリアの一般人口より若く死に、刑務所に収監されている人々のアボリジニの人口比が大きいことを訴えた後、自分自身が植民初期の 1820 年、兵士や植民者による虐殺が行われたニューサウスウェルズ州の Wiradjuri（ウィラジュリ）の人びとの出自であることを告げる。そして、Australian Dream は、人種主義（racism）に根ざされていると続ける。イギリスによる大陸支配の根拠とされたのは、この大地が、無主地（terra nullius 後述）であるとされたからであった。1901 年オーストラリア連邦が成立するが、アボリジニは憲法のもとには無く（このことは、後に触れる）、それ以来、彼が生まれた 1963 年までアボリジニのコミュニティから混血した子どもたちが連れ去られ、寄宿舎や白人家庭に送られ

た。いわゆる「Stolen Generation」の問題である。2008 年に当時の Kevin Radd 首相はいわゆる「Sorry」演説[4]を行ったのだが歴史的な誤りに言及したものの補償は行わないとした（後述）。

筆者はこれまでオーストラリアの先住民であるアボリジニについて調査研究を行ってきたが、本稿では彼らの置かれている状況について、これまでの研究と合わせて総括的に述べておきたい。

私のアボリジニ研究

著者がオーストラリア・アボリジニについての研究を始めたのは 1982 年で、初めてのフィールドワークにでかけたのは 1984 年のことであった。以来 30 年が経過するが、その間、アボリジニの置かれている状況は大きく変化した。

オーストラリア・アボリジニの研究は日本では活発ではなく、1978 年頃から研究の展開可能性を図っていた国立民族学博物館の小山修三教授（現・名誉教授）は、同館を拠点とした研究グループを 1982 年に発足させた。以下に述べるように、1970 年代から 80 年代にかけての時代、それまでのアボリジニが置かれた状況にくらべて、オーストラリアに大きな変化が現れていたことが、研究グループ結成の状況的な背景であった。くわえて、国立民族学博物館のオーストラリア・コレクションが十分ではなく喫緊にコレクションを整え、アボリジニ展を企画してアボリジニの現在を示すことが当初の問題意識であった。小山教授を代表とするアボリジニ研究グループは、各自の研究関心に基づく発表を行うとともに、1983 年の京都じゅらく染織資料館におけるバティック展[5]、1986 年の神戸市立博物館における特別展[6]、1992 年の国立民族学博物館における特別展[7]などを開催して研究グループの研究成果の一部を問うことができた。

以下に、調査地別に私のこれまでの研究についてのあらましを書いておきたい。ガリウィンクでの調査は 1984 年～ 1988 年、マニングリダでの調査が 1984 年～ 2002 年、グンバルニャでの調査が 1989 年～ 1993 年であった。年によっては複数の調査地で調査を行ったからである。以下のタイトルに付している年代はそれぞれの町の設立年代である。

［ガリウィンク (1942 年設立)］

初めてのフィールドワークは東北アーネムランドの沖合にあるエルコ島のガリウィンクという町を中心に行った。そこで見たのは、週末にハンティングを行うアボリジニであった。週日は給与生活者として暮らし、週末は町から離れた場所まで車で移動して過ごすのである［杉藤他 1986］。

定着してしばらく暮らすうちに、私のことを「息子」と呼ぶデービッド・ブルマラという老人と親しくなった。以下に述べるブルマラのことは、すでに記したことがある［杉藤　1990］。彼は、町の長老のひとりで「Mara Leader's Council」という長老たち有力者で構成される議会の議長だった。彼は町の男たちの中でひとり異色の風体だった。大抵の男たちが、T シャツ・半ズボン・はだしという出立ちのところ、白い長袖シャツ・長ズボンにベルト、メガネをかけ、首からは双眼鏡をさげ、手にはステッキ、しかし、はだしで、私を引き連れて街中の道路を歩き、出会う人々に私を紹介してくれた。とてもありがたい反面、迷惑でもあった。というのも、彼は町の権威であり、フィールドワークにはいささか、や

っかいではあった。しかし、彼の狙いはそこにあったといえる。わたしの町でつくる人間関係を自分のグループにぐっと近づけたのである。

彼は、非常に流暢な英語を駆使し、とても難しい単語が読み書きできた。私の英語力では辞書なしには理解することは困難だった。彼は、町にやってきたキリスト教ミッションや行政関係者に近づき、アボリジニ社会との媒介者の役回りを若いうちから自認していた。若いころの彼が起こした出来事の一つが「メモリアル事件[8]」であった。町の一角にアボリジニの人々が「メモリアル」とよぶ木彫群があって、これについてのブルマラの説明は、部族争いをしていた我々の「平和のためのメモリアル」だというものであった。しかし、ブルマラ以外の長老によると、ブルマラのせいで部族の秘密が暴露されたのだという。アボリジニの儀礼には公開儀礼と秘密儀礼があって秘密儀礼はアボリジニであっても女性や成人前の男性は参加できない。メモリアルの前の広場で、秘密儀礼を公開で行ったというのが、ブルマラが首謀者のひとりとして引き起こした「事件」であった。これは、彼らの互酬性の論理にもとづいている。大切なモノを明らかにすれば（あるいは、渡せば）、相手は同じようにしなければならないという論理である。なぜ、秘密を公開したかというと、そのことによって主流社会の富を町にもたらそうというものであった。たしかに、それ以降も続けて町にインフラ投資が行われ続けたことを見ると、互酬性は果たされたかに見えるが、しかし、秘密儀礼を公開しなくてもおそらくはインフラ投資は行われただろう。

わたしがガリウィンクで行った調査のもう一つの成果は病院の出生記録を入手したこと、また、そのデータを親族構造についての研究と重ねあわせたことであった［杉藤　1991］。ガリウィンクに住むアボリジニの人々は、自らのことを現在「ヨルング（Yolngu）」と呼んでいるのだが、以前は、「ムルンギン（Murungin）」と呼ばれていた[9]。この「ムルンギン」こと「ヨルング」の人々の親族構造は複雑極まりなく、その理解はなかなか難しい。わたしは、出生記録の中から約５％の人々の婚姻において複雑な婚姻規則の一部が破られていることを見出し、婚姻規則の遵守とアイデンティティ、婚姻規則と人口の関係についてコンピュータ・シミュレーションの技法を用いて分析を行った。

［マニングリダ（1957 年設立）］

中央アーネムランドのマニングリダの町は私たちオーストラリア研究のグループのメンバーにとって、中心的な拠点の役割を果たしてきたアボリジニの町である。ここは、後に述べるアウトステーション運動のメッカのひとつであって、私はアウトステーション運動がもたらしたものについて、住宅建築に注目して分析したことがある［杉藤　1998］。アーネムランドに限らず、連邦政府による住宅インフラの整備は、アボリジニたちのライフスタイルとは無関係に一方的に主流社会のライフスタイルを持ち込むことになった。もともと、アボリジニたちは雨季には簡便な高床でユーカリの樹皮を屋根にした家屋を造るが、乾季には樹の枝を屋根に載せたような、四本の掘っ建て柱の小規模な小屋を造るだけであった。また、岩場近くに居住する者達は雨季には岩陰に居住した。その彼らに、当初、波板の屋根や壁を持ち複数の部屋割りを持った家屋が提供された。現在でいえばツーバイフォーやレンガ積みの2LDK、 3LDK の家屋である。家を持たない、あるいは、「貧弱な」住居しか持たない

人々に住居を供給することは、福祉政策的にも必要かつ十分な施策と思えるだろう。しかし、はたして、どうだっただろうか。

アウトステーション運動当初、彼らは、町を出てユーカリの疎林に元々の生活のように小さな小屋を使って住んだ。死者が出ると、その場所を放置して移動した。彼らは遊動的な狩猟採集民だったのである。やがてアウトステーションにも住宅インフラの波が押し寄せる。そして、彼らの遊動性は縛られるようになったのである。すなわち、一旦設けられた恒久的なインフラを簡単には捨てることができない。

わたしたちの研究グループは、1980 ～ 2000 年代にかけてほぼ 30 年ほどの間、マニングリダを定点観測してきたといえる。アウトステーション運動の展開や運動を支援する組織の展開、それを支える主流社会のシステム、アボリジニ社会の応対、これらの様子をバウィナンガ・アボリジナル・コーポレーション[10]の評議会議事録を元に詳細に記録した［久保・堀江　2015］。これにより、マニングリダの 1980 年ごろから現在に至る状況が詳細に明らかになったのである。

マニングリダではオーストラリアのセンサス（国勢調査）[11]の調査隊に同行して当時のアウトステーションを回ったことがある。1996 年のことであったが先にのべた報告書に関連した調査を目的としたものであった。また、8 月 2 週目が調査時点であるので、私自身も 1991 年から連続して 5 回記入している。マニングリダで記入したこともあれば、滞在中の他の街で記入したこともある。後に触れるように、アボリジニがセンサスの対象になったのが 1971 年センサスからで、それまでは、白人と混血していないアボリジニはセンサスの対象ではなかったのである。日本の国勢調査には記入欄がないが、オーストラリアのそれでは民族的出自を記入するようになっている。図 1 の写真は手元にあった 2011 年センサスの 3 ページ目で、20 番の項目がこれに当たる。記載されている内容は表 1 に見るとおりである。

表 1　2011 センサスにおける出自の質問事項

20 What is this person's ancestry?
・Provide up to two ancestries only.
・Examples of 'Other - please specify' are:
GREEK,VIETNAMESE, HMONG, DUTCH, KURDISH, MAORI, LEBANESE, AUSTRALIAN SOUTH SEA ISLANDER.
・Remember to mark box like this: ❑—
(f) Visit www.abs.gov.au/censushelp for more information.
❑ English
❑ Irish
❑ Scottish
❑ Italian
❑ German
❑ Chinese
❑ Australian
Other - please specify
（記入欄）❑❑❑❑❑❑❑❑❑❑❑❑❑❑❑❑❑❑❑❑
❑❑❑❑❑❑❑❑❑❑❑❑❑❑❑❑❑❑❑❑

（図 1 より文字化）

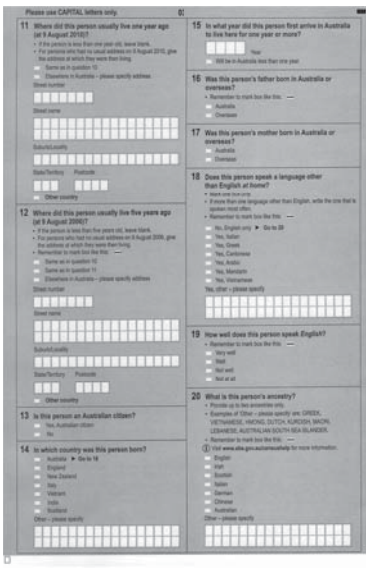


図 1　2011 年センサスの 3 ページ目

では、アボリジニはどのように記入するだろう。実際には、リテラシーの問題もあって、直接記入していない場合もあると思われる。表1に見るように、上限二つ（両親ということだろう）の祖先の帰属を記入するようになっている。もし、両親ともにアボリジニであるとすると、「Australian」を選択することもできるし、「ABORIGINE」と文字を空欄に記入することもできるだろう。しかし、後者は、英語で「元から住んでいる人々」をさす一般名詞から作られた総称であることを忘れてはならない。為政者から与えられたのが包括名としての「アボリジニ」という呼名なのである。

先の項で述べたようにガリウィンクの人々は自らを「ヨルング（Yolngu）」と呼んでいるから「YOLNGU」と記入することもできる。じつは、「ヨルング」とは「人間」を意味する言葉である。さらに、すべての人々には部族名称がある。日本人にはわかりにくいが、とりあえずは「姓」をイメージすればよい。もっとも、厳密には彼らは「姓」を持っているわけではない。部族とは、共通の祖先を持つ集団をさしている。たとえば、わたしを「息子」と呼んだブルマラの部族は「ワラミリ（Warramirri）」なので、「WARRAMIRRI」と記入することもできる。マニングリダでは、たとえば、西部に住む人達は自分達を「ビニン（Bininj =人間）」と呼び、東部の人々はガリウィンクと同様「ヨルング」と呼ぶ。また、ブララ、レンバルンガ、ナカラ、グナビチ、グニングらのたくさんの部族が存在する。

センサスへの帰属の記入は、自らのアイデンティティを明記することでもあるのである。

［グンバルニャ（オーエンペリ、1925年設立）］

グンバルニャでの調査は、アボリジニ芸術に焦点を当てた［杉藤　2002］。グンバルニャはキリスト教ミッション（宣教団）のCMS[12]が設立したアボリジニの街で、この街の周辺で樹皮画[13]が発見された、いわば、アボリジニ芸術の発祥の地の一つでもある。「芸術」は、もちろん、欧米文化の概念である。個人として確立したアーティストがいて、作品があり、作品を評価する市場がある。この三点で成立するはずが、「アボリジニ芸術」の場合、個々のアーティストが不明、しかし、作品が作られ、作品を評価する市場が生まれる。こうした作品は、原始芸術あるいは民族芸術という芸術のジャンルの一つとみなされ、当初は美術館というよりも、博物館で展示されたのである。しかし、1950年代に中央砂漠地方のハーマンスバーグ・コミュニティで水彩の景観画を描くアボリジニ画家アルバート・ナマチラ[14]が見出され、1960年代の中央砂漠地方のパプニア・コミュニティで小学校の扉に描かれた絵画から始まったアボリジニ絵画のアーティストたちは、1970年代に「パプニア・チュラ」[15]というアーティスト集団をつくりあげた。1950年代以降、アボリジニ芸術は、アーティスト・作品・市場の三要素をもつ現代的な芸術へと変貌を遂げたのである。アーネムランドでも1960年代以降にはアーティストの名前が作品に記されるようになった。

もともと、アーネムランドのアボリジニたちの描いた絵画は、儀礼の際のトーテムを示すボディー・ペインティングのテーマであり、また、ユーカリの樹皮を使って葺かれた屋根の内側に神話語りの素材やトーテムのテーマを次世代に伝承するために描かれたものであり、「芸術」とはコンテキストが全く異なるものであった。それ

が、現代芸術の文脈に換骨奪胎されていくのである。しかも、評価された作品には相当高額な評価額がつけられ、美術館だけでなく、画廊やオークションがアボリジニ絵画を入手する販路が必要となった。グンバルニャだけでなく、ほとんどのアボリジニ・コミュニティはアートセンターという名前の組織が設けられ、絵画や彫刻の指導、画材の調達、販売、展覧会の企画・実施の役割を担った。センターの中心的な役割を担うマネージャーは、当然、主流社会からプロやセミプロの人材が流れ込んでくる。アボリジニたちは著名なアーティストは大金を稼ぎ、若手、あるいは、未熟なアーティストはツーリストのための少額の作品を作り、アートセンターは美術館・画廊・オークションだけでなく、土産物店などにも作品を送り込んだ。

作品が一般化するにつれ、多様な関心層が勝手に作品をコピーして各方面に出品することになった。アボリジニだけがアボリジニ芸術を制作しうるとまでは言えないにしても、オリジナリティやオーセンティシティ、そして、著作権が大きな問題となった。その辺りの経緯について、グンバルニャやマニングリダのアートセンターの状況を紹介しながら、アボリジニ芸術の問題性について触れたことがある［杉藤　2010］。

さて、ここまで、私のアボリジニ研究の一端に触れながらアボリジニの現在を記してきたのだが、ここで、彼らのおかれている政治的経済的な状況についてあらましを把握しておくことにしよう。これまで記してきたフィールドワークでの経験との関連が目に見えてくるはずである。

アボリジニのおかれてきた状況

［1970 年代から 80 年代：自主決定自主管理の時代］

1967 年に実施されたオーストラリアにおける国民投票において、アボリジニの権利がオーストラリアに居住する他の諸民族と同等に認められ、センサスにおける人口カテゴリーに数えられることとなった。オーストラリアの移民政策では白豪主義[16]が知られているが、1970 年代に入り、労働党ホイットラム政権によって多文化主義政策[17]へと移行していた。それと平行するように、対アボリジニ政策においても、同化統合主義[18]から自主決定自主管理政策[19]への転換が行われた。著者らが現地調査を行っていたノーザンテリトリーのアーネムランド地方は、その理想的な状況にあると考えられていた。

1950 年代までに政府やキリスト教ミッションによって設立されていたアーネムランド地方のセツルメント（町）では、アウトステーション運動[20]が起り、その運動を支援する組織がセツルメントに作られ、政府も財政的に支援していた。そして、これらの運動や組織が、表向きは先住民が主体となって運用されることになっていた。アボリジニの有力者によって構成される評議会によって運営されていたのである。しかし、実際には主流社会から働きに来ていた人々の助言が、彼らの動向を左右していた［久保・堀江　2015］。

アーネムランドでは、すでに 1976 年にアボリジニ土地権法（ノーザンテリトリー）が成立し、アボリジニの土地権が確立しアーネムランド地方もアボリジナルランド[21]となっていた。この土地権法の成立以前に、1969 年にはアーネムランド東北部に居住するヨルグ族による鉱山開発に関わる土地権回復請求（ヨルグ族の敗訴）がなされており、ノーザンテリトリーはその意味でもアボリジニの権利を擁護する先進的な地域であったのである。

ここで注意しなければならない点は、この間の動きは、オーストラリア主流社会の政策転換、すなわち、自主決定自主管理政策が先住民社会に大きな影響を与え、先住民の権利が擁護されるようになったかに見えたということに留意しておきたい。

［1990年代後半から2000年代：「ノーマル化」の時代］

アボリジニの土地権に関しては1992年にクイーンズランド州におけるいわゆる「マボ判決」[22]があり、従来の国際法上の無主地概念[23]が否定されることになった。関連して1993年には先住権原法と先住権原審判所[24]が発足し、アボリジニたちのクラウンランド[25]に対する土地権回復請求権が時限付きで認められることになる。また、1996年には更に画期的な「ウィック判決」[26]がなされ、アボリジニたちの土地請求権の対象が拡大された。

さらに、1990年には先住民の行政組織であるATSIC[27]が誕生する。もともとは、対アボリジニ政策は内務省が扱い、省内に部局が設けられていたが、エージェンシー化されることになり、ATSICの影響範囲は全土に及びオーストラリアの連邦地方の選挙区のほかにATSICの選挙区が設けられるほどであった。また、土地権に関わり設置されていた各地の土地評議会[28]はATSICの傘下に入った。しかし、このATSICは2005年に閉じられ、各種の先住民政策は各省庁に分散化され、連邦行政の側はこれを「ノーマル化」[29]と呼んだ。こうした「ノーマル化」を遂行したのが1996年にオーストラリアの政権をとった自由党国民党連合のジョン・ハワード政権（~2007年）であった。

ハワード政権は、2006年には次の段階の「ノーマル化」を遂行する。従来の先住民の土地権はコミュナルな権限として承認されていたが、これを個人化しようとしたのである。たとえば、1976年に成立していたアボリジニ土地権法（ノーザンテリトリー）にも2006年に修正がくわえられた。アボリジナルランドのセツルメントからは行政権の多くが上位の郡[30]に移管され、様々な権限を喪失した。

また、2007年には、いわゆるインターベンション政策（Northern Territory National Emergency Response Bill 2007）が実施された。これは、ノーザンテリトリーにおける従来の対アボリジニに対する様々な補助金や制度的優遇措置などは効果がなかっただけではなく、補助金を酒とポルノと賭博に消費し、家庭内暴力が蔓延しているとして、連邦政府が警察権力を持って直接介入するというものであった。

ハワード政権を崩壊に追いやり政権に返り咲いた労働党政権のケヴィン・ラッド首相は、2008年2月、有名な「謝罪（Sorry）」演説を行う。いわゆる「盗まれた世代[31]」に対し、アイデンティティ喪失の被害にあったアボリジニに謝罪を行ったのであった。しかし、謝罪の一方、被害補償については行わないとした。また、この頃から「和解[32]」というキーワードがとりわけ一般にハイライトされたかに見える。アボリジニに対して宥和的な労働党政権も謝罪や和解を進めるものの、ノーマル化やインターベンションについては、もとに戻すことができず、その後、再び政権は自由党国民党連合に戻って現在に至っている。

アーネムランドで調査研究を長く行ってきた者としては、当初から連邦政府の諸政策は自作自演あるいは「マッチ・ポンプ」のように見える。すなわち、先住民に対して様々な施策を展開し

ては、道半ばにしてその効果についての評価と見直しを行う。これは、先住民の側から見ると、要求や期待したものばかりとはいえず、しかも、自律的なアボリジニ社会に対する介入もしくは変容の強制としか見えないことも多い。

特に1970年代以降、「自主決定自主管理政策」のもと、自立的な対応が求められることになったわけであるが、その暇もなく、次々と施策が変化し、先住民を取り巻く環境はむしろ劣悪化していくのである。じつは、様々な制度的転換や先住民支援政策の実施は、オーストラリアが置かれている世界状況の反映でもあるのであるが、そうした状況が、マイノリティである先住民社会をますます追い詰めることにもつながりかねないのである。

先住民を取り巻く世界的状況

なにも、オーストラリアが独自でアボリジニ政策を展開してきたわけではない。オーストラリア政府の諸政策は、世界状況と不即不離であったといえるだろう。

[1950 ー 60年代、アメリカ公民権運動の影響]

チャールズ・パーキンス[33]は、中央砂漠のアランダの出自で、シドニー大学の学生の頃にアメリカの1960年代の公民権運動の影響を受けて「Freedom Ride」を組織し、バスに乗って全国を遊説して回った。彼ら学生の公民権運動が1997年の国民投票への最後の大きなインパクトとなった。パーキンスはその後、アボリジニ問題省に入省し、官僚としてのキャリアを重ね、アボリジニの権利回復に力を尽くした。余談だが、パーキンスには、1984年にそのオフィス（当時は副長官だったので、副長官室）を訪問して直接お話を伺ったことがある。その年、国立民族学博物館を訪問して来たアボリジニ問題省の担当官を表敬訪問をした際に、偶然お会いすることができた。

関連して1972年にキャンベラの国会議事堂前の広場に建てられた「Tent Embassy」[34]が象徴的な意味を持っている。1972年のAustralia Day、シドニーからやってきたアボリジニの青年四人が国会議事堂前にビーチパラソルをたてて、「Aboriginal Embassy」の看板を掲げた。これは、パーキンスと並ぶアボリジニの活動家ゲーリー・フォーリー[35]の仲間たちのアピールであった。フォーリーはアメリカのブラック・パワー運動に影響を受けた活動家であった。彼らは、1788年に始まるオーストラリア植民の歴史に正面から反対を唱えて、オーストラリア国家に対し、アボリジニの国家の大使館であるとの看板を掲げてみせたのであった[36]。

[先住民の10年から先住民宣言へ]

ここで、国連の動きから、先住民の権利擁護の流れを見ておこう[37]。1982年、国連の人権小委員会に先住民族に関する作業グループが設置され、1992年には、地球サミット「環境と開発に関する国際連合会議」が開かれ、生物多様性や森林開発について議題にあがって、リオ・デ・ジャネイロの会場にアマゾン川流域の先住民族が現れメッセージを送り、彼らの土地や環境の悪化に懸念を表明した。ついで、国連総会は、1993年を「世界の先住民の国際年[38]」と宣言し、1995–2004年を「世界の先住民の国際の10年[39]」、2005–2015年を「第2次世界の先住民の国際の10年[40]」とした。

この間、2000年には経済社会理事会の補助機関として「先住民問題に関する常設フォーラム

[41]」が設置され、2007年には「先住民族の権利に関する宣言[42]」が総会において採択された。この採択において、アメリカ合衆国、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドが反対を投じたことが注目された。これら四国は、いずれも、先住民を持ちそれぞれの国において対策を講じてきたといえる。これらの国々が反対票を投じたのである。ちなみに日本は賛成に回り、これを機会に国会決議[43]などによりアイヌ民族を先住民とする流れができたことは、望ましいとは言えるが…。

さて、1970年代以降、現代に至るまでオーストラリアが、そして、オーストラリア先住民が置かれている世界の政治経済的状況は、ネオリベラリズムである。これは、彼らだけではなく、我々もまた同様にそうした状況に置かれている。ここでいうネオリベラリズムとは、イギリスのサッチャー首相が主導した「サッチャリズム」であり、アメリカのレーガン大統領の「レーガノミクス」を指し、規制緩和と民営化による「小さな政府」を主たる政策とするものである。日本では、中曽根内閣の時代に始まる。

先の項で述べた自主決定自主管理政策の影響を受けたアウトステーション運動が積極化し、彼らの一部は街を出てかつての遊動的な狩猟採集生活を復活させたかに見えた。また、通常の省庁の管掌するアボリジニ政策についてはATSICというアボリジニの組織が作られ、さらに「ノーマル化」されていった。こうしたアボリジニの置かれた状況は、まさにネオリベラル的なグローバリゼーションの渦中にあったといえる。

むすびにかえて：オーストラリア・アボリジニの未来

ネビル・シュートの『渚にて』[44]は、冷戦期を背景にした終末戦争の物語だ。物語時間は1964年、米ソ対立の中で起きた第三次世界大戦のため北半球は死滅し、生き残ったミサイル原潜「スコーピオン」はオーストラリアのメルボルンに逃れる。熱核戦争で生まれた放射能の雲は北半球を死滅させただけでなく、やがては南半球にも南下、メルボルンにも死がせまる。生き残った人々は残された命をどのように生きるだろう、といったSF小説だ。淡々とした、終末感に満ちた静かな物語という記憶がある。

わたしは、この『渚にて』を70年代に読んでいたのだが、1984年にアーネムランドに初めてのフィールドワークに行った時、一人になった夜中ふと思い出した。作品はもちろん、白人社会のお話である。なぜ、アボリジニのことだったのかというと、彼らは、こうした終末戦争の時、どうするだろうと考えたからだ。つまりは、近代文明に染まったわれわれは文明装置がなくなったら生き残れないが、アボリジニたちは狩猟採集の技術もある。スーパーマーケットから食品を買い、冷蔵庫や冷凍庫を必須と考える我々は生き残ることができないのではないか、と考えたのである。

私の暮らしていたガリウィンクをはじめとするアーネムランドのアボリジニ・コミュニティの状況をおさらいしておこう。

アーネムランドはアボリジニ領で入域許可を必要とする。観光客も許可証がなければ、立ち入ることができない。一方、オーストラリア国家のミニマムスタンダードとしては、様々な業務を職掌する外部者[45]を必要とする。当時のガリウ

ィンクの状況は、アボリジニ領におけるスタンダードであったと言って良いだろう。私が知りあった外部者とは次のような人びとである。まずは、タウンクラークである。彼は、コミュニティ行政の全般を管掌し、アボリジニによって構成される議会の助言者となる。議事録の作成は彼の管掌事項である。また、コミュニティの住宅建設やインフラ整備の統括を行う。コミュニティを離れて住むアボリジニのアウトステーションへの支援業務に携わるのがリソースセンターのマネージャーである。遠隔地のアウトステーションには定期的な食糧配達、行政サービス、医療サービスの管理を行う。コミュニティの発電・電気（街路の配電から住宅内の配線まで）の管理を行うエレクトリシャン。上下水の管理を行うプランバー。道路のメインテナンスを行うコントローラー。そして、メインテナンスの必要な機材施設はすべて、外部から持ち込まれるので、2 週間に一度のバージ（配船）があり、発電の燃料や車の燃料、食糧等、様々な荷物の積み下ろしの管理を行うマネージャー、食料供給を行うスーパーマーケットのマネージャー、学校の教員、これら、すべてが、主流社会からやってくる。十数年定着する者もあれば、数年で交代していく者もいる。アボリジニのコミュニティはこうした主流社会からやってくる人々によって支えられているのである。

さて、『渚にて』で、私が夢想したのは、こういうことだった。主流社会が第三次世界大戦や放射能の影響によって機能不全にいたり、定期的なバージがやがて来なくなる。燃料の欠乏から電気や上下水の管理が次第に滞るようになる。そうした中で、十全なインフラ維持を前提として生活している主流社会から来ていた人びとの仕事がなくなり、生活基盤が失われ、食糧もなくなる。次第にコミュニティを離れる人びとが出てくる、あるいは、すでに察知して、インフラの喪失のまえにいなくなっているかもしれない。電気が止まる、水道が止まる。下水も詰まる。車の燃料がなくなる。さて、そうした時に、アボリジニたちはどうするのだろうかというのが私の夢想であった。

当初、私の抱いたイメージは、彼らは、「ユーカリの森に帰っていくだろう」というものだった。当時、コミュニティ（居住者 1000 人ほど）の郊外にはアボリジニの「儀礼場」があり、風にのって、ときおり、歌声が響いた。また、私の住んでいた「ホテル」の周辺のアボリジニたちの住宅の前からも歌声が響いていた。「森に帰る」というイメージはそうしたところから来ている。果たしてどうか。

彼らの中には、主流社会からやってくるマネージャーたちのアシスタントとしての職があたえられ、給与所得者になっているものもある。しかし、多くは社会保障の給付金を当てにして、その金がなくなったらハンティングに行って、買い食いできない食糧を調達している。また、給与所得者になったものも、彼らの人生で最も大事なことは、儀礼であった。儀礼が始まると一ヶ月ばかり姿を消す。日々の暮らしでも、仕事について必ずしも勤勉とはいえない。主流社会がもたらした住宅や上下水道、電気、道路、車、インフラを享受しているが、必ずしも浸りきっているともいえない。だが、実は彼らの狩猟活動は近代そのものである。ライフルや散弾銃を用い、移動には四輪駆動の車を使う。彼らは、確かに現代文明社会の周縁に位置する存在である。だから、様々な文明装置が崩壊した時、自らの手で自然からの収穫で生存する可能性が高いといえるだろう。しかし、残念ながら、近代文明社会

が創りだした核の放射能の影響を免れることは難しいと言わなければならないだろう[46]。

1 Sydney Cove とは、現在のシドニー中心街にあたる場所に開かれたオーストラリアにおける最初の植民者の居住地を指す。

2 http://www.ethics.org.au/events/past-event-gallery/iq2-racism-debate

3 http://www.ethics.org.au/On-Ethics/blog/January-2016/Stan-Grant-s-speech-on-racism-and-the-Australian-d

4 https://www.youtube.com/watch?v=b3TZOGpG6cM

5 じゅらく染織資料館で開催（1983 年 9 月）されたもので、中央砂漠のアーナベラ・コミュニティのバティック作品を展示するだけでなく、2 人のアボリジニ作家を招いて制作実演を依頼するとともに、国立民族学博物館において制作過程の撮影を行った。

6 神戸市立博物館において「狩人の夢：オーストラリア・アボリジニの世界」（1986 年 7 月 26 日～ 8 月 31 日）と題する特別展を行い、国立民族学博物館の収集作品の他、現地コミュニティからの作品も展示した。

7 国立民族学博物館において「オーストラリア・アボリジニ：狩人と精霊の 5 万年」（1992 年 9 月 10 日～ 12 月 8 日）と題する特別展を行った。期間中にアーネムランドのオーエンペリ（現在グンバルニャ）・コミュニティの作者を招いてプラスティック製の岩壁のレプリカにロックアート制作の実演を依頼し同時にその過程の撮影を行った。

8 私がブルマラから聞いた話は、事件についての彼の理解あるいは解釈だが、ほぼリアルタイムで記録したのは Ronald Berndt である［Berndt 1962］。

9 ムルンギンについての民族誌としての記述を初めて行ったのはウォーナー［Watner 1958］であるが、親族研究として体系的に記したのがレヴィ＝ストロース［レヴィ＝ストロース　1977］である。

10 Bawinanga Aboriginal Cooporation とは、マニングリダ地域のアウトステーション運動を支援するための組織で、連邦政府や州政府の競争的資金を活用しながらアボリジニ社会のインフラ整備や日常のサービスに貢献してきた。部族代表からなる評議会が意思決定をし、白人の CEO がこれを統括している。

11 オーストラリアの国勢調査は末尾が 1 と 6 の数字の年に行われる。今年 2016 年が国勢調査年である。毎回 8 月 9 日に実施することになっている。

12 Christian Missionary Society

13 オーストラリアでは bark painting と呼ばれていて、ユーカリの一種の樹皮を剥いで広げ、重しを載せて熱い砂の中に放置して平らにしてから、内皮側に黒赤黄白の四色の顔料を用いて書かれたものである。

14 Albert Namatjira (1902-1959)

15 Papunya Tula、http://www.australia.gov.au/about-australia/australian-story/papunya-tula-art

16 White Australian Policy

17 Multi-cultural Policy

18 Assimilation & Integration Policy

19 Self-determination & Self-management Policy

20 アウトステーション運動とは、もともと 20 － 30 人の小集団による遊動的な狩猟採集生活を送っていた先住民が、政府や教会の支援によってセツルメントに集住するようになっていたものが、様々な支援に基づき、小集落（アウトステーション）に拡散居住して、四輪駆動車やライフル・散弾銃をもちいて狩猟を行う「近代的狩猟民」として展開しようというもので、たとえば、マニングリダ・セツルメント地域においては、一気に 40 － 50 の小集落が誕生し、アクセス道路や小集落へのインフラの整備が進んだ。

21 これ以前アボリジニには居留地（Reserve）が認められていたが、アボリジナル・ランド（Aboriginal Land）として、アボリジニのコミュナルな土地権が認められた。

22 アボリジニと並んでオーストラリアの先住民と位置づけられるトレス海峡諸島民のエディー・マボが出身地のマレー島の土地権請求をクイーンズランド政府に対し起こしたものである。

23 オーストラリア大陸がイギリスに帰属することになったキャプテン・クックによる 1770 年の領有宣言の根拠となるのがこの無主地（テラ・ナリウス）で、マボ判決では、無主地概念を否定して先住民の先住権原を認めた画期的な判決であったとされる。

24 Native Title Act 1993、および、Native Title Tribunal

25 オーストラリアの土地区分の一つであるが、契機としてはイギリスのオーストラリア領有権は国王に付されていたので、クラウンランド（王室領）とされ、植民の過程で様々な土地区分に区分されていった。エディー・マボの訴訟はこのクラウンランドの一つであったマレー島の土地権を主張したのである。

26 ウィック判決は、クイーンズランド州のヨーク半島の共住者であるウィック族の訴訟に対するもので、先のマボ判決がクラウンランドに対する土地権回復を認めるものであったのに対し、各種の借地（リースホルド）に対してもアボリジニらの土地権回復請求を認めるというものであった。牧場借地（パストラル・リース）や鉱山借地（マイニング・リース）への影響が大であった。

27 Aborigines and Torres Strait Islanders Commission

28 Land Council

29 normalization

30 Shire

31 Stolen Generation：盗まれた世代とは、19 世紀末から 20 世紀にかけてオーストラリアの各政府やキリスト教団体が実施した施策で、特に、白人との混血児を強制的に居住地から離れた寄宿舎などに収容したいわゆる「キッドナップ・ポリシー」のために、言語や血縁のつながりを喪失した人々をいう。全国で数万人に及ぶとされる。

32 Reconciliation：先の 1967 年における国民投票も和解過程の一つであったが、1990 年代に Council for Aboriginal Reconciliation が発足し、2000 年代に入り Reconciliation Australia という組織が和解に向けて活動を続けている。

33 Charles Parkins (1936-2000)、アボリジニの活動家として知られるが、長く連邦政府のアボリジニ問題省（Department Aboriginal Affairs）の幹部として勤務し、最後は終身長官に任命された。その後退官の後、別に述べた ATSIC の副コミッショナーに就任している。https://en.wikipedia.org/wiki/Charles_Perkins_(Aboriginal_activist)

34 https://www.reconciliation.org.au/wp-content/uploads/2013/12/Five-Fast-Facts-Tent-embassy.pdf

35 Gary Forley (1950-)、https://www.vu.edu.au/contact-us/gary-edward-foley、http://indigenousrights.net.au/people/pagination/gary_foley

36 http://indigenousrights.net.au/land_rights/aboriginal_embassy,_1972/australia_day_under_a_beach_umbrella

37 http://www.unic.or.jp/activities/humanrights/discrimination/indigenous_people/

38 International Year of the World's Indigenous People

39 International Decade of the World's Indigenous People

40 Second International Decade of the World's Indigenous People

41 Permanent Forum on Indigenous Issues

42 Declaration on the rights of Indigenous Peoples

43 http://www.shugiin.go.jp/internet/itdb_gian.nsf/html/gian/honbun/ketsugian/g16913001.htm

44 原作は 1957 年出版、単行本による翻訳出版は 1958 年で、文庫本による出版は 1965 年である。私が読んだのは、文庫本のバージョンである。

45 ここでいう外部者とは、コミュニティのインフラを運用するために着任している、主流社会の人々を指す。インフラとは、言葉のとおりに電気／水道／下水／家屋の建築（建設）の管理運用を意味し、そのために必要となる要員のことをさす。ちなみに、主流社会とは、移民初期からのイギリス系とはかぎらずに、民族的出自を問わず、白人社会の中で働くことのできる、近代社会システムに適応している人びとの集団を指している。

46 日本の JAXA の「はやぶさ」の帰還の際に着陸地点として選択されたのがオーストラリア中央砂漠のウーメラ実験場であるが、付近のマラリンガ実験場では、1947 年から 1963 年まで、イギリスが核実験を実施した。イギリス・オーストラリア政府は事前通告を行ったとするが、実際には被爆したアボリジニが存在し、強制移住させられた。http://www.creativespirits.info/aboriginalculture/history/maralinga-how-british-nuclear-tests-changed-history-forever#axzz3zUbONPtq

文献

久保正敏・堀江保範・編著、2015、「バウィナンガ・アボリジナル組合の議事録（1978～1994）からみる対アボリジニ政策とインフラ整備の歴史:マニングリダと周辺アウトステーションの活動史」、『国立民族学博物館調査報告　126』。

杉藤重信、1990、「長老ブルマラの世界」、中野不二男・編著『もっと知りたいオーストラリア』、弘文堂、pp.82-94。

杉藤重信、1991、「人口規制要因としての婚姻規則：コンピュータ・シミュレーションによる分析」、『近代狩猟採集民オーストラリア・アボリジニ（国立民族学博物館研究報告別冊 15）』、国立民族学博物館、pp.251-275。

杉藤重信、1998、「町の中にもブッシュ、そして町がブッシュにやってきた：オーストラリア・アーネムランド・アボリジニの住まい」、佐藤浩司・編著『住まいをつむぐ：建築人類学へのいざない (1)』、学芸出版社、pp.71-88。

杉藤重信、2002、「アボリジニ芸術の現在・過去・未来：オーエンペリ物語」、小山修三・窪田幸子・編著『多民族社会の先住民：オーストラリア・アボリジニの現在』、世界思想社、pp.215-238。

杉藤重信、2010、「アボリジニの芸術活動と著作権：文化の所有と拡散」、山田奨治・編著『コモンズと文化:文化は誰のものか』、東京堂出版、pp.147-179。

杉藤重信・窪田幸子、1986、「ウィークエンド・ハンター―町ずまいアボリジニの経済生活」、『季刊民族学』36: 88-93。

レヴィ＝ストロース、クロード、1977、「ムルンギン体系」『親族の基本構造(上)』、番町書房、pp.314-355。

Berndt, Ronald、1962、“ An Adjustment movement in Arnhem Land, Northern Territory of Australia”、Mouton。

Warner, Lloyd、1958、“A Black Civilization: A Study of an Australian Tribe (2nd ed.)”、Harper & Bros.。

「女性論」プロジェクト研究報告

A Report of the Women's Studies Project

女子大生のキャリアデザインと女子大学のキャリア教育に関する研究
ー専門職養成学部を中心にー

Study about the Carrier Design of the Female University Students and Carrier Education for a Women's University

梅山女学園大学現代マネジメント学部教授
東　　珠実
Tamami Azuma
梅山女学園高等学校教諭
小川 奈保子
Naoko Ogawa
梅山女学園大学人間関係学部准教授
小倉　祥子
Shoko Ogura
梅山女学園大学国際コミュニケーション学部教授
影山　穂波
Honami Kageyama
梅山女学園大学人間関係学部教授
藤原　直子
Naoko Fujiwara
梅山女学園大学人間関係学部教授
吉田 あけみ
Akemi Yoshida

1. 緒 言

中央教育審議会によるキャリア教育・職業教育の在り方に関する答申[1)]が示されてから、すでに5年が経過した。筆者らは、この間、女子大学におけるキャリア教育の在り方を検討するために、女子大学卒業生のライフコースの事例分析を行い[2)]、その結果を教材化(ロールモデル集)[3)]し、女子学園におけるキャリア教育用教材開発に関する研究[4)]を行い、キャリア教育授業のための教材[5)]を作成し、大学におけるキャリア教育の実態調査を実施してきた。

昨年は、本学の教養系の学部の学生たちを対象に「女子総合学園のキャリア教育に関する調査」[6)]を実施し、教養系学部の学生のキャリアデザインに関する実態を把握し、キャリア教育の課題を抽出した。

これらを踏まえ、本研究では、専門職養成学部の学生に対して、昨年同様の調査を実施し、専門職養成学部の学生のキャリアデザインに関する実態とキャリア教育の課題を明確にするとともに、昨年との比較によって、教養系、専門職養成系の差異並びに共通点を検討することにより、女子大学に在籍する学生たちの大学への進学動機と今後の理想のライフコースについて明らかにし、それぞれの学生のニ

ーズに合ったキャリア教育の在り方を追究することを目的とした。なお、調査にあたっては昨年の調査と同様に、京都女子大学による女子学生のキャリア教育に関する調査研究[7]を参照した。

2. 研究方法

1）調査対象者

本研究では、本学7学部のうち専門職養成系の学部としてとらえることのできる生活科学部、教育学部の2学部に在籍する1～3年生を調査対象とした。本来であるならば、看護学部が専門職養成系学部の筆頭であり、看護学部に調査を実施すべきであると思われるが、実習授業等のスケジュールの都合で、今回は看護学部を対象から外すこととした。両学部・各学科1、2、3年生各100名ずつを目安としたが、調査票（有効回答票）の回収数は、表1のとおりとなった。

すなわち、生活科学部340名、教育学部447名の合計787名を分析対象とした。

表1　調査対象者の属性（学部学科・学年）

学部学科 / 学年	生活科		教育	合計
	管理栄養	生活環境デザイン	子ども発達	
1年	0	0	194	194
2年	125	93	154	372
3年	115	7	99	221
合計	240	100	447	787
	340		447	

2）調査方法

本研究における調査はアンケートにより実施した。調査時期は、2015年6～7月である。調査票は、授業中に配付・回収した。

調査内容は、以下のとおりである。

①大学進学に関する意思決定に関する事項（大学進学理由、学部・学科の選択）

②大学入学と資格取得に関する事項（大学入学時における資格取得の希望、大学入学時に取得をめざしていた資格）

③理想のライフコースと価値観に関する事項（卒業後の理想のライフコース、人生で重要なもの）

④卒業後の職業選択に関する事項（就きたい職業・職種に関する意思決定、就きたい職業、希望する雇用形態、就職先を決める上で重視すること）

⑤キャリア教育の経験と希望に関する事項（将来のキャリア形成に関してこれまでに学んだ（体験した）こと、将来のキャリア形成のために大学で学びたい（体験したい）こと、女子総合学園のキャリア教育について思うこと）

調査結果は、全体及び学科別に集計し、全体的傾向を把握するとともに学科間の比較分析を行った。

3. 結果及び考察

調査結果の概要は、表2に示したとおりである。

表２　調査結果の概要(1)

学部		生活科		教育	全体
質問・選択肢	学科	管理栄養	生活環境デザイン	子ども発達	(全体平均または合計)
どのような理由で大学へ進学したか	専門的な知識を身に付けたいから	82	50	100	232
	教養を身に付けたいから	5	4	19	28
	資格を取りたいから	86	13	238	337
	就職を有利にしたいから（良い条件で就職したいから）	15	12	26	53
	友達をつくりたいから	0	0	1	1
	大学進学が当たり前という環境だったから	37	14	38	89
	親や塾に先生、知人など周囲の勧めがあったから	4	3	3	10
	その他	5	2	1	8
将来就きたい職業を考えて学部・学科を選んだか	よく考えて選んだ	89	36	330	455
	少し考えて選んだ	107	43	90	240
	どちらともいえない	14	9	19	42
	あまり考えずに選んだ	24	11	7	42
	全く考えずに選んだ	6	1	0	7
在学中に資格を取得したいと思っていたか	はい（資格を取得したいと思っていた）	228	92	432	752
	いいえ（資格を取得したいと思っていなかった）	11	8	9	28
卒業後理想とするライフコースはどのようなものか	結婚後ずっと専業主婦	12	5	11	28
	出産後ずっと専業主婦	8	3	16	27
	結婚退職後子育てが落ち着くまで専業主婦、その後パートで働く	25	10	54	89
	出産退職後子育てが落ち着くまで専業主婦、その後パートで働く	100	28	139	267
	結婚退職後子育てが落ち着くまで専業主婦、その後フルタイムで働く	13	6	27	46
	出産退職後子育てが落ち着くまで専業主婦、その後フルタイムで働く	30	31	105	166
	結婚・出産後も変わらずフルタイムで働く	25	10	59	94
	結婚後はパートタイムで働く	5	2	2	9
	結婚せずフルタイムで働く	13	2	14	29
	結婚後、子どもはつくらずフルタイムで働く	2	1	4	7
	その他	4	0	8	12
人生にとってどの程度重要か（1～5点）	子育て	4.1	4.1	4.4	4.3
	親孝行	4.2	4.3	4.3	4.3
	パートナー（配偶者、恋人）との関係	4.1	4.2	4.3	4.2
	友人との関係	4.2	4.4	4.5	4.5
	仕事	3.9	4.1	4.1	4
	健康	4.5	4.3	4.4	4.4
	美容	3.6	3.7	3.7	3.6
	自己啓発活動（自分のための趣味の活動）	4.0	4.0	3.9	4.0
	社会貢献活動（社会に役立つ趣味の活動）	3.2	4.4	3.6	3.6
卒業後に就きたい職種・職業が決まっているか	はっきり決めている	15	6	189	210
	ある程度決めている	104	41	205	350
	あまり明確に決めていない	110	44	44	198
	まったく決めていない	9	7	4	20
	進学するつもり	0	2	2	4
	就職も進学もするつもりはない	0	0	0	0
	その他	1	0	3	4
卒業後、どのような職業を希望しているか	会社員	150	75	26	251
	公務員（教員以外）	45	9	34	88
	教員	10	7	359	376
	自営業者（家業を継ぐ）	4	2	4	10
	その他	28	4	12	44

注：1）各質問に対する有効回答（未回答、不適切回答を除く）の結果を示した。
　　2）〔1～5点〕で回答を求めた質問の数値は平均点、その他の質問の数値は回答数を表す。

表2　調査結果の概要(2)

学部			生活科		教育	全体
質問・選択肢	学科		管理栄養	生活環境デザイン	子ども発達	(全体平均または合計)
卒業後、どのような雇用形態を希望しているか	正規の職員・従業員		234	97	428	759
	パート		2	1	5	8
	アルバイト		0	0	1	1
	労働者派遣事業所の派遣社員		0	0	0	0
	契約社員		1	0	1	2
	嘱託		0	0	0	0
	その他		0	0	1	1
就職先を決める上でどの程度重視しているか（1～5点）	自分の能力やスキルを活かせる		4.1	4.3	4.2	4.2
	仕事の内容にやりがいを感じる		4.4	4.6	4.6	4.5
	時間的・精神的負担が少ない		4.1	3.9	3.6	3.8
	給与が高い		4.0	4.0	3.7	3.8
	休暇がとりやすい		4.0	4.0	3.6	3.8
	職場への交通の便が良い		4.0	3.9	3.8	3.9
	職場の雰囲気・人間関係が良い		4.7	4.7	4.5	4.6
	長く勤め続けることができる		4.3	4.3	4.2	4.2
	経営・雇用が安定している		4.5	4.4	4.4	4.4
	仕事を通じて社会貢献できる		3.5	3.5	4.0	3.8
	性別にかかわりなく活躍できる		3.7	3.9	4.0	3.9
将来のキャリア形成に関する事項をこれまでに学んだ（体験した）ことがあるか	近年の就職状況	ある	160	74	320	554
		ない	80	26	127	233
	働く女性の現状	ある	192	75	347	614
		ない	48	25	100	173
	ロールモデル（目標となる先輩）や卒業生の体験談	ある	127	68	251	446
		ない	113	32	196	341
	生活設計の方法	ある	196	80	345	621
		ない	44	20	102	166
	就職活動に必要な具体的なスキル（エントリーシートの書き方、面接の受け方など）	ある	65	28	180	273
		ない	175	72	267	514
	就職採用試験（筆記試験）の内容	ある	77	29	129	235
		ない	163	71	318	552
	インターンシップ（現場の就業体験）	ある	158	49	258	465
		ない	82	51	189	322
	OGとのネットワーク	ある	167	81	345	593
		ない	73	19	102	194
	就職のために今するべきこと	ある	89	45	183	317
		ない	151	55	264	470
将来のキャリア形成に関する事項を大学でどの程度学びたいか（1～5点）	近年の就職状況		4.1	4.1	3.9	4.0
	働く女性の現状		3.7	4.0	3.8	3.8
	ロールモデル（目標となる先輩）や卒業生の体験談		4.2	4.1	4.2	4.2
	生活設計の方法		3.7	3.9	3.8	3.8
	就職活動に必要な具体的なスキル（エントリーシートの書き方、面接の受け方など）		4.7	4.7	4.4	4.5
	就職採用試験（筆記試験）の内容		4.6	4.6	4.6	4.6
	インターンシップ（現場の就業体験）		3.9	4.4	4.1	4.1
	OGとのネットワーク		3.9	3.8	3.8	3.9
	就職のために今すべきこと		4.5	4.4	4.4	4.5

注：1）各質問に対する有効回答（未回答、不適切回答を除く）の結果を示した。
　　2）〔1～5点〕で回答を求めた質問の数値は平均点、その他の質問の数値は回答数を表す。

以下では、表2及びより詳細なデータに基づいて作成した図表を提示し、項目別に結果を考察する。

（1）大学進学に関する意思決定

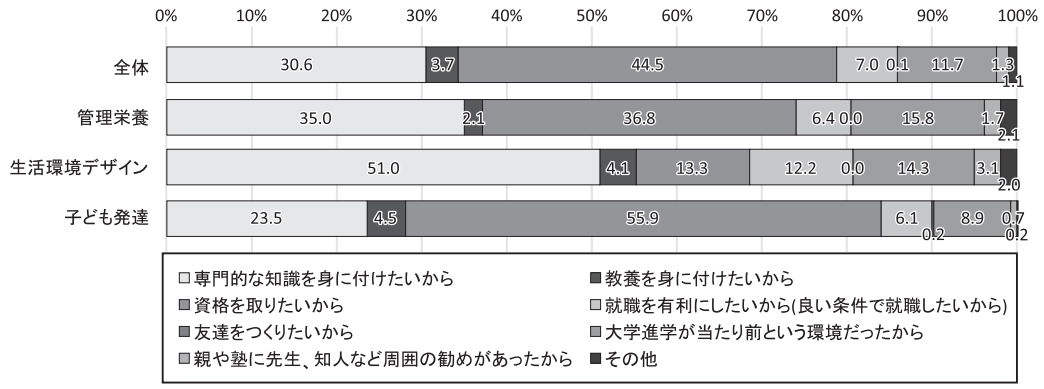
a. 大学進学理由

「あなたはどのような理由で大学へ進学し

ましたか」という問いに対する回答は、図１のとおりである。全体をみると、「資格をとりたいから」が最も多く、次いで「専門的な知識を身に付けたいから」があげられ、これらを合わせると７割を超える。これに対し「大学進学があたり前という環境だったから」は約１割、「就職を有利にしたいから（良い条件で就職したいから）は 7.0％にとどまることから、学生たちは、総じて、具体的で明確な動機を意識して大学へ進学している様子がうかがえる。

また、学科別に比較すると、子ども発達学科で「資格をとりたいから」が多く、生活環境デザイン学科で「専門的な知識を身に付けたいから」とする学生がかなり多いことが分かる。

図1　どのような理由で大学に進学したか（1つ選択）

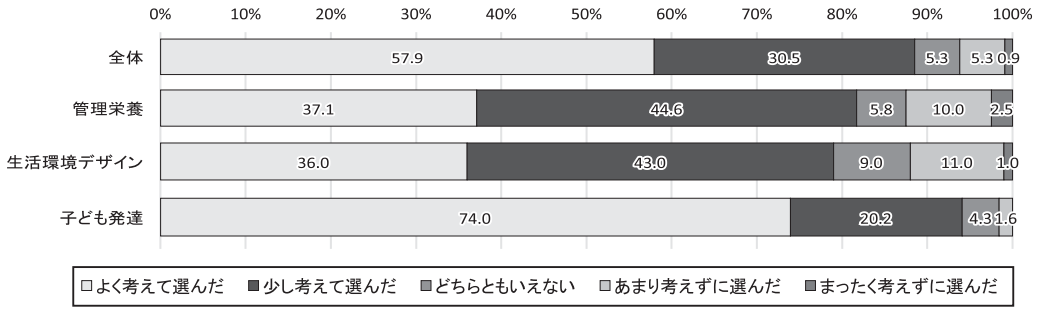


注：χ^2 検定によれば学科別の回答には 1％水準で有意差が認められる（p ＝ 0.0000）。

b. 学部・学科の選択

「あなたは将来就きたい職業を考えて学部・学科を選びましたか」という質問に対する回答は、図２のとおりである。全体をみると「よく考えて選んだ」が最も多く、「少し考えて選んだ」を合わせると９割近くにのぼる。これに対し「あまり考えずに選んだ」が 5.3％、「まったく考えずに選んだ」は 0.9％ であることから、大半の学生が将来就きたい職業を考えて選んでいることが分かる。

図２　将来就きたい職業を考えて学部・学科を選んだか〔１つ選択〕



注：χ^2 検定によれば学科別の回答には 1％水準で有意差が認められる（p ＝ 0.0000）。

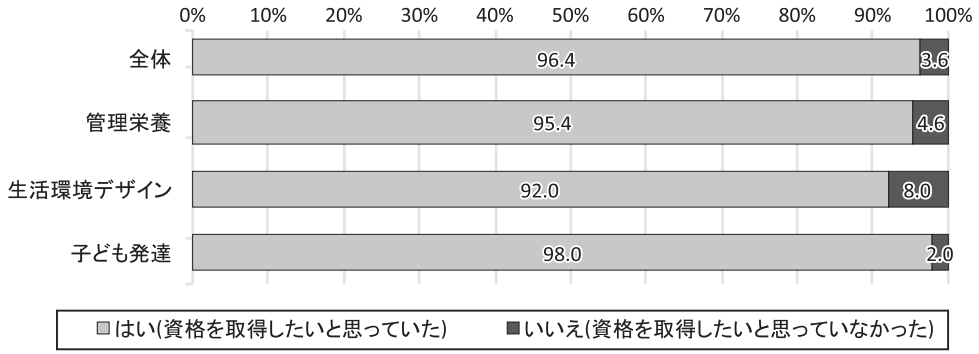
学科別に比較してみると、「よく考えて選んだ」が管理栄養学科や生活環境デザイン学科が4割弱にとどまるのに対し、子ども発達学科は7割を超えることから、学部・学科選択をする際に子ども発達学科は将来就きたい職業を明確に意識していることがうかがえる。

（2）大学入学と資格取得

a. 大学入学時における資格取得の希望

「あなたは大学入学時、在学中に何か資格を取得したいと思っていましたか」という質問に対する回答は、図3のとおりである。全体をみると、「はい（資格を取得したいと思っていた）」が96.4%で、大半の学生が資格取得を望んで大学に入学したことが分かる。学科別に比較すると、子ども発達学科では「はい」と答えた人が98%に達し、他の学科以上に資格志向が強いことが分かる。子ども発達学科は教員養成系の学科であるため、十分に検討したうえで学科を受験したという図1の結果とも符合する。また管理栄養士の育成を進めている管理栄養学科においても「いいえ（資格を取得したいと思っていなかった）」を選択した学生は4.6%にすぎないという結果となった。生活環境デザイン学科も資格志向は強いが、教員や管理栄養士のように、学科に共通する一つの資格をイメージするわけではないためか、8%と1割近くの学生が「いいえ（資格を取得したいと思っていなかった）」を選択している。

図3　大学入学時、在学中に何か資格を取得したいと思っていたか



注：χ^2検定によれば学科別の回答には1%水準で有意差が認められる（$p = 0.009$）。

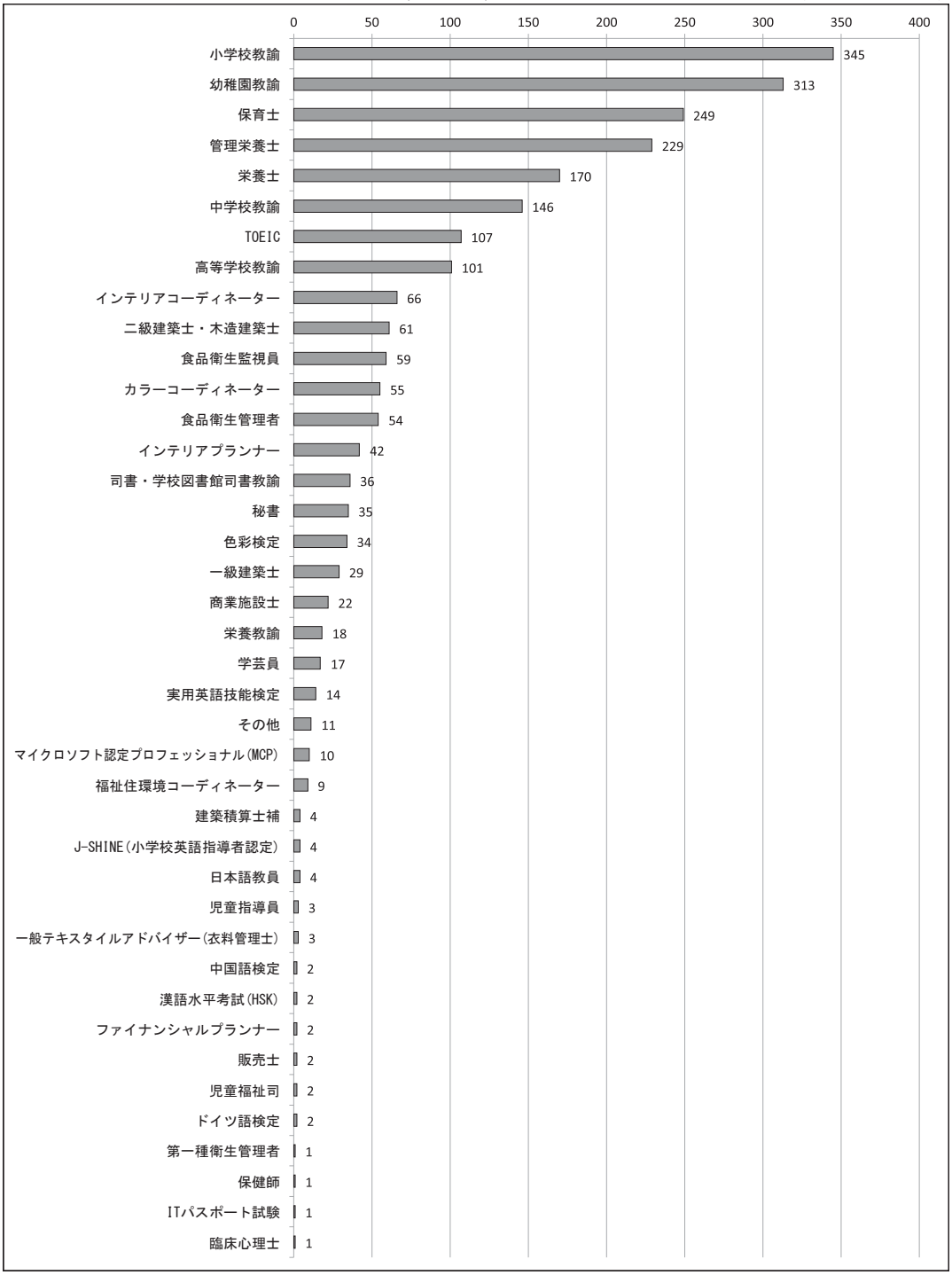
b. 大学入学時に取得をめざしていた資格

「大学入学時、あなたが取得を目指していた資格は何ですか」という問いに対する回答は、図4のとおりである。全体をみると、「小学校教諭」が最も多く、次いで「幼稚園教諭」となり、4割前後の人がこの二つの資格をあげていた。しかしこの結果は、子ども発達学科の母数が半数以上を占めることに起因していると考えられるため、学科別に比較する。

表3は、取得を目指す資格を学科別に分類したものである。これをみると3学科に共通して見られる資格は「TOEIC」のみである。中学校・高等学校の教諭は生活環境デザイン学科と子ども発達学科に共通するが、その他の資格は全く学科により異なっていることが特徴のひとつである。資格志向の学部学科であ

図４　大学入学時、取得をめざしていた資格（受験資格、任用資格、検定試験などを含む）はなにか

〈全　体〉　　**〔複数回答：人〕**



るため当然の結果ではあるが、明確な差異がみられた。管理栄養学科では管理栄養士が93.8％と大半の学生が志向しており、栄養士は約半数、食品衛生監視員、食料衛生管理者が2割程度と学科にかかわる資格が続く。生活環境デザイン学科に関しては、6割以上がインテリアコーディネーター、二級建築士・木造建築士を目指しているが、管理栄養学科ほど明確な数字とはなっていない。これはアパレル系と建築・住宅系の分野があるためであろう。インテリアプランナー、色彩検定、一級建築士と志望資格が続く。いずれにしても、TOEICと中学校・高等学校教諭を除き、学科専門に密着した資格が並んでいるのは管理栄養学科と同様の傾向といえよう。教育学部子ども発達学科に関しても、TOEICを除いて、教員養成系の資格が列挙された。小学校・幼稚園教諭が7割以上を占め、保育士が半数を占める。副免となる中学校・高等学校が2～3割で、司書・司書教諭が1割弱となった。3学科に共通して、入学した後は、資格取得に向かい教育されていると考えることもできよう。このことは、昨年の教養系学部学科における調査の結果においては、それぞれの学科の特徴はみられるものの、学部の違いを越えた一般的な資格を志向していたことと比較すると異なる結果となった。

表3　大学入学時、取得をめざしていた資格（受験資格、任用資格、検定試験などを含む）はなにか

〈学 科 別〉　〔複数回答：%〕

順位	全体	管理栄養	生活環境デザイン	子ども発達
1	小学校教諭 44.1	管理栄養士 93.8	インテリアコーディネーター 64.0	小学校教諭 76.5
2	幼稚園教諭 40.0	栄養士 48.7	二級建築士・木造建築士 60.0	幼稚園教諭 70.0
3	保育士 31.8	食品衛生監視員 24.6	カラーコーディネーター 51.0	保育士 55.5
4	管理栄養士 29.3	食品衛生管理者 22.5	インテリアプランナー 41.0	中学校教諭 29.1
5	栄養士 21.7	TOEIC 17.9	色彩検定 31.0	高等学校教諭 17.9
6	中学校教諭 18.7	栄養教諭 9.2	一級建築士 29.0	TOEIC 11.6
7	TOEIC 13.7	—	商業施設士 28.0	司書・学校図書館司書教諭 7.8
8	高等学校教諭 12.9	—	TOEIC 12.0	—
9	インテリアコーディネーター 8.0	—	高等学校教諭 10.0	—
10	二級建築士・木造建築士 7.8	—	建築積算士補 9.0	—
11	食品衛生監視員 7.5	—	福祉住環境コーディネーター 9.0	—
12	カラーコーディネーター 7.0	—	中学校教諭 8.0	—
13	食品衛生管理者 6.9	—	学芸員 8.0	—
14	インテリアプランナー 5.3	—	—	—

注：1）5％以上の学生が取得を希望していた資格を掲げた。
　　2）上段は資格名、下段は当該資格の取得を希望していた学生の割合を示した。

（3）理想のライフコースと価値観

a. 卒業後の理想のライフコース

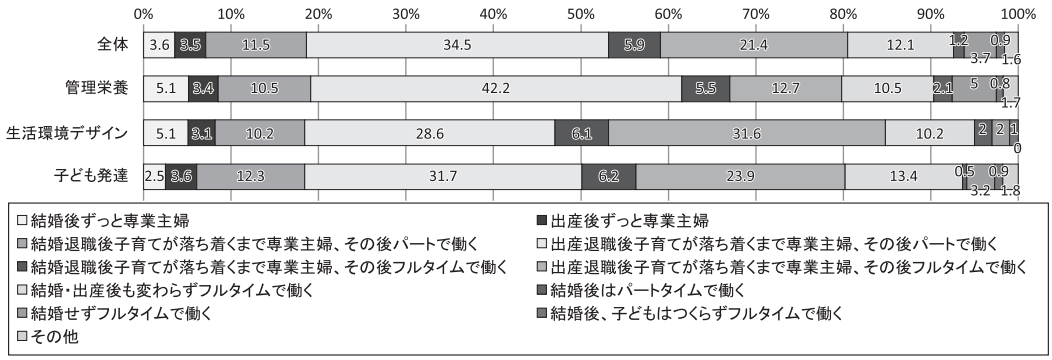
「あなたが卒業後、理想とするライフコースはどのようなものですか」という問いに対する回答は、図5のとおりである。全体をみると、「出産退職後子育てが落ち着くまで専業主婦、その後パートで働く」が最も多く34.5%を占めている。次いで「出産退職後子育てが落ち着くまで専業主婦、その後フルタイムで働く」が21.4%、「結婚・出産後も変わらずフルタイムで働く」が12.1%、「結婚退職後子育てが落ち着くまで専業主婦、その後パートで働く」が11.5%の順となっている。

選択肢を組み合わせてみると、ほとんどの学生が理想のライフコースに「結婚・出産」を想定していることが分かる。また「仕事」との関わり方では、結婚・出産の有無、復職のタイミング等を組み合わせると、パートタイム希望が46.0%、フルタイム希望が44.0%、専業主婦希望が7.1%であった。

さらにこの結果を国立社会保障・人口問題研究所が2010年に実施した「第14回出生動向基本調査（結婚と出産に関する全国調査）」[8]の結果と比較すると、女子大学に通う調査対象者層の特徴が明確となる。同調査によれば、未婚女性の理想のライフコースについて、「専業主婦コース」19.7%、「再就職コース」35.2%、「両立コース」30.6%、「DINKS コース」3.3%、「非婚就業コース」4.9%という結果が得られている。本調査の結果を同様に集計しなおすと、「専業主婦コース」7.1%、「再就職コース」73.3%、「両立コース」13.3%、「DINKS コース」0.9%、「非婚就業コース」3.7%となる。調査に関する諸条件が異なるため単純に比較はできないが、いずれにしても、本調査の対象学生がいわゆるM字型（再就職コース）を強く志向しており、両立コースの希望者が少ないことが明白である。

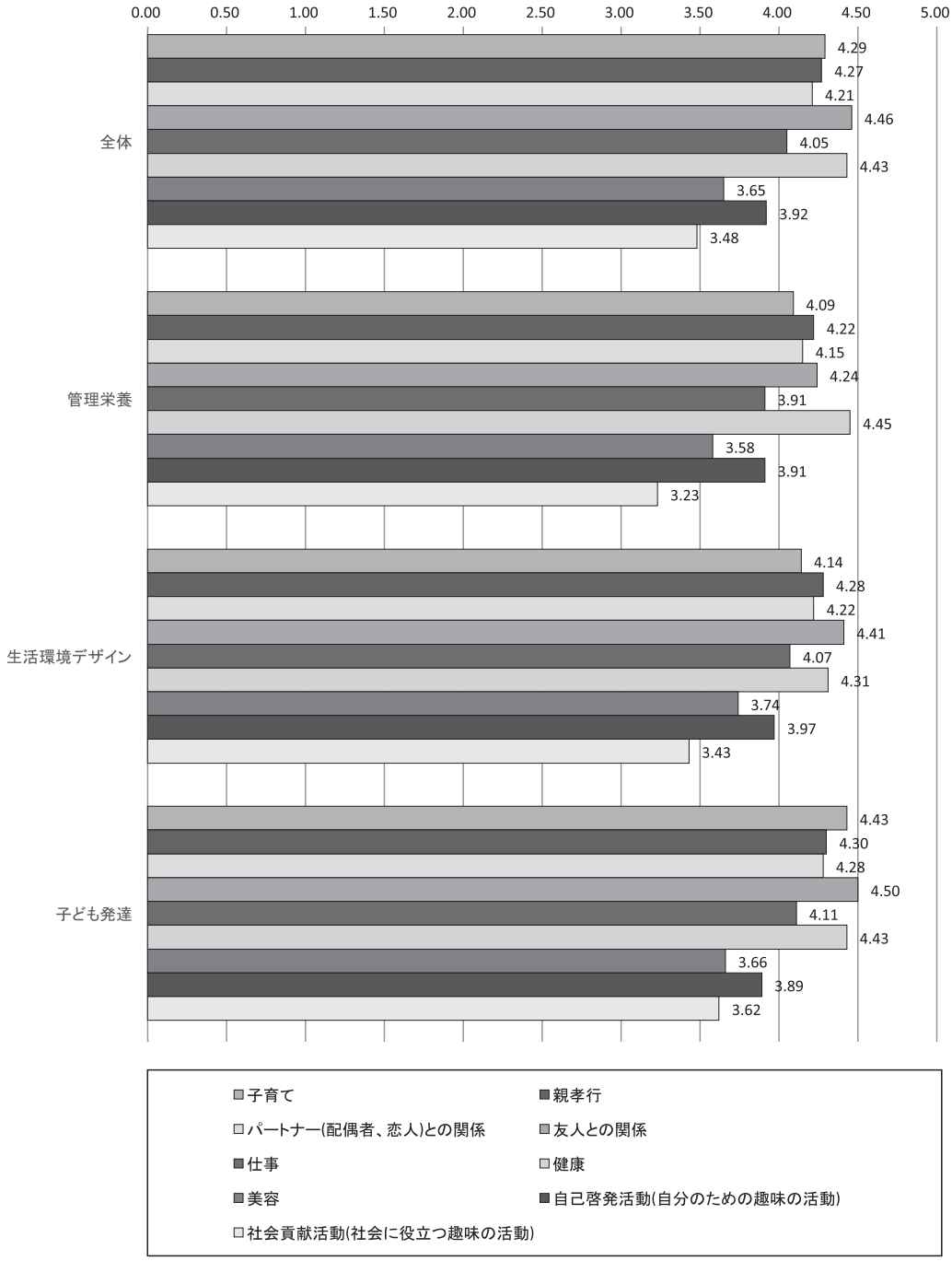
これらの結果を学科別にみると、生活環境デザイン学科では、「出産退職後子育てが落ち着くまで専業主婦、その後フルタイムで働く」希望が31.6%と、「出産退職後子育てが落ち着くまで専業主婦、その後パートタイムで働く」コース（28.6%）を上回っているという特徴がある。一方管理栄養学科では、「出産退職後子育てが落ち着くまで専業主婦、その後パートタイムで働く」コースが42.2%と相対的に高く、全体の平均と比べ7.7ポイント上回っているという特徴がある。

図5 卒業後理想とするライフコースはどのようなものか（1つ選択）



注：χ^2 検定によれば学科別の回答には5%水準で有意差が認められる（$p = 0.018$）。

図６　人生にとってどの程度重要か〔５段階評定：平均点〕



b. 人生で重要なもの

「あなたの人生にとって次の事項はどの程度重要ですか」という問いに対する回答は、図6のとおりである。全体をみると、重要度に関する平均スコアは、「友人との関係」が4.46と最も高く、次いで「健康」4.43、「子育て」4.29となっている。一方、「社会貢献活動」や「美容」項目は重要度のスコアが3.5前後と相対的に低い。

学科別にみると、管理栄養学科は「健康」の重要度のスコアが高く、生活環境デザイン学科では「友人との関係」、「健康」の重要度のスコアが高い。子ども発達学科では、「友人との関係」、「子育て」、「健康」の重要度のスコアが高くなっている。管理栄養学科と子ども発達学科では専門資格取得者が多いと考えられるが、「仕事」に関する重要度のスコアが管理栄養学科で3.91と低く、この結果は予想と異なるものであった。

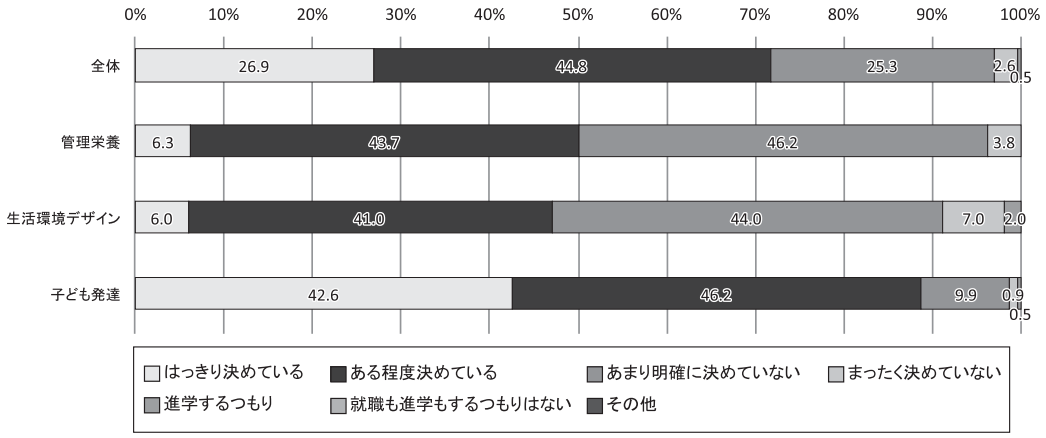
（4）卒業後の職業選択

a. 就きたい職業・職種に関する意思決定

「あなたは現在、卒業後に就きたい職種・職業を決めていますか」という問いに対する回答は、図7のとおりである。全体をみると、「ある程度決めている」が最も多く44.8%を占め、「はっきり決めている」を合わせると、7割以上の学生が将来の職業・職種について具体的なイメージをもっている。これは、専門職養成系学部・学科の特徴を示唆する結果であるように思われるが、学科別に比較すると大きな差異が認められる。

「はっきり決めている」または「ある程度決めている」と回答する割合が非常に高いのは子ども発達学科で、9割近くの学生が将来の職業・職種を決めており、教諭、保育士などを目指しているものと思われる。これに対し、管理栄養学科で「はっきり」または「ある程度」卒業後に就きたい職業・職種を決めているのは5割にとどまり、生活環境デザイン学科では5割に満たない。

図7　卒業後、就きたい職業・職種が決まっているか



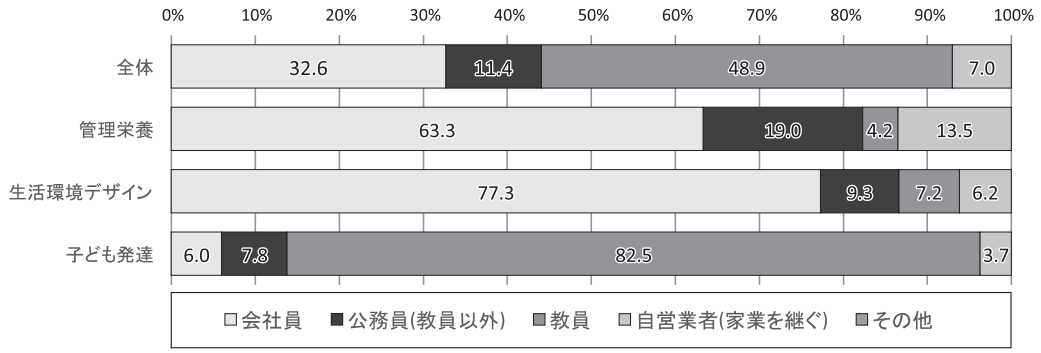
注：χ^2検定によれば、学科別の回答には1%水準で有意差が認められる（$p = 0.0000$）。

b. 就きたい職業

「あなたは大学卒業後、どのような職業を希望していますか」という問いに対する回答は、図８のとおりである。全体をみると、調査対象者の学部・学科構成を反映し、「教員」が最も多く全体の半数近くを占め、次いで３割強が「会社員」、１割強が「公務員」と答えている。

学科別に見ると、子ども発達学科では、８割以上が「教員」と答えており、これが全体の結果に影響を及ぼしている。一方、管理栄養学科では６割強が、生活環境デザイン学科では８割近くが「会社員」と答えており、さらに管理栄養学科では「公務員」と答える学生も２割程度みられる。

図８　卒業後、どのような職業に就きたいか



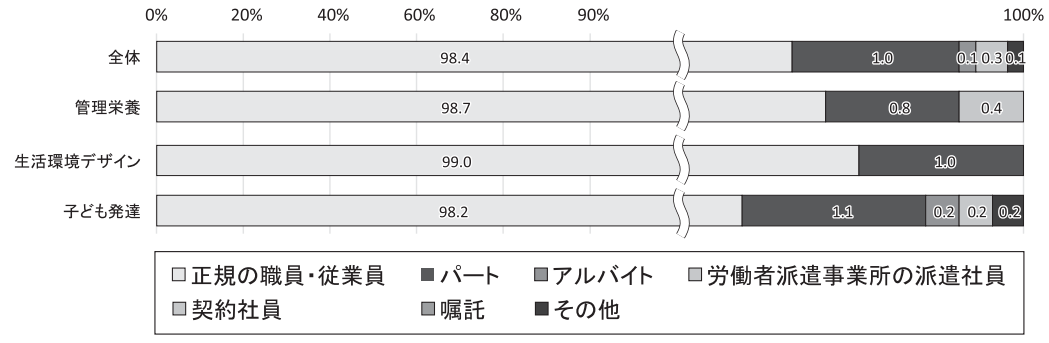
注：χ^2検定によれば、学科別の回答には１%水準で有意差が認められる（p = 0.0000）。

c. 希望する雇用形態

「あなたは大学卒業後、どのような雇用形態を希望していますか」という問いに対する回答は、図９のとおりである。全体をみると、ほとんどすべての学生が「正規の職員・従業員」と回答している。

学科別にみても、いずれも同様の結果となっており、専門分野や将来就きたい職業に関わらず、学生たちは、総じて安定した収入の得られる雇用形態を望んでいることが明らかである。

図９　卒業後、どのような雇用形態で働きたいか



注：χ^2検定によれば、学科別の回答には有意差は認められない

d. 就職先を決める上で重視すること

「あなたは就職先を決める上で次の事項をどの程度重視しますか」という問いに対する回答(1 ～ 5 点の評定点を選択)は、図 10 のとおりである。全体をみると、就職先を決める上で重視する程度が最も高いのは、「職場の雰囲気・人間関係が良い」で、そのスコアは 4.59 である。次いで「仕事の内容にやりがいを感じる」が 4.53、「経営・雇用が安定している」が 4.41 となっており、さらに「長く務め続けることができる」、「自分のスキルや能力を活かせる」が続く。これら以外の選択肢のスコアには大差がみられないが、相対的に最もスコアが低いのは「仕事を通じて社会貢献できる」の 3.75 である。

学科別にみると、上位の3つの選択肢は3学科に共通であるが、管理栄養学科と生活環境デザイン学科では「職場の雰囲気・人間関係が良い」のスコアが最も高いのに対し、子ども発達学科では「仕事の内容にやりがいを感じる」のスコアが最も高い。また、スコアが最も低い選択肢をみると、管理栄養学科と生活環境デザイン学科では「仕事を通じて社会貢献できる」であるのに対し、子ども発達学科では「時間的・経済的負担が少ない」である。これらの結果は、子ども発達学科の学生が目指している「教員」という仕事が、管理栄養学科や生活環境デザイン学科の学生が目指している「会社員」とは異なる性質をもっていることを反映したものといえよう。

(5)キャリア教育の経験と希望

a. 将来のキャリア形成に関してこれまでに学んだ(体験した)こと

「将来のキャリア形成(就職、生活設計)に関する事項について、これまでに学んだ(体験した)ことがありますか」という問いに対する項目別の回答は、図 11 のとおりである。

全体をみると、大学の授業で学んだこととしては、「生活設計の方法」が 43.2% と最も割合が高く、次に「働く女性の現状」が 38.1% と続く。また、キャリアサポート課のイベント等で学んだことは「就職のために今すべきこと」「就職採用試験(筆記試験)の内容」「就職活動に必要な具体的なスキル」が 15% 前後であった。これまで学んだ(体験した)ことはない項目は、「OG とのネットワーク」が約 7 割、「インターンシップ」が約 6 割、「就職採用試験(筆記試験)の内容」が約 5 割であった。これらの結果は、今回の調査における回答者に 2 年生が多いこと、キャリアサポート課主催の活動時期との兼ね合いで、未体験者が多いことも考えられる。また、中学・高校での学びや体験では、「近年の就職状況」が最も割合が高く 48.1 % であった。次に、「働く女性の現状」「ロールモデルや卒業生の体験談」「生活設計の方法」と続いている。

表 4 の学科別をみると、資格専門職養成系 3 学科において大きな差はみられない。前回の調査では、学部によって大学で学んだことの割合に差があり、学部のカリキュラムの特徴が反映されていると推測された。若干の差ではあるが、生活環境デザイン学科が他の 2 つの学科に比べ、「近年の就職状況」「働く女性の現状」の項目に関し、中学・高校・大学以外の「その他の機会に学んだ」と回答する割合が高かった。

b. 将来のキャリア形成のために大学で学び

図10　将来の就職先を決める上でどの程度重視するか〔５段階評定：平均点〕

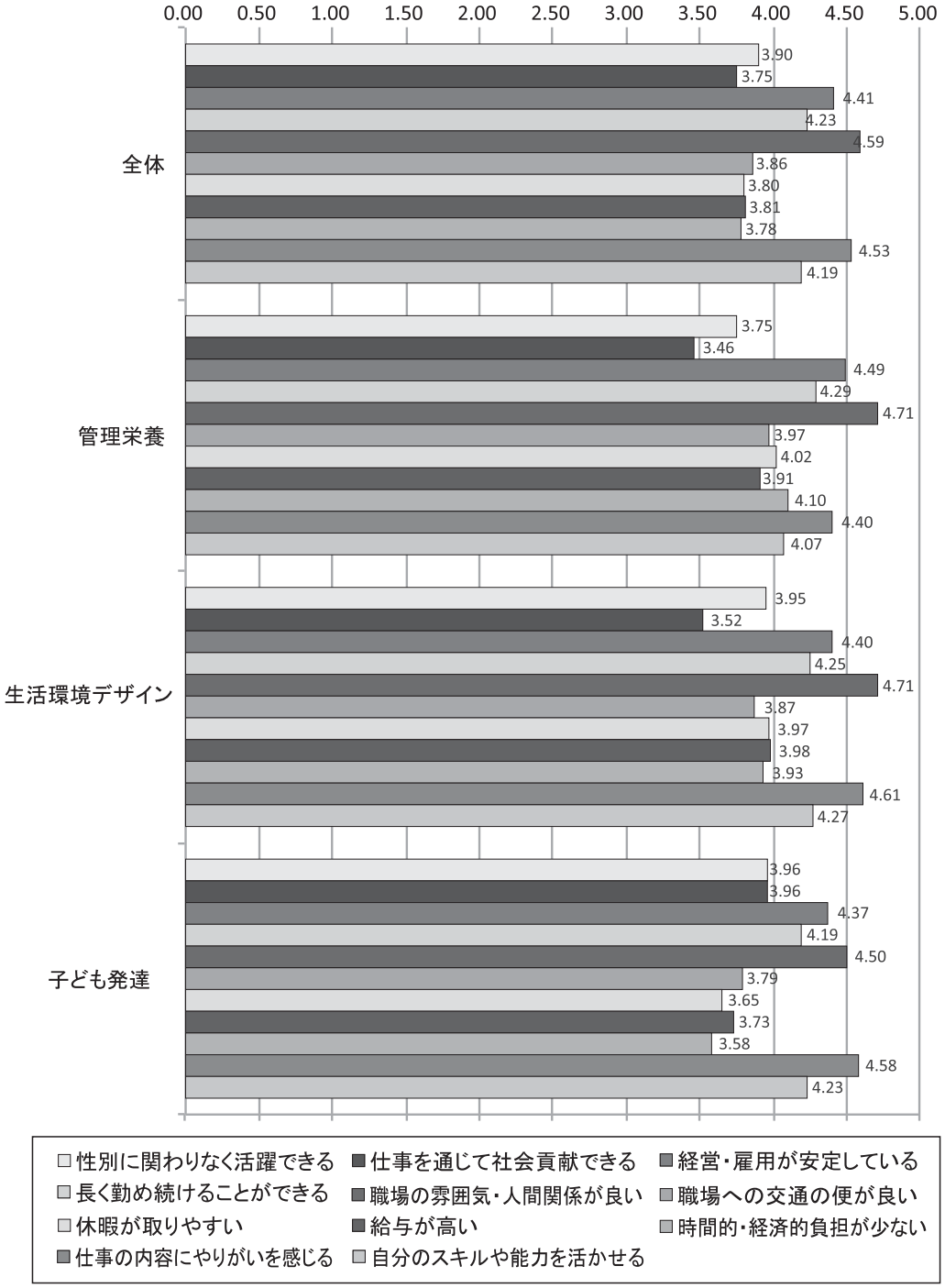
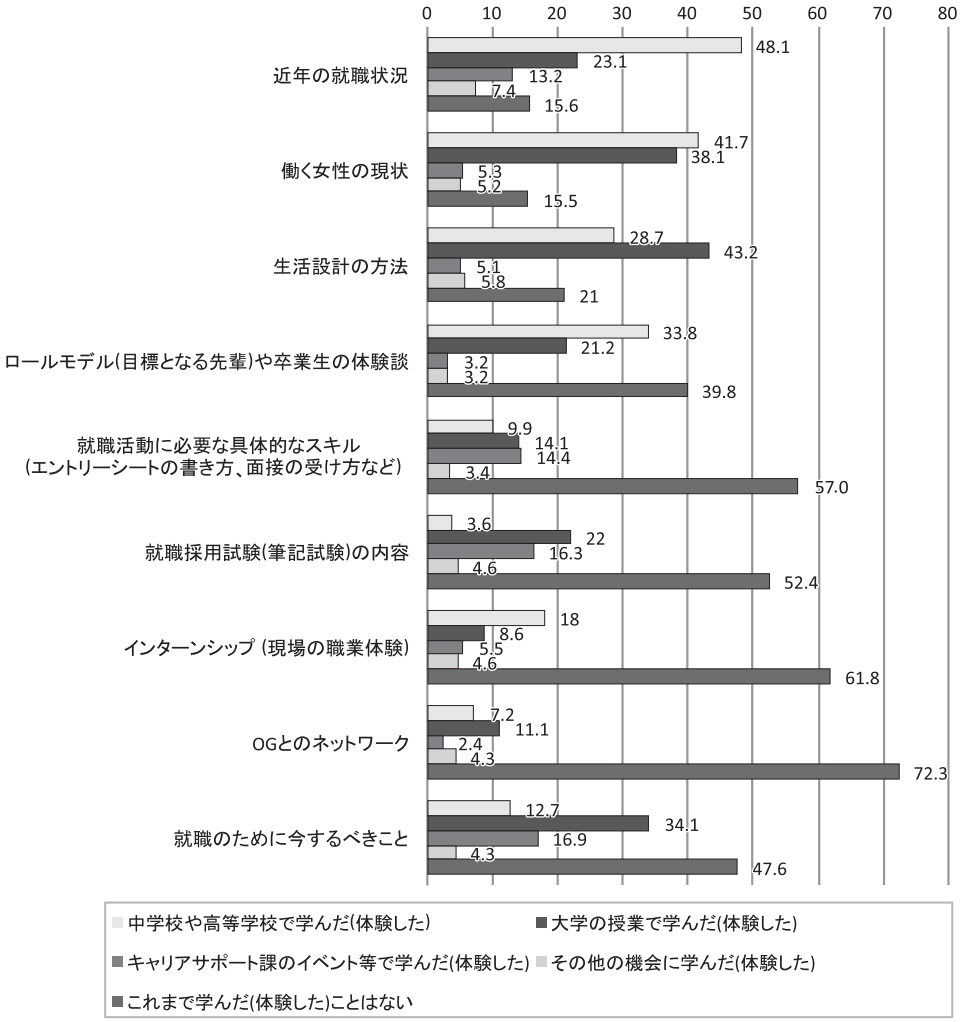


図11　将来のキャリア形成に関する事項についてこれまで学んだ(体験した)ことがあるか
＜全　体＞　(%)



たい(体験したい)こと

「あなたの将来のキャリア形成(就職、生活設計)のために、次の事項をどの程度学びたい(体験したい) ですか」という問いに対する回答は、図 12 のとおりである。全体をみると、「就職活動に必要な具体的なスキル」「就職採用試験の内容」がいずれも 4.6 程度の高いスコアを示しており、続いて「就職のために今するべきこと」4.46、「ロールモデルや卒業生の体験談」4.19、「インターンシップ」4.09、「近年の就職状況」 4.0 となっている。逆に相対的にスコアが低いのは「生活設計の方法」3.77、「働く女性の現状」 3.79 である。これらの結果から、将来のキャリア形成のために学生が学びたい内容とは、就職活動に役立つような具体的な内容やスキルであることがうかがえる。

表4　将来のキャリア形成に関する事項についてこれまで学んだ(体験した)ことがあるか

〈学 科 別〉　　**(%)**

項目	選択肢	管理栄養	生活環境デザイン	子ども発達
近年の就職状況	中学校や高等学校で学んだ(体験した)	0.4	0.0	1.6
	大学の授業で学んだ(体験した)	2.1	1.0	4.1
	キャリアサポート課のイベント等で学んだ(体験した)	21.9	16.3	25.6
	その他の機会に学んだ(体験した)	41.4	56.1	40.0
	これまでに学んだ(体験した)ことはない	33.8	26.5	28.7
働く女性の現状	中学校や高等学校で学んだ(体験した)	0.8	0.0	1.4
	大学の授業で学んだ(体験した)	6.3	1.0	4.7
	キャリアサポート課のイベント等で学んだ(体験した)	32.6	19.4	32.3
	その他の機会に学んだ(体験した)	40.2	54.1	39.1
	これまでに学んだ(体験した)ことはない	20.1	25.5	22.6
生活設計の方法	中学校や高等学校で学んだ(体験した)	0.0	0.0	0.8
	大学の授業で学んだ(体験した)	3.4	2.0	3.4
	キャリアサポート課のイベント等で学んだ(体験した)	16.0	19.4	18.3
	その他の機会に学んだ(体験した)	33.2	45.9	33.6
	これまでに学んだ(体験した)ことはない	47.5	32.7	44.2
ロールモデル(目標となる先輩)や卒業生の体験談	中学校や高等学校で学んだ(体験した)	1.3	0.0	0.9
	大学の授業で学んだ(体験した)	3.8	0.0	5.9
	キャリアサポート課のイベント等で学んだ(体験した)	36.6	28.6	31.2
	その他の機会に学んだ(体験した)	39.9	51.0	38.9
	これまでに学んだ(体験した)ことはない	18.5	20.4	23.1
就職活動に必要な具体的なスキル(エントリーシートの書き方、面接の受け方など)	中学校や高等学校で学んだ(体験した)	0.0	0.0	1.4
	大学の授業で学んだ(体験した)	0.8	1.0	1.4
	キャリアサポート課のイベント等で学んだ(体験した)	7.1	5.1	10.8
	その他の機会に学んだ(体験した)	18.4	20.4	26.2
	これまでに学んだ(体験した)ことはない	73.2	73.5	60.3
就職採用試験(筆記試験)の内容	中学校や高等学校で学んだ(体験した)	0.0	1.0	0.5
	大学の授業で学んだ(体験した)	1.3	0.0	1.8
	キャリアサポート課のイベント等で学んだ(体験した)	6.7	7.1	7.4
	その他の機会に学んだ(体験した)	23.4	19.4	18.5
	これまでに学んだ(体験した)ことはない	68.2	72.4	71.8
インターンシップ(現場の職業体験)	中学校や高等学校で学んだ(体験した)	1.7	0.0	1.4
	大学の授業で学んだ(体験した)	8.4	1.0	3.9
	キャリアサポート課のイベント等で学んだ(体験した)	24.7	11.2	16.8
	その他の機会に学んだ(体験した)	31.0	35.7	35.1
	これまでに学んだ(体験した)ことはない	34.3	52.0	42.9
OGとのネットワーク	中学校や高等学校で学んだ(体験した)	0.8	0.0	1.1
	大学の授業で学んだ(体験した)	2.5	3.1	5.6
	キャリアサポート課のイベント等で学んだ(体験した)	28.2	28.6	27.5
	その他の機会に学んだ(体験した)	37.8	49.0	42.7
	これまでに学んだ(体験した)ことはない	30.7	19.4	23.0
就職のために今するべきこと	中学校や高等学校で学んだ(体験した)	0.4	0.0	0.5
	大学の授業で学んだ(体験した)	0.4	0.0	1.6
	キャリアサポート課のイベント等で学んだ(体験した)	9.6	14.3	10.4
	その他の機会に学んだ(体験した)	26.4	29.6	28.0
	これまでに学んだ(体験した)ことはない	63.2	56.1	59.6

注：経験率(学んだ学生の割合)または未経験率(これまでに学んだことはない学生割合)が50%を超えるものに網掛けをした。

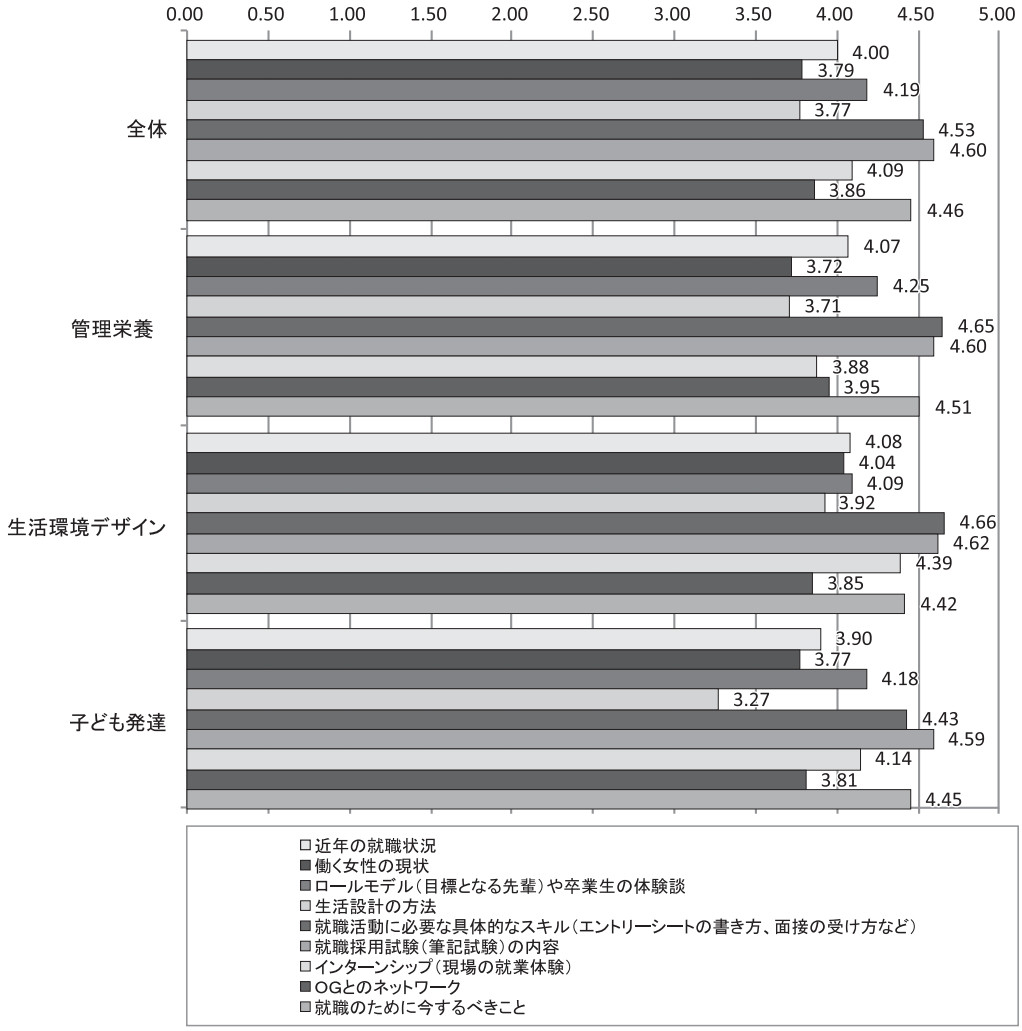
学科別に比較すると、他の2学科に比べ、生活環境デザイン学科は「働く女性の現状」や「インターンシップ」のスコアが相対的に高くなっている。これは、卒業後の進路が他の2学科に比べ、一般企業への就職が多いことが考えられる。管理栄養学科では、相対的に「ロールモデルや卒業生の体験談」のスコアが高く、卒業後のイメージについて関心が高いことが分かる。子ども発達学科は、「就職採用試験の内容」が最も高いスコアであり、教員採用試験に関する学びの関心が高いことを示している。その一方で、「生活設計の方法」に関しては、相

対的に低いスコアとなっている。

これらの結果については、調査対象者の学年構成の影響なども受けていると思われるが、卒業後の進路や職業が反映されていると考えられる。総じて、就職活動に直結するような内容に関する学びの関心が高いのは明らかではあるが、内容的には学科別で異なるものと考えられる。管理栄養学科での「管理栄養士」の資格取得や子ども発達学科での「教師」という専門職に就くための学びと、一般的な就職活動を行う生活環境デザイン学科の学生の学びの関心は異なってくるということであろう。

一方、「働く女性の現状」や「生活設計の方法」は相対的にスコアが低い傾向がある。これ

図12　将来のキャリア形成に関する事項をどの程度学びたい（体験したい）か〔５段階評定：平均点〕



は、就職活動に直結した知識とはいえないが、将来のキャリア形成、とりわけ職業社会における自分の生き方を実現できる力を身につけるという点において重要である。それゆえに、学生の就職活動に役立つことを学びたいという意識を理解しつつ、今後のライフキャリアを見通した知識への関心をいかに向上させるかが今後のキャリア支援の課題だと思われる。

c. 女子総合学園のキャリア教育について思うこと

最後に、「女子総合学園のキャリア教育について、あなたが思うこと（希望、独自性など）を自由に書いてください」という問いに対する回答について考察する。

全調査回答者のうち 118 名から回答（自由記述）が得られた。それらの回答の中から、女子総合学園のキャリア教育に求める内容や椙山女学園大学のキャリア教育の中で評価されている点をまとめると、以下のようである。

①インターンシップなどの職業体験の充実やガイダンス等の具体的な就職支援
②卒業生などによる具体的な体験談
③働く女性の現状に関する情報提供
④女性の自立、活躍のための教育
⑤マナーに関する教育

①については、「インターンシップの場がもっと増えるとうれしい」「ガイダンスなどがとてもたすかる」「就職対策が遅い」「1、2 年生からインターンシップや企業説明会の説明をしてほしい」「採用試験について詳しく説明してほしい」「幼稚園や保育園の情報を教えてほしい」「保育者の話をもっと聞きたい」「専門的な資格が必要となる職種につきたいので、そのための対策をもっと充実させてほしい」など、専門職養成系の学部であるがゆえか、早くから職業志向が固まっており、それに向けた教育や支援を期待している。すなわちキャリア教育に求めるものは具体的な職業教育に特化されている傾向にある。その一方で「一般の就職の情報がほしい」「教育学部以外の進路について知りたい」という回答もあり、職業志向が高いものの必ずしも現在所属している学部の専門職にはこだわっていないと思われる回答もあった。

②については、「就職した先輩の話が聞けてよかった」「OG が行う体験談に基づいた就職についての授業」「就職について OG とのかかわりが持てるようにしてほしい」「体験談をたくさん聞きたい」「ゲストスピークの機会が多くてよい」「リアルな現場の状況が知りたい」など、卒業生をはじめとした生の声を欲しているようである。

③については、「女性が社会に出たときどうしたらよいか」「女性が今後、社会で活躍するためにこれからどうすべきかなどを学びたい」「女性が育児をしながら働くことができる環境を知りたい」「結婚・出産後働くための情報がほしい」「結婚・出産など女子だからこそ悩むことをもう少し詳しく知っておきたい」などの声があった。

④については「これから先の社会で女性がもっと活躍するためにも自立した女性教育が必要」「女子大ならではの、女子だけで育つ環境をいかして社会に出ても立派に働ける女性の育成」「女性が社会で活躍していけるスキルを身につけたい」「女子大ならではの女子が働く方向からの視点」「女子大だから女性が働くということについて様々なことを教えてくれてありがたい」というような、女性の活躍推進

に関わる内容の要望が目立った。

⑤については、「椙山独自のマナーブック」「面接時の服装を知りたい」というような、マナーに関する要望もみられた。

これらの結果については、対象学部の特性による点もあると思われるが、かなり明確な職業志向があり、具体的にその職業に就くためのあるいはその職業を継続するための教育並びに情報提供を求めていた。教員側は、人生キャリアも見据えて、職業キャリアにとどまらない幅広いキャリア教育を志向しているが、学生側の要望は職業キャリア教育であり、またその内容もかなり具体的かつ直接的なものであったので、その意識の乖離をどのように埋めていくかが今後の課題になると思われる。

4. 結 語

以上のように、本研究では、女子大学の専門職養成学部に在籍する学生たちの大学への進学動機と今後の理想のライフコースを明らかにするとともに、キャリア教育に関するこれまでの経験と今後の希望を具体的にとらえてきた。本研究の成果を要約すると、以下のとおりである。

①女子大学の専門職養成学部に在籍する学生たちは、総じて明確な職業志向を持って進学しており、学科選択についてはそれなりに考えて選んでいる。特に教育学部にその傾向が顕著である。

②しかしながら、理想のライフコースについては、「結婚・出産後も変わらずフルタイムで働く」を希望している人よりも、むしろ「出産退職後子育てが落ち着くまで専業主婦・その後パートで働く」が圧倒的に多い。いわゆるM字型のライフコースを希望している人々が多いという結果になった。

③仕事に関しては、明確な職業志向があるものの、必ずしもすべての学生が在籍学部で取得できる資格などと直接関係すると思われるものを希望しているわけではなく、その学部の中にあって、自分なりの仕事を模索している状況も見られた。

④キャリア教育に関しては、学びの経験が少ないことがわかった。その一方で、学びのニーズはかなり高い傾向にあったので、中学・高校などにおいてもあまり学んでいないということを前提に大学でのキャリア教育の充実が必要であろう。学びのニーズは、インターンシップなどの充実や体験談を聴くことや具体的な就職支援に向けられていた。つまり、キャリア教育とはいうものの、その要求のほとんどは「職業キャリア教育」に関するものであった。

このような結果を踏まえ、今後のキャリア教育の課題としては以下のようなものがあると思われる。

1点目は、個別の学生目線でのキャリア教育の必要である。昨年実施した教養系学部の学生とは結果の傾向が顕著に違っていたということを踏まえ、それぞれの学生の状況やニーズを把握し、必ずしもニーズにのみ答えるというものではないが、学生たちの理解が不足しているキャリア分野に関する教育を充実させるとともに、職業キャリア教育については、ニーズにある程度則したものも提供していく必要があると思われる。

2点目は、特にその職業キャリア分野に関する教育について、授業として実施するものと、キャリア支援課などで支援するものとの整理、すみわけが必要であると思われる。

キャリア支援課においては、具体的実践的

な情報提供が求められるが、授業においては、多数派の事例のみでなく、多角的な視点からの情報の提供、思考のトレーニングが必要であろう。

3点目は、女子大学ゆえの利点と課題を踏まえたキャリア教育の必要性である。2015年には「女性の活躍推進法」も施行され、女性の生き方働き方に関わる社会の情勢は大きく変化してきている。そのような状況にあって、社会で活躍できる女性たちを育成するためにはどのような教育が必要であるかについて、大学の特性を踏まえながら検討すべきである。単なるマナー教育にとどまることなく、今後の社会において、それぞれの女性たちがその人らしく輝けるようなキャリア教育を模索していく必要がある。

以上のように、女子大生のキャリアデザインと女子大学のキャリア教育に関する調査を本学の学生を対象に2年続けて実施し、その結果について考察・検討してきたが、調査を実施できなかった学部もあり、また学年ごとに比較検討をするには学年ごとのデータ量にばらつきがあるなどの問題点もあり、十分な分析をすることが叶わなかった。今後はこれらの反省を踏まえ、全学部全学年でできるだけ時期もそろえて同様の調査が実施できれば、より多くのキャリア教育に向けての提言ができると思われる。また、大学入学前のキャリア教育があまり充実していないという結果もみられたので、できうることならば総合学園の強みを生かして、中学・高等学校などでも調査を実施し、更なる課題を把握していきたいと思う。

引用文献・参考文献

1) 中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」（2011年1月31日）。
2) 東珠実・小川奈保子・小倉祥子・影山穂波・藤原直子・吉田あけみ「女子大学卒業生のライフコースと女子大学の特性に関する研究―20代から80代の卒業生へのインタビュー調査を手掛かりに―」、『椙山人間学研究』第7号（2012）、pp.110 ～ 136。
3) 椙山女学園大学女性論プロジェクト「ロールモデル集　椙山発の女性たち」（2013）。
4) 東珠実・小川奈保子・小倉祥子・影山穂波・藤原直子・吉田あけみ「女子大学におけるキャリア教育の比較研究」、『椙山人間学研究』第9号（2014）、pp.164 ～ 180。
5) 東珠実・太田ふみ子・小川奈保子・小倉祥子・影山穂波・塚田文子・藤原直子・吉田あけみ「SUGIYAMA　私のキャリアマップ　MY CAREER　MAP」椙山人間学研究センター（2011）。
6) 東珠実・小川奈保子・小倉祥子・影山穂波・藤原直子・吉田あけみ「女子大生のキャリアデザインと女子大学のキャリア教育に関する研究」、『椙山人間学研究』第10号（2015）、pp.141 ～ 163。
7) 京都女子大学「現代GP『女子学生のキャリア教育の体系化と普及』文部科学省現代的教育ニーズ取り組み支援プログラム（平成18年度・平成19年度）アンケート調査報告書」（2008）。
8) 国立社会保障・人口問題研究所「第14回出生動向基本調査（結婚と出産に関する全国調査）」（2010）。

「日本・アジア文化と人間」プロジェクト研究報告

2015 Annual Report
'Japan and the Asia culture, and a human being' Research Project

椙山女学園大学文化情報学部教授
飯塚　恵理人
Erito Iizuka

「日本・アジア文化と人間」プロジェクトでは昨年度に引き続き、3名の構成員がそれぞれメインテーマである「日本・アジア文化と人間」を踏まえ、各自の研究を継続遂行した。梅野研究員、冨田研究員より下記の報告を受けたので、それに筆者分を加えて報告する。

梅野きみ子

前年度からの継続の下記2つの研究課題に取り組んだ。

1）名古屋国文学研究会

所属する会員（名古屋・関西方面からの女性研究者20名ほど）が、4月4日（土）、5月9日（土）、6月6日（土）、7月4日（土）、8月22日（土）、9月5日（土）、10月3日（土）、11月7日（土）、12月5日（土）、1月9日（土）、2月6日（土）、3月5日（土）のそれぞれ午後1時～6時まで、椙山人間交流会館において、『風葉和歌集』の注釈研究のための発表会を開催した。その成果は、平成28年6月発行予定の『新注和歌文学叢書』（青簡舎）の中に『風葉和歌集新注　一』として刊行される予定である。

なお、これまでに発行した『風葉和歌集研究報』1～18号は、その叢書の体裁に合わせた原稿に、修正・書き換えて編集している。

2）『源氏物語』の注釈研究会

本研究会では、風間書房からの共著『源氏物語　注釈十一』（浮舟―夢浮橋）を刊行するための打ち合わせを、5月9日（土）に椙山人間交流会館において、名古屋国文学研究会の開催される日の午前中に、今回の共著者、梅野きみ子、乾澄子、岡本美和子、嘉藤久美子、田尻紀子、宮田光および山崎和子の7名と風間書房社長も交えて、編集方針などの討議をした。その後の、原稿執筆のための打ち合わせは、名古屋国文学研究会の開催される日に合わせて、その開催の前後に、椙山人間交流会館において継続して開催した。その成果は、平成28年10月に刊行する予定である。

冨田和子

平成27年度は前年に引き続き、18世紀以降、近世後期以降の俳諧資料の収集と整理を中心に、当該資料の収集と整理に努めた。この成果の中から、「柳江庵撰会所本『狂俳袖濡す』の紹介と翻刻」（「椙山女学園大学研究論集」47号　平成28年3月発行予定）をまとめた。柳江庵撰会所本とは、句会で撰者の柳

江庵が選んだ上位句（本書は 100 句）を掲載して出版したものである。本書は、刊記未詳ながら、表紙に「鸞亭佛追福」とある鸞亭が初代柳江庵であれば、文政二（1819）年頃刊と推定できるもので、「狂俳」の呼称の初見を、従来よりも十年早く確認できることになるものである。なお、初代柳江庵鸞亭は、『名府玉尽し』〔文化五（1808）年〕で、「俳諧風雅の達人」と評された井上士朗と並んで、「俳諧冠句達人」と評された人物である。

他に、東海近世文学会 10 月例会で、研究発表「『狂俳袖濡す』と『狂俳満願の暁』を端緒とした狂俳界の一面」を行った。この中の『狂俳満願の暁』〔文政八（1825）年〕は興行年代の明確なものであり、現時点では「狂俳」の呼称の初見である。本書の出現によって、文政期には三河だけでなく尾張でも興行が行われていたことが実証された。

更に資料を蒐集し、論文にまとめたいと考えている。

ホームページを開設した（URL：http://web.sugiyama-u.ac.jp/~kazuko/mysite3）。

飯塚恵理人

飯塚は昨年度に引き続き、所属する「メディアと古典芸能研究会」で放送文化基金平成 25 年度助成（課題：昭和 20-40 年代民放草創期放送資料の収集・整理とアーカイブ化に関する基礎的研究、助成額：70 万円、執行は平成 26 年度になる）をいただき、椙山人間学研究センターの本プロジェクト研究費と併せてラジオ放送開始期からテレビ放送開始期前後の民間放送の放送関係資料・附属劇団の関係資料の収集・整理およびアーカイブス化を行った。民間放送附属劇団関係資料の成果については本誌「椙山人間学研究 2015」第 11 号に掲載予定である。

資料紹介「飯塚恵理人宛辻山幸一氏書簡（2015年11月29日消印）」

The letter from Mr.Kouichi Tsujiyama who is a SP.LP-record collector to Erito Iizuka

椙山女学園大学文化情報学部教授
飯塚　恵理人
Erito Iizuka

はじめに

辻山幸一氏は神戸在住のSP・LPレコードコレクターで、新内・清元・歌舞伎・能楽などの関西における放送と関連した出演者・演目の良質なコレクションを所蔵されている。「メディアと古典芸能研究会」では放送文化基金による助成金を得て、氏の膨大なコレクションの中から特に関西の放送と関連深い出演者・演目のレコードを選び、デジタル化を行っている。作成されたデジタルデータは、著作権の消滅した盤のものについては研究会の代表である筆者が所属する椙山女学園大学の飯塚研究室ホームページ「恵理人の小屋」（http://zeami.ci.sugiyama-u.ac.jp/~izuka/erito1/）内の「辻山幸一コレクション」のサイトで公開している。

辻山氏は平成27年秋に病を得られ入院された。その折にこれまで歩んでこられた人生を振り返られてということで飯塚宛に書簡を送ってこられた。太平洋戦争後から平成初期までの昭和のレコードコレクターの生活がコレクター歴60年を越える辻山氏の筆により生き生きと表され、芸能の一次資料としてのレコード収集に関する貴重な証言となっており価値あるものと考えたので、飯塚宛の私信ではあるがここに辻山氏の御了承を得てその全文を掲載することにした。

以下は辻山氏の原文のままであるが、飯塚が句読点・カギかっこなどの記号を適宜補った。文中には一部、旧仮名遣い等や現代において不適切な表現が存在するが、辻山氏の原文を尊重して訂正・削除は行っていない。また本稿は辻山氏の記憶によっているため、年代や人名など記憶違いによる事実とは異なる部分がある可能性があるが、裏付けの調査は別稿を期したい。

（安原コレクション追記）

〔この一段は、拙稿「ラジオ放送と蓄音機レコードが変えた謡曲の質―囃子方にシテ方が合わせる時代へ―」（「椙山女学園大学文化情報学部紀要」平成28年3月発行予定）に載せてある文章に対する辻山幸一氏による追記である。〕

安原コレクションが世に知られることになったのは、BK（飯塚注：BKはNHK大阪放送局）から午後2時？で30分の枠組で「名人のおもかげ」のタイトルで放送され、義太夫は安原氏本人・能楽は沼艸雨（この解説は後に活字化されて…新書版）古典芸能研究室にあります。歌舞伎の解説者は失念。放送開始はS25～26頃、私が最初にセンコー堂を教

えてくれた古レコード屋氏・・・元々クラシックのレコード屋で、LP 盤に転向して三の宮で店を開いていました。大正 2 年の生まれだと聞いた記憶があります。この最期のことは「レコード芸術」に投稿がありました。この人に聞いた話では、安原さんが SP レコードを持って「自分の店に寄った時に放送局（BK）の帰ってくる途中やねん。放送局がこの原板を元に 2 枚コピーをこしらえて呉れるネン。一枚は天理の図書館に渡してる」とか聞いた記憶があります。多分芯がアルミの遠心式の録音盤のことだと思います。この方のご子息にお目にかかったことが一度だけあります。今は確か神戸の住吉に移転してるとか聞いていますが、LP レコード屋（中古）で beethoven のエロイカのウラニヤ盤を店頭でウン十万で出ていたのを買っていたのを見かけたのです。この人は岡山の方の倉の中で SP 盤を LP 盤の最後期（飯塚注：CD に変わる 1980 年頃か）にダビングして東京の会社から出していたといふ、ジャンルに違いはあっても親子二代のレコードマニアだったと思います。

（LP と SP の双方の盤が出ていたこと）

コレクション新派にあるコロムビア盤の「滝の白糸」「日本橋」、これは NHK 原盤を元にしていますが、同じ音源のものを双方買い求めるほどマニアックでもなく当時は「キューキュー」言ってたのが本音ですが、…記憶するところでは NHK が放送で 1 時間に編集したのがカセットのそれで、コロムビア盤では「風もないのにそうぞうしい」のセリフがあるといふ様な珍なる現象が生じています。「有名なベルリンの女子 100 m」のレコードの B 面の「前畑勝った前畑勝った」で終るのが、そのあとにもう「ひとくさり」録音が残されたものが存在するといふことがあるそうですがある意味で通じることでしょう。

（辻山氏の父親　辻山幸平氏について）

途中まで書いて検査入院やら何やら、途中思い出しては忘れして先生（飯塚注：飯塚）と同じ病気の脳手術の前日となってしまって、病室でしまったあと忘れてたですが……どこまで書いたやら申しわけないです。

結局はどういう育ち方をしていてこんな中途半端な人間に育ったかをお話しておきますと、こういふ私が出来上つたかといふと人間生まれ落ちての土壌だと思ひます。私の親父というのがメチャクチャ人間、芸事に凝ることなどもってのほかの人だったのですが、「何の何の」……最晩年に近くなって解ったことは初代の鴈治郎の追っかけまでやった人だったこと。私の生まれた昭和 10 年以前東京まで行ったといふのだから相当な人だったということ。私が買ったブロマイドの女形が誰れだったかわからないことがあり、母が上手いこと御機嫌のよい時に聞くと「お慶ちゃん」（飯塚注:「慶ちゃん福助」という愛称で親しまれた五代目中村福助。現在の九代目中村福助の祖父）と答が帰ったので相当人の代物だったというわけでしてこれが父の方、母の方は御存知の通り（飯塚：本稿後半に述べられているが、母方の従兄弟に往年の大女優八千草薫と、もう一人東宝の社員で役者をしていた人がいること）ですから私を入れて三人が二人は本職、私だけが素人芸人、それでも舞台には上ってるのですから……でもそれが本業にならなかったので救われます。

（丸井不二夫氏のこと）

例の丸井コレクションの丸井さん（飯塚注：「新派・遠きあし音」などの著述がある新派俳優で劇団の事務職員）、あの方などは立派なもので芝居が好きで好きで家出して役者になったと聞いてます。確かお父上がその当時学校の教頭だったとのこと、そして新派の藤村秀夫の門下となり、戦後は番頭さんに転向、それが新派というジャンルが無くなってもそれを追っかけるだけの資料を残して呉れた、かけがえのない仕事を残された由来だと思います。資料として音以外にも三冊の書籍が残っているのはさすがと思います。ちなみに御子息は東大医学部の先生ですからそういふ家系なのでしょうか。さて私はそういった尻尾の一人として出来たことは飯塚先生と大山先生（飯塚注：神戸女子大学古典芸能センター勤務の大山範子先生）に出逢えたという幸運にめぐまれたことです。「ゴミやゴミや」と言われながら何とか集めたものをゴミにせずにすんだ幸せを思わずにいられません。私の集めたビデオテープが神戸女子大の研究室に立派にリスト付きでおさまってるのも嬉れしい限ぎりです。明日には頭の中のバイパス手術が上手く行き、歌舞伎関係の VTR を整理して大山先生にメイワクでしょうがお渡ししてなど、ゴミをゴミでなくする作業が出来ることを願っております。

（神戸の芸能文化土壌と淡路島の素人浄瑠璃）

神戸といふところはおかしな土地でして、新らしいのか古いのか明治まで逆のぼって考へてみても不思議なところがあります。神戸の市街も元々の中心は JR の神戸駅の西南のあたりから神戸市の中央市場の南側にあるわけですが、芦屋の方と須磨にと金持は移住してまして、戦災を受けたこともあり古きもの何もなしお寺＝それもお墓ばかりというわけでして、遊芸を伝える三業地花隈も一軒もなし（親父の古戦場）、能舞台も楠公さんの観世のそれと上田さんの舞台（ここからは大山先生のお仕事）といふことでして、あとは神戸女子大に期待するのみです。

もうすこし大きく見ても、京阪神ということになっても古典芸能については心細いかぎりです。文楽もついに太夫が一人になってしまいました。義太夫といふ語り物の芸でも元々は好きな人が名前だけをつぐと言うのが原則ですが、今の人は親子二代目で例外です。その昔私がおぼえているのは、神戸の中突堤の船つき場で仕事で淡路に行く時に、大きなオッチャンがいましたがジット見てると初老の女性同行です。二人の会話が聞くとはなしに聞えてくるのを聞くと、どうやら鳴門で素義の会に行くのだとわかりました。今から about50 年前のことです。当時神戸から洲本まで船で 2.5h ～ 3h、そして洲本から福良まで小一時間、それから鳴門まで船で 30 分ぐらいですからキチガイでないと、といふ時間ですから気の遠くなる今では考へられない時間。その昔淡路の市といふ近くで仕事場にといらなくなった小学校の講堂を移築した祝いにまねかれて、その時出逢ったのが浄瑠璃ヅクシみたいなことで …… その昔「幕間」といふ雑誌に投稿した …… そんな土壌が田舎も都会にもありません。

（辻山幸平氏と戦前神戸のクラシック愛好サロン文化）

私自身おぼえているのが、第二次大戦で料

理屋などの広い空間が焼けてなくなってましたので、二十畳近い広間があった我が家に目をつけた（付け足したら家の広さは二十畳を越えてました）親父の関係者が貸してくれといふことで月に二度くらいはエンカイをしてました。それに芸者さんが来る（それも戦災で開店休業の）といふことで、芸者はんがメイキャップして着付してまでそして何やらおどるのやらキャーと……を小学校の子供が見るのですから、それがエエとも悪いとも孔子とも孟子とも、よりすり込みがはげしいのですから、日曜日にしか家にいなかった親父が何をしてたか頭の中ではすっかり判ってしまった子供には三味線の音は知らん間に二上りも三下りも子守り歌みたいなものだったと思います。その親父ですが第二次大戦と第一次の間のことでしょうか、神戸にはサロン文化みたいなものがあったらしく文部大臣まで行って亡くなった砂田重民さんの親、これも政治家の家に出入りしてたとは聞いています。クラシック音楽も親父はそこで仕込まれて、後年親父の口からプロンプテュ（飯塚注：おそらくシューベルトのピアノ曲「プロンプチュ　ハ短調 op.90-1」のこと）といふ言葉が出て来たのにおどろいたおぼえがあります。

（歌舞伎に触れ、国文好きになる）

そして母のことになりますが、親父が戦後、とにかく三木本に次ぐ真珠の取引量があったとかで戦後の神戸の一つしかない会社の社長とやらにまつり上げられ月に一度は GHQ との折衝に東京に行く間に、ナイショで歌舞伎を見に行ってました。それがお話した「中学二年生に歌舞伎に見参した」ことにつながります。そして後年、私のことをこんなことになるとはと嘆いていましたが、植えつけて肥料までやってそだたないはずはありません。猿之助（初代猿翁）の小鍛冶で「足を見ときなさい」とあどばいすするのですから。それによくないことに「甲南」という学校での 10 年に浜口博章先生と出逢ふという不幸が加わってしっかりと国文学漬けが出来上りました。もって生まれた道楽に、親父のように芸者さんとは近ずきになりませんでしたが……芸事はいたってすきになってしまいました。

（レコード収集と新内コレクション）

手元に資料のないまま書いていると思い出したままに書くことになりましたが、新内にしても一番に聞いたのが「新内流し」victor 盤（富士松喜昇社中）でその内にあった「蘭蝶」の一くさり……king 盤岡本文彌へと連がり、あとはあの通りになって新内コレクション（飯塚注：ホームページ「恵理人の小屋　辻山幸一コレクション新内」http://zeami.ci.sugiyama-u.ac.jp/~izuka/erito1/tujishinnai1.html）が出来上りました。その新内から三月書房の吉川志都子さんへと連がるわけですが、その吉川さんも桧書房にいてゴマの数を勘定するのがいやでいやでと聞かされてます。甲南という学校、16 単位は他学部のを充当することが出来るという項目を見付けた時のうれしさ。経済学部を、親父にナイショで文学部が聞けるということでニコニコして荒木良雄先生の国文学概論（古典をいかに近代小説が取り込んだか）、国文学特講世阿弥四番目物……など。加えて上田能楽堂が出来た頃でして、神戸能楽鑑賞会があと最後の数回。香西精先生も聞かせて貰えて。あとは私のことです。歌舞伎も新劇もお能も皆一緒。自己流に

本も読み、見に行きで自己流に消化して現在に至る、ですか。古典についての消化は浜口先生に教室で教えて頂いてといふわけで、とにかくムチャクチャです。その間に私としては「お茶」にのめり込んで､つまりは「お茶」を中心に焼物から何やかや……しかしこれは奥が深すぎて…今年の光悦会が手術日とは……残念ですが生にかかわることでいさぎよくあきらめます……クラシック音楽……とにかく八つ手のごとくあれにもこれにも手をひろげて、もうすこし生かしてもらわんと締めくくれないというのが私の道楽人生です。

もうすぐ消灯の時間。10 代の頃から 80 歳を一気に書き飛ばしてきましたが、凡人の私、ねられるかどうか。何しろ頭の手術ですから。その時にショウもない事を思い出しました。地方の旧家の蔵の掃除・売りはらいに行く古道具屋に聞いた話ですが、ケースに入った古レコードを持って帰ってくれと頼まれてことわるといふ話。出たらもらって来てと頼んだけどそこまでの話。一流の方の道具屋で聞いた話。私自身高架下の古道具屋で洋楽の片面盤を生ブの袋入りで求めたこと。本当のロー管を見付けて価を聞いて、誰れも買わんだろうと多加をくくって次の日に行ったらなかった話。私自身大事に本と入れてある入口のプレハブの物入にあるはずの中村鴈次郎の SP 盤がみつからないことなど、イライラしてる間に十年位すぐたってしまったこと。前進座の地方巡業の舞台でその他大勢に地元の劇団の下ウケで出て、トビの者に出たのはいいがハンテンの衿が抜けてて裏にいるおばあちゃんにドヤされたことなどチョロチョロ思い出しはしますが、ここいらで止めることにします。

（辻山氏が見てきた名人達）

うだうだとメモなしにここまで書いてきて思い出したのは私の見た名人たち。能楽はまだノータッチ。そりゃ歌舞伎に関しては暖習会的な切符が家に転がってることもないといふ堅くて軟かい家だったので入手の方法等は学習ずみのこともありましたのですが、お能の世界だけはもう一段も二段も高く、甲南と言ふ学校が狂言を秋の文化祭に一番は出していたので善竹彌五郎さんの最晩年の舞台を見る機会を得ました。新制になってからの高校で私は五回ですから、先輩の狂言をおどろきの目で見ました。清酒の忠勇の若林さん、私の一年下の武智鉄二の兄弟などなど。その頃の私はウイリアム・サローヤンの「My Hart is Highth Land」（飯塚注：原文ママ）。よくやったと思います。それまでは大学生の女性の助人にたのみ、モリエールのミザントロープなど学園祭でしたのですから、正に文化祭と言えるでしょう。そのあと補導課に終戦時陸軍少尉という先生が座るようになり、自由さはなくなり女の役は男がせよで女形といふことになりました。

しかしこりない男の辻山幸一さんは歌舞伎を見ることは止めず、母の腰ギンチャクでお茶にもせっせと精を出すといふ事になりました。ここで知った無茶苦茶に奥行の深い世界には驚きの他ありませんでした。入札目録の戦前出されたものに見開きページ「札元」と名を連ねている道具屋さんに戸田彌七商店があります。ここの番頭さんに青山栄太郎といふ方がいて、いろんな事を教えてもらいました。その内に道具に関係のないことがあります。それは船場言葉です。書いた言葉、つまり文字に残したのは牧村史陽（上方文化研究）

と山崎豊子です。山崎豊子の小説「のれん」「ぼんち」、使われている言葉・字面だけでは西洲さんのかごしまべんですが、何ともやわらかい「ごわす」です。それが10年たたない間、私がそれこそ船場で社員としてつとめた頃に完全に消滅していました。それでも大阪美術倶楽部になっていた鴻池の本家の主人の部屋や台所はそのままで使われていました。その鴻池家の横丁にあった鰻家に「半助有り〼（＝ます）」と書かれた木札が下っていたのを思い出します。半世紀たってそんなこと思い出すなんて我れながらあきれます。その戸田彌七商店ですが確か名古屋から入られた方があとをつがれています。

脱線してしまいました。その当時、関西歌舞伎が大騒動からまともに芝居が打てなくなって見るものは何もなしという時になりました。元々はその当時、武智鉄二をはじめとする関西の批評家がボロンチョンに関西歌舞伎をやっつけたのと、時を同じくしてTVが普及して居ながら見れるといふ事ですが、確かに関西の評論家は基本としては旦那が基本ですから「好きな事を言って何が悪い」です。この生き残りが権藤芳一さんです。絶対にヨイショナシ。それと同時に扇雀ブームに取り残されたぬるま湯につかった面々、先年亡くなった富十郎さんが気の毒の限りです。その富十郎が最晩年にTVで見た「うかれ坊主」、手の動きがふぐ三津さん（飯塚注　八代目坂東三津五郎ふぐ毒中毒のため1975年（昭和50年）1月16日に急逝した。）の前の名人三津五郎に手の動きがそっくりなのに見ていておどろきました。この人もおどりでは天下をとったと思います。今の藤十郎は一人残りましたが、とにもかくにもこの年まで華があるとはすごいことです。

（辻山氏と能楽・オペラとの出会い）

私も前述の如くあれやこれや万事（ヨロズゴト）に首を突っ込み、仕入が「能」という事になりました。そこで母の友人の、言ふなればお謡をしている方に「見るものがない言うて今度は能や」としゃべったのが、荒木先生の国文学特講が役に立ったといふか何か、上田照也さんの門人のお弟子さんと言ふことでこれはと言う能の会の切符が届くと言ふことになり、サラリーマン時代後期にはシッカリと勉強させてもらふこととなり、一週間のスケジュールが映画・劇場・古本屋（もちろんレコードさがしも込ります）巡と、よくあんな幸な時間はなかったなあと親の仕事の真珠屋を……淡路島へ島流……なるまで飲めないのが幸いしたということでしょうか……。何しろ酒食料品の問屋ですから強い人間は無茶苦茶に強くなりますが、下戸はどうして逃げようかそればかりでした。問屋ですからビールは積み上げてあり空瓶が一本転がってたら不可。一函だったら得意先からの引取（空瓶も商品です）でバレません。期末になって数が合わないのを仕入が四苦八苦してました。毎日120函がトラック一台で入ってくるのですから。ですから帰宅時間はもう無茶苦茶…その時間を道楽につかったと言ふわけです。

忘れた……それにオペラ。これにも多くの時間とお金をつぎ込みました。当時テープレコーダーのオープンリールの花やかなりし頃ですが、これを元にした海賊版がアメリカで出廻ってることを知った私は何とかしてあの手この手で入手してこれも面白かった。しかしこれで解ったことは海外のレコードコレク

ターの質の高さと奥の深さでした。その当時クラシックレコードの月刊カタログがあり、それで日本から発注すると（私の場合ヤマハ）三ヶ月先には届くといふ……正期盤……しかし高かった。ヘンデルのアルキーナ三枚組が、当時 2800 × 3（飯塚注：原文ママ）が一ヶ月の給料ほぼパア、それを黙認してくれてた親父もわかい時にいい方の道楽をしてたから、飲まない分……ということだったからでしょうか。

これは書いてるかもしれませんが、私の生まれた時…当時は家でサンバさんが来て、が常識の時代。まず家に父親がいなかったこと。それをしらせたのは先ずおばあちゃんだったと思います。電話を受けたところは待合か料理屋か、芸者をはべらしてスチャラカチャンの最中で、その先が時代を先き取りした投ヒヨウで決まったのが私の名前で、親父の名の幸平から一字をとつて幸一に決ったとか。いやはや芸事に対する私の宮仕はここらに端を発してるのかもしれません。

話が脱線しました。実は私、家内の謡も立ったところも一度も見ていないのです。結婚が決まってチャンスはあったのですが……前述の母の友人が式の当日、私に「村雨留舞うなんて大したものよ」と言ってくれたので……この人が太鼓判を押してくれるならと思った時は「後のまつり」、おしいことをしました。私の舞台も、スナップ写真はあっても他はなにもなし。半世紀前はそんなものです。調子に乗って書き飛ばしましたが、目下頭の中は狂ってないでよしとしなければならないので、何を書いたか見返してないので……こんなええ加減な思い出話、自分でもええかげんなここまでの半生です。大山先生に出合って飯塚先生といふ方にお目にかかれて幸せだったこと、丸井不二夫さんのテープコレクション（新派）も私蔵に終ることなく伝えられたことに感謝の他ありません。元気になりましたら何とかテープをデジタル化する仕事に手をつけたいと思っています。

（安原仙三氏とご子息）

病室でポートライナーを眺めている時に、あれ書いたかなと思い出します。安原仙三氏御自身の、レコードコレクターとして書かれたものは確か上方に「末尾に続く」といふ記述で尻切れの記事を見たのが最初です（第二次大戦前）。戦後は「文楽」といふ大阪出版の雑誌に……丁度「名人の面影」の放送の出た頃に大阪で見付けて、外とう…着てられたものでまいて電車のラッシュを外して須磨に持って帰った苦心を書かれているのを見た記憶があります。大隅太夫の鰻谷です。これも出張録音で抜けがあったはずです。この出張録音の片面盤（コロムビア）は、厚くて一見丈夫に見えてポカット割れるヤッカイな取扱注意の代物です。ついでに思い出したのは、この安原さんの御子息に 10 年もっとになるでしょうがお目にかかったことがあります。この話は重複になるかも知れませんが…親子 2 代…どこかで連がっていると思います。

（海外の海賊盤）

海外の海賊盤の話、パイレッシー行為でも海外のは徹底してます。LP 盤時代の後期、メトロポリタン歌劇場でローマ歌劇場の出張公演があり、日本と興行形態がちがうのでイタリアでプロデュースしたものを持って行ったわけで、コーラスオケがどうだったか。面白

いのはその海賊盤、公開された放送が一切ないのにです。どうも客席の右と左にマイクをもって入った海賊さんが、外に電波を飛ばして外で録音したとしか考えられない代物です。アメリカのコレクターの話のつづき。この海賊盤のレコードボックスの絵の筆者が日本人の女性。念のいったことにこの女性の旦那の日本人が、私の先輩の会社にいた老人。こんなこともありました。

捨てられる前にお願いしたくて、孫も卒業したアンパンマンとは分類したく思っています。半世紀近く前に子供達の、今の孫の年齢の頃の 8mm を「ヘソクリがたまったら」…で DVD 化していますが、していてわかったこと。娘のダンナの写したビデオの中には、どこかにあるはずの私の若い時代の「サッソーと動いている映像」は一切なしという事実。瞳ちゃんの旦那、谷口千吉先生の書いた資料、その他資料が意外にないということ。没後「黒澤明研究会」からフィルムグラフィー、それが編まれましたが東宝でも 100%、映画すべては残っていないと思います。残せば量的にどうなるか。デジタル化という手段がかなりそれをゆるしてくれていると思いますが、残すということ、「スタートはオール」でかからなければ残らないと私の経験からは判るのです。唯々家族からはヒンシク（飯塚注：原文ママ）の的になることは間違いありません。

（古い録音の価値）

高木浩志の「文楽の芸」。病室に持ち込んで読んでいましたら、S25 年からこの本の出された S59 年まで義太夫を録音してた人の事がありましたがどうなりましたやら。私でも朝の能の時間を何となく録音していて何時の間にやら演者がいなくなっていたといふことに出くわすことがあります。大したことのない人が何か名人あつかいで紹介されたり、世の中はわからないものです。この世に一日でも長生きして、残せるものをより分ける仕事をしたいと思います…今度の歌舞伎篇のトリに九代目・五代目の紅葉狩などどうかと思ふのですが。

善竹彌五郎さんが文化財保護委員会に残した録音が、何かで読んだ話に行方不明とか何とか。近年の文化財研究所の目録に、名前は失念したが演劇研究家の蔵だったとかでそれらしいものが見える。NHK ですらケチって、そう言った録音分が何があるかを公開していない。ヨーロッパの歌手で最古の録音らしいものがあるとわかると、それを国家としてケンショウ付でさがしているという話が半世紀近く前にあったが、日本では戦前に大山巌のロー管に入れたものが残っていたのが再現出来なかったと「レコード文化発達史」（山口亀之助）かで見た。で、もう（飯塚注：蠟管録音は）無茶苦茶に高くて私も買うのをあきらめた。しかしあちらではエジソンにはじまる声が残っているし、手にも入る。いつぞや先生（飯塚注：飯塚恵理人）にも御迷惑をかけた丸井コレクションのレコードも、東芝レコードが同時に吹込んだと思われるものとその元々の一連のシリーズと、同じく「日本吹込事始め」といふタイトルで CD 化されているのにと「何を思ってるのや」といふ気分。でも丸井さんが残して呉れたコレクションが、完全に死んでしまった新派の芸を何らかの形で後世に伝えることが出来たと思ふし、歌舞伎学会誌にのったディスコグラフィーといふ文字だけによる資料による研究に役立つこと

と思ふ。

近年の話になるが、イタリアでとった口パクものの蝶々夫人も数年前にCD化されて残ったが、時代劇（日本映画）の中に入った「能」のコマ切の映画シーンですら今おさえておかないとといふ気持ちもある。「あの映画は面の下の演者のエラ」が見えるので××だと「演劇評論」だかで読んだ記おくがある。数巻の古い録音しかない、名人達の芸のかけらもない古文化財の不幸をなげきたくなる。私のとりためた能楽のVTRは大山先生に助けてもらって神戸女子大にある。残るは歌舞伎・文楽篇、と思いは飛びます。

さてここまで書き飛ばした自伝めいた人間形成史みたいなもの。読んでみて（目で拾ってみて）女篇の残いことに気がつきました。あれを書くにもこれを書くにも、女篇がすくないのは仕方ありません。同じ高校のクラスで結婚したのが最後だと思ってたらブービー賞といったことですから、手ブラより増（まし）ですか。女房・子供・孫全部女。亡くなった義兄の家内の姉･･･（9＋1＝）10人。手も足も出ません。幸わ（飯塚注：原文ママ）せと申す他あります。半世紀前サラリーマン時代からつき合って今に至る女性の一人いるだけ。素人絵描きますがしっかりした思想をもってテキパキした女性で旦那もしっています。これが一度家へうかがい、旦那の本箱岩波の青帯が「全部あるのでは」の量、上には上がいるものです。今、私の枕元には「何でもそのあたりに積んであるのでいいよ」と言ったら、サガンの「サラ･ベルナール」、藤原新也「チベット放浪」、澤野久雄「言葉のない手紙」、津本陽「名臣伝」、郡司正勝「鶴屋南北」、高木浩志「文楽の芸」、河出ムック「マリアカラス」、桂宮本叢書「私家集巻の一」。これが私の人生だと思います。

（辻山幸一氏の御両親）

それにしても私の親のルーツというか何かと言ふと、雲と霧とは言いませんが、私も見当はついていますが無茶苦茶な人だった。事実だと思います。戦前、印度人相手の布を輸出をしてたのも事実ですし、家の中にミミズみたいなインド文字の手紙があったのも覚えてますし。戦後その家族がひとかたまり日本に来て、1～4夫人プラス子供、その内3やったか4やったかの夫人が日本人。母も知ってしゃべってた記おくがあります。進駐軍相手に、子供心にあのあやし気な英語で通じるのかと、英語でやり取りするのは見てました。そこまでで止めとけばよかったのが晩年の真珠屋。巻き込まれた倅こそ災難です。それがなければ船場の酒食料品問屋の番頭さんの末席ぐらいで、安月給をぼやきながらくらしていたことと思います。

又、母方もつまりは珍なる方に属すると思います。母に聞いた話では、長持から引っぱりだした刀でチャンバラしてたのが兄、つまり私から言ふオジサン達で、母の一番上の兄が八千草薫のお父さんというわけです。先年大山先生の発掘した大阪能楽殿。彼女としたら当時、つまり戦前あのあたりに住みプール女学校に行っていた彼女。毎日に、近く見ていた大阪能楽殿を見た生き証人と言へます。宝塚では新珠三千代の一年下だったと聞いています。もう一人の役者は母の妹の長男･･･何かの間違いみたいに役者になってました。東宝芸術座が菊田一夫で出来上がった時に井上孝雄なんかと同期のはずで、台詞もあって

プログラムにもA・B・Cでなくそれなりの役名もついての東宝の社員のはずです。ですからあの当時の芸術座が、その時その主役の寄せ集めですから子ガイの役者を一人づつ主役につけてたので、およそいろんなものをしています。それに私・・・学生役者・・・大学の時に・・・「お茶と同情」、映画化された時の主役はデボラ・カー、という舞台の主役で・・・・・・一寸は有名になりました。あんな役をしたおかげで一寸は有名になりました。「イトコ」三人かくなる次第でして。

手の器用なのはこの母方の祖父が戦前、別府で松田式竹細工という竹の小物細工の先生をしていました。竹の産地で細い枝などロスになるものを素材にして、今でいふ民芸の先生です。これも何も残っていない。私の大事にしている雛人形が二点、これだけ。本が一冊書かれています。かく左様に残っているのは母方から数えてみてもそれプラス2人で、明治からで私を入れて5人が残っていて、その内の3人が何らかで芸の世界に首を突込んでいます。エエのやら悪いのやら。

ここまでウダラウダラ書き飛ばして先生のこと。上は荒木良雄先生、前述の浜口先生、高校時代に講師でいらしてた吾郷寅之進先生。自分自身のしたことに先生の専門の教えを受けたかった方、本田義憲先生。今から思ふと岩波文庫のリルケの詩集をもって現われる・・・・・・大学が出来ると一転してあやし気な先生は数を増し、いい先生は大学と二分された感があります。我々生徒も、あだなはつけてもソンケイ（…）すべき先生と、受験屋とさげすんで見る先生とふるいにかけてしまいました。ここらで手術の糸もとれて傷口もきれいとお墨付が出ましたので、「おわり」にします。

おわりに

以上が辻山幸一氏の書簡である。この原稿をまとめている平成27年12月28日現在で、辻山幸一コレクションのうち飯塚研究室に移送・整理・保管されている、放送と関連するレコードの約75％がデジタル化を終えている。これらは後世に放送文化として遺すべき貴重な一次資料である。しかしながらまだ、落語を中心として25％程度のレコードが残っているし、辻山氏の御自宅の物置に未整理のまま保管されているレコードもあると伺っているので、全体を整理・デジタル化を済ませ長く保存できる形にするためにはなお数年を要する。貴重なコレクションなので「メディアと古典芸能研究会」の事業として継続的にデジタル化を進め、すべてを後世に遺したい。

補記　貴重な書簡の掲載を御許可下さった辻山幸一先生、「メディアと古典芸能研究会」の皆様、大山範子先生並びに神戸女子大学古典芸能センターの皆様に感謝致します。本稿は平成26年度放送文化基金助成及び平成27年度椙山女学園人間学研究センタープロジェクト「日本・アジア文化と人間」の飯塚担当分成果の一部となります。記して感謝申し上げます。

「環境と人間」プロジェクト2015年度活動報告 保育者および教員養成課程における環境教育の実践ー椙山女学園大学教育学部(名古屋市)の事例2007年～2015年

Activities of Environmental Education on a Course of Teacher Education: A Case in School of Education, Sugiyama Jogakuen University, Nagoya, Japan, 2007-2015

椙山女学園大学教育学部准教授
野崎　健太郎
Kentaro Nozaki

キーワード：教員養成課程，環境教育，自然体験，伝統的な食文化，人間関係
Key words：teacher education, environmental education, nature experience, traditional food culture, human relation

はじめに

2007 年に教育学部子ども発達学科が設置され 10 年間が経過した。この間、筆者は、保育者および教員養成課程にふさわしい授業の在り方を模索し、実践を繰り返してきた。教育学部では「理科」と「理科教育」を専門に担い、今日、アクティブ・ラーニング（Active Learning）と称される学生参加型の授業形態を実施し、その教育効果を検討してきた（野崎，2010；野崎，2011a；野崎，2012a；野崎，2013a；Nozaki *et al*.，2013；野崎 2014a；野崎，2015）。加えて、椙山人間学研究センターで「環境と人間」プロジェクトを立ち上げてからは、教員養成課程における「環境教育」の確立に力を注いできた。本稿では、この 10 年間で確立してきた手法を用いた 2015 年度の実践を紹介する。

環境の科学

教養教育科目であるが、保育者や教員となって現場で環境教育を実践する際に活用できる知識と技術の習得を目指した（野崎，2014b）。学校ビオトープを用いた水生生物の採集および水質調査の実践（野崎・宇土，2011；野崎・森，2012；野崎，2013b；野崎 2014c；

写真1. 大学のビオトープガーデンにおける水生生物の採集（2015年4月21日）

写真2. パックテストを用いたビオトープの水質調査（2015年4月21日）

写真3. 教育学部敷地内の空き地を開墾する（2015年4月27日）

写真4. 冬野菜の栽培を目指しての開墾作業（2015年10月5日）

吉川・野崎，2014）、教室で簡便に実施できる化学分析（野崎，2012b）を授業に取り入れた。

写真 1、2 は 2015 年度前期の授業で行った大学のビオトープガーデンにおける水環境調査の実践である。受講学生たちは、このような人工の小さな池にも 3 種類のヤゴ（トンボの幼虫）、ミズムシ（甲殻類）が生息していることに驚き、夢中になって採集活動を行っていた。水質は現地ではその値の意味が実感できなかったようであるが、次の授業時間に、結果を図表にまとめ、椙山女学園大学附属小学校のビオトープ、東海地方の主要河川の水質と比較させることで理解を深めた。

生活科

小学校 1、2 年生の教科で行われ、保育の学びである“遊び”から、小学校での“学習”へのつなぎとなる教科である。授業の内容を「生命と食」に絞り、野菜の栽培、収穫した野菜の調理、会食、地域の食文化を学ぶ社会見学を行っている（野崎，2011b；野崎 2012c）。

写真 3、4 は、2015 年度前期および後期の開墾である。粘土質の土壌に苦戦しながらも、鍬やスコップを楽しげに振っていた。農器具の安全な使い方、肥料の種類と効果、教材としての種子と苗について体験的に学ばせた。

野菜を栽培する上で、「間引き」は必須の作業であるが、生活科ではこれを「いのちの教育」の教材として活用した。間引きは、人間が食料を得るために、人間の都合で小さな苗を引き抜く行為であり、受講学生には、それを美化することなく、失われるいのちに向き合うことを求めた。間引いた苗は、お雑煮やパスタの具材として受講学生と料理して味わった（写真 5、6）。なお、お雑煮の出汁は、日本の伝統的な食文化を実感するために、昆布と鰹節でとった。

前期はジャガイモと夏野菜のカレー、後期はサツマイモと冬野菜の鍋を調理して会食を

写真5. 間引き菜を具材としたパスタづくり（2015年6月8日）

写真6. 間引き菜を具材としたお雑煮づくり（2015年10月26日）

行っている。お世話になっている先生方、先輩方をお招きし、会話を楽しみながら、共に食べる“共食”の意義を実感してもらっている（写真7、8）。なお、後期は化学調味料を用いずに、塩と昆布だけで漬ける白菜漬けを仕込み、2016年1月には、冬野菜の鍋とともに収穫祭の会食を行った。野菜の栽培活動や調理実習を行う中で、伝統的な食文化への認識が高まってくる。これを定着させるために愛知県豊田市の味噌蔵、野田味噌商店（枡塚味噌）の見学を行っている（枡塚味噌 web site：http://www.masuzuka.co.jp/）。この味噌蔵は三河地方伝統の豆味噌を木の樽で1年半寝かせる天然醸造にこだわっている。筆者は教育学部着任前に、豊田市の戦争遺跡を学

写真7. 夏野菜とカレーの会食（2015年7月20日）

写真8. サツマイモの収穫祭（2015年12月7日）

ぶ会の催しに参加し、旧日本軍の飛行機格納庫を蔵として持つ枡塚味噌の野田清衛社長（無限責任社員）、野田麻規子専務夫妻に巡りあった。教育学部ではぜひ伝統食に関わる授業をと構想していたため、思い切って見学を申し込んだところ快く受け入れていただき、

写真9. 枡塚味噌「蔵の食育学校」での野田社長の講義（2015年12月5日）

写真10. 自給率100%の材料を用いた五平餅づくり
（2015年12月5日）

2008 年以来、現在まで年 2 回の見学をお願いしている。見学当日は、旧鳳来町の廃校から移設した机、椅子、額縁が並ぶ蔵の食育学校で、野田社長自らの熱い語りに学生はみるみると引き込まれていく（写真 9）。加えて、豊田五平餅学会の事務局長を兼務する枡塚味噌営業の稲石さん指導の五平餅づくりの体験は、大変に楽しいひと時である（写真 10）。

受講学生には事前学習として、「発酵」について、大人向け、子ども向けの説明を考えさせ、その結果を班（3 ～ 4 人）ごとに 3 枚の報告書にまとめさせる。この報告書は、事前に野田社長に送り、当日の授業の材料としてもらっている。社長から「発酵」について質問され、表面的な回答をしても、それが真の理解とはほど遠いことに気づく、これが学びの理想的なかたちの 1 つであろう。野田社長は「子どもたちは正直だ。おもしろくなければ聞いてくれない。そして大人の嘘をすぐに見抜く。」と受講学生たちに語りかけてくれる。そして、「俺たち味噌屋は味噌をつくっていない。味噌を見守っているのだ。教育もそういうものではないか。待つことも大切だ。」と続く、そして“ ひとなる ”という言葉を引き合いに出しながら、「人間になるのを待とうじゃないか。」と結論付ける。この話を聞き、教師になった卒業生が、「学生の頃、ここで良い勉強をしました。」と言って、再び子どもたちを連れて見学に来る。野田社長はこれがたまらなく嬉しいとのことである。事後学習では、野田ご夫妻と稲石さんに自筆の手紙を書いてもらう。このように社会見学の際には、多忙な本業の時間を割いて対応してくれる現場に丸投げすることなく、学校側もいかに準備して臨むか、そして、それが良い効果を引き出す、ということを実感させている。

ケースメソッド

愛知県、名古屋市の水道水源である木曽川の上流、長野県木曽町福島で 4 泊 5 日の合宿形式で行っている。筆者が人間関係学部在籍

写真11. 河川源流部の調査（2015年8月10日）

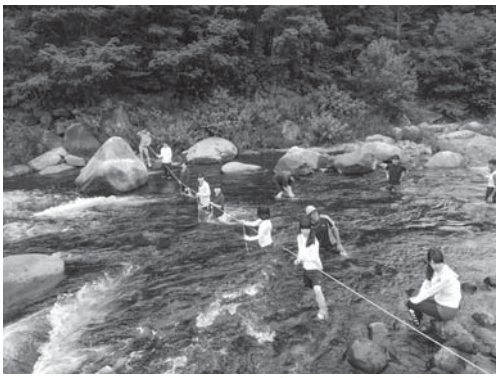


写真12. 木曽川での調査（2015年8月11日）

時から始め（野崎，2008）、教育学部に異動後は、高知大学理学部生物学科との合同で実施している。この授業に用いる教科書も 2 冊編集した（日本陸水学会東海支部会編，2010；2014）。授業内容は、地形、水質、水生生物の調査を行い（写真 11、12）、それらを組み合わせて河川生態系の仕組みを理解させることを中心にしている（野崎，2012d；山本・野崎，2015）。受講学生たちは、複数の情報を組み合わせて 1 つの話をつくる作業に慣れていないが、現実社会の課題は、ほとんどがそのような解決策を用いる必要がある。その訓練とも位置づけている。

調査以外にも、水泳、焚き火、魚釣り、自炊といった楽しい内容も盛り込みながら、共同生活を楽しんでいる（写真 13、14）。この

写真13. 川遊び（2015年8月18日）

写真14. 焚き火で焼いたトウモロコシを頬張る（2015年8月11日）

実習を通じて、教育効果を検討したところ、「人間関係を構築する大切さ」が浮かび上がってきた（野崎，2013c）。受講学生からの意見をまとめてみると、自然は個人では太刀打ちできないことがある。しかし、仲間と協力すればできることが大きく広がることを学生たちは実感した。ここから社会における共同作業、すなわち人間関係の重要性が理解されたようである。ともに自炊し食事をとる楽しさも格別のようである（写真 15、16）。ここでも“共食”の学びが実践できている。

写真15. 楽しく会食（2015年8月13日）

写真16. 楽しく会食（2015年8月18日）

今後の課題

この 10 年間の実践により、授業内容は確立してきた。しかしながら、教育効果については明確ではない（野崎，2013a；野崎 2014b）。

今後は効果の測定方法の開発を含め、実践を見直す時期に入っていると考える。

謝辞

環境の科学における実践では、教育学部教授 / 元附属小学校長の宇土泰寛先生、附属小学校教諭の森昌彦先生、生活科の社会見学では、枡塚味噌の野田清衛社長、野田麻規子専務、稲石さん、ケースメソッドでは、高知大学理学部生物科学コース講師の加藤元海博士にお世話になりました。ここに深く感謝いたします。

文献

日本陸水学会東海支部会編(2010)身近な水の環境科学, 朝倉書店, 東京.

日本陸水学会東海支部会編(2014)身近な水の環境科学(実習・測定編) − 自然の仕組みを調べるために − . 朝倉書店.

野崎健太郎(2008)体験型の水環境教育の実践 ～人文社会学系の大学生を対象にして～ . 椙山人間学研究 , 4, 57-68.

野崎健太郎(2010)小学校教員養成課程の大学生への教材体験を通した「理科」学習の実践 . 椙山女学園大学教育学部紀要 , 3, 85-95.

野崎健太郎(2011a)小学校教員養成課程の「理科」における鮮魚(マイワシ:Scadinops melanostictus)を用いた解剖実習 . 椙山女学園大学教育学部紀要 , 4, 95-102.

野崎健太郎 (2011b) 植物の成長観察を用いた大学生の科学的素養(科学リテラシー)教育の実践 . 椙山女学園大学研究論集(自然科学篇), 42, 27-33.

野崎健太郎・宇土泰寛(2011)小学校のビオトープを活用した大学生の水環境教育 − 椙山女学園大学教育学部(愛知県名古屋市)の教養教育における実践 − . 椙山人間学研究, 7:148-155.

野崎健太郎 (2012a) 小学校教員養成課程における模擬授業を導入した「理科指導法」の学習の立案と実践 − 授業を準備し実践するまでに必要な時間経過を理解するために − . 椙山女学園大学教育学部紀要, 5:165-175.

野崎健太郎 (2012b) 人文社会学系の大学生を対象とした陸水環境教育の実践 − 講義科目への利き水, 水質分析および BOD 試験の導入とその評価. 陸の水, 54:11-18.

野崎健太郎 (2012c) 保育者・小学校教員養成課程の「生活科」授業における生命と食の学び. 椙山女学園大学研究論集 (自然科学篇), 43:1-12.

野崎健太郎 (2012d) 保育者・小学校教員養成課程における河川調査実習の立案とその教育効果. 日本生態学会誌, 62:51-58.

野崎健太郎・森昌彦(2012)保育者・教員養成課程の大学生への環境教育および研究の場としての椙山女学園山添キャンパス (愛知県名古屋市千種区覚王山). 椙山人間学研究, 8:181-184.

野崎健太郎 (2013a) 自然科学系の大学講義における期末試験の得点と事後学習との関係. 椙山女学園大学研究論集 (自然科学篇), 44:1-8.

野崎健太郎 (2013b) 教員養成における陸水学の研究手法を導入したアクティブ・ラーニング形式の環境教育の実践. 椙山人間学研究, 9:194-199.

野崎健太郎(2013c)第 5 章 河川実習を通じた人間関係への気づき − 自然体験学習が大学生に及ぼす影響. 人間関係の諸問題:渡邉毅(編

著），p.101-114, 中部日本教育文化会, 名古屋.
Nozaki, K., Mori, Y., Mori, A., Mori, A, Ootake, S. and Iwasaki, K. (2013) Preliminary research on paper rotor (Kami-tombo) as a craft teaching material: effect of wing width and length on rotor flight time. *Journal of the School of Education, Sugiyama Jogakuen University*, 6: 355-361.
野崎健太郎（2014a）生物学教育における有性生殖の教材としての糸状緑藻アオミドロ属（車軸藻綱）の有用性. 椙山女学園大学教育学部紀要，7：295-299.
野崎健太郎（2014b）大学教養科目の環境学におけるアクティブ・ラーニングの効果. 椙山女学園大学研究論集（自然科学篇），45：119-126.
野崎健太郎（2014c）設置後 5 年を経過したビオトープの池の水質と水生動物相－椙山女学園大学星が丘キャンパス（名古屋市）のビオトープの事例－. 椙山人間学研究，10：173-176.
野崎健太郎（2015）糸状藻アオミドロ属（ホシミドロ科 Zygnemataceae，*Spirogyra* 属）の接合過程を教材とした有性生殖の学び－小学校教員養成課程における実践－. 椙山女学園大学教育学部紀要，8：159-167.
山本彩莉・野崎健太郎（2015）：木曽川上流域（長野県木曽町）におけるスナック菓子とセル瓶を用いたコイ科魚類アブラハヤ（*Rhynchocypris logowskii steindachmeri*）の採集：自然体験学習の教材としての予備的研究. 陸の水，70：35-39.
吉川真由・野崎健太郎（2014）都市部の学校施設に生息する昆虫と生息環境との関係：名古屋市千種区山添町における解析. 椙山女学園大学教育学部紀要，7：173-185.

乳児から就学前幼児までの発達段階を見通した保育の充実―乳児専門保育園から幼稚園への円滑な接続を中心に―

Improvement of childcare that looked through a development stage from a baby to an infant. Mainly on the smooth shifts from a nursery school specialized in baby to a kindergarten.

椙山女学園大学教育学部教授
附属幼稚園園長
石橋　尚子
Naoko Ishibashi
椙山女学園大学附属保育園園長
小林　豊子
Toyoko Kobayashi
椙山女学園大学附属幼稚園教頭
三田　郁穂
Ikuho Mita
椙山女学園大学附属保育園主任
松本由美子
Yumiko Matsumoto

1. 問題の所在と目的

2015年4月から「子ども・子育て支援新制度」が本格的に実施された。保育界の転換期・変革期とも言える制度改革であり、「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」の告示に象徴されるように、国策としての幼保一体化の方向が明示された。それと全く時を同じくして、椙山女学園大学附属保育園（乳児専門保育園）が誕生した。既存の附属幼稚園とは別組織の名古屋市認可園ではあるが、国の動向と無関係では在りえず、乳児から就学前幼児までの発達段階を見通した保育の充実は、今後附属両園が取り組むべき最重要課題である。

「待機児童０政策」の下、ここ数年名古屋市内にも数多くの乳児専門保育園が設置されている。企業参入の影響もあって、それらの園の保育の質の確保が問題視されているが、最大の関心は、3歳児以降の就園先の確保と保育内容の連続性の保障である。しかしながら、就園先の確保はともかく、保育内容の連続性の保障については具体的な提案は行われていない。本研究はこのような保育界の要請に応えるものである。幼保連携型認定こども園とは違った形での幼保の連携、接続の在り方を提案したいと考える。

その取り組みの端緒として、附属保育園から附属幼稚園への円滑な接続について検討する。乳児専門保育園で育った2歳児を、保育園・幼稚園の3歳児クラスに受け入れる場合

に、どのような保育の連続性の確保と配慮・工夫等が行われているのかを、送り手側、受け入れ側の両面から調査し、その問題点を明らかにする。その結果を踏まえて、現行の附属幼稚園教育課程並びに附属保育園保育課程の一本化と、円滑な接続方法について具体化したい。

2. 研究の流れ

本年度の研究の流れは以下の通りである。本報告書を作成している1月時点では、ステップ4が進行中である。ステップ5までの結果を踏まえ、今後さらなる研究の進展をはかりたい。

ステップ1 2015年「子ども・子育て支援新制度」開始時の名古屋市内教育・保育施設の開設状況把握。附属幼稚園には、附属保育園開設前に幼保連携型認定こども園化を目指した経緯もあることから、名古屋市内の認定こども園の開設状況に注目した。

ステップ2 同一法人内の乳児専門保育園から保育園・幼稚園への接続並びに保育の連続性と課題についての実態調査。先進的取り組みを行っている以下2園の見学並びにインタビュー調査・資料収集を行った。

①大阪キリスト教短期大学付属「聖愛幼稚園」「せいあい保育園」：大阪市阿倍野区。大学の附属幼稚園・保育園という形態が一致していることにより抽出。

②認定こども園「ゆうゆうのもり幼保園」:横浜市都筑区。新園舎設計にあたり訪問・協力を得た経緯があること、幼保連携における先進的取り組み園であることにより抽出。

ステップ3 情報の共有と園内幼保連携協議チームの立ち上げ。ステップ2で入手した情報を園内で報告・共有するとともに、乳児専門保育園から幼稚園への円滑な接続方法について具体化するための園内幼保連携協議チームを立ち上げた。メンバーは、本プロジェクトメンバーに、附属幼稚園3歳児主任教諭、附属幼稚園預かり保育担当教諭、附属保育園2歳児担当保育士2名、の4名を加えた計8名である。

ステップ4 園内幼保連携協議チームによる幼保連携会議の実施と連携具体案の提案と試行。現在附属保育園2歳児クラス在園12名の本年度3月卒園、次年度4月附属幼稚園3歳児クラス入園に向けて、円滑な移行を可能とするための協議を行い、具体案を提案し、他の教諭・保育士の協力のもと試行する。

ステップ5 園内幼保連携協議チームによる連携具体案試行の評価と修正。

3. 研究成果

(1)「子ども・子育て支援新制度」開始時の名古屋市内教育・保育施設の開設状況について

「名古屋市の保育（平成27年度）」によれば、「認定こども園とは、就学前の子どもに幼児教育・保育を提供し、地域における子育て支援を行う機能を備える施設」であり、その種類には、「幼保連携型認定こども園：学校及び児童福祉施設として、双方の法的位置づけを持つ単一の施設」「幼稚園型認定こども園：すでに認可されている幼稚園が、教育課程に基づく教育を行うほか、保育の必要な子どもにも教育・保育を合わせて行う施設」「保育所型認定こども園：すでに認可されている保育所が、保育を必要としている子どもに保育を行うほか、保育の必要な子ども以外の満3歳児以上の子どもに教育・保育を行う施設」「地方裁量

型認定こども園：保育を必要とする子どもに保育を行うほか、保育の必要な子ども以外の満3歳児以上の子どもに教育・保育を行う保育所機能施設」の4種がある。

2015年7月時点における名古屋市内の認定こども園数は30園（全て私立園）で、名古屋市内全教育･保育施設562園（国公立幼稚園：24園、私立幼稚園：152園、公立保育園115園、私立保育園：241園、認定こども園：30園）の5.3%である。名古屋市16区の内、東区、北区、中区の3区にはこの時点で認定こども園は開設されておらず、最も開設率が高い南区においてもその率は11.8%（4園/34園）に留まっている。椙山女学園大学附属幼稚園・保育園の所在地である千種区においては、認定こども園は2園（社会福祉法人ちくさ学園：千草保育園、社会福祉法人立任天会：富士見の森こども園）で、千種区全教育・保育施設45園の4.4%である。

このように、現時点での名古屋市内の認定こども園数は極めて少なく、今後の動向が注目されるところである。保育の連続性の確保と配慮・工夫等の観点からも、継続して情報収集していきたい。

(2) 同一法人内の乳児専門保育園から保育園・幼稚園への接続並びに保育の連続性と課題について

訪問調査を行った2つの園から得られた情報や成果については、訪問後に行った報告会で使用した資料を掲載することで、報告としたい。

①大阪キリスト教短期大学付属「聖愛幼稚園」「せいあい保育園」を訪問して

【訪問日時】平成27年7月15日（水）

【訪問者】小林豊子、三田郁穂

【施設設備について】

・保育園は旧制度認定こども園認可に伴い新築。
・1F玄関ホール、厨房は幼保共用。
・職員室は幼稚園教員・園長と保育園園長・主任が使用。保育園職員は2F休憩室を使用。
・2Fは保育園専用スペース：0歳児室8名、1歳児室16名、2歳児室22名の計46名。
・2F中央にやや広いスペースがあり、1･2歳児部屋の壁を移動させるとまとまったスペースがとれる。1･2歳児部屋はつながった空間で家具にて間仕切り。
・幼稚園は別棟。各学年2クラス、すべて複数担任。
・預かり保育は共用ホールにて行う。3歳午睡は保育園内1Fの幼稚園2歳児室で。

【清水千鶴園長への聞き取り結果】

・園の概要：幼稚園は間もなく創立50年。5年前に保育園設立。0～2歳の保育園と3～5歳の幼稚園の認定こども園となる。新制度に伴い、認定こども園の認可を返上し、保育園と幼稚園の別組織とする。
・保育園から幼稚園への入園に関して：2歳児のうち約半数が幼稚園を希望。希望者は幼稚園に優先的に入園できる。入園金が必要。

【幼稚園への滑らかな接続のために保育園が行っていること】

・生活時間の配慮：2歳児後半より幼稚園での生活時間にスムーズに移行できるようにするため、給食時間を30分ほど遅らせ、午睡の開始時間を遅くする。

【幼稚園への滑らかな接続のために幼稚園が

行っていること】

・入園前からの預かり保育の対応：降園前にお迎え児と預かり児に分け、預かり保育児は先に預かり保育に向かい、11 時 30 分に給食を食べ、午睡する。5 月からは 14 時までの保育になるが、預かり保育の 3 歳児は全員 14 時からすぐに 1 時間の午睡、その後おやつをとる（3 月まで）。

【幼稚園への接続のための引き継ぎ書類や会議等】

・書面での申し送りはない。保護者の情報やアレルギーは口頭で伝達。

【幼稚園と保育園の交流保育】

・夕刻 18 時 30 分～ 19 時は合同保育。一緒におやつ。保育士 2 名と幼稚園教諭 2 名の 4 名体制。以前は 17 時からであったが、預かり保育の人数が増えて、危険であるとともに小さい子が休めないため。

・園庭で一緒に遊ぶ。

・年長児が少人数で昼寝時に手伝いに行く。

【幼稚園への入園に向けて保護者への説明】

・保護者が幼稚園か他の保育園かを選択。

・2 月の説明会で年間の保護者参加行事を知らせている。

【幼稚園と保育園の保護者間の交流】

・特にない。

・保育園保護者会が幼稚園 PTA 行事に参加するかどうかは、その年の役員で決めている。

【職員間の連携について】

・月に 1 回不定期で幼稚園と保育園の職員が連絡会議を行う。保育内容、ローテーション、預かり保育、土曜勤務など雑談も。出入り・参加は自由。

・人事異動は給料体系が違うので今はできない。

②認定こども園「ゆうゆうのもり幼保園」を訪問して

【訪問日時】平成 27 年 9 月 24 日（木）

【訪問者】石橋（横尾）尚子、松本由美子

【園の概要】渡辺英則園長によれば、ゆうゆうのもり幼保園は、横浜市のよこはま子育て支援計画中期政策プラン「はまっ子幼保園」構想に基づき平成 17 年に開園した施設。保育園、幼稚園の枠を超えて、子どもが子どもらしく育つことを目的に保育を行っている。平成 19 年 4 月からは、新たな法律に基づき、幼保一体化政策として「認定こども園」となった。常に子どもが育ちあうという視点で、保護者、地域社会に発信できるような施設でありたいと願っているとのことであった。

【子どもの人数並びに職員（全員正規採用）の配置】表 1 に示す通りである。

【職員の勤務体制】

・乳児担当と幼児担当では別の勤務形態をとっている。

表 1

	2 号・3 号	1 号	職員数	担任比率	職員その他ﾌﾘｰ等
0 歳児	6 名		2 名	3：1	主任 1 名 フリー 1 名
1 歳児	10 名		3 名	4：1	
2 歳児	11 名		2 名	5：1	
3 歳児	11 名	50 名	4 名	15：1	光の時間：フリー 3 名 風の時間：フリー 4 名 （遅番勤務 +1）
4 歳児	11 名	50 名	2 名	30：1	
5 歳児	11 名	50 名	2 名	30：1	
合計	60 名	150 名	15 名		9 名
	210 名				

・乳児：いわゆる時差勤務で、7:30 ～ 19:30 の時間帯を交代勤務。
・幼児：おはよう保育＝ 7:30 ～ 8:00 パート 2 ～ 3 名（子ども数は 20 名程度）、光の時間（おひさま保育）＝ 8:00 ～ 17:00 光担任（クラス担当制：8 名）、風の時間（そよかぜ保育）11:00 ～ 19:30 風担任（学年担当制：3 名）の 3 つの時間帯で構成。それぞれの時間帯を 1 年間は専任。
・乳児・幼児合同：ぬくもりの時間の名称で、18:30 ～ 19:30 の時間帯を乳児担当 1 名と風担任 3 名（主にそうじ・戸締り・書類作成）の 4 名で担当。

【情報の共有方法】
・朝礼：乳児担任 1 名＋光担任 8 名で打ち合わせを行う（業務日誌のようなノート有）。
・昼礼：光担任と風担任の引き継ぎ（14:00 頃）。
・他に「乳児ノート」もあり、職員全員が見て園全体のことを把握するよう努めている。
・食事の時間を有効に活用する。乳児主任＋風主任＋光主任で食べながらミーティングをし、情報交換の場としている。

【接続にあたって最も大切なこと】
※ 2 歳児の 3 学期を大切に丁寧に！
・幼保が連携していくことの重要性を、繰り返し強調された。

【椙山で実際にどんな困難が予想されるか】
・子どもは、2 歳児 1 クラス 12 名が 4 クラスに分かれることにより、仲間が分断される不安を抱く。
・子どもは、環境・生活リズムの変化により、情緒が不安定になる。
・保護者は、今までのように手厚くケアしてもらえないことに不満を抱きがちである。
・3 歳児クラス担任は、ほとんど会うことのない保護者との意思の疎通が難しい。
・保護者間の立場上の摩擦が生じる。
・午後の生活を豊かなものにできるか。

【幼稚園への滑らかな接続のために保育園にできること】渡辺英則園長の提案
・2 歳児担任と共に、2F で生活してみる（幼稚園の先生、子どもたちと触れあう。楽しいことがあると知らせていく）。
・生活リズムを少しずつ幼稚園 3 歳児クラス用にスライドさせていく（食事をしたあと間を空けて午睡へ）。

【幼稚園への滑らかな接続のために幼稚園にできること】渡辺英則園長の提案
・保護者との意思の疎通方法を検討する。
・午睡を含めた生活のあり方（養護も含めて）を考える。
・預かり保育担当と担任の引き継ぎを丁寧に行う。
・預かり保育の充実（内容、カリキュラム）。
・幼稚園春休み期間に、3 歳児クラス担任予定者が 2 歳児クラスに入って保育をする機会を設ける。

【幼稚園への滑らかな接続のために保護者にアピールすべきこと】渡辺英則園長の提案
・4 月の保護者会は土曜日に開催するなど、役員や保護者会行事などは全体の場で決める。
・保育園と幼稚園の違いについて丁寧に説明する。
・園が両者を分けた考え方をしない。
・預かり保育事業の説明を詳しくする。

【その他の留意点】
・おやつの時間の検討：14:00 から午睡に入るので、起きた子どもから食べさせるか、

15:00 ～ 16:00 の時間設定で食べさせるか。
・幼保の先生がお互いの子どもたちのことに興味を持つこと。
・4 月の 1 ヶ月間は 3 歳から入園してくる子の預かり保育は断り、保育園からの 12 人のケアに集中する。

(3) 園内幼保連携協議チームによる幼保連携会議の実施と連携具体案の提案

前述の 8 名のメンバーにより園内幼保連携協議チームを立ち上げ、現時点で 2 回の幼保連携会議を実施し、連携具体案を検討している。今後全職員への提案後､実施を目指す。2 回の会議録をもって、報告としたい。

①幼保連携会議（第 1 回）
・開催日時：平成 27 年 12 月 10 日（木）15:30 ～ 16:30
・石橋園長より園内幼保連携協議チーム立ち上げにあたって：保育園から 12 名の園児が来年度より入園することが確定している。その子どもたちの不安を少しでも解消できるように、幼稚園と保育園でお互いを充分に理解し、連携して保育を進めていきたい。そのための具体策についてこの場で検討をお願いしたい。
・石橋園長並びに松本保育主任より：認定こども園「ゆうゆうのもり幼保園」見学報告。
・見学報告書についての質問や、現在疑問に思っていることなどの話し合い。
Q1：認定 1 号、2 号について
A1：1 号は 5 時間保育、いわゆる幼稚園時間の認定。2 号･3 号は延長保育の認定。
Q2：今までも保育園児は沢山来ていたが、以前の習慣で困ったことは一度もなかったか。
A2：0 ～ 5 歳の保育園でも、2 歳から 3 歳への移行は大切にしている。検討の必要あり。
Q3：預かりの時間で、昼寝をどう取り入れていくのか。時間よりも、昼寝の不要な子は起きたままでいいのか。
A3：昼寝がないと必ず夕刻寝てしまうであろう。保育時間が長いので疲れてしまう。4 月などは、今までの習慣でどうしても寝てしまう。検討の必要あり。
Q4：例えば保育園ではトイレのスリッパなど使ったことがないが。
A4：園児がいない時に 2 階に散歩に来て、使ってみては。

今回はここまでで終了。具体的に何をしていくかは、次回以降へ持ち越し。

②幼保連携会議（第 2 回）
・開催日時：平成 27 年 12 月 15 日（火）
・小林園長より：幼稚園児、保育園児の互いの子どもたちの最善の利益を考え、子どもたちが心地よく生活できるように考えていく必要がある。
・三田教頭より：大阪キリスト教短期大学付属「聖愛幼稚園」「せいあい保育園」見学報告。

【幼保の連携の具体案について】
・今回は、2 歳児全員が椙山幼稚園へ入園するが、来年度以降、転園する子どももいるかもしれないことを考えると、幼稚園への入園に向けてということに重きを置くのはどうか？転園児への対応はどうしていくのか？
・子どもが幼稚園入園、他園への入園に向けて、大きくなったことへの実感が得られるようにしていくことは大切である。ただ

し、幼保の接続のねらいは、毎年考えていかなければならないだろう（3歳児以降の就園状況を考慮する）。

【幼保の連携の具体案について：保育園で取り組めること】

・3歳児の戸外活動中や冬期・春期休業期間に、3歳児保育室を使わせてもらう。
・戸外での集団遊び等で子ども同士関わる機会を持つ。
・預かり保育の活動に合流し、一緒に関わる機会を持つ（2歳児は、少人数のグループに分かれて、保育士1名とともに活動に参加する）。
・幼稚園での活動に加えてもらう（幼稚園の子どもたちに負担がないところで可能なら）。
・トイレでスリッパを履くことに慣れる（ぶどう組前のトイレで行う）。
・上靴の使用をしていく。

【幼保の連携の具体案について：幼稚園で取り組めること】

・冬くまクラス（冬期休業期間中の預かり保育）の活動に参加することは、可能である。
・3学期は発表会があり、それに向けての活動も多くなってくるので、クラス（保育室内）での活動に保育園児が入っていくのは難しい。兼用園庭や、砂場で遊んでいるときに交流していくのはどうか。
・休み期間中に、幼稚園の保育室を使うことは問題ない。
・幼稚園の用品（カバン等）を使って、自分で出し入れすることに慣れておくのはどうか。無理のない範囲で。

【これらを踏まえて】

・4月以降預かり保育で使用するため、ハンカチを携帯し使用することに慣れさせる。
・ホールで遊ぶ時に上靴を履かせ、着脱に慣れさせる。
・戸外遊びの時に交流をしていく。交流の可否については、両者の担任で確認し合う。
・冬くまクラス（冬期休業期間中の預かり保育）の活動に参加させ、入園式前（4/1開始）の預かり保育に慣れさせておく。参加にあたっては、担当保育士と充分に連絡・相談する。
・幼稚園用品を使って、幼稚園ごっこを楽しむことで、幼稚園用品の扱いに慣れさせる。また幼稚園への憧れの気持ちや幼稚園入園への期待感を持たせる。(3/5に用品が届く。<u>今回は、全員入園であったので可能であるが、来年度以降は保育園児への転園状況を踏まえて検討する。</u>)
・箸の使用については、幼稚園では年中クラスの中旬くらいから大体の子が揃って使用できるようになるので、まだ焦らなくてよい。まず今の2歳児の状況を見てから、今後の対応を検討する。

4. まとめと今後の課題

2015年「子ども・子育て支援新制度」開始時の名古屋市内教育・保育施設の開設状況把握に始まり、幼保連携に関する先進的取り組みを行っている2園を訪問し、その見学成果を共有化する形で「幼保連携協議チーム」を立ち上げた。幼保連携協議チームによる幼保連携会議は今まさに稼働中であり、そこから提案される具体策が徐々に実行されつつある現状である。その実行は年度をまたぐものであり、現時点（2016年1月）で評価することはできない。その評価並びに附属幼稚園と附

属保育園との連携の方向性については、今後の報告としたい。

引用・参考文献

・名古屋市の保育－平成 27 年度－ 2015 名古屋市子ども青少年局保育部保育企画室・保育運営課編 A4 版全 392 頁.
・名古屋市幼児教育研究協議会名簿 2015 名古屋市幼児教育研究協議会組織部編 A4 版全 56 頁.

謝辞：今回、大阪キリスト教短期大学付属「聖愛幼稚園」「せいあい保育園」の清水千鶴園長先生はじめ諸先生、認定こども園「ゆうゆうのもり幼保園」の渡辺英則園長先生はじめ諸先生には、ご多忙の中を訪問調査にご協力いただくとともに、貴重な情報をご提供いただきました。ここに、謝意を表します。

自校教育について

Education of History and Principle

椙山女学園大学人間関係学部教授
椙山人間学研究センター研究員
杉藤　重信
Shigenobu Sugito

はじめに

1991（平成 3）年 6 月の大学設置基準のいわゆる大綱化[1]では、一般教育と専門教育の区分、および、科目区分ごとの最低修得単位数、卒業に要する総単位数の下限、必要専任教員数を収容定員により定めること、また、授業方法別の単位計算を弾力的にすることなどが定められた。また、2002（平成 14）年の学校教育法の改正により、大学には、7 年に一度のいわゆる「認証評価」という自己評価システムが導入されることになった。同時にグローバル COE などの競争的資金制度が従来の補助金に加えて導入され、補助金の縮小と競争的資金制度の拡充が進んだ。2004（平成 16）年には国立大学法人法が成立し、国立大学は独立法人化が迫られ、国私立の大学法人は、規模等に基づく補助金の割り振りのシステムから、大学教育の質を競う競争的資金化した補助金をともに競うことになった。国立大学法人と私学法人はほぼ同列に否応なくこうした状況に追い込まれてきたわけである。

こうした枠組みの大幅な変更は、経済を中心とする規制緩和あるいは大綱化を基本施策とするいわゆるネオリベラリズムの世界的な潮流と軌を一にする。その流れはすでに 1980 年代のイギリスのサッチャリズムやアメリカのレーガノミクス、日本の中曽根政権の「小さな政府」政策で始まっていた。1991（平成 3）年の大学設置基準の大綱化も、1987（昭和 62）年に設置された大学審議会の答申に基づくもので中曽根内閣の置き土産とでも言えるものだろう。従来、大学は、それまでは様々な規制を順守することと引き換えに既得権益が保護されていたし、特に私学は、様々な規制を強化する可能性のある補助金の受給を避けて、独自性を保持するために授業料などの諸費用を国立大学法人の授業料よりも高額に設定することもできた。もしくは、政府等の補助金が国立大学等に偏在するので、高額の授業料等を設定せざるを得なかった。

規制緩和によって大学の設置が自由化され、私学の設置数が増加して、私立大学間の競争が激化するとともに大学の序列化が強化され、入学定員を満たすことができない大学も増加することになる。これは、まさに、競争原理に基づくネオリベラルな帰結である。しかし、競争は平等のもとになされねばならないはずである。残念なことに現実はそのような単純な状況にはない。例えば、地方の私立大学が公設公営大学あるいは公立大学法人に転換されると受験者が増加し偏差値が上がる。授業料が下がるからである。地域振興の掛け声もあって、自治体が支援する公立大学法人の設置数は増加しているのが現状である。あるい

は、大学の規模や教育の内容、教員組織など多様であり、条件を平等化することは困難であるという考えもあるだろう。また、昨今の「私立大学等改革総合支援事業」はポイント制の形をとった競争的資金で、大学改革を進めることでポイントを上げた大学が補助金を受けるというインセンティブとなっている。しかし、ポイントを上げれば上げるほど、結果的にはどの大学も類似の制度設計を持つ大学になるよう仕向けられてしまうことになるのである。また、自己評価システムという名の「認証評価」制度は、各大学の個性を伸ばすとは思えない。同じ枠組みの中にはめ込もうとしているように見える。

こうした状況の中で、私学としての独自性を維持し、高等教育機関としての使命を果たすためには、どのようにすればいいのだろうか。様々な方法があるだろうが、その回答のひとつが「自校教育」の充実であると考える。本稿では自校教育について、日本における状況や本学におけるこれまでの取り組みに関連させて述べるとともに、本学の今後の方向性について著者の考えを述べることを目的としている。

なお、本稿では、以下に述べる自校のアイデンティティを学ぶための教育システムを「自校教育」と呼ぶことにする。「自校」は、地方によっては自動車学校を指すが、ここでは、自校とは「自分自身が所属する学校」を指している。また、「自校史教育」という呼名があるが、「自校史教育」を包摂する更に広い分野も有るとの見地から。自校のアイデンティティを学ぶための重要な要素として自校についての学習あるいは教育として「自校教育」と呼びたい。

自校教育とは何か：立教大学の試み

さて、自校教育の日本におけるエヴァンジェリストは、現在立教学院本部調査役であり教育学者の寺﨑昌男氏であろう[2]。彼は、1974（昭和 49）年に立教大学から大学教育のキャリアを開始し、1979（昭和 54）年東京大学に移った。そして、定年退職後の 1992（平成 4）年に立教大学に戻り、教養教育の改革に携わることになる。ここから、彼の自校教育のエヴァンジェリストとしての活動期が始まることになる。タイミングとしては、まさに先に述べた大綱化の時代である。

寺﨑は教養教育の改革の中で、カリキュラムづくりの責任者として一科目を担当することにし、「大学論を読む」という科目を開講した。最初は、ドイツの大学について話し始めたが、学生の反応が振るわない。そこで、「日本の戦後の今の大学制度の成り立ち」について話したところ、反応が良かった。次に、立教大学について知っているか質問してみたが、全くあやふやな理解だった。そこで、シラバスを無視して「立教大学を考える」というテーマで講義を始めた。出欠票には、書くように言われていないにもかかわらず、学生たちはたくさん感想を書いてきた。後期になって別の科目でも同じテーマで話してみたところ、やはり、学生の反応が良かったという［寺﨑 2006:91-94］。

寺﨑は、自校教育を受講した学生について気がついたこととして 5 点をあげている。それは、（1）入学した学生の中には不本意入学者がいること、（2）圧倒的多数の学生は自分がいる大学のことについて初耳に等しいこと、

(3) なんでも話そうと心がけたから学生たちに届いたのではないか、(4) 学生たちは「自校」の特質や性格を全く知らない、(5) 学生たちは知識欲を充足した、ということであったという［寺﨑 2006:94-100］。

もちろん、立教大学と本学とを直接に比較することは難しいだろう。例えば、学部によって状況は違うにしても、関東と中部の大学の進学状況の違いなどといった条件の違いなどによって、不本意入学者の数は本学は比較的少ないかもしれない。しかし、逆に、愛知県という地域が比較的他地域への進学者が少ないという特徴を持つこと、長い歴史を持つ本学へ進学を考える際に本人ではなく保護者の意向が強く影響して入学したこと、親から「女子大」を勧められたことなど、立教大学とは状況の異なる不本意入学者が潜在することが考えられる。その意味でも、寺﨑の５つの気づきをふまえて本学独自の自校教育を構築することは大変意味のあることと言わねばならないだろう。

ましてや、本来個性を発揮することができるはずの大綱化と言いつつ、相変わらず潜在的な規制が様々にあり、競争的資金や認証評価制度をめぐる制約の中で、寺﨑たちが立教大学の教養教育改革に取り組み、その中に自校教育システムを組み入れたのは、巧妙な仕掛けを持っている。「立教科目」と呼ばれる自校教育の科目群は、2001（平成 13）年から開講されている。その後、立教大学は 2005（平成 17）年度に「特色ある大学教育支援プログラム」の応募テーマ「主として教育課程の工夫改善に関するテーマ」に申請、取組名称『「立教科目」- 建学の精神から学ぶ科目展開』が採択されている。その取組の概要と採択理由は表１に見るとおりである。

表１　『「立教科目」- 建学の精神から学ぶ科目展開』

取組の概要
「立教科目」とは、立教大学の建学の精神が問いかける「人間としての基本的なあり方」を考え、学び、行動へと学生を誘う科目群であり、全学部全学年を対象とする教養教育課程において、2001 年度から開講されている。「立教科目」は、建学の精神から導かれた倫理性、社会性、人間性を培う「宗教」「都市」「大学」「人権」の４つのテーマを設定している。これらの設定は、必修科目を置かない立教大学の教養教育課程において、学生の主体的な科目選択を促す履修支援の機能を果たしている。また、授業方法の特色として、ゲスト・スピーカー制度を導入し、専門家や実務家を招請し、リアリティを高める工夫を凝らしている。今後は、カリキュラムの点検・改善システムをさらに活用し、テーマを８つに拡げるとともに、建学の精神に関わる正課・正課外の諸活動との連携を一層深めていく。
採択理由
当該取組は、大綱化以降の一般教育改革において再編成した全学共通カリキュラムの総合 A 群のうち立教科目に焦点をあてたものです。立教大学のミッションを体現することを目的とした立教科目は、４つのテーマから構成されているが、それぞれの科目の内容において、また、必要に応じてゲスト・スピーカーを講師に招くなどの方法にも工夫がなされていることは高く評価できます。大学のミッションを体現するための教養教育という設定は、現代の日本の大学にとっても重要な課題であり、本取組は参考になる事例といえます。受講希望者に応じるため、今後は４テーマを８テーマに拡大しますが、そうしたなかでも現在と同様の工夫とそれに対する学生からの評価が継続されることが希望されます。

https://www.rikkyo.ac.jp/academics/undergraduate/zenkari/_asset/pdf/008.pdf より

この「立教科目」の特徴は、必修とはしていないということではないだろうか。自校教育として全学必修として、所属学生全員に受講させたいとも考えるが、立教科目はそうした考えを取らない。表２に見るように、最大でも 2003（平成 15）年の「立教大学の歴史」の 686 人で、最小は同じ科目の 2006（平成 18）年の 67 名である。

表２　自校史科目開講状況

年度	科 目	受講者数（人）
2002	立教大学の歴史	227
2003	立教大学の歴史	686
	立教学院と戦争	104
2004	立教大学の歴史	100
	立教学院と戦争	94
2005	立教大学の歴史	116
	立教学院と戦争	130
2006	立教大学の歴史	67
	立教学院と戦争	108
2007	立教大学の歴史	183
	立教学院と戦争	127
2008	立教大学の歴史	210
	立教学院と戦争	138

［湯川他　2010:171］

また、「立教大学の歴史」の授業内容は表３に見るとおりである。先の寺﨑の言葉にあるように、立教大学の戦時下の状況についても３回にわたり戦争とキリスト教育の関連とについて講義がなされている。

表３「立教大学の歴史」2008 年度の 授業内容

回数	授業内容
1	オリエンテーション
2	聖公会の日本伝道と創立者ウィリアムズ
3	立教学校の誕生
4	文部省訓令第 12 号と立教学院の成立
5	高等教育制度の整備と立教大学の誕生
6	関東大震災による被害と復興
7	立教大学の拡大と戦争の影
8	日米開戦とキリスト教主義教育の危機
9	戦局の悪化とキリスト教主義教育の危機
10	敗戦から学園の再建
11	新制立教大学への移行
12	高度経済成長期以降の立教大学
13	まとめ

［湯川他　2010:172］

こうした授業と並んで重要視されるのが根拠となる資料の提示である。寺﨑によると、自校（史）教育を開始する動機のひとつが『立教学院百二十五年史　資料集』の編纂が同時期に行われていたということである［寺﨑 2006: 91］。そして、もうひとつが以下に述べる自校教育のための施設の充実である。

自校教育のための施設：立教学院展示館

立教学院では、2014（平成 26）年に創立 140 周年を記念して「立教学院展示館」を立教大学のメインキャンパスである池袋キャンパスに設けた。同館は「立教学院各校の歴史展示を通し、児童・生徒・学生の自校教育の場として、また、校友・保護者・地域の方々をはじめ社会一般に、立教の歴史と伝統、教育と研究の取り組みを発信する場として」[3] 活用する施設としてオープンしたものである。同館の英語名は「The Heritage and Future of Rikkyo」と名付けられていて、同学院の遺産をもとに未来にかける意欲が日本語名称以上に表明されているように見受けられる。この点は本学がもっと学ばねばならないところであろう。

立教学院展示館は、池袋キャンパスにあるレンガ建造物のひとつであるメーザーライブラリー記念館に設置され、この記念館は東京都の歴史的建造物に選定されている。この建物は「建築物としての価値だけでなく、これまで大学教育・研究活動に密接な関係を持って利用されてきたことを踏まえ、展示施設として選ばれ」たとのことである。施設設備としても、「メーザーライブラリー記念館内にオープンしたグループ学習スペース「メーザー・ラーニング・コモンズ」からの導線を開放し」、同館のデジタル展示を活用しているようである。

また、立教学院の各学校は、同館に関連させたカリキュラムを設けている。それは、表 4 に見るとおりである。

表４　立教学院の各学校における展示館関連カリキュラム

学校	科目名・単元名	対象
立教小学校	「学院めぐり」	1 年生、生活科
	「立教単元」	3 年生、社会科
立教池袋中学校・高等学校	中学校選科で施設見学	選科
	中学校社会科	各学年
立教新座中学校・高等学校	自由選択の講義で施設見学	高校 3 年生
	選択講座「自校史」	高校 3 年生
立教大学	「立教大学の歴史」	全学共通カリキュラム

（立教学院展示館の HP をもとに作成）

寺﨑は、同館の役割について、「学生諸君は、大学を一歩一歩築いてきた先学や先輩の願いを知り、父母の方たち、さらに昔から池袋に住んでおられる方たちも「立教」と自分たちの暮らしを考えていただきたい。つまり広義の「オール立教」のための広場にしたい。これが私たちの願いでした。展示館とは、今や大学・学校の飾りではなく、学院の全姿を社会に示すアカウンタビリティー（説明責任）遂行の場なのです」と述べており、展示館を

自校教育の重要な場と位置づけているのである。

本学の状況については、後に改めて触れることにするが、まずは、本学の周辺地域の大学に設置されている大学博物館等（資料室などを含む）の設置状況について見てみることにする。全て網羅できていないと思われるが、とりあえず、ウェブ検索で見つけることができたものをあげておく（表5）。

表５　愛知・岐阜・三重・静岡の大学に設置されている博物館等

愛知学院大学歯学部歯科資料展示室	1986 年に前身の資料展示室が誕生し、1989 年に歯学部へ移管される。1995 年に歯学部創立 35 周年記念事業として、現在の状況に至る。2006 年に博物館相当施設として登録されている。
愛知県立芸術大学学術資料館	1973 年に開館され、2007 年に博物館相当施設として登録された。
岐阜女子大学デジタルミュージアム	2000 年、文化情報をデジタル・アーカイブ化して館内展示 (提示) をおこない、その一部をインターネット、CD 等で流通させるバーチャルミュージアムとして設置された。
椙山歴史文化館	2009 年に創設者椙山正弐生誕 130 周年記念事業として開館した。
中部大学民族資料博物館	1992 年に前身となる民俗資料室を設立した。2011 年に開館し、2013 年に博物館相当施設として登録された。
常葉学園大学常葉美術館	1977 年、常葉短大と菊川高校の美術・デザイン科開設 5 周年記念として開館、学生・生徒だけでなく広く一般市民に公開している。
名古屋大学博物館	1982 年に前身である総合研究資料館が設立された。2000 年に全国 5 番目の大学博物館として設立された。
南山大学人類学博物館	1949 年に人類学民俗学研究所付属陳列室として発足した。1964 年に研究所とは別の建物に移動し、1967 年に博物館相当施設として登録される。1979 年に人類学研究所と別組織となり人類学博物館と名称変更をする。

（備考：各博物館等のウェブページから資料を得た。五十音順）

全国の大学における自校教育の状況

1991 年の大綱化以降、全国の大学では、立教大学を始めとして自校教育への取り組みの事例が増えているようである。ここでは、調査された時期は 2008（平成 20）年と古いが、岩手大学の大川一毅氏の『大学における自校教育の導入実施と大学評価への活用に関する研究』[大川　2010] を手がかりにその実施状況を見てみることにする。なお、寺﨑も 2003（平成 15）年 7 月段階における全国の自校教育のカリキュラムをあげているので、それも合わせてみることにする（表 6）。

大川によると、2008 年の調査で、全国 752 大学のうち 373 大学が回答し、自校教育を実施しているのは国立大学 62 大学中 33 大学（実施率 53%）、公立大学 51 大学中 10 大学（実施率 20%）、私立大学 260 大学中 93 大学（実施率 40%）であるという。また、33 大学が検討中と回答したという。授業区分では、回答のあった 196 授業中「全学共通科目」が 91 授業と最も多く、続いて「教養科目」の 82 授業が続く。この 2 つのカテゴリーで合わせて 88.3% におよぶ。また、「必修科目」としている授業が 94 授業（48%）、「選択科目」は 81 授業（41%）である。また履修対象者では学

表6　2003年7月における自校史教育の状況

大学名	講座名	開講カテゴリー	備考
神奈川大学	「神奈川県の歴史」	基本科目	
慶応義塾大学湘南キャンパス	「慶應義塾入門」	講義	
創価大学	「創価大学について」、「21世紀文明論」		文書館が協力
東海大学	「現代文明論」		文書館が協力
東海大学	（文学部新入生教育時）		『井上円了の教育理念』を一年生全員に、『ショートヒストリー東海大学』を三年生全員に配布
明治大学	「日本近代史と明治大学1、2」	学部間共通総合講座	
早稲田大学	「早稲田大学史」	オープン教育	
名古屋大学	「名大の歴史をたどる」、「情報公開と文庫資料」		
関西大学	（レクチャー）		新採用職員教員、新入生へ
関西学院大学	（題不詳）	総合コース	履修基準年度1年、95年度より毎年秋学期2時間2単位
甲南大学	「甲南大学と平生釟三郎」		2単位
神戸女学院大学	「大学論：神戸女学院女子高等教育の世界史的意義」、「初期神戸女学院」		1994－1997年
同志社大学	「日本の近代化と同志社」		
同志社女子大学	（年一回歴史展示）		新入生オリエンテーション時の見学を呼びかけ
南山大学	（授業の一環として）		展示室見学
広島大学	「広島大学の歴史」	教養的教育科目	2001年度より
桃山学院大学	「桃山学院・大学の歴史」	総合講座	
立命館大学	「日本近代史と立命館の100年」		2002年度より
九州大学	「九州大学とは何か：ともに考える」、「九州大学の歴史」		
立教大学	「立教大学の歴史」	全学共通科目	立教学院資料センターが出講
京都大学	（科目名不詳）		文書館教官出講

［寺﨑　2006:102-104］から作成

部の1年生とする授業が最も多く103授業（53%）となっている［大川　2010：7-9］。

授業内容については、この調査では14類型をあげていずれに該当するかを聞いている。14類型は表7に見るとおりである。この中で、「自校理解教育」が最も多く196授業中61授業（31%）［大川　2010：11］である。大川は「各大学において自校教育の捉え方や授業も多様、その多様性こそ、現状における自校教育授業特性ともいえる」と総括し、それぞれの類型についての事例としてシラバスを例にあげている［大川　2010：13-14］。

表７　自校教育授業の類型

番号	類型
1	自校理解教育
2	キャリア・プランニング教育
3	初年次教育
4	大学・高等教育論
5	大学史（自校史）教育
6	歴史（学）教育
7	宗教（学）教育
8	オリエンテーション・ガイダンス教育
9	地域理解教育
10	学問論
11	学習スキル習得教育
12	専門領域導入教育
13	ボランティア活動の機会
14	自己発見・探求教育

［大川　2010:10］をもとに作成

また、実施形態としては、講義形式が最も多く、ただ、類型によっては、たとえば、「初年次教育」においてはその限りではない。また、担当教員では、196 授業中 160 授業（82%）が「リレー型」もしくは「オムニバス授業」として実施され、担当者も専任教員は 159 授業（81%）と最も多い。また、学長や学部長、大学役員、理事長が携わることも多く、196 授業中 73 授業（37%）で学長もしくは理事長が授業実践に関わっている。また、196 授業中 153 授業（78%）で授業の統括や取りまとめの役割を担うコーディネータが存在する。そして、その役割は「授業の企画・計画」「教員・講師間の連絡調整」で、この点も、自校教育の実施推進の課題となっているという。また、大学職員が参画するのも自校教育の特色であるとし、回答のあった 190 授業中 66 授業（34%）で大学職員が運営に関わっており、大川は、「今後の可能性のひとつを示唆する」と述べている［大川　2010：15-18］。

自校教育の実施目的としては、196 講義中 134 授業（68%）が「自学の理念・使命（ミッション）・目的の周知」をあげていて、これに次ぐのが、「自校史・沿革の理解」（108 授業、55%）である。その他の項目も含め表 8 にあげておく［大川　2010:19］。設置別に見ると各カテゴリーの特徴が見えると大川氏は述べる。すなわち国立大学では「自校史・沿革の理解」及び「自学の現状の理解」が最も多く、「法人化以降、国立大学はそれぞれの独自性を積極的に打ち出そうとしており、大学の教育・研究・社会貢献等の現状や地域との関係を自校教育授業の教育内容に反映している」という。一方、公立大学では「自学と地域社会の関係」が最も多く、私立大学では「自学の理念・使命（ミッション）・目的の周知」が最も多いという［大川　2010：19 － 21］。

授業内容、実施形態、実施目的のカテゴリーで、それぞれの大学の属性を反映して興味深いところである（表 8）。

表８　自校教育授業の実施目的（196 授業を母数とし、複数回答）

授業の目的	授業数	比率
自学の理念・使命（ミッション）・目的の周知	134	68%
自校史・沿革の理解	108	55%
大学への帰属意識の涵養（形成）	77	39%
学生の自己探求を深める機会の提供	74	38%
自学の現状の理解	74	38%
大学における学習意欲の促進	71	36%
初年次教育（導入教育）の一貫	67	34%
教養・基礎教育の一環	67	34%
愛校心の涵養（形成）	64	33%
大学が立地する［地域］の理解	59	30%
キャリア（プランニング）教育の一環	56	29%
学習方法（スキル）の習得	50	26%
その他	123	63%

［大川　2010：19］をもとに作成

また、学士力育成という観点では、自校教育が育成しようとする学士力は「社会情勢や自然、文化への理解」（106 授業、65%）が最も多く、ついで「倫理観」（70 授業、43%）、「論理的思考力」（56 授業、34%）、「課題解決能力」（56 授業、34%）、「チームワーク・リーダーシップ」（52 授業、32%）が続くという［大川　2010：23］。

学生の評価としては、満足度では「満足」と「おおむね満足」を合わせて 133 授業（86%）となり、目標達成度では「達成」と「おおむね達成」を合わせて 126 授業（85%）と学生の評価は高かったようである［大川　2010：29］。一方、各大学が答えた課題としては「担当教員の選定」（56 授業、33%）、「授業内容の選定」（51 授業、30%）、「複数教員による授業内容の整合性」（38 授業、22%）、「授業統括者の負担」（36 授業、21%）、「授業目的や到達目標の設定」（36 授業、21%）があげられている［大川　2010：31］。

ところで、このアンケートには本学も教務課が回答しているようであるが、本学の自校教育である「人間論」は授業類型の中に含まれていなかった［大川　2010：33-34］。「公開を許可しなかった大学の名称はあげない」としているので、ひょっとして、「公開は不可」としたのかもしれないが、後に述べるように本学の「人間論」の持つ複合性や目的などが明確化されていなかったため答えることができなかったことが理由であるかもしれない。

本学における自校教育の流れ

(1) 人間論について

以上述べてきた自校教育は本学にあっては、「人間論」であるし、カリキュラム以外の実践の場は「椙山歴史文化館」がこれに当たると言えよう。この節では、人間論や椙山歴史文化館に関するこれまでの経緯や今後目指すべきものについて触れることにしよう。まずは、人間論である[4]。

じつは、本学における「人間論」の試みは早くはないかもしれないが、全国的にも決し

て遅くはない。人間論は、1998（平成 10）年、当時学生部長であった故・渡邉毅元教授（全学教務委員長を兼務）の主導で行われた教養教育改革[5]に始まる。当初の目論見としては、1991 年に始まった大綱化の流れに対応した「教養教育科目の全学共通化」を目途とするものであったが、ワーキンググループ内での意思統一ができず当初の目的を断念することになった。しかし、副産物として「全学共通科目」というカテゴリーが生まれ、開設される科目には「人間論」の名称が充てられることとなった。「人間」がキーワードになったのは、本学の教育理念「人間になろう」によっていることはいうまでもない。

科目名の決定に際して、当初は「人間学」の案もあったが、英訳は "anthropology" となるので人類学との差別化が困難との判断で「人間論」に落着したという。ちなみに、現在「人間論」の英訳は “theories of human being” となっていて、著者としては、英訳としてうまくこなれていない印象である。英語的には “human sciences”（人間の諸科学）といったところが収まりが良いと思えるが、これとても、人間関係学部の英語名称 “School of Human Sciences” があって重複は望ましくはないので、あらためて再検討を必要とするだろう。さて、1998（平成 10）年に誕生した「人間論」であるが、その運用は「全学共通科目」ではあるものの、各学部で開講され、内容や担当者についても学部が決定するものとして合意された。科目名称は共通しているものの、内容的には学部に任されることとなった。

次のステップは 2001（平成 13）年もしくは 2002（平成 14）年に始まった。「人間論」の共通教科書の作成をめざすという動きである。当時の武藤泰敏学長と竹内政雄学生部長が企画したもので、国際コミュニケーション学部の北岡崇教授を代表とするワーキンググループがつくられ、教科書の内容が検討された。各学部の人間論担当者から執筆者を集めるという計画であったというが、最終的には一部の学部の担当者らが執筆し、『人・ヒト・ひと』［人間を考える会　2003］が出版された。しかし、この教科書は、出版されたものの授業で使われることはなく、また、教職員に配布されることもなかった[6]。

次に「人間論」が課題として取り上げられたのが 2007（平成 19）年の泉有亮学長と杉戸清彬学生部長の時である。ワーキンググループが作られて共通開講時間化が議論され、水曜 2 限を共通開講時限とすることが合意されたが、答申は次の野淵龍雄学長の代（2008 ～ 2011 年度）に持ち越された。

この 2008（平成 20）年の答申の後、野淵は「人間論」の授業内容に着手する。野淵の在任中、人間論実施委員会が設けられ、人間論の運用に携わることとなった。もともと、「人間論」の授業内容に対する学生の不満、例えば、「なぜこの授業が＜人間論＞なのか？」といった声を聞いていた野淵はシラバスに記載される「授業目標」と「授業計画」を統一し、2009（平成 21）年度より、現在にいたるまでの「人間論」のスタイルを作り上げた。ただし、シラバスのその他の項目の記載は各学部の選任した担当者に任され、「授業計画」の第二の項目「人間はどのような存在か」（計 9 回）の内容については、担当者の裁量に任されることとなった。これ以来、現在に至るまでの「人間論」は、それまでとは一歩進んでカリキュラムの枠組みを共通化することになったので

ある（表9）。また、この年の入学式から理事長の椙山正弘は、式を終えた後に全学部・全研究科の入学生に対して自校史を含む「人間になろう」についての講義を行い、これを「人間論」の第1時限とした。しかし、このスタイルは、文部科学省からの「半期15回の講義に組み込むことはふさわしくない」との助言により、数年の実施にとどまり、その後は、各学部の学部長が授業時間の第1回目に「人間になろう」の内容を含む講義を担当することとなり、現在に至っている。

表9　2009年の「人間論」合意事項

シラバス項目	合意事項
授業目標	学園の教育理念「人間になろう」を具現化することを目指し、「人間とはどんな存在か、人間はいかに生きるべきか」について考える。
授業計画	1. 学園の教育理念「人間になろう」（1回） 2.「人間はどのような存在か」に関する講義（9回） 3. キャリアデザイン（3回） 4. 食育（1回） 5. エコ・環境問題（1回）

「人間論」をめぐる最も新しい動きは、教養教育の全学化がスタートした2015（平成27）年におきた。すでに、前年の2014（平成26）年2月の全学教務委員会で人間論改革の合意が決まり、各学部から1名の委員を出してワーキンググループを構成することになった。その後、3月に第一回のミーティングが行われ、ワーキンググループは検討を重ねて2014年度内に答申案をまとめた。とりまとめ役の米田公則学長補佐（全学教務委員長）は、2015年5月の全学教務委員会に「新しい「人間論」の在り方について（人間論WG 骨子案）」を提出し、6月教授会以降、大学運営会議、大学改革審議会などで協議が進んだ。協議の方向性としては、人間論の重要性や全学化の理念については理解できるが、拙速な変更は時期尚早であるというもので、結果として、現時点においては、全学化の方向を目指すものの、2016年度については、開講曜日時限を金曜3限4限にまとめ、カリキュラムは当面現行通りとし、日進キャンパスは別途開講することとなった。カリキュラムの在り方や枠組みについては、当面現行通りで行うこととなった。

一方、椙山人間学研究センターでは2015年度に「人間論教材作成プロジェクト」を立ち上げ、大学の人間論ワーキンググループをそのまま移行し、米田をプロジェクト・リーダーとしてすすめることとしたが、教材の枠組みについての合意ができず、一度もミーティングが開かれなかった。また、人間学研究センターでは、毎年4回開催している「人間講座」に「人間論シリーズ」という共通タイトルを銘打った講座シリーズを設けることとし、2015年度の第2回から開始した。2016年度に予定している「人間講座」のテーマも含めて記したものが表10である。

表 10 「人間講座」における「人間論シリーズ」(2015 年度より)

開催日	テーマ	講師	タイトル
2015 年 7 月 27 日	人間は、言語によってのみ人間である	増井透（人間関係学部教授）	『物語はどのように理解されるか』
2015 年 10 月 1 日	人間は、道具によってのみ人間である	小林繁樹（国立民族学博物館名誉教授）	『世界のモノづくりから“くらし”を考える』
2015 年 12 月 10 日	人は社会的動物である	黒田由彦（名古屋大学教授）	『災害が露わにする“社会の本質”』
2016 年第 1 回	（人間の発達）	（依頼中）	（未定）
2016 年第 2 回	（哲学的人間論）	（依頼中）	（未定）
2016 年第 3 回	（人間と環境）	（依頼中）	（未定）
2016 年第 4 回	（教育学的人間論）	（依頼中）	（未定）

［備考］2016 年度のテーマについては、人間学研究センター打ち合わせ会で協議されたものである。

これまで述べてきた自校教育に関わる学内学外の状況を見ても、本学においてもその意義と重要性が十分認識されてきたと言えよう。しかし、それにもかかわらず、その運用と実践については様々な課題を見て取ることができる。

(2) 椙山歴史文化館について

次に、本学における自校教育の重要な場である「椙山歴史文化館」（以下、歴文館と記）について見ていくことにしよう。

歴文館は、2009（平成 21）年、学園創設者の椙山正弌の生誕 130 周年を記念して設立された。先の本学における「人間論」の展開の流れと重ねて見ると、歴文館の設置は、野淵学長の就任と人間論改革のタイミングと重なっていて、本学における自校教育の重要な一部を担っている。その設立趣旨は、以下の 5 点である。

表 11 椙山歴史文化館の設立趣旨

1	学園の歴史を日本（世界）の歴史の中に位置づけて紹介する
2	学園の教育理念をアピールする
3	学園の基礎を築いてきた生徒・教職員の活動を紹介する
4	創設者の足跡と人を紹介する
5	学園に関係する人々の文化の交流ができる場とする

http://www.sugiyama-u.ac.jp/mshc/about/

歴文館は、星が丘キャンパスの図書館 4 階に設置され、「歴史展示室」「文化展示室」「正弌記念室」の三室から構成されている。もともと、「歴史展示室」が置かれている図書館 4 階の空間には「椙山女学園資料室」が置かれていて、椙山女学園の歴史資料が元・椙山女学園高等学校校長の松井康太郎らよって整理が行われていた。とくに、2005（平成 17）年は学園創設 100 周年にあたり、これに先立つ 2000（平成 12）年には「資料収集委員会」[7] が設置され、この「学園資料室」にも資料が搬入されていたのである。「正弌記念室」は、

図書館の5階部分に設置されているが、この空間は、かつての山添キャンパスに設置されていた金剛鐘[8]を設置していた塔屋が再現されているものである。「文化展示室」の空間は、もともとは、図書館の古典籍等の書庫として利用されていた。

本学の学芸員課程に関わっていた著者は、1999（平成11）年に総務課の依頼を受けて、当時の「学園資料室」に寄贈された「雛形」についての調査に関わったことがある［杉藤2000］。「雛形」とは、学園創設者の椙山正弐が、本学園創設の契機のひとつとなった当時の東京裁縫女学校（現在・東京家政大学）で学んだ裁縫教育の教育法のひとつである。東京裁縫女学校は女子のみの学校であったが、特別に入学を許され学び取ったのが、サイズダウンした型紙に基づいて、和装・洋装の服装を制作するというもので、実寸よりも短時間のうちに制作することが可能である。東京裁縫女学校の創設者の渡邉辰五郎が創案したものであったという。逝去された卒業生の遺品の中に「雛形」の作品があり、ご遺贈頂いたものおよび、「学園資料室」の時代から収納されていたものも含め、現在、歴文館で展示されている。なお、現在に至るまで、歴文館の「雛形」研究会では継続して「雛形」の整理分類と撮影を行っており、データベース化された一部の資料はウェブページからも見ることができる[9]。

2005（平成17）年8月には、生活科学部の新棟が竣工して学部が移転することになり、実験道具をはじめ、貴重資料の保存が課題となった。学園の受け入れ体制が整わないまま、一部の資料のみ、学園センター地下の倉庫に保管されることになった。生活科学部（旧家政学部[10]）は、本学の大学設置以来の歴史と伝統を持っており貴重資料を保存さらには展示することは、重要な課題であったが、2012（平成24）年に企画展として「ものとデジタルアーカイブ：その現実と実際」というタイトルで、故中山晃名誉教授の手作り実験道具コレクションを始め、雛形、椙山正弐がコレクションした掛け軸、人間関係学部の心理学実験器具などが合わせて展示[11]された。

実は、歴文館では展示スペースや収納施設が限られていることから、資料のデジタルアーカイブ化が設置当初から企図され、デジタル展示の充実が課題とされてきた。現在、歴文館のウェブページの「資料室」[12]から、表12に見るような資料を閲覧することができる。

表12　歴文館のデジタル資料

資料名	アクセス	内容
椙山女学園の歴史	歴文館サイト	年表形式の学園の歴史を表示
雛形データベース	文化情報学部サイト	歴史文化館のデジタルアーカイブ化された雛形コレクションの検索・表示
掛け軸データベース	文化情報学部サイト	椙山正弐のデジタルアーカイブ化された掛け軸コレクションの検索・表示
椙山女学園の教育をたどる ―ことば集―創立から現代まで	歴文館サイト	年表形式で歴代の理事長・学園長の言葉をデジタルアーカイブ化された文書を表示
心理学実験データベース	歴文館サイト	人間関係学部のデジタルアーカイブ化された心理学実験器具の検索・表示

被服材料学実験器具データベース	歴文館サイト	生活科学部のデジタルアーカイブ化された被服材料学実験器具の検索・表示
画像データベース	文化情報学部サイト	歴文館で開催した作品展アーカイブや所蔵コレクションなどをデータベース化して検索・表示
椙山歴史文化館映像シリーズ	文化情報学部サイト	文化情報学部の学生が制作した歴文館に関連した映像シリーズへのリンク
糸菊データベース	歴文館サイト（歴文館内アクセスのみ）	大正７年に創刊された同窓会紙『糸櫻』以来、現在に至るまでの学園広報誌『糸菊』をデジタル化（1999 年まで刊行分）したもので、著作権保護のため館内アクセスのみ
記録：企画展等開催情報	歴文館サイト	開催情報の表示

http://www.sugiyama-u.ac.jp/mshc/guide02/archives/

先に述べたように、歴文館の設置と人間論のあらたな展開は同時期であり、椙山美恵子歴文館館長（学園顧問）は、歴文館を訪問する初年次教育の演習クラスやその他の学年のクラスの学生に対して、椙山女学園の「人間になろう」の教育理念を伝える講義を行ってきた[13]。

むすびにかえて：本学における自校教育のあり方について

これまで、最近の日本の大学の置かれている全体的な状況を述べた後、教育学者の寺﨑の関わった立教学院の自校教育および立教学院展示館の状況を提示し、また大川の科研報告書に基づいて全国の大学における自校教育の現状のあらましに触れた。その後、本学における自校教育にかかわる、「人間論」の展開、歴文館の設置、百年史の出版について述べてきた。本学の自校教育状況は、寺﨑がその重要性を強調したタイミングと比べても決して遅くはない。また、寺﨑の示す指針、カリキュラム化された自校教育、資料展示施設、アーカイブ化、沿革史の編纂［寺﨑　2006］は、本学としてその指針とは大きくずれてはいない。しかし、以下の点において、今後改善すべき点があるように思われる。

まず、第一に現在進行している「人間論」の運用に関わる諸課題である。立教大学の自校教育たる「立教科目」は複数の科目に渡っていて、とくに、歴史教育の部分が大きな柱となっている。他の大学の例では、例えば、京都大学はオープンコースウェアに「現代の大学・大学生論 A」を二人の教員のオムニバスで開講しており表 13 のようなカリキュラムとなっている。立教大学もそうであるが、全学共通科目の扱いではあるが、必ずしも必修とはなっていない。本学においても、例えば、「全学共通科目：椙山学」として、現在の「人間論」を「人間にかかわる総合的な科目」として位置づけ、「椙山の歴史」を「椙山女学園を日本の高等教育と関連付けた歴史教育のための科目」として、全学で複数開講して選択必修とするのもありうるのではないかと考える。

第二に、歴文館のシステマティックな活用の検討である。歴文館を訪問するクラスに対する「人間になろう」教育は資料にあるように歴史教育に集約されているのであるが、むしろ、椙山女学園に関わる様々な物理的資料とデジタルアーカイブを充実させて、全学学生にスタンプラリー形式をとって随時必ず訪

表 13　京都大学「現代の大学・大学生論 A」のカリキュラム

第 1 回	授業のイントロダクション
第 2 回	帝国大学の始動と京都帝国大学の創立
第 3 回	国家と大学　−滝川事件−
第 4 回	戦時中の大学
第 5 回	出兵する大学生 −「学徒出陣」−
第 6 回	敗戦後の大学改革と京都大学
第 7 回	大学紛争とその背景（2）
第 8 回	現代の大学・大学生を理解するための問い
第 9 回	前文脈としての大人社会の力 (1)
第 10 回	前文脈としての大人社会の力 (2)
第 11 回	1970 ～ 1980 年代の若者文化の隆盛
第 12 回	1990 年代以降の大学、大学生

https://ocw.kyoto-u.ac.jp/ja/kyoto-university-archives-jp/course-01a/schedule

問して認証を受けるようなシステムを構築し、リアルな歴文館の訪問を通じた自発的な学びの機会を提供してもよい。同時に、デジタルアーカイブ化を充実させて、バーチャルな訪問を通じたアクティブラーニングの場にしてはどうだろうか。このためには、椙山女学園の歴文館を通じたコレクション方針とデジタルアーカイブ化の明確な指針が示されねばならない。

さて、最後に、この稿を書いていくうちに困ったことを記しておこう。それは、自校教育（自校史教育をふくむ）の英語名称はなにかであった。そこで、とりあえず、旧友の英国人である Mark Reback 氏（名城大学准教授）に質問してみたところ、本稿の英文タイトルとした「Education of History and Principle」ではないかという助言をえた。しかし、彼自身が英国で卒業した大学における学びの中には、こうした授業科目を受講した記憶はないとのことである。もし、自校教育が日本に固有のものとしたら、なぜ日本に必要とされるようになったか（それは、本稿に述べてきたところであるが）、また、自校教育が他国で必要でない理由、あるいは、もともと無いのか、無くなったのかなどなど、様々な興味深いことが含まれている。そうした点を明らかにすることも、興味深いことと言わねばなるまい。

---

[1] 大学審議会の答申（1991 年 3 月）に含まれていたいわゆる大綱化の指針は以下の 6 項目である。1)　各大学・短期大学に開設を義務づけていた授業科目の科目区分（一般教育科目 , 専門教育科目 , 外国語科目及び保健体育目）を廃止する。 2)　学生の卒業要件として定められていた各科目区分ごとの最低修得単位数（大学の場合 , 一般教育科目 36 単位以上 , 専門教育科目 76 単位以上 , 外国語科目 8 単位以上 , 保健体育科目 4 単位以上）を廃止し , 総単位数（大学の場合 ,124 単位以上）のみ規定するにとどめる。 3)　必要専任教員数について , 各科目区分ごとに算定する方式を廃止し , 収容定員の規模に応じた総数のみを算定する方式とする。また , 大学の兼任の教員の合計数は , 全教員数の 2 分の 1 を超えないとする制限規定を廃止する。4)　授業の方法別（講義 , 演習 , 実験・実技・実習等）に一律に定められていた単位の計算方法を , 各大学・短期大学の判断により弾力的に定めることができるよう , また , 高い教育効果が期待できる演習などの授業が開設しやすくなるよう改める。 5)　学部内の組織として , 学部の種類によって学科を設けることが適当でない場合に限って例外的に設置を認めていた課程を , 学部の教育目的を達成する上で有益かつ適切である場合は , 学部の種類を問わず設けることができることとする。 6)　医学部 , 歯学部の進学課程・専門課程を法令上の制度としては廃止する。

[2] 本稿では、寺崎氏および寺崎氏にかかる自校教育については、氏の著書『大学は歴史の思想で変わる』［寺崎 2006］によっている。

[3] http://www.rikkyogakuin.jp/hfr/　以下、「立教学院展示

館」についての記述はこの URL によっている。

[4] この節をまとめるにあたっては、本学人間関係学部の田中節雄教授の助言を得た。ただし、事実関係については、今後確認を要する点があるので、現時点での記述について過誤があるとすれば、もちろん、著者の責任である。

[5] 田中教授の話では、渡邉毅・元学生部長は江原昭善・元学長の意向を受けたとのことであるが、人間論誕生を平成 10 年とすると、当時の学長は江原の次の椙山孝金・元学長の在任期間となってしまう。江原の代で渡邉・元学生部長の在任中となると、平成 7 － 8 年となってしまう。本稿では、とりあえず、田中教授の平成 10 年説をとっておくことにする。

[6] この出版物のことは、筆者自身も最近までその存在を失念していた。田中教授の示唆をうけて執筆者のひとりから借りることができ、その内容を見て、かつて見せてもらったことがあったことを思い出すことができた。

[7] 同時に「編集委員会」が立ち上がり、『椙山女学園百年史』［椙山女学園百年史編集委員会　2007］が編集されている。

[8] 金剛鐘は大正 10 年に創設者椙山正弋がアメリカ視察の際、カリフォルニア大学におけるカリヨンの鐘の音にあわせ祈りを捧げる学生の姿に感銘をうけたことを契機として、イギリスに発注したもので、現在も、山添キャンパスに設置され、高校生徒たちによって毎朝奏鳴されている。太平洋戦争中の金属供出の際にも免除され、現在も使用されている。

[9] http://zeami.ci.sugiyama-u.ac.jp/dl/Hinagata/index.html

[10] 1949（昭和 24）年、椙山女学園大学は家政学部の単科大学として山添キャンパスに設置され、1962（昭和 37）年に星が丘キャンパスに移転した。

[11] http://www.sugiyama-u.ac.jp/mshc/da/

[12] http://www.sugiyama-u.ac.jp/mshc/guide02/archives/

[13] 本稿の文末には、椙山館長のご厚意により、歴文館で使用されるパワーポイントで 70 ページにわたるプリントアウトを添付しておいた。なお、この資料は、椙山館長が用意されている「大学用」と「中学・高校用」のうち、後者を採っている。それは、先に取り上げた立教学院の例にもあるように、総合学園としての自校教育の場として歴文館を位置づけるという意味でも、ふさわしいと考えたからである。

文献

大川一毅、2011、『大学における自校教育の導入実施と大学評価への活用に関する研究（課題番号 20600002 平成 20 ～ 22 年度 科学研究費補助金 基盤研究（C）研究成果報告書）』、岩手大学

杉藤重信、2000、「雛形」、BSM（Bulletin of Sugiyama Museology）5：巻頭言

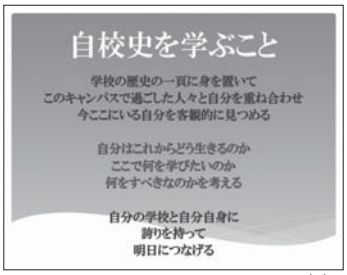
椙山女学園百周年史編集委員会、2007、『椙山女学園百年史』、学校法人椙山女学園

寺﨑昌男、2006、『大学は歴史の思想で変わる：FD・評価・私学』、東信堂

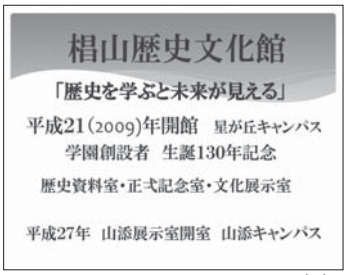
人間を考える会・編、2003、『人・ヒト・ひと：人間を考える（椙山女学園大学研究叢書 15）』、東京教学社

湯川次義・久保田英助・野口穂高 大岡紀理子・大岡ヨト、2010、「「自校史教育」に関する基盤的研究」、『早稲田教育評論』、24（1）:169 － 188

参考資料「自校史を学ぶこと」（椙山歴史文化館）



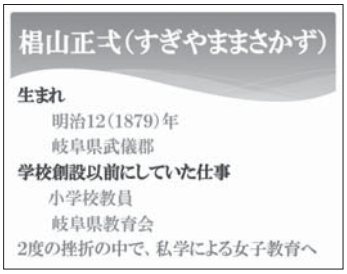
(1)



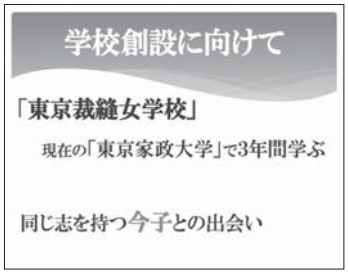
(2)

(3)

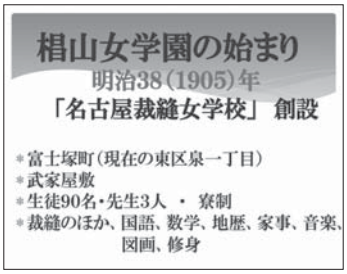
(4)



(5)



(6)



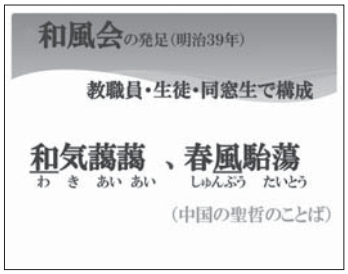
(7)

(8)

(9)

(10)

(11)



(12)

(13)

(14)

(15)

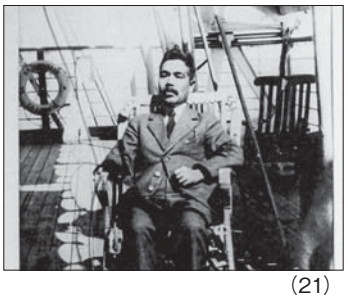
（16）

（17）

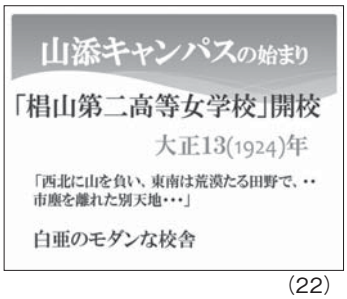
（18）

（19）

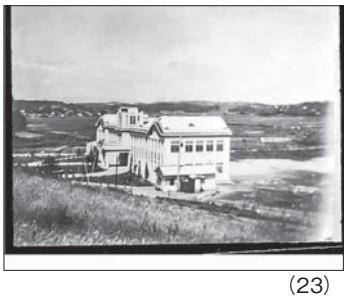
（20）



（21）



（22）



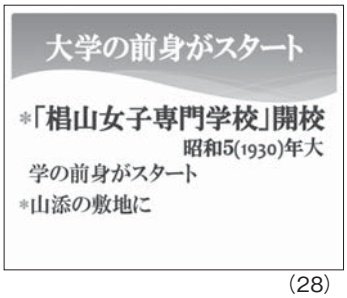
（23）

（24）

（25）

（26）

（27）



（28）

（29）

（30）

大正半ばから昭和初期
おおらかでユニークな教育
汽船旅行

(31)

校外見学
新聞社・放送局・ガス会社・測候所
電話局・裁判所・ガラス工場・陶器会社
学芸会　・音楽会　・展覧会
英語クラス練習会・英詩暗誦会
自由研究

・・・・・・・・・・・・

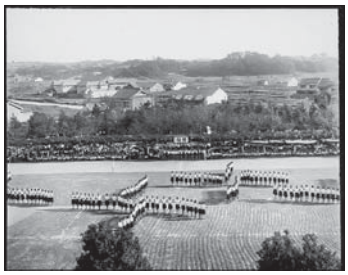
文芸講演会　大正11(1922)年
菊池寛・芥川龍之介・小島政次郎
椙山高等女学校講堂

(32)

運動の奨励

登山(富士山・白馬など)
運動会(大正8(1919)年～)
テニス部・水泳部の誕生
(昭和3(1928)年)
続いてバレー部・バスケット部・陸上部など

(33)



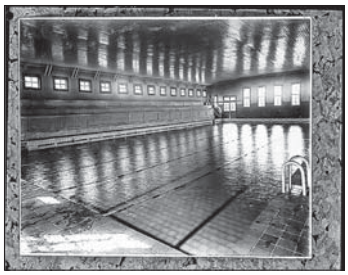
(34)

屋内プールの完成
昭和3(1928)年

*総タイル張り
*25メートル・5コース
*400名収容のスタンド

夏以外は多目的利用の雨天体操場

(35)



(36)

日本女性初の金メダリスト
前畑秀子

昭和7(1932)年第10回オリンピック
ロサンゼルス大会
女子200メートル平泳ぎ銀メダル

昭和11(1936)年第11回オリンピック
ベルリン大会
女子200メートル平泳ぎ金メダル

(37)

(38)

(39)

(40)

学園歌制定

創立30周年　昭和10(1935)年

歌詞　長谷部親弘(歌人)
作曲　片山頴太郎(現東京藝術大学)

真理(まこと)の道を　踏ふみわけて
心を磨き　身を鍛ひ
光ある世の　人たらん

(41)

(42)

孝経幢　創立30年記念

孝経とは孔子の孝道の教え

(43)

太平洋戦争(第二次世界大戦)
本学園でも・・・・

勤労奉仕・学徒動員
「金属類回収令」(孝経幢・胸像など)
金剛鐘は・・・・難を免れた
「被服工場」富士塚町校舎
「軍需工場」山添町校舎
授業完全停止　昭和19(1944)年

(44)

(45)

(46)

(47)

名古屋空襲 昭和20(1945)年

学園発祥地・富士塚町校舎は全焼

学徒動員(愛知航空機工場)
本校生徒と教諭18名が犠牲(6月)

8月15日 終戦

(48)

新しい出発

「中学校」「高等学校」の開校
(昭和22(1947)年～
椙山女子専門学校が「大学」として開学
(昭和24(1949)年～
新しい中高制服制定 (昭和26(1951)年～

「幼稚園」の再開(昭和25(1950)年)
「小学校」開校(昭和27(1952)年)

(49)

学園創立50周年(昭和29(1954)年)

(50)

学園創立50周年 中高校舎新築
昭和29(1954)年

(51)

(52)

伊勢湾台風(昭和34(1959)年)

(53)

星が丘に大学(家政学部)移転
(昭和37(1962)年)

(54)

人間橋渡り初め

(55)

「人間橋由来記」の碑

(56)

人間橋由来記
「人間になろう」の始まり

(前略)
古人の歌に
　人となれ人　人となせ人
というのがある
人間完成、これこそ学園創設の精神であり
学校教育の終局の目標である

諸君よ、人間になろう

(57)

(58)

山添キャンパスの整備

「和風館」 昭和44(1969)年

中高図書館 昭和52(1977)年
(現在は北斗館)
「椙山スポーツセンター」昭和57(1982)年

(59)

中高一貫教育の推進
教育目標「4つの柱」
昭和53(1978)年度より

健康で鍛えられた身体
科学的体系にもとずく基礎学力
社会的存在の認識の上に立つモラル
豊かな情操

(60)

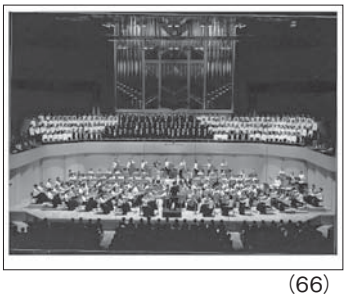
(61)

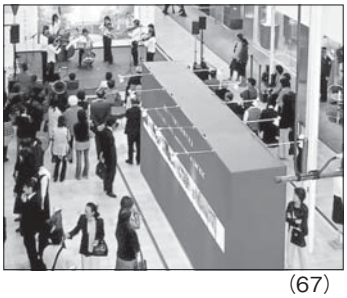
(62)

(63)

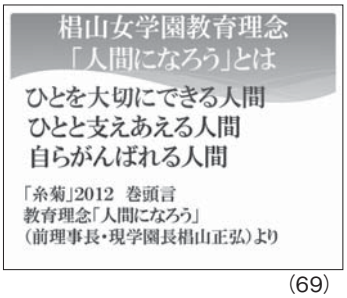
(64)

(65)

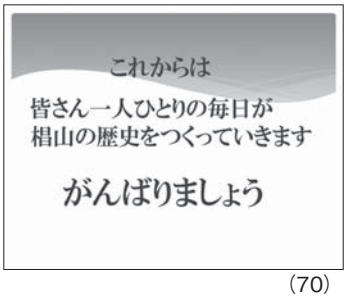

(66)


(67)

(68)



(69)



(70)

自然人類学の「環境」概念を再吟味する

Reconsideration on the technical term “environment” in Physical Anthropology.

椙山女学園大学名誉教授
京都大学名誉教授
江原　昭善

筆者はこれまでに、時機に応じて数多くの小論を書き記してきた。その各々はそれ自体が単独で意味を持つものだった。だが、それらを新しいテーマのもとにまとめ直し、再分類してみると、いくつかの新鮮な息吹を持った小論が誕生した。以下の論文はそのようなもののひとつである（米寿の某日これを記す）。

Ⅰ.「環境」という概念の基体について

Ⅰ-1. 英国の哲学者 F. ベーコンの考え

筆者はすでに「環境問題を考え直す」（椙山女学園大学 生活の科学 20, 1988）や「人間を再考する」（総合クリエイティブ・センター研究論集 創 第3号、2001）、『服を着たネアンデルタール人』（雄山閣、2001）や『稜線に立つホモ・サピエンス』（京都大学学術出版会、2005）の中などで、環境問題にも触れてきた。だが時代の推移とともに、一般の環境という概念も、その都度に再考しなければならないところに来ていることも指摘してきた。その基本的な考え方は、今もほとんど変わらない。

だが、手元でピストルの1ミリメートルの狂いが、標的のところでは大きく外れるものだ。だから、話の重複は好ましくはないが、手元の話やそれを構成する個々の概念の微妙な違いなども、少しはしておかなくてはなるまい。それは単なる言葉の綾とか、ペダンティック（衒学的）な言葉のもてあそびなどで済ますわけにいかない、と思ったからである。

まず第1に、英国のベーコン（Francis Bacon, 1561-1626, 政治学者で政治家）によると、目的に沿うべく自然の一部を切り取ってきて、人工的な条件のもとで痛めつけると、自然の方が白状するという。自然を実験にかけ、口を割らせるのだ。それ以来「実験は自然の拷問台」とまでいわれるようになった。こうして彼は初めて近代的な科学的方法を確立した経験論の祖となり、同時に帰納論を打ち立てたことで有名になった。

逆にいえば、自然は空気や水やさまざまな地下資源などのように、いくら痛めつけ搾取し続けても尽きることのない無限・無尽蔵の存在だという誤った理解が強化されてきた。この考えは、自然科学や技術の側の開発にはすこぶる都合がよく、環境や自然はたいへん扱いやすい存在になる。

第2に、環境や自然をこのように理解することにより、人間は自然界の支配者になったような錯覚を持つようになった。これらの発想が、現代の自然破壊や資源の枯渇や産廃問題などを惹き起こす元凶にもなった。このことを謙虚に反省しなければ、まるで黙示録の予言にも似た目前の人類全体の危機から、滅亡への転落を防ぐことは到底できまい。人類はまさにその生存か滅亡かの厳しい二者択一の稜線上に立っているのだ。それ故ここで改

めて、「環境」について新しい観点から考え直してみることにした。

Ⅰ-2.「環境」という概念は意外に新しい

以上のような時代的風潮のなかで、1970年ごろから「環境」問題を論ずる声が次第に一般にも広がってきた。自然保護をめぐる研究会や講演会やシンポジウムなども増え始め、新聞や雑誌、テレビやラジオなどでも、テーマに事欠くことはなかった。だが、それらの内容は産業やそれと密接な関係を持つ工学や医療技術の分野のものが多かった。

それとほぼ並行するかのように、1960年代から生物学でも人間や生き物の生きざまを研究する生態学や霊長類学などが盛んになりつつあった。研究の場が実験室という建物のなかとは限らず、積極的に野外、それも南米やアジアやアフリカなどでの野外の調査にも目が向けられるようになった。その研究の流れのなかで、動・植物や人類の存続の危機を暗示する兆候に、研究者たちは気が付き始めた。その危機的兆候は見る見るうちに私たちの足元にまで、広範かつ急速に迫ってきた。それまではベーコン流の環境論が依然として、今風にいえば科学的・客観的に人間の外側の条件を中心に分析し解釈することに、終始していたのだ。

筆者はそのような環境論になぜか、しっくりと馴染むことができなかった。というのも主体である人間や生物たちとその客体である周りの外的条件との間には、切っても切れない系（システム）が形成されていることに気付いていなかったからだ。人間でいえば、客体である人間の周りの条件も人間の属性の一部なのだ。「環境のない人間」など存在しないし、「人間のいない人間だけの環境」などはあり得ようはずがないからだ。では、環境論はいかにあるべきだろうか。

Ⅰ-3.　ユクスキュルの環境論について

このことを最初に的確に指摘したのは、エストニア出身で、ドイツのハンブルク大学で研究していた動物学者ユクスキュル（Jakob Johann von Uxküll, 1864-1944）だった。彼によれば、それぞれの動物はそれぞれの「環世界」（Umwelt, ドイツ語で um= 取り巻くまたは環、welt= 世界。Umwelt を環境と和訳しているが、環日本海、環太平洋などと同じ語法で、環世界と和訳すべきか）を形成しており、それを生物を取り巻く外部の条件（ドイツ語で Umgebung、日本語で環条件）という言葉にすり替えて矮小化できないことを強調した。たとえば、ウサギがいて、はじめてウサギの環境が存在する。ウサギがいなければ、ウサギの環境も存在しないというわけだ。

この視点は、哲学や霊長類学や比較行動学などにも大きな影響を与えた。逆にいうと、ユクスキュルまでは、環境という概念もその内容も、ユクスキュルのような視点は欠如していた。もしそのときユクスキュルがいたならば、今日のような自然破壊や産廃問題は進行していなかったかもしれない。

同じ環世界に住む動物同士が、同じ餌をめぐって競合するときは、そこに生存競争が生ずる。喰うか喰われるかの肉食動物どうしは、弱肉強食の関係を生ずる。その環条件が人為的に汚染され、人類に深刻な影響をもたらすときには、それを公害と呼ぶようになった。

どの生物種もそれぞれが自分中心に個別の外的条件をまとめ上げ、それぞれが自分の環

世界を築き上げていることは分かった。日本語では環条件も環世界も環境というが、以後はユクスキュルに従って、両者を区別しておきたい。因みに哲学における現象学では、客観的世界（数学や物理・化学的法則が支配する世界）と区別して、生活世界（Lebenswelt）という概念が使用されているが、ここではUmwelt（環世界）もLebenswelt（生活世界）も、ほぼ同じ意味だと考えてよい。

Ⅰ - 4. 生物と感覚器官との関係

以上に述べた生物主体と環条件の関係を、もう少し詳しく眺めてみよう。奇妙に聞こえるかもしれないが、生物にとって自分が生きるのに必要でない刺激や情報は、外的条件のなかに含まれていても、まったく存在しないのも同然だ。それというのも、生物は自分が生きるために必要な刺激や情報をキャッチする感覚器官を備えており、その感覚器官は生存に必要な刺激や情報だけをキャッチする働きをしている。だからその生物の生存に必要のない刺激や情報は、彼の感覚器官にとってはあってもなくても同じこと。つまりその動物とその動物の生命維持に必要な環条件との間には、閉鎖的な系が構成されている。これらの系全体を生物の環世界というのだ。

言い換えると、どの感覚器官もその生物に必要な刺激だけを選択する働きを持っており、生存に必要な外的条件だけを切り取るものとして機能している。このようにして、その動物に特有の系（システム）が構成され、その系全体で環世界が作り上げられているというわけだ。

たとえば、視覚に限っていえば、色彩感覚を持たないイヌの世界では色彩が欠けており、またイエバエの世界では白と黒の濃淡だけの像から構成されている。このように各生物はそれぞれが異なる感覚器官を持っており、それによって同じ空間内でも異なる環世界を形成している。

明度覚・嗅覚・温度覚の感覚器しか持たないダニは、この3感覚だけで環条件をまとめ上げて、ダニの環世界を構成している。そのメスは皮膚の明度覚で木に登り、嗅覚と温度覚で木の下を通る哺乳動物をとらえ、落下し、その動物にとり付いて血を吸う。

あるいは実際に刺激が生物に届いていても、それを受け取る感覚器官がなければ、自分が生きていくべく必要な感覚を必要としないという意味で、そのような刺激は素通りさせるか、自分の環世界から排除してしまう。たとえば、トカゲはどんなにかすかな葉擦れの音にも敏感に反応し、身をひるがえして逃げる。けれども、傍らでピストルが鳴っても素知らぬ顔だ。ピストルの音などとは縁もゆかりもない環世界に生きているからだ。

それ故、まったく同じ刺激が動物によって違った価値を持つこともわかる。一本の樫の木でも、その木の根元に巣を営むキツネにとっては雨よけ、木の窪みに巣を営むフクロウには風よけ、リスにとってはよじ登るもの、トリにとっては巣を営む土台、アリにとってはただ樹皮があるだけだ。

このようにして構成される環世界は、しばしば生理的環境もしくは生態学的環境と呼ばれる。このような秩序系は人類でも共通だ。このレベルの環世界が人為的に阻害もしくは破壊的影響をもたらす場合には、すでに述べたように公害という名で呼ばれる。

Ⅰ - 5.　フィルターを素通りする環境ホルモンや有機化合物

この事実が、20 世紀後半ごろから生物や人類に深刻な問題をもたらし始めた。

事情はこうだ。約 35 億年前に、この地球上で極めてちっぽけな単細胞の生命が誕生した。だが、たとえちっぽけでも、この出来事は地球上では革命的な出来事だった。それ以来、その生き物は環条件のなかから生きるために必要な物質を、自らの感覚器官で吟味しながら、選び取って自分だけの環世界を築いてきた。そのくり返しの流れのなかで、高等な生き物へと向上進化してきた(elevation)。同時にいろんな種類の生物も生み出し分化しながら、多様化してきた。

その際、生物たちの身体を構成する物質はすべて、それまでにその生き物が生活してきた地球上の既知の物質に限定されている。その生き物が接する機会のなかった深い地底の重金属や人工的な新素材や新物質などは含まれていない。言い換えると、あらゆる地球上の生物は、その背景に進化史的な過去を背負っている。もし長い進化の過程で生存に耐えられない事態に直面すると、そこできびしく淘汰された。なかには現在も淘汰されつつある生物もいることだろう。今、身の周りにいる生物はすべて、それらの生存条件をなんとか潜り抜けてきた生き残りだといってもよい。

だがその際に、生き物が長い進化の途上で遭遇したこともないような物質に対しては、まったく無防備で、毒物として忌避した。また、うっかりして取り込んでしまったものは、排泄するだけの生理的メカニズムを発達させてこなかった。だから、そのような物質に直面しても、それらはいとも簡単に生理的フィルターを素通りして体内に侵入し、いつまでも体内に残留して、排泄することもなく、長期に亘って、じわじわとその生き物を、内部から攻め続けることになる。

その最たるものに、内分泌撹乱物質と呼ばれる化学物質（俗に環境ホルモン）があって、それがいま人間を直撃している。人間の感覚器官がチェックできないために、素通りして体内に侵入し、本来の成長ホルモンよりも先に、まるで正常な成長ホルモンのように擬似的に働いて、発育を阻害する。その他、催奇性物質や発ガン性物質なども含めて、このような危険な物質が約 70 種もある。

すぐ目につく催奇性や発ガン性の化学物質の場合、チェックは比較的容易だが、数世代後でないと効果が分からないものは、まことに始末が悪い。おまけに進行中の現象はいつも明瞭な結果が顕在していないことが多く、実証性と因果関係を重視する科学主義や技術主義のもっとも苦手とするところだ。また、環境を「外の世界」としてだけ見てきた科学主義の欠陥を見る想いがする。

このような危険物質が、体内に取り入れられた場合、その被害が個体レベルに留まっていればよいのだが、体内に蓄積･濃縮され、最終的に食物連鎖の頂上にいる生き物が、その高濃度の物質を摂取することになる。そのような物質の多くは体脂肪に蓄積され、人間も含めて哺乳類では高脂肪の母乳を通して、乳児に受け渡される。だからその影響は個体レベルにとどまらないで、世代から世代へと作用し続けることになる。このようにして体内に残留した化学物質によっては、ごく微量でも擬似ホルモンとして胎児のホルモン系をかく乱し、性の発現や発育に重大な影響を及ぼ

す。

このような現象はいまでは全地球に広がっているといってもよい。また人間も含めていろんな生物で発表されている事実について、具体的な引用はあまりにも膨大で、この小論の範囲内ではとても引用し切れないほどだ。だが重要な報告なので、すべてを省略せず、ここでその若干を引用しておきたい。

アメリカのハクトウワシの孵化率は大幅に下がり、ミシガン湖ではミンクの不妊が激増、英国でカワウソが激減、北海のアザラシがジステンバー・ウィルスに感染して大量に死亡し、その皮下脂肪には通常の２～３倍のＰＣＢが発見され、日本近海の魚介類のペニスの発育が悪く、人類でも青年期の精子数が半減している（コルボーン他 2002)。その他、この種の情報は市販の新聞や雑誌にも頻繁に登場し始めた。ホルモンに誘発されるガン、不妊症、子供に見られる神経障害、野生動物に見られるさまざまな繁殖異常や大量死などなど。まだ未解明の部分も多いが、それらを惹き起こす疑わしい物質や原因は身辺にごろごろしている。だから操作しやすいからといって、「環境は人間をとりまく外の世界だ」などと悠長なことをいってはおれまい。

これらの事態を、世情を騒がす空騒ぎといって切り捨てるか、人類や動物たちや病める自然を救済すべく、疑わしきを罰して生産にブレーキをかけるか、その選択の代償はきわめて大きいことはたしかだ。そしてその解決の鍵は取り敢えずは科学的解析が、そして最終的には人間の精神がそのイエローカードを握っているのだということを認識しておきたい。

Ⅰ‐6. ニーチェの「生」の理解

ウサギはウサギにとって、キツネはキツネにとって、それぞれが生きる上で必要な条件を、自然のなかから積極的に選び取りながら、ウサギはウサギの、キツネはキツネの環世界を築き上げていることは分かった。

その際、多くの進化論者がいうように、「生き物は一方的に自然の側から手を加えられ淘汰され、あるいは生き物の側から闇雲に自然条件に従属的に適応しているだけの、まるで主体性のない糝粉(しんこ)細工などではない」ということも、認識しておく必要があろう。

そういう意味では、進化論でいう自然選択という理解は一方的に偏っていて、正しくはない。哲学者ニーチェの考えでは、「生き物は外的条件に、なされるがままに消極的に適応しているのでなく、常にみずからの欲求によって外部の条件を選択し服従させ、自分に同化吸収していく意思を持っており、それを生と呼んだ」(ニーチェ)。まさに卓見である。日本では今西錦司教授が同様の見解を発表している。

このような意味で、人間は物質、生命、物質文化、精神文化の各秩序系からなる進化を遂げた存在で、生物のなかでも、もっとも広くかつ層序的に大きな深さをもった生き物であることが分かる。

Ⅰ‐7. 人間とその環世界は、同じひとつの系をなす

繰り返し述べてきたように、「人間」とその「環世界」という概念は、ちょうど心と体が分離できないように、もともとひとつのものなのだ。それをベーコン的・科学的に、「人間」と「環境」という２つの実体に切り離し、環

境を客観的存在として理解し、もしくはその環境を人間の外にある存在と理解するようになった。それ故そのような見方をすれば、環境は人間が自由勝手に操作し易い外部の存在だということになる。

多分、ベーコンとほぼ同じ時代に活躍した近代哲学の父とまでいわれたデカルト流の二元論の影響、つまり「人間」を理性（もしくは精神）と身体の２つの実体に分離した彼の思想が分かり易いことから、現代科学の精神と身体を理解するのにも、両者の思想は１本の縄のように縒られて、ずっと今日まで尾を引いてきたのかもしれない。

Ⅰ－７－1. 人間の環世界の拡大と質的転化

すでに明らかになったことだと思うが､「ヒトのいないヒトだけの環世界」､「環世界のないヒト」は実在しない。ヒトとその環世界は、切っても切れないひとつの関係もしくはシステムに収まっている。デカルトは両者を二元論的に二つの実体と考え、ベーコンはそれをヒトとヒトを取り巻く外的条件（環条件）に切り離して理解したのに対し、ユクスキュルはそれらをひとつの系もしくは system として捉え、ヒトも含む系として、その全体を環世界とした。当然のことながら、この考えは人間論にも大きく影響することになった。

註：大乗仏教の中観派（インド３世紀ごろの竜樹を中心とする“空”の思想）や唯識派の認識論では､あらゆる存在は実体なるがゆえに存在しているのでなく、他の存在と関係し合うことによって存在している､という（相依相関性､仏教でいう「縁起」や「空」の思想)。ジェームス･ラヴロックは『地球生命圏～ガイアの科学､1987』でも同じような考えを示している。これらの思想が、原子物理学の発見や理論とも一致していて興味がある。

繰り返し述べてきたように、慣用的表現としての人間の環境は人間を取り巻く外的条件を意味し、ユクスキュルの環世界では、それらも含めて、人間そのものなのだ。だからベーコン的・デカルト二元論的・科学的理解では、人間と環境という２つの実体として切り離して理解し、環境の方を人間の外にある存在と理解すれば、人間が自由勝手に操作し易い外的存在だということになる。その環境が危機的状態になり、人間を危うくしているというわけだ。

このようなことから、現在の間違った環境論では､「では人間そのものは？」と訊ねると、怪訝な顔をして「自明の存在として、脇に置いてある！」という答えが返ってくる。「分かりきったことは訊くな！」というわけだ。このようにして、今では残念なことに、後戻りが難しいところまで環世界の破壊が進行してしまった。環世界の破壊は人間そのものの破壊と同義なのに、だ。

だから人間にとって、環世界はもはや傍観的な客観主義者でいることは許されないことが分かった。とすれば、参加者もしくは関与者として振る舞う以外に術はなく、このような観点からもう一度、人間の環世界そのものについて考え直しておく必要がありそうだ。

Ⅰ－７－2. 人間の環世界の層序性

人間の環世界は、その構造のなかに物質系、生命系、物質文化系、精神文化系などのさまざまな秩序系が層序的に組み込まれている。人間への進化の歴史が反映されていて、人間の環世界は他の動物たちとは異なり、層序的にも深く､幅も深いことがわかる。しかし､人間の環世界を量的に拡大した側面だけを見ると、他の動物たちとは異なる重要な特徴を見

落とす危険がある。つまり、人間の環世界は文化的に拡大・深化してきただけでなく、質的にも転化していることを見逃してはならない。その現状を眺めてみよう。

Ⅰ-7-2-a. 食は個体維持に留まらず

摂食は、いうまでもなく生物としては個体維持には欠かせない行動だ。しかし人間ではその食材は、「爪と牙」によらない文化的･経済的手段によって入手され、部族や民族の習慣にしたがって調理され、栄養学的というよりも好みに応じて摂食されるようになった。

進化的に下等な生き物では、捕食はそのまま摂食行動でもある。たとえば爬虫類などでは餌を捕獲したときは、すでに摂食の始まりである。人間の場合は捕食と摂食の関係が社会的・文化的に間接化され、質的に転化していく状況がよく分かる。

たとえば人類の場合、食材の入手はもはや「爪と牙」によらず､道具や技術のような物資的・文化的手段を駆使して入手される。その食材は「爪と牙」の代わりに貨幣によって入手され、人手によって運搬され、それぞれの部族や民族の慣習や好みによって調理されて、やっと口にすることになる。さらに冠婚葬祭などの祭礼時には、それに見合った調理が施され、儀礼には欠かせないものになる。その際、食材がどこの誰が、いつ、どこで、どのようにして入手したか、などは問題ではない。

このようにして、食は個体維持、健康保持のために食べる餌と同質のものでなく、食べる楽しみや好みや儀礼へと質的転化していることがよく分かる。

Ⅰ-7-2-b. 性は種族維持に留まらず

性についても食と同じように、質的な転化が認められる。本来は種属維持や子孫繁栄には欠かせないものが性だが、文化はそれをすっかり質的に転化させてしまった。

いくら生物学的には欠かし得ない重要な生物学的条件だとしても、だからといって、性的に成熟した異性どうしが、出合がしらに乱交的に性器的結合をすることなど、地球上のいかなる部族を見ても、人間と名のつく限り、あり得ないことだ。どのような未開の部族であれ、その社会の掟に従って、交際、婚約、結婚などの儀式を経て初めて、性的な生活が許される。

その点ではむしろ文明社会の方が崩れていて退廃的なことが多い。そして種族維持という本来の意義から離れて、享楽的に終始するか、愛へと昇華させるかは、当人たちの選択の自由にまでなってしまった。きわめて生物学的だと思われる出産に際しても、どの部族や民族も諸々の儀式によって、当人はもとより親族うち揃って祝福し、性が人間的な情や愛にまで昇華した姿が見えてくる。

このようにして生物学的な根拠に根差す行動や現象にも、人間の場合には本能まる出しではなく、文化的・質的に転化してしまっていることがよく分かる。人間が文化を持っているということは、生物学的人間に文化がプラスされたということではなく、どの行動も質的にまったく違った文化的なものに質的転化してしまっているということだ。

衣や住についても同じことがいえる。

Ⅰ-7-2-c. 嗅覚の世界から視覚の世界へ

この話の流れのなかで、人類は哺乳類レベ

ルから霊長類レベルへと向上進化してきたことについて、触れておかねばならない。しかしそれにはすでに本誌第９号「人間の深層を探る」でかなり詳細に論じておいた。嗅覚によるホルモン中心の動物と、視覚中心に情報を処理する霊長類とでは、受け取る情報の種類も多く、かつ情報のまとめ方も複雑である。嗅覚情報は方向性よりも空間的広がり、つまり嗅脳（旧脳部）への刺激の強さによるホルモンの分泌が主だが、視覚情報では受け取る情報は種類が多く、かつ複雑で、その情報は新脳部分（大脳皮質）で処理される。だから嗅覚・ホルモン中心で築かれた環世界と、視覚により新脳に築かれた環世界とでは、情報の処理の仕方に大きな違いがある。新脳の大脳皮質の方が、許容や反応の幅が大きいことは明らかだ。その代表が霊長類だ。

だからもし人間がネズミのように、嗅覚中心の生物であったならば、周囲の情報に情動的に申し分なく反応し、驚愕・恐怖・攻撃・逃避その他の行動にも大きく左右されることだろう。

それに比べると、視覚ははるかに複雑な情報をコード化し、大脳皮質でその経験を処理する。このようにして、嗅覚は深く情動的で官能的には満足のいくものだが、視覚中心になった人間では、心理的にもはるかに広い許容性と適応能力を示すことができるようになったというわけだ。

Ⅱ. 人間はどこまで家畜か

人間の成り立ちを知るには、他の動物たちとは違って人類進化の過程で文化を創り出し、その環世界のなかで進化してきた側面を無視してはならない。つまり純然たる生物進化の次元だけで人類を見ることはできない。このことをウィーンの人類学者アイクシュテット（Eickstedt, E．F., 1940）は、きわめて適切にも「人間が文化を創り出したというよりも、文化が人間を創り出したのだ」といった。つまり文化が人間をして人間たらしめたのだといった。もっと分かり易くいえば、文化の働きかけがなければ、猿人はいまも猿人の姿かたちのままに留まっていただろうというわけだ。その分かり易い証拠を示してみよう。

Ⅱ - 1. イノシシがブタに

では、実際に文化がどれほど人間に影響を与えただろうか。それを理解するよい実例として、「家畜」がある。家畜には必ずそのもとになった野生原種の動物がいる。それが人工的条件下つまり文化的条件下で生活を操作され育種されることによって、家畜になったのだ。その結果、両者の間では外観上はもとより目に見えない習性や行動にも、まるでイヌとネコほどの違いを生ずる。けれども野生原種とその派生種である家畜とは、見てくれがいかにかけ離れていようとも、生物学的には両者とも同じ仲間であって（つまり種は同じであって）その証拠にかけ合わせれば、コドモもできるし、マゴも生まれる。繁殖上の障壁はまったく存在しない。

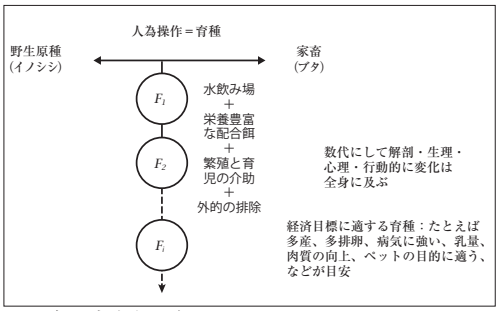


図１自己家畜化現象
イヌとネコほどに姿・形が変わっても新しい種になったわけではない。その証拠に、かけ合わせると $F_1 \rightarrow F_2 \cdots F_i$ とコドモができ、繁殖の隔離はない。

この事実をイノシシとブタについて、もう少し突っ込んで考えてみよう。家畜のブタには、すでに述べたように基になった野生原種のイノシシがいる。ブタは暑さ寒さや雨露風雪にじかにさらされることはなく、人間の手で作られた小屋の中でぬくぬくと生活している。喉が渇けば水飲み場が備えてあり、空腹になれば栄養を配慮した、苦労して咀嚼する必要もない配合餌が与えられる。必要に応じて遺伝的に望ましいオスまたはメスがあてがわれ、こうしてコドモが産まれると人間が介助して育てられる。危険な外敵が近づくと、警戒するまでもなく人間が追い払ってくれる。こうしてブタはたらふく食べ、飲んで、安穏に毎日を過ごすことができる。

一方、野生のイノシシは雪が降っても雨が降っても、生きていくために、これらの一つひとつを命がけでこなし、一日の 90 パーセント以上をそのために費やす。それが野生に生きる基本的条件なのだ。

驚いたことに、このような生活条件の違いが、わずか数代続くだけで、野生のイノシシは家畜のブタになる。水棲動物のように皮下脂肪が発達し、咀嚼器や消化器は退化し、脳は低質化し、心理的・行動的に攻撃性や警戒心は鈍磨し、結果として神経質なところだけが残る。文字通り頭の天辺から足先まで、解剖・生理・心理・行動にわたってすっかり変化してしまう（図２参照）。

このような変化を「家畜化(domestication)」とよんでいる。とすると、人間（人類）の場合も同じではないだろうか。豊かな生活とか安全な生活とか快適な生活といっても、文化的といえば聞こえがよいが、人工的生活条件下で生活していることに変わりがない。このようなことから人間の解剖的・生理的特徴には、家畜と共通するものが多い。たとえば人種的に身長や皮膚の色、目の虹彩色、毛髪の色や形、皮下脂肪の沈着などに大きな変異が見られる。これらの特徴を「人種特徴」というわけだが、人種特徴の変異が大きいこと自体、野生種的ではなく、家畜種になって初めて見られる特徴なのだ。

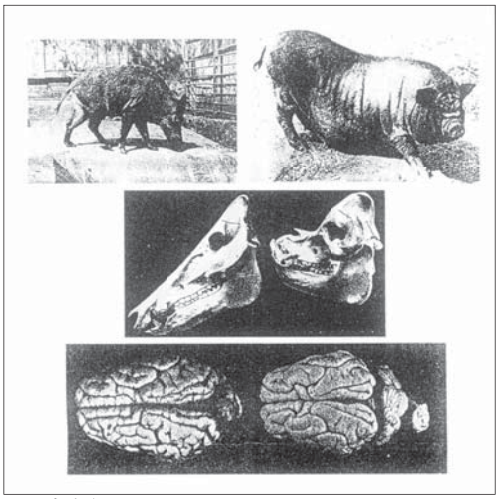


図２家畜化
上段はブタ（右）と野生イノシシの外観、中段はブタ（右）とイノシシの頭骨、ブタの歯並びはイノシシに較べて退化している。下段は脳の比較。左のイノシシの脳の溝が多く深いのに対して、ブタの脳の溝は浅く全体として脳はのっぺりとしている。(Herre & Röhrs 1971より一部改変)

Ⅱ - 2. 自己家畜化現象

家畜の場合には多産にするとか、乳量や産卵数を増やすとか、病気に強くするとか、さまざまな経済目標が立てられ、それに沿って育種されている。ところが人間の場合は明確な目標がなく、保健・衛生上、矛盾しない範囲内で、ただ快適で豊かな生活を、というだけだ。こうして蒙った変化を「自己家畜化(self-domestication)」という。

平均的な都会の団地生活の例を見てみよう。

そこに住む都会人は、舗装された夜道を帰り、コンクリートの階段を登り、鉄製の扉を開ける。電灯のスイッチひとつで夜が昼に変わる。冷蔵庫を開ければ、なにがしかの人手が加わった人工的な食品がつまっている。蛇口をひねれば水が得られ、操作ひとつで火が得られる。このようにして快適性と無駄の排除を追求した究極は、ついには純人工的な宇宙船のような空間になるのだろうか。そして人間はそのような生活空間に、生理的・心理的にどこまで耐えられるのだろうか。アメニティ空間といえば聞こえはよいが、つまるところ人工的空間であることに変わりはなく、ちょっとその舞台裏を覗くと、家畜的環条件に取り囲まれた人間の姿が浮かび上がってくるではないか。こうして人間は知らず知らずのうちに心身ともに影響を受け、変化しつつあるのだ。

ひょっとすると、大都会に多い過密な生活、出勤・登校拒否や自律神経失調症、心身症やノイローゼやうつ病などの精神性疾患も、このような環世界や環条件の不適合と無関係ではないと思うのだが…。

だからウィーン大学のアイクシュテット教授は、いささか皮肉を交えながら、「人類が胸を張って文化を創り出したといっているが、実はその文化が人間を創り出してきたのだ」といったのだ。まことにその通りで、もし人類が文化を持たなければ、私たちはいまも毛むくじゃらな猿人の姿のままで、衣類もつけず裸足で山野を駆け回っていることだろう。このような視座から現代人を見ると、身体的、解剖的、生理的、心理的に無目標な文化条件のなかで生活している危うい「未完の人類」の姿が見えてくる。とすると、ニーチェのいう「未完の人間」はどこまで先読みしていたのだろうか。

Ⅱ - 3.「家畜化」論争について

1964 年の冬学期にドイツのキール大学で、自然人類学の主講義（Hauptvorlesung）を担当していた頃のこと。

キールの冬は、朝 10 時ごろに夜が明け始め、午後 3 時ごろにはもう夜の帳が降り始める。午後は電灯の下での講義になる。だからその生活に慣れるまでは、まるで大学全体が夜学のような印象を受けたものだ。その分だけ、短い夏は白夜に近い。

人類学教室は、第 2 次世界大戦の手酷い被害の後に再建・新築された建物の 4 階と 5 階にあり、その建物の北隣の地上は、かなり広い家畜学教室の放飼実験場だった。その広い実験場にはオオカミやコヨーテ、テリアやチンなどからコリーやシェパードまで 50 種ばかりのイヌたちが飼育されていた。野生のオオカミやコヨーテが、どのようにして家畜のイヌになってきたか（家畜化）、その特徴はまずどこに現れるか、彼らの系統や遺伝関係はどうなっているか、ということなどが研究されていた。

いつものように筆者の講義が終わりごろになると、まるで時計でも見ていたかのように、それらのイヌのうちの 1 頭が遠吠えを始める。すると、他のイヌたちもつられていっせいに遠吠えする。まさに「一犬虚に吠えて、万犬実に吠える」だ。そのイヌの遠吠えには、まるで故郷への郷愁か家族や仲間たちへの恋い焦がれか、もの悲しくも切々と想いをそそる響きがこもっていて、忍びがたい。

その研究担当者ヘレ教授（Herre,w.）は、家

図 3 ヘレ教授

畜学とくに家畜化の分野では権威者で、その高名のほどは日本にいるときから聞き知っていた。よい機会でもあるので、あらかじめ面会のアポイントをとっておいて、お会いできることになった。彼はその笑顔が象徴しているように、会ってみると静かな湖面を見るような、穏やかな人物だった（図 3）。

しかし学問上のことになると、一体どこにそんな情熱が潜んでいたのかと思いたくなるほど、打って変わって舌鋒鋭く相手に切り込み、おどろいたものだ。

Ⅱ - 4. 家畜化現象と人類進化

霊長類のなかでも、とくに人類についてはその進化過程で文化を発達させてきたので、その影響を知るべく、家畜化の法則は無視しえない重要な情報を含んでいる。というのも、哺乳類のなかで文化の影響をもろに被った家畜と、文化的環境にどっぷりと浸かった人類を比較することで、解剖・生理・心理や行動その他にどのような具体的な影響があったか、人類の進化史的・根元的な成り立ちを知る上でも、筆者に限らずとも人類学者ならば誰でも、この問題については大きな関心を持っているはずだ。しかしながらそのときの議論は、家畜学と人類学の双方にとって、重要なすれ違いのポイントも含んでいるので、ヘレ教授との対談を通して、ここで紹介しておきたい。

彼によると、「よくあることだが、専門の違う分野どうしで、学問用語や術語や概念をみだりに転用するのは、大変危険だ。たとえば家畜学分野の概念である『家畜化』を、分野の違う『人類学』に安易に転用するのは、とくに危険だ」という。その具体的な実例として、

①家畜学では、野生原種とその派生種である家畜の変化が、イノシシとブタの例で見られるように、イヌとネコほどの違いを示したとしても、種が変化（種分化 speciation）したわけではない。だから両者の間では、ほぼ自由に、交雑や混血もできるのだ。であるならば、人類学でアウストラロピテクスからホモ・ハビリス、ホモ・エレクトゥス、ホモ・ネアンデルターレンシス、ホモ・サピエンスへと、種どころか科や属のレベルも越えて、進化や変化をさせてきた現象を、「家畜化」の概念で説明するのは論理的に飛躍していないか。

②多くの家畜化の例が示すように、たとえば、乳量や産卵数を増やすべく、家畜化は人間の経済目標から創り出された一種の不自然な生物で、野生原種から見れば病的でいびつな動物だ。だから生物にとって、もっとも大切な脳・中枢神経系は低質化し、消化器系はガタガタ、心理的・行動的にも大きく負の変化を蒙っている。だから、家畜化でこのような深刻な病的

現象が見られる限り、高度化し向上進化してきた人類進化には適用しがたいのではないか。

と指摘する。

筆者も日ごろ、学生たちにはある分野の専門用語をみだりに他の分野に転用することは、カテゴリー・エラーを侵す危険性があるので、慎重であるべきことを喚起してきた。たしかに「家畜化」は人工的環条件が人間に及ぼす負の影響を知るよすがにはなる。だが、それ故にヘレ教授は「家畜化」①や②のように、人類進化の説明原理にはなりにくいのではないか、と強調するのだ。

それに対して筆者は、自然人類学の立場から以下のように説明した。

①については、現代生物学と古生物学とでは、「時空」や「空間」の概念が大きく異なる。家畜学は現代生物学のなかの「時空」で考え、自然人類学では古生物学や地質学的時間も含めて、その「時空」概念のなかで考える。だから、とくにヘレ教授がいうような矛盾は感じない。問題は現代生物学の「家畜化」における「時空」の概念を、古生物や進化の「時空」次元に直接に持ち込むことにあるのではないか。

②については、家畜学で扱う家畜化は、たとえばペットや使役用、脂肪分の豊富な乳量や産卵数を増加させるなどのように、いずれも経済目標だけに絞られている。その結果、人為的に単純化された環条件下、つまり不健全な非自然的・非正常的環条件下で育種・飼育・給餌などが行われることから生じている。

人類進化（ヒト化・人間化・ヒューマニゼーションなど）の場合は、人為的（文化的）な環世界の中身（環条件）が、人類の文化や技術の発達とともに、ますます複雑化していく性質を持っている。その状況は家畜化と人類進化とでは、まるで正反対である。つまり人類と家畜では、その環世界が質的に大きく異なることに注視すべきだ。

人類学や民俗学や先史学（考古学）や進化論（進化学）などでの発見が増えるにつれ、人類の形態特徴や行動パターンや心理的変化などの進化速度と文化の発達度が、その環世界と見事に並行している事実をみても、これらの事情はよく理解できるのではなかろうか。

註：マールブルク（Marburg）大学における新カント学派の考え方を参考にすると、地質学的時間は「過去」における無限的（無限大から無限小までを含む）時間として理解できるかもしれない。B. ラッセル（英国の哲学者・数学者、実証主義）によると、それは一種の神秘主義だとして切り捨てる。たしかに、その測定「量」は、実在するもの（das Reale）そのものではない。だが実在するものの実在性（Realität）を表し、その意味で実在するものの根源をなすと考えることもできよう（田辺元 2010、中沢新一 2011）。したがって（無限大的、無限小的）時間の代わりに限界なき時間、無限的時間、微分的時間などと読み替えれば、あまり違和感はなしに地質学的時間や古生物学の進化的時間なども理解できると思う。少なくともアジア的思考に慣れ親しんだ筆者には、まったくラッセルがいうような違和感はない。現代生物学と古生物学では、存在者の「時空」、したがって環世界が異なることから、同じ座標軸のなかで論ずるには無理があるのかも知れない。それが②で露呈した。もしそうならば、その影響は古生物学ばかりでなく、先史学や考古学、民族学や古人類学などにも波及することだろう。「哲学」分野からのご意見をお教えいただきたい。

参考にした文献

プラトン『プロタゴラス』（藤沢令夫訳）岩波文庫。

マルフェイト（1970）『人間観の歴史』（湯本

和子訳）思索社。
ラントマン、M.（1971）『人間学としての人類学』（谷口茂訳）思索社。
バーマン、M.（1989）『デカルトからベイトソンへ』（柴田元幸訳）国文社。
江原昭善（1991）『人類～ホモ・サピエンスへの道』NHK ブックス改訂版。
江原昭善（1993）『人類の起源と進化～人間理解のために』裳華房。
江原昭善（1998）『人間はなぜ人間か～新しい人類の地平から』雄山閣。
江原昭善（1998）「環境」問題を考え直す。「生活の科学 20 1998」椙山女学園大学生活科学部。
江原昭善（2001）『服を着たネアンデルタール人～現代人の深層を探る』雄山閣。
江原昭善（2001）「『人間』を再考する」。椙山女学園。総合クリエイティブ・センター研究論集第 3 号。
江原昭善（2005a）「稜線に立つホモ・サピエンス～人類の行方を模索する」総合クリエイティブ・センター。　研究論集第 7 号。
江原昭善（2005b）『稜線に立つホモ・サピエンス～自然人類学を超えて』京都大学学術出版会。
江原昭善（2006）「ホモ・サピエンスの稜線のかなたで」椙山人間学研究 Vol.2。
江原昭善（2007a）「自然人類学者、仏教思想に触れて」椙山人間学研究 Vol.3。
江原昭善（2007b）「介護精神の深層を探る」日本介護福祉養成施設協会。
江原昭善（2009a）「悟りや啓示は宗教領域だけの概念か～自然人類学から脱皮して」椙山人間学研究 Vol.5。
江原昭善（2009b）「自然人類学者の独り言」「総合人間学会」編。学文社。
江原昭善（2012）「あの世はこの世のなかに在り～自然人類学者が考えたこと」椙山人間学研究 Vol.6。
江原昭善（2013）「人間の深層を探る」椙山人間学研究 Vol.7。
江原昭善（2014）「哲学と自然人類学の狭間で」椙山人間学研究 Vol. 8.
田辺元（2010）『田辺元哲学選Ⅰ～Ⅳ』（藤田正勝編）岩波文庫。
中沢新一（2011）『フィロソフィア・ヤポニカ』講談社学術文庫。
Uxküll,J, J.（1973）『生物から見た世界』（日高敏隆 他訳）思索社。
Wickler .W.（1975）『Stammesgeschichte und Ritualisierung tierischer und menschlicher Verhaltensmuster. Deutscher Taschenbuch Verlag GmbH & Co.KG,München.
Haeckel, E.,（1923）natürliche Schöpfunngsgeschichte., Walter de Gruyter & Co., Berlin und Leipzig.
Remane, A.（1956）Die Grundlagen des natürlichen System, der vergleihenden Anato-mie und der Phylogenetik., 2. Aufl., Geest Portig, Leipzig.

椙山人間学研究センター活動概要

（平成27年4月から平成28年3月まで）

■椙山人間学研究センター構成員・プロジェクト研究員

○椙山人間学研究センター構成員

センター長　椙山正弘
研究員　　杉藤重信
客員研究員　稲村哲也
事務局（企画広報部長）　竹田浩康
事務局（企画広報部企画課長）　藤田修
事務局（企画広報部企画課職員）　原田美佳
事務局（センター事務室職員）　大喜多優香

○プロジェクト研究員

①『総合人間論』
プロジェクトリーダー　杉藤重信
（研究員、人間関係学部教授）

②『女 性 論』
プロジェクトリーダー　吉田あけみ
（人間関係学部教授）
メンバー：東珠実（現代マネジメント学部教授）
影山穂波（国際コミュニケーション学部教授）
藤原直子（人間関係学部教授）
小倉祥子（人間関係学部准教授）
小川奈保子（高等学校教諭）

③『人間発達論』　※今年度は活動休止

④『日本・アジア文化と人間』
プロジェクトリーダー　飯塚恵理人
（文化情報学部教授）
メンバー：加藤益幹（国際コミュニケーション学部教授）
季増民（文化情報学部教授）
鄭麗芸（文化情報学部教授）
二宮俊博（文化情報学部教授）
樋口謙一郎（文化情報学部准教授）
冨田和子（生活科学部助教）
梅野きみ子（大学名誉教授）

⑤『環境と人間』
プロジェクトリーダー　野崎健太郎
（教育学部准教授）
メンバー：宇土泰寛（教育学部教授）
森昌彦（附属小学校教諭）
川野幸彦（附属小学校教諭）

⑥『人間論教材作成』　※今年度は活動休止

⑦『公募プロジェクト』
プロジェクトリーダー　石橋尚子
（教育学部教授／附属幼稚園園長）
メンバー：小林豊子（附属保育園園長）
三田郁穂（附属幼稚園教頭）
松本由美子（附属保育園主任）

○平成27年5月11日（月）17:30～19:00

「椙山人間学研究センター平成 27 年度
第 1 回人間講座」開催
テーマ：『1 メートルの長さの決め方』
講　師：森棟公夫氏（理事長兼学長）
場　所：椙山人間交流会館キャリア教育推進ルーム
参加者：70 名

○平成27年7月27日（月）17:30～19:00

「椙山人間学研究センター平成 27 年度
第 2 回人間講座」開催

テーマ：人間論シリーズ１　人間は、言語によってのみ人間である
『物語はどのように理解されるか』
講　師：増井透氏（人間関係学部教授）
場　所：椙山人間交流会館キャリア教育推進ルーム
参加者：85 名

○平成27年10月1日（木）17:30～19:00
「椙山人間学研究センター平成 27 年度
第 3 回人間講座」開催
テーマ：人間論シリーズ２　人間は、道具によってのみ人間である
『世界のモノづくりから“くらし”を考える』
講　師：小林繁樹氏（国立民族学博物館名誉教授）
場　所：椙山人間交流会館キャリア教育推進ルーム
参加者：50 名

○平成27年12月10日（木）17:30～19:00
「椙山人間学研究センター平成 27 年度
第 4 回人間講座」開催
テーマ：人間論シリーズ３　人は社会的動物である
『災害が露わにする“社会の本質”』
講　師：黒田由彦氏（名古屋大学大学院環境学研究科教授）
場　所：椙山人間交流会館キャリア教育推進ルーム
参加者：53 名

○平成27年12月5日（土）13:30～16:15
「椙山女学園創立 110 周年記念
椙山フォーラム」開催
テーマ：『女性のライフデザインを考える』
基調講演：芦田多恵氏（株式会社ジュン アシダ ファッションデザイナー）
トークセッション：芦田多恵氏
冨田明美（生活科学部教授）
後藤真由（生活科学部学生）
谷　知夏（生活科学部学生）
鶴田帆香（高等学校生徒）
横井愛璃（高等学校生徒）

場　所：椙山女学園大学文化情報学部メディア棟 001 室
開会挨拶　　森棟理事長
趣旨説明　　戸部エクステンションセンター長
閉会挨拶　　杉藤研究員
司会進行・講師紹介
豊田美穂氏
（NHK 津放送局キャスター、生活科学部卒業）
参加者：341 名

（告知・広報）
①中日・日本経済新聞折込
約 22.2 万部（平成 27 年 11 月 7 日（土））
②新聞「催事告知欄」（無料）への原稿送付（中日、毎日、読売、朝日）
③マスコミへの取材依頼
④教職員宛案内状送付
⑤外部個人宛案内状送付
⑥学園ホームページでの告知
⑦センターホームページでの告知
⑧名古屋市立図書館はじめ周辺地域の 30 図書館
⑨名古屋市立生涯学習センターはじめ周辺地域 20 施設
⑩近隣大学及び大学関連機関 5 校

○平成28年3月22日（火）15：55〜16:25（予定）

・平成 27 年度プロジェクト活動報告会開催

○平成28年3月下旬

・『椙山人間学研究 2015』（第 11 号）発行

■椙山人間学研究センター・ホームページの運営

・センターの活動であるフォーラム、人間講座の案内や告知、その報告などの詳しい情報をセンターのホームページ上に掲載し、学園の教職員や学生等のみならず一般の方々へも公開している。年誌「椙山人間学研究」既刊号も掲載している。

・椙山人間学研究センター・ホームページ
URL:http://shrc.sugiyama-u.ac.jp/

■椙山人間学研究センター運営委員会　開催

○第 1 回　平成 27 年 5 月 25 日（月）17:15 〜 17:45

○第 2 回　平成 28 年 3 月 14 日（月）15:30 〜 16:00

■椙山人間学研究センター打合せ会　開催

（参加：センター長、杉藤研究員、企画課・センター事務室職員）

平成 27 年 4 月 15 日
平成 27 年 5 月 18 日
平成 27 年 6 月 22 日
平成 27 年 9 月 14 日
平成 27 年 11 月 9 日
平成 27 年 12 月 10 日
平成 28 年 1 月 18 日
平成 28 年 3 月 14 日

椙山人間学研究センター規程

平成16年規程第13号
平成16年7月30日制定

（趣旨）

第1条　この規程は、学校法人椙山女学園（以下「学園」という。）が、建学の精神に基づく伝統に立って、その教育理念「人間になろう」そのものを、より広くより深く研究し、新たな人間についての知の開発を通して、学園の教育研究、学術の振興に寄与するとともに、研究の成果を広く学界、一般社会及び地域に向けて発信する拠点として設置する、椙山人間学研究センター（以下「センター」という。）について必要な事項を定める。

（センターの事業）

第2条　センターは、次の各号に定める事業を行う。

(1) 学園の教育理念「人間になろう」の調査研究及びその教育実践の支援に関する事業

(2) 新しい世紀に求められる「人間観」（人文科学、社会科学及び自然科学等における人間観の研究並びに学際的領域の研究）についての調査研究事業

(3) 学園の一貫教育及び連携教育についての調査研究事業

(4) 「人間学（観・論）」を主題としたフォーラム、公開講座及び自主講座等の事業

(5) 大学等学校、研究機関及び企業等学園外の機関との交流並びにネットワークに関する事業

(6) 年報の刊行に関する事業

(7) 人間論及び人間関係論等に関するコンサルテーション、研修会並びに講演会への講師の派遣等に関する事業

(8) その他センター長が必要と認める事業

（センター長）

第3条　センターにセンター長を置き、センター長は、理事長の命を受け、センターの事業を統括し、所属職員を統督する。

2　センター長の任期は2年間とする。ただし、再任を妨げない。

（主任研究員）

第4条　センターに主任研究員を置く。

2　主任研究員は、各調査研究領域を統括し、研究ネットワークを主宰する。

（研究員）

第5条　センターの事業遂行に必要な研究調査を行うため、研究員を置くことができる。

（客員研究員）

第6条　センターの研究調査に関して、学園外に広く知識又は経験を求める必要があるときは、客員研究員を置くことができる。

2　客員研究員について必要な事項は、理事長が定める。

（事務）

第7条　センターの事務は、企画課が行う。

（運営委員会）

第8条　センターの的確かつ円滑な運営を図るため、センターに運営委員会を置く。

2　運営委員会は、センターの事業に関する次の事項を審議する。

(1) 調査研究、委託研究、プロジェクト、研究会及び年報等の事業計画に関すること。

(2) 予算に関すること。

(3) 前各号のほかセンター長が諮問すること。

3　運営委員会は、次の各号に掲げる委員で構成する。

(1) センター長
(2) 大学長
(3) 高等学校長及び中学校長
(4) 小学校長
(5) 幼稚園長
(6) 主任研究員
(7) 事務局長

附則

この規程は、平成17年4月1日から施行する。

附則（平成１９年規程第２７号）

この規程は、平成19年9月1日から施行する。

椙山人間学研究センター年誌「椙山人間学研究」編集内規

（「椙山人間学研究」について）

椙山人間学研究センター（以下「センター」という。）は、研究紀要として「椙山人間学研究」（以下「本誌」という。）を編集出版し、原則として毎年度３月に刊行する。

「本誌」編集委員会（以下「編集委員会」という。）は、椙山人間学研究センター長（以下「センター長」という。）が委嘱する本学園教職員若干名の委員によって構成し、センター長は委員長となって編集委員会を統括し、本誌を編集刊行する。委員の任期は１年とし、再任を妨げない。

本誌には、センターにおけるプロジェクト研究に関わる研究成果のほか、人間学に関連する基礎研究並びに応用・実践・臨床研究に寄与する内容の学術論文、センターが主催または共催する講演会等における講演録、及びセンターの活動記録等を掲載する。

（寄稿資格）

第１　本誌には、原則としてセンター所属の主任研究員、研究員、客員研究員及びセンター長が依頼した者が寄稿することができる。

（寄稿原稿）

第２　センターの設立趣旨、及び各プロジェクトの研究テーマに添ったもので、上記寄稿資格者以外の学内外者から広く原稿を募集する。応募原稿多数の場合には、編集委員会において選考し採択する。

（書 式 等）

第３　寄稿原稿は、原則として次のとおりとする。

（１）原稿は、原則としてMicrosoft Wordにより作成されるものとし、USBメモリまたはメール添付などデータで提出するものとする。
また、その際には次の表題を付するものとする。
ア 表題（和文・欧文）
イ 氏名（和文・欧文）
ウ 所属・職名

（２）原稿は注、図表及び写真を含めて４００字詰原稿用紙に換算して５０枚以内とする。欧文についてもこれに相当する量とする。

（３）掲載する写真は原則モノクロ写真とし、電子媒体で提出されるものとする。印刷媒体として提出される場合、A4の台紙に貼り、別途送付すること。ただし、出来上がり寸法及び画質は編集委員会に一任するものとする。

（４）図表等は、原則電子媒体で提出されるものとする。印刷媒体として提出される場合、印刷原稿に添付し、該当ページに割り付けをして本文原稿右横の空白にその旨を明記すること。最終的なレイアウトについては、編集委員会に一任するものとする。

（５）注、引用文献等の記載については、原稿末尾に記載するものとする。

（６）出版の際の割り付けレイアウトは、原則として二段組とする。

（校　正）

第４　執筆者校正は、原則として再校までとし、最終稿（３校）は編集委員会が行うものとする。

（期日等の遵守）

第５　執筆者は原稿の寄稿期日、校正期日その他編集上必要な事項について遵守しなければならない。寄稿期日等は編集委員会が送付する執筆依頼に記載のものとする。

（著 作 権）

第６　本誌に掲載された論文の著作権は、学校法人椙山女学園に帰属する。ただし、原著者が出典を明示して再利用することは妨げない。

（掲 載 料）

第７　原稿の掲載について、規定枚数を超える場合は掲載料を徴収することがある。掲載料については、センター長が別途定める。

（そ の 他）

第８　この内規の改廃及び本誌の寄稿原稿に関する必要事項でこの内規に定めのないものについては、センター長が別途定める。

附則

この内規は、平成２４年１１月１２日から実施する。

この内規は、平成２７年１１月３０日から実施する。

編集後記

『椙山人間学研究』第11号をお届けいたします。ご多忙中にも関わらずご執筆いただきました先生方には、この場をお借りして心よりお礼申し上げます。

椙山人間学研究センターでは毎年、人間講座や椙山フォーラムといった公開講座を開催しています。平成27年度は、人間講座に「人間論シリーズ」という名称をつけてシリーズ化し、認知心理学、文化人類学、社会学などといった研究分野から「人間」について考えました。また、学園創立110周年記念として行った椙山フォーラムは、「女性のライフデザイン」をメインテーマとして、「衣」の分野で活躍されているファッションデザイナーの芦田多恵氏に講演していただきました。このように本センターでは、あらゆる分野から講座を企画し開催しておりますが、これらの講座に毎回積極的に出席してくださっている方を見ると、ふと感じることがあります。それは、一つの分野に限らず、あらゆる分野から物事を探究し、学ぶことを希望されている人がたくさんおられるのではないかということです。そして、あらゆる分野、方向、立場から物事を学び考えるということは、非常に重要なことではないかと感じました。

2015年11月、パリで世界を震撼させる出来事が起こりました。過激派組織イスラム国（IS=イスラミックステート）による同時多発テロ事件です。120人を超える人々が犠牲となり、世界中が亡くなった方達に追悼の祈りを捧げました。そして、ISを悪と見なす人や、IS壊滅のため空爆を強化すると宣言する国も現れました。テロは決して許されないことであり、ISによるテロ行為が間違っていることは事実です。しかし、ISが支配する地域には罪のない人々や子どももいるはずであり、そんな罪のない方達が空爆によって命を落としているのも事実のはずです。パリのテロで亡くなった方達を悼む人はたくさんいますが、ISの支配地域への空爆で亡くなった方達を悼む人がはたしてどれほどいるでしょう。大半の人がパリでの惨事には目を向けても、IS支配地域における惨事にはなかなか目を向けようとしていないのではないでしょうか。

そういったことを考えると、ある出来事を一つの立場からでしか見ないのは、非常に危険なことだと思われます。一方向から物事を見つめるだけでは、その物事の本質は見えてきません。おそらく本質や真理というものは、さまざまな方向や立場から見つめ考えることで、初めて見えてくるものなのでしょう。今後、私達人間がより良い時代を生きていくために求められるのは、多方面から物事を見つめ本質を見抜く目であると思います。

椙山人間学研究センターでは設立以来、人間の本質をより深く探るべく、多方面から考察を行ってきました。そして、その知見を広く提供できるよう努めてまいりました。今後もあらゆるテーマで講座を開催することで、これからの時代を生きていくためのヒントを少しでも皆様にお届けすることができたなら幸いです。また、講座の開催だけでなく、これまでセンターで行ってきた研究を冊子という形で多くの方に提供できればと考えています。センターが発刊するこの『椙山人間学研究』には、人間にまつわるさまざまな研究結果・報告が載せられています。ぜひご一読いただき、人間についての理解を深めるためにご利用いただければと、心より願っています。

2016年3月18日

センター事務室　大喜多優香

執筆者紹介

梶山　正弘　（梶山女学園学園長 / 梶山人間学研究センター長）

【寄稿】

杉藤　重信　（梶山女学園大学人間関係学部長）
江原　昭善　（梶山女学園大学名誉教授／京都大学名誉教授）

【フォーラム】

芦田　多恵　（株式会社ジュン アシダ　ファッションデザイナー）
戸部　栄一　（梶山女学園大学エクステンションセンター長／生活科学部教授）
冨田　明美　（梶山女学園大学生活科学部教授）

【人間講座】

森棟　公夫　（梶山女学園理事長 / 梶山女学園大学学長）
増井　透　（梶山女学園大学人間関係学部教授）
小林　繁樹　（国立民族学博物館名誉教授）
黒田　由彦　（名古屋大学大学院環境学研究科教授）

【プロジェクト研究】

（総合人間論）

杉藤　重信　（梶山人間学研究センター研究員 / 人間関係学部教授）

（女性論）

吉田　あけみ　（梶山女学園大学人間関係学部教授）
東　珠実　（梶山女学園大学現代マネジメント学部教授）
影山　穂波　（梶山女学園大学国際コミュニケーション学部教授）
藤原　直子　（梶山女学園大学人間関係学部教授）
小倉　祥子　（梶山女学園大学人間関係学部准教授）
小川　奈保子　（梶山女学園高等学校教諭）

（日本・アジア文化と人間）

飯塚　恵理人　（梶山女学園大学文化情報学部教授）
冨田　和子　（梶山女学園大学生活科学部助教）
梅野　きみ子　（梶山女学園大学名誉教授）

（環境と人間）

野﨑　健太郎　（梶山女学園大学教育学部准教授）

（公募プロジェクト）

石橋　尚子　（梶山女学園大学教育学部教授 / 附属幼稚園園長）
小林　豊子　（梶山女学園大学附属保育園園長）
三田　郁穂　（梶山女学園大学附属幼稚園教頭）
松本　由美子　（梶山女学園大学附属保育園主任）

【編集】

竹田　浩康　（企画広報部長）
藤田　修　（企画広報部企画課長）
原田　美佳　（企画広報部企画課職員）
大喜多　優香　（企画広報部企画課職員）

「椙山人間学研究」第 11 号
Journal of Sugiyama Human Research Vol.11

発行：平成 28 年 3 月 18 日
発行者：椙山人間学研究センター
〒464-8662　名古屋市千種区星が丘元町 17 番 3 号
電話　　052-781-1186（代）
　　052-781-7146（直）
ＵＲＬ：http://shrc.sugiyama-u.ac.jp/
印刷：長屋印刷株式会社